熊本県文化財調査報告第219集

群　前　遺　跡

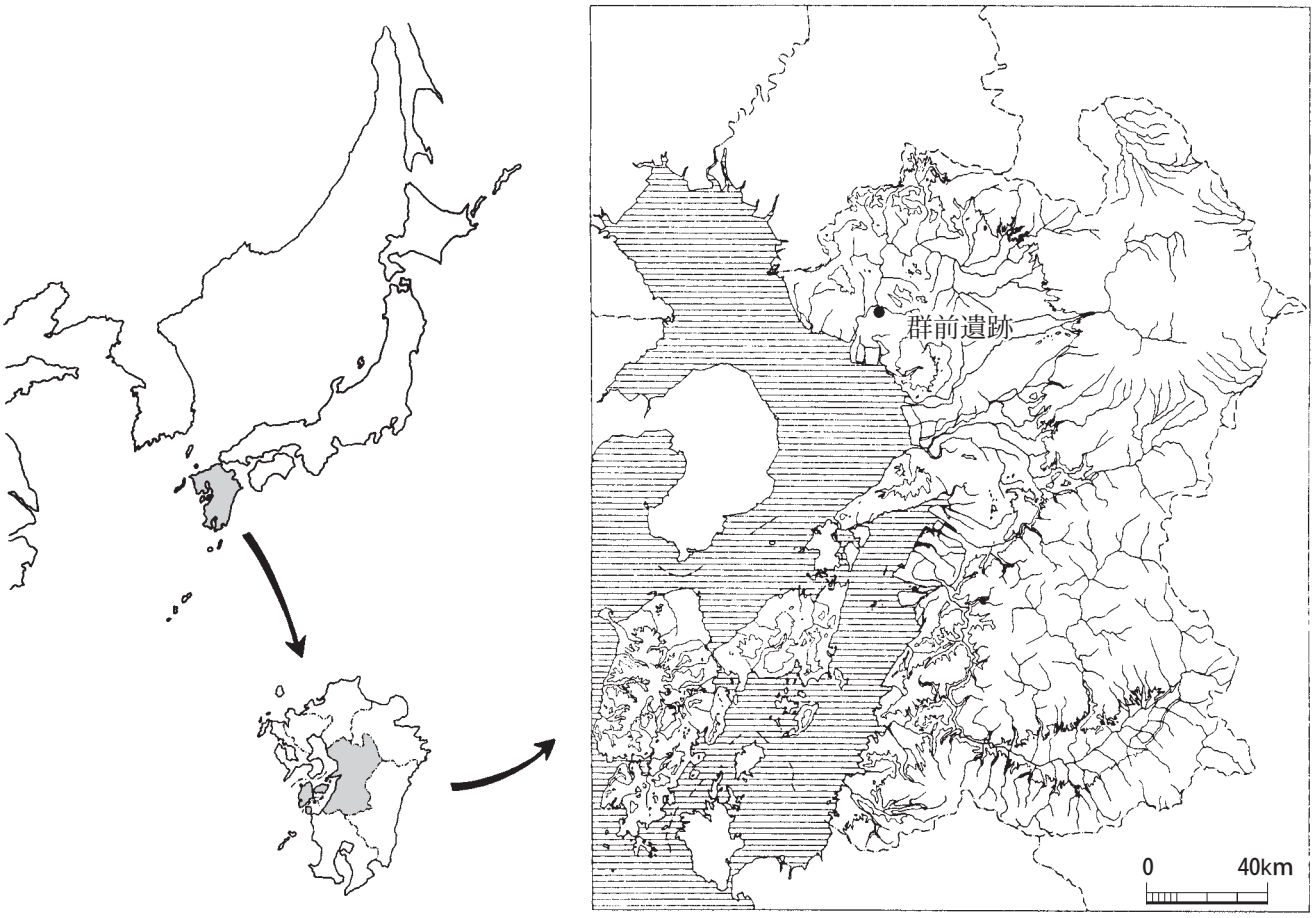
国土交通省菊池川工事事務所木葉川復緊事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2004.3

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第219集

群前遺跡
（むれのまえ）



2004

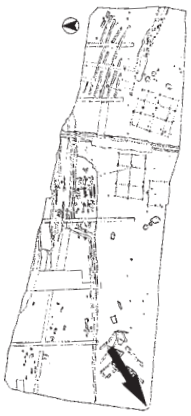
熊本県教育委員会

写真(PL) 1　空撮 1 （遺跡上空より木葉山方面を望む）

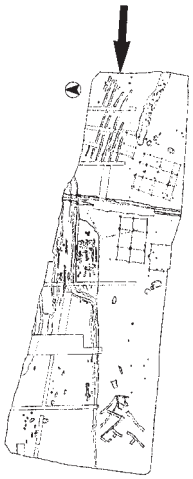
写真(PL) 2　空撮 2 （遺跡上空より雲仙方面を望む）

写真(PL)3　空撮３（遺跡周辺）

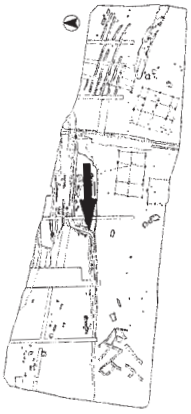
写真(PL)4　空撮４（遺跡全景）



写真(PL) 5
土層断面
（B、C－2）

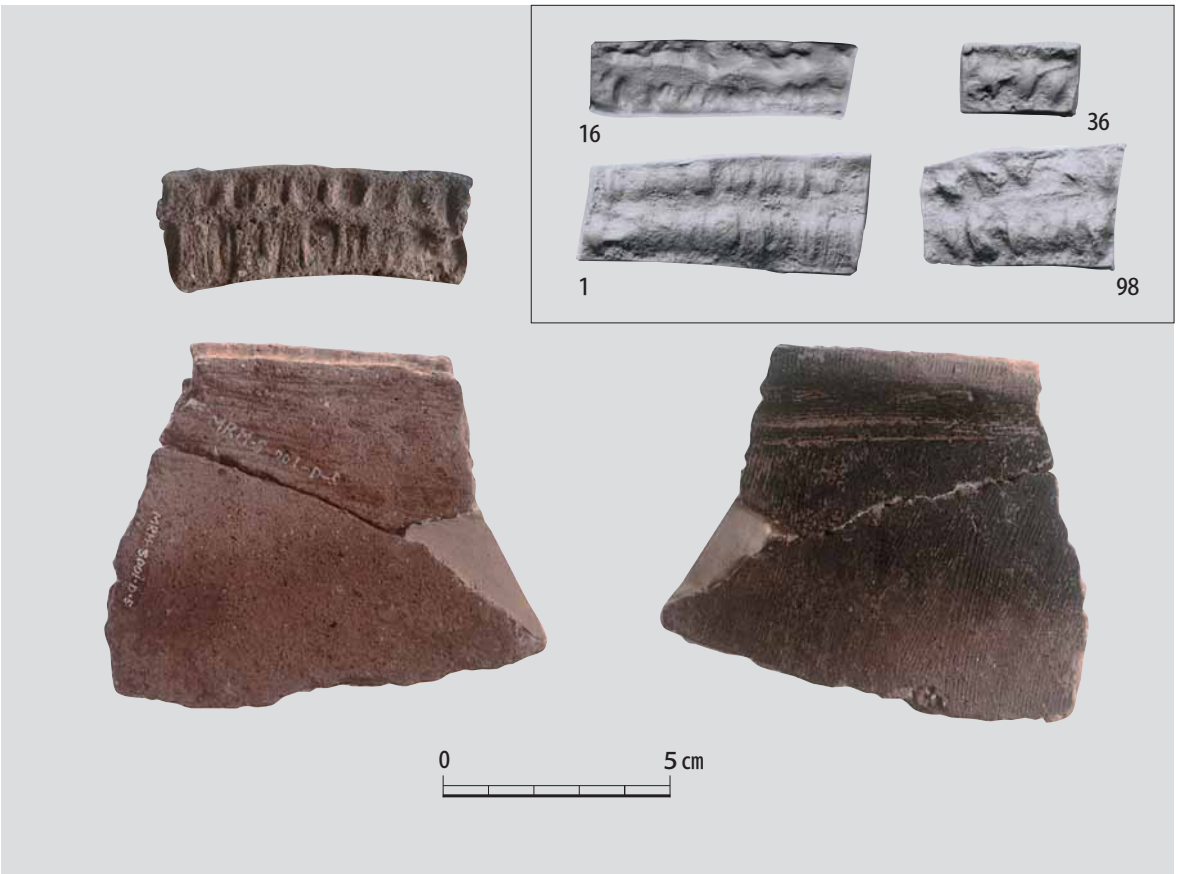


写真(PL) 6
S015検出状況



写真(PL) 7
生物痕跡
検出状況
（自然の落ち込みⅠ）

写真（PL）8　出土遺物



写真（PL）9　中世土師器（土鍋）の展開写真（遺物番号 1）
と土鍋口縁部の粘土圧痕

序　　文

熊本県教育委員会では、国土交通省菊池川工事事務所木葉川復緊事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、熊本県玉名市大字津留字群前に所在する群前遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、中世、近世の遺構を中心として、弥生、古墳、古代、中世、近世の遺物が発見されました。特に中世期の青磁、白磁が出土していることは菊池氏が対明貿易港として高瀬や伊倉を中心に利用していたことに関連があると考えられます。

この報告書が県民の皆様を始め多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解を深めて頂く一助となれば、喜びに堪えません。

なお、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導、助言をいただいた諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成16年３月31日

熊本県教育長　　田　中　力　男

例　　言

1．本書は、平成14年（2002）10月１日～平成15年（2003）２月28日にかけて実施した熊本県玉名市大字津留字群前に所在する群前遺跡の発掘調査報告書であり、熊本県文化財調査報告第219集である。
2．調査は、平成14年度国土交通省菊池川工事事務所木葉川復緊事業に伴い実施した。
3．調査は、国土交通省菊池川工事事務所の依頼を受け、熊本県教育庁文化課が実施し、遺物の整理・保管は熊本県文化財資料室で行った。
4．整理報告は平成15年度（2002年度）に行った。
5．国土座標軸による測量基準杭の設定は、㈱有明測量開発社に委託した。
6．本書で使用した航空写真は、九州航空株式会社に委託撮影したものである。
7．現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは、岡本真也・阿南麻衣が行った。遺物実測は、松本裕子・井島秀子・金子美代子・坂本貴美子・宮崎典子・岡本が行った。遺構製図及び遺物製図は、西村和美・三宅由華・松本・坂本が行った。遺物写真撮影は、村田百合子の指導のもと、岡本が行い、小山正子・伊津野ノブ子・高濱悦子・原田美和が補助した。写真の縮尺は不統一である。
8．英文要約は、岡本が作成し、村田がこれを訂正した。
9．本文の執筆は、第４章を㈱パレオ・ラボに委託し、それ以外を岡本が行った。
10．本書の編集は、岡本があたり、校正等に際しては西村・三宅が補助した。
11．遺物は、熊本県文化財資料室に保管している。

凡　　例

1．写真図版のキャプションにある矢印は撮影方向を示す。
2．本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。
3．報告書に掲載した実測図の縮尺は不統一であるため、おのおのの頁に明記した。
4．出土遺物の観察表と掲載文については、全て巻末の出土遺物観察表に掲載している。
5．須恵器については古代須恵器の断面を黒ぬりで、中世須恵器の断面をトーンで表現し区別した。

本　文　目　次

口絵カラー写真

序文

例言・凡例

第Ⅰ章　調査の経緯 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の組織 …… 1

第３節　調査の過程 …… 1

第Ⅱ章　位置と環境 …… 3

第１節　地理的環境 …… 3

第２節　歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の概要 …… 23

第１節　調査の方法 …… 23

第２節　調査区の設定 …… 23

第３節　層位と包含層 …… 23

第Ⅳ章　調査の結果 …… 27

第１節　はじめに …… 27

第２節　遺構 …… 27

第３節　遺物 …… 51

第４節　自然の落ちこみ …… 60

第Ⅴ章　諸分析 …… 69

・植物珪酸体分析

・炭化種子の同定

・放射性炭素年代測定

第Ⅵ章　総括 …… 78

遺物観察表 …… 87

引用・参考文献 …… 90

summary …… 94

写真図版 …… 96

あとがき …… 122

報告書抄録

挿　図　目　次

図(Fig) 1　群前遺跡周辺遺跡地図　S＝1/50,000 …… 5
図(Fig) 2　地形断面図　S＝1/50,000 …… 6
図(Fig) 3　群前遺跡周辺調査区配置図　S＝1/1,000 ……14
図(Fig) 4　遺構配置図 ⑴　S＝1/200 ……15
図(Fig) 5　遺構配置図 ⑵ ⑶　S＝1/200 ……17
図(Fig) 6　土層断面図 ⑴　S＝1/80 ……19
図(Fig) 7　土層断面図 ⑵　S＝1/80 ……21
図(Fig) 8　燃焼土坑（S001）・出土遺物実測図　S＝1/30，1/3，1/2 ……28
図(Fig) 9　燃焼土坑（S002，003）　土坑（S004，005）・出土遺物実測図　S＝1/30，1/3 ……30
図(Fig)10　土坑（S007）・出土遺物実測図　S＝1/30，2/3 ……32
図(Fig)11　土坑（S010）・出土遺物実測図　S＝1/10，1/3 ……33
図(Fig)12　掘立柱建物（S011）実測図　S＝1/80 ……34
図(Fig)13　ピット（S011ピット５）・出土遺物実測図　S＝1/20，1/3 ……35
図(Fig)14　掘立柱建物（S012）実測図　S＝1/80 ……36
図(Fig)15　掘立柱建物（上：S013、下：S014）実測図　S＝1/80 ……38
図(Fig)16　畝状遺構群（S015）実測図　S＝1/80 ……40
図(Fig)17　畝状遺構群（S016）実測図　S＝1/80，1/40 ……41
図(Fig)18　杭列（S019，020）実測図　S＝1/80，1/20 ……42
図(Fig)19　ピット（左：Ｃ－６ピット７、右：Ｃ－４ピット１）・出土遺物実測図　S＝1/20，1/3 ……43
図(Fig)20　溝状遺構（S008）・出土遺物実測図　S＝1/80，1/40，1/3 ……44
図(Fig)21　溝（S006）実測図　S＝1/80 ……45
図(Fig)22　溝（S006）出土遺物実測図　S＝1/3，2/3，1/2 ……47
図(Fig)23　畝状遺構群（S018）実測図　S＝1/100 ……49
図(Fig)24　溝（S017）実測図　S＝1/80、1/40 ……50
図(Fig)25　包含層出土遺物実測図 ⑴　S＝1/3 ……52
図(Fig)26　包含層出土遺物実測図 ⑵　S＝1/3，2/3，1/2 ……53
図(Fig)27　自然の落ちこみⅠ実測図　S＝1/80，1/40 ……55
図(Fig)28　生物痕跡（S006，自然の落ちこみⅠ）実測図　S＝1/80 ……57
図(Fig)29　上層及び一括出土遺物実測図 ⑴ S＝1/3 ……59
図(Fig)30　上層及び一括出土遺物実測図 ⑵ S＝2/3，1/2，1/1 ……63
図(Fig)31　下層出土遺物実測図⑶　S＝1/3，1/2 ……64
図(Fig)32　自然の落ちこみⅡ出土遺物実測図　S＝1/3，1/2，1/1 ……66
図(Fig)33　菊池川口の港の変遷要図（田辺 1988） ……79
図(Fig)34　津と荘園関係図（田辺 1988に追筆） ……80
図(Fig)35　群前遺跡周辺字図（玉名郡村図　津留村『玉名市史　資料篇１　絵図・地図』に加筆） ……80
図(Fig)36　群前遺跡遺構配置図（中世Ａ期、中世Ｂ期） ……82
図(Fig)37　群前遺跡遺構配置図（中世Ｃ期、中世・それ以前、近世以降） ……84
図(Fig)38　湊関係施設位置図（田辺 1988に追筆） ……85

表　目　次

表(Tab) 1　周辺遺跡一覧表 ⑴ …… 7
表(Tab) 2　周辺遺跡一覧表 ⑵ …… 8
表(Tab) 3　周辺遺跡一覧表 ⑶ …… 9

表(Tab)４　周辺遺跡一覧表 ⑷ ……10
表(Tab)５　周辺遺跡一覧表 ⑸ ……11
表(Tab)６　周辺遺跡一覧表 ⑹ ……12
表(Tab)７　周辺遺跡一覧表 ⑺ ……13
表(Tab)８　太宰府土器型式と国産陶器・貿易陶器編年（山本 1995）……78
表(Tab)９　菊池川口の諸港の推定年代（田辺 1988）……80
表(Tab)10　熊本県北部～中央部編年概略（美濃口 1994）……81
表(Tab)11　土器観察表 ⑴ ……87
表(Tab)12　土器観察表 ⑵ ……88
表(Tab)13　石器観察表……89
表(Tab)14　鉄器観察表……89
表(Tab)15　土錘観察表……89
表(Tab)16　古銭観察表……89

写　真　図　版

写真(ＰＬ)１　空撮１（遺跡上空より木葉山方面を望む）
写真(ＰＬ)２　空撮２（遺跡上空より雲仙方面を望む）
写真(ＰＬ)３　空撮３（遺跡周辺）
写真(ＰＬ)４　空撮４（遺跡全景）
写真(ＰＬ)５　土層断面（Ｂ、Ｃ－２）
写真(ＰＬ)６　S015検出状況
写真(ＰＬ)７　生物痕跡検出状況（自然の落ちこみⅠ）
写真(ＰＬ)８　出土遺物
写真(ＰＬ)９　中世土師器（土鍋）の展開写真（遺物番号１）
写真(ＰＬ)10　遺跡全景 ⑴ ……96
写真(ＰＬ)11　遺跡全景 ⑵ ……96
写真(ＰＬ)12　遺跡全景 ⑶ ……96
写真(ＰＬ)13　土層断面１（北東側：Ｃ－８）……97
写真(ＰＬ)14　土層断面２（南西側：Ｃ－２）……97
写真(ＰＬ)15　土層断面３（南西側：Ｂ－２）……97
写真(ＰＬ)16　土層断面４（南西深掘：Ｃ、Ｄ－１）……98
写真(ＰＬ)17　S001～003検出状況 ……98
写真(ＰＬ)18　S001完掘状況 ……98
写真(ＰＬ)19　S002，003完掘状況 ……99
写真(ＰＬ)20　S004完掘状況 ……99
写真(ＰＬ)21　S005完掘状況 ……99
写真(ＰＬ)22　S007遺物出土状況（遺物番号７） ……100
写真(ＰＬ)23　S010検出状況 ……100
写真(ＰＬ)24　S010半裁状況 ……100
写真(ＰＬ)25　S006完掘状況 ……101
写真(ＰＬ)26　S006土層断面 ……101
写真(ＰＬ)27　S006遺物出土状況（遠景）上層は自然の落ちこみⅠ ……101
写真(ＰＬ)28　S006遺物出土状況（近景：遺物番号17） ……102
写真(ＰＬ)29　S006遺物出土状況（近景：遺物番号16） ……102
写真(ＰＬ)30　S011，013，008完掘状況 ……102
写真(ＰＬ)31　S008土層断面 ……103

写真（ＰＬ）32　S012，014完掘状況 ……103
写真（ＰＬ）33　掘立柱建物群（S011～014）完掘状況 ……103
写真（ＰＬ）34　遺物出土状況（遺物番号11：S011のピット５） ……104
写真（ＰＬ）35　遺物出土状況（遺物番号12：Ｃ－６のピット７） ……104
写真（ＰＬ）36　S020のピットＤ杭半裁状況 ……104
写真（ＰＬ）37　S019のピットＡ杭半裁状況 ……105
写真（ＰＬ）38　杭材（左：自然の落ちこみⅠ内，右：S019のピットＢ） ……105
写真（ＰＬ）39　自然の落ちこみⅠ完掘状況 ……105
写真（ＰＬ）40　自然の落ちこみⅠ内生物痕跡検出状況 ……106
写真（ＰＬ）41　自然の落ちこみⅠ床土断面状況 ……106
写真（ＰＬ）42　自然の落ちこみⅠ土層断面（下層は自然の落ちこみⅡ） ……106
写真（ＰＬ）43　自然の落ちこみⅠ内の杭半裁状況 ……107
写真（ＰＬ）44　自然の落ちこみⅠ内の出土杭 ……107
写真（ＰＬ）45　自然の落ちこみⅠ遺物出土状況（遺物番号105） ……107
写真（ＰＬ）46　遺物出土状況（遺物番号122：自然の落ちこみⅡ） ……108
写真（ＰＬ）47　S017検出状況 ……108
写真（ＰＬ）48　S017完掘状況 ……108
写真（ＰＬ）49　S015検出状況 ……109
写真（ＰＬ）50　S015完掘状況 ……109
写真（ＰＬ）51　S016検出状況 ……109
写真（ＰＬ）52　S016完掘状況 ……110
写真（ＰＬ）53　S018検出状況（北側） ……110
写真（ＰＬ）54　S018完掘状況（北側） ……110
写真（ＰＬ）55　S018完掘状況（南側） ……111
写真（ＰＬ）56　作業風景 ⑴ ……111
写真（ＰＬ）57　作業風景 ⑵ ……111
写真（ＰＬ）58　作業風景 ⑶ ……112
写真（ＰＬ）59　作業風景 ⑷ ……112
写真（ＰＬ）60　作業員の皆様方と ……112
写真（ＰＬ）61　出土遺物【S001，002，007，008】 ……113
写真（ＰＬ）62　出土遺物【S010，011】 ……113
写真（ＰＬ）63　出土遺物【Ｃ－４ピット１】 ……114
写真（ＰＬ）64　出土遺物【S006】 ……114
写真（ＰＬ）65　出土遺物【上層及び一括 ⑴】 ……115
写真（ＰＬ）66　出土遺物【上層及び一括 ⑵】 ……115
写真（ＰＬ）67　出土遺物【上層及び一括 ⑶】 ……116
写真（ＰＬ）68　出土遺物【出土鉄器】 ……116
写真（ＰＬ）69　出土遺物【下層 ⑴】 ……117
写真（ＰＬ）70　出土遺物【下層 ⑵】 ……117
写真（ＰＬ）71　包含層出土遺物 ⑴ ……118
写真（ＰＬ）72　包含層出土遺物 ⑵ ……118
写真（ＰＬ）73　包含層出土遺物 ⑶ ……119
写真（ＰＬ）74　包含層出土遺物 ⑷ ……119
写真（ＰＬ）75　自然の落ちこみⅡ出土遺物 ⑴ ……120
写真（ＰＬ）76　自然の落ちこみⅡ出土遺物 ⑵ ……120
写真（ＰＬ）77　遺跡内出土鉄滓 ……121
写真（ＰＬ）78　遺構内出土粘土塊 ……121

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

本遺跡の調査は、国土交通省菊池川工事事務所木葉川復緊事業に伴う堤防工事によるものである。

事業の実施に先立ち予定地内に埋蔵文化財が存在する可能性が高いことから、試掘調査を実施した。その結果、中世から近世の土器や陶磁器片が発見され、遺跡の存在が確認された。その後、埋蔵文化財の発掘調査が必要な範囲を国土交通省へ連絡し、協議を重ねた上で、調査を行う運びとなった。

第２節　調査の組織

試掘調査は平成13年度、発掘調査は、平成14年度、報告書作成は平成15年度に行った。

【平成13年度（2001）　試掘調査】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　阪井大文（文化課長）
　　島津義昭（課長補佐）
調査総括　高木正文（主幹兼調査第１係長）
調査事務局　小田信也（課長補佐）
　　中村幸宏（主幹兼総務係長）
　　廣瀬泰之（参　事）
　　杉村輝彦（主　事）
調査担当　坂田和弘（参　事）
　　水野哲郎（文化財保護主事）

【平成14年度（2001）　本調査】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　成瀬烈大（文化課長）
　　島津義昭（教育審議員・課長補佐）
調査総括　高木正文（主幹兼調査第１係長）
調査事務局　小田信也（教育審議員・課長補佐）
　　中村幸宏（主幹兼総務係長）
　　天野寿久（主任主事）
　　杉村輝彦（主　事）
調査担当　岡本真也（参　事）
　　阿南麻衣（嘱　託）

【平成15年度（2003）　報告書作成】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　成瀬烈大（文化課長）
　　島津義昭（教育審議員・課長補佐）
調査総括　高木正文（主幹兼調査第１係長）
調査事務局　小田信也（教育審議員・課長補佐）
　　欄杭正義（主幹兼総務係長）
　　天野寿久（主任主事）
　　杉村輝彦（主　事）
調査担当　岡本真也（文化財保護主事）
　　三宅由華（嘱　託）
　　西村和美（嘱　託）

調査指導及び協力者（順不同・敬称略）

渡辺一徳（熊本大学教育学部）、岩永清吉（熊本県文化財保護指導委員）、美濃口雅朗・網田龍生（熊本市教育委員会）、竹田宏司・末永崇・古閑敬士・大倉千寿（玉名市教育委員会）、阿南　亨（菊池市教育委員会）、野田拓治、水野哲郎、山下義満，米村　大（熊本県文化課）

第３節　調査の過程

本調査は平成14（2002）年10月１日（火）から平成15（2003）年２月28日（金）まで行った。

【９月】

（中旬～下旬）

調査区内の表土剥ぎ。中世から近世の土師器片や陶磁器片が出土。調査区の約１／３に広がる水田跡ではないかと考えられる酸化鉄の集積層を確認。

プレハブを設置し、電話及び電気工事を行う。

30日に資料室より機材を搬入。

【10月】

（１日～11日）

１日作業開始。木葉川沿いの道や調査区内に杭を打ったり、梯子や階段を設置したりして安全策をとる。高木主幹が来跡、挨拶をしていただく。

２日～３日、掘り下げをしながら遺構検出を行う。ピットを多く検出。掘立柱建物か柵列の可能性が高いと考えられる。

４日～、試掘調査時に検出された溝と自然の落ちこみⅠとの切り合い関係が判明。自然の落ちこみⅠは表土剥ぎレベルより40～50㎝上から確認され、溝より新しい。遺構検出は晴天時は土が見にくく曇りの日が最適。ピットの半裁に入る。

平板測量で遺構を書き込み、レベルを入れる。

（15日～31日）

雨が多く、作業を中止することが多い。調査区側溝の周りの壁をきれいに落とし清掃する作業と断面実測を行う。廃土はたまった時点（約２週間毎に）で三山建設に運び出してもらう。

【11月】

（１日～15日）

10月同様、全体的に雨が多い。

６日、Ｄ－４，５グリッドで３基の土坑を確認。その中に焼土、炭や中世の土師皿が含まれる。

12日、Ｃ、Ｄ－６，７グリッドで北西から南東方向に平行に伸びる３つの溝状の遺構を確認。

遺構は完掘後、実測も平行して行う。

（18日～29日）

19日、光波測距儀で側溝壁全周に１ｍ毎のグリッド杭のニゲ杭をうつ。

25日、自然の落ちこみⅡ上層「開元通宝」１枚が出土。渡来銭で唐代（初鋳621年）に製造されたとなっているが、後世に日本で製造された模鋳銭の可能性も考えられる。

自然の落ちこみⅠ上層から滑石製リング状の遺物が出土。

【12月】

（２日～13日）

前半もかなり雨が多く、作業ができない日が続く。

２日、山下氏が来跡。ピットの掘り方や掘立柱建物検出のノウハウを指導していただく。

５日、掘立柱建物２棟を確認。

12日、米村大氏より大判（４×５）サイズで遺構全景写真を撮影してもらう。

桃と考えられる炭化種子が約10個程含まれる浅い土坑を検出。

（16日～27日）

自然の落ちこみⅠの掘り下げを進める。中世の遺物がローリングを受けた状態で多く出土。畝状遺構の掘り下げも平行して行う。

【１月】

（７日～18日）

７日、仕事始め。１月中旬の空撮を目指して遺構の掘り下げを中心に作業を進める。

８日～、自然の落ちこみⅠ周辺に広がる生物痕跡の実測も平行して行う。

17日、最終的に５棟の掘立柱建物を検出。両庇で２間×３間総柱建物も含まれる。

18日、空中写真撮影。

（20日～31日）

自然の落ちこみⅠを完掘。自然の落ちこみⅠより下層に落ち込んだ層（自然の落ちこみⅡ）を掘り下げる。実測は５棟の掘立柱建物を中心に行う。鉄製品が出土。杭列が確認されるが、かなり新しい可能性が考えられる。杭材の先端部は金属による加工痕跡が明確に残る。

【２月】

（３日～14日）

畝状遺構（S015）の下に別の畝状遺構（S018）があることが判明。上の畝状遺構の完掘を目指して掘り下げを行う。しかし、埋土がわかりにくい。Ｃ、Ｄ－７，８グリッドに限定して掘り下げる。

12日、下の畝状遺構（S018）の掘り下げに入る埋土が砂質で掘りやすい。

（17日～28日）

最下層で検出された溝（S017）の掘り下げに入る。約90度に曲がりながら南北に伸び、更に東西につながる途中まで確認した。埋土が砂質で掘りやすい。

26日、㈱パレオ・ラボの藤根氏が自然科学分析のサンプリングに来跡。

28日、午前中に調査備品などの撤収、場内整備を行い全ての調査を終了する。作業は午前中で終了。午後に仮設トイレ、備品、調査機材等の撤収。プレハブなどは３月１日，２日の休日に撤収完了。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

玉名平野は熊本県の北部に位置し、菊池川下流域に広がった面積49㎢を有する沖積平野である。この平野では玉名市の市街地を頂点として典型的な三角州を形成し、前縁には藩政時代より進められてきた干拓地が豊穣の海である有明海に向かって広がっている。対岸は長崎県の島原半島である。一方平野の東部は金峰山系山麓に限られ、北側は花崗岩山塊からなる小岱山に続く洪積台地と接している。

市街地は北側の花崗岩風化土壌で形成された丘陵地帯、沖積面よりの比高５ｍ程度の低位洪積段丘、弥生海退による海岸線の後退と河川の働きによって形成された自然陸化箇所、広大で肥沃な臨海沖積平野とに大きく分けられる。玉名市街中央を貫流して有明海に注ぐ菊池川は、幹線の流路延長61.2㎞、阿蘇外輪山北西部に源を発し、菊池渓谷をはじめ山間地を流下、中流の菊鹿盆地を経て下流の玉名平野に至り、有明海に注ぐ。下流域では和仁川、内田川、江田川、木葉川、繁根木川などの諸支流が合わさり、特に玉名平野南部の本遺跡周辺部で大きく蛇行し、屈曲している。

また、26,300haという日本一広大な干潟を持つ有明海は、全国の海岸に分布する干潟の約42％にもおよび、東京湾より大きく伊勢湾や陸奥湾に匹敵する大きさの内海である。特に潮の干満の差が日本一大きく、大潮時には最大６～７ｍに達する。潮は菊池川の支流、木葉川に隣接する本遺跡の横を上がり、約12㎞程度を逆流する。（熊日　1997）

群前遺跡は熊本県玉名市大字津留字群前に所在する。木葉川と菊池川が合流する地点から木葉川側へ約200ｍ上流の左岸に位置する。（図１参照）標高は約６ｍの沖積地である。付近は雨期には毎年のように河川の水位が上がり、氾濫原となる地帯である。

第２節　歴史的環境

ここでは図１の玉名地域を中心に群前遺跡周辺の各時代の歴史的環境を概観してみたい。

【旧石器時代】（～約13,000年前）

現在、熊本県下には300を越える旧石器時代の遺跡が確認されている。河川流域に集中しており、その中でも白川を中心とする阿蘇外輪山一帯や球磨川上流域を中心とする球磨盆地一帯などが特に集中した地域である。

菊池川も例外ではなく、流域沿いに玉名、山鹿、菊池周辺に点在している。現在のところ玉名市内には４ヶ所の旧石器の遺跡（玉名市の遺跡地図による）が存在する。定形石器や時期などの詳細は不明である。周辺遺跡では岱明町の今泉遺跡、年の神遺跡、備中遺跡ではナイフ形石器が採集されており、菊水町の下津原遺跡では剥片尖頭器、中原遺跡ではナイフ形石器、台形様石器、細石刃、細石核等が採集されている。また、荒尾市の平山宿遺跡では礫層からチャート製のチョッパー、陣屋敷遺跡では粘土層から西洋梨形のハンダックスと考えられる両面加工石器が採集されている。これらはいずれも前期旧石器時代の石器の可能性があると報告されている。荒尾市周辺は約９万年前の阿蘇４火砕流堆積物が堆積していない地域だと言われており、その可能性は十分に考えられる。小岱山が盾となって阿蘇４火砕流をくい止めたものと考えられている。

【縄文時代】（約13,000年前～2,300年前）

縄文時代前期には気候の温暖化に伴い海水面が現在より３～５ｍ上昇（縄文海進）し、その後も気候の変動によりわずかな海進、海退を繰り返している。玉名市周辺の縄文時代の遺跡は古玉杵名湾が台地裾部にかかる場所を中心に貝塚が多い。繁根木貝塚、保田木貝塚、桃田貝塚などの縄文中期の集落・貝塚である。天水町には縄文時代前期の尾田貝塚、菊水町江田船山古墳の位置する清原台地の菊池川隣接部には縄文時代後期の若園貝塚がある。

また、菊池川左岸の低湿地遺跡も確認されている。上小田宮の前遺跡では縄文時代後期～晩期の弓の一部や炭化したドングリが付着した深鉢型土器の破片などが出土している。狩猟や採集（ドングリのあく抜き作業）を裏付けできる良好な資料である。玉名市内には現在のところ16ヶ所の縄文時代の遺跡（玉名市の遺跡地図）が存在する。

【弥生時代】（約2,300年前～1,700年前）

弥生時代になると遺跡の数も増加し、菊池川流域

の低湿地や台地上に集落が営まれる。付近を概観すると弥生時代前期については天水町の斉藤山貝塚があり、多くの突帯文土器、日本最古とされる鉄斧が出土している。中期以降では、当地が北部九州の影響を受けやすい地理的要因もあることから、甕棺墓や支石墓群が多く発見されており、もっぱら台地上に分布域を示している。高岡原遺跡は立願寺台地に位置する弥生時代後期から古墳時代前期頃の集落跡であり、内行花文鏡２面が出土している。

低地の遺跡では清原台地の対岸にあたる菊池川右岸、標高約10.5mの自然堤防上にある前田遺跡が挙げられる。弥生時代中期後半～後期にかけての住居跡が50基以上、甕棺墓２基などが確認されている。

玉名市内には現在のところ70ヶ所以上の弥生時代の遺跡（玉名市の遺跡地図）が存在する。

【古墳時代】（約1,700年前～1,400年前）

菊池川流域は古墳の密集地帯である。特に遺跡の北側丘陵部には中期から後期にかけての装飾古墳や横穴墓が数多く分布する。

菊池川流域で最も古い前方後円墳は、畿内編年３期の左岸下流域にある玉名市の山下古墳（４世紀末）である。院塚古墳は４世紀末～５世紀初頭で、畿内編年４～５期の前方後円墳である。玉名市の繁根木（伝左山）古墳は径35mの円墳であるが、最古の複式横穴式石室と舟形石棺も直葬し、６世紀初頭と考えられている。

畿内編年７期後半には銀象嵌太刀や冠などの豊富な副葬品を持つ菊水町の江田船山古墳（５世紀末）が築造される。畿内編年８～９期では、内部主体部が石棺に代わって石屋形が登場し、装飾古墳の最盛期となる。玉名市にある大坊古墳（国史跡）、永安寺東古墳・永安寺西古墳（いずれも国史跡）、石貫穴観音横穴・石貫ナギノ横穴群（いずれも国史跡）はその代表である。

近年の調査において天水町の大塚古墳、菊水町の松阪古墳では、内部主体が石棺直葬の径が100mを超える前方後円墳である可能性が指摘されている。また、玉名市の城ヶ辻古墳群の６号墳では北部九州の影響を受けた県内初の竪穴系横口式石室墓が確認された。

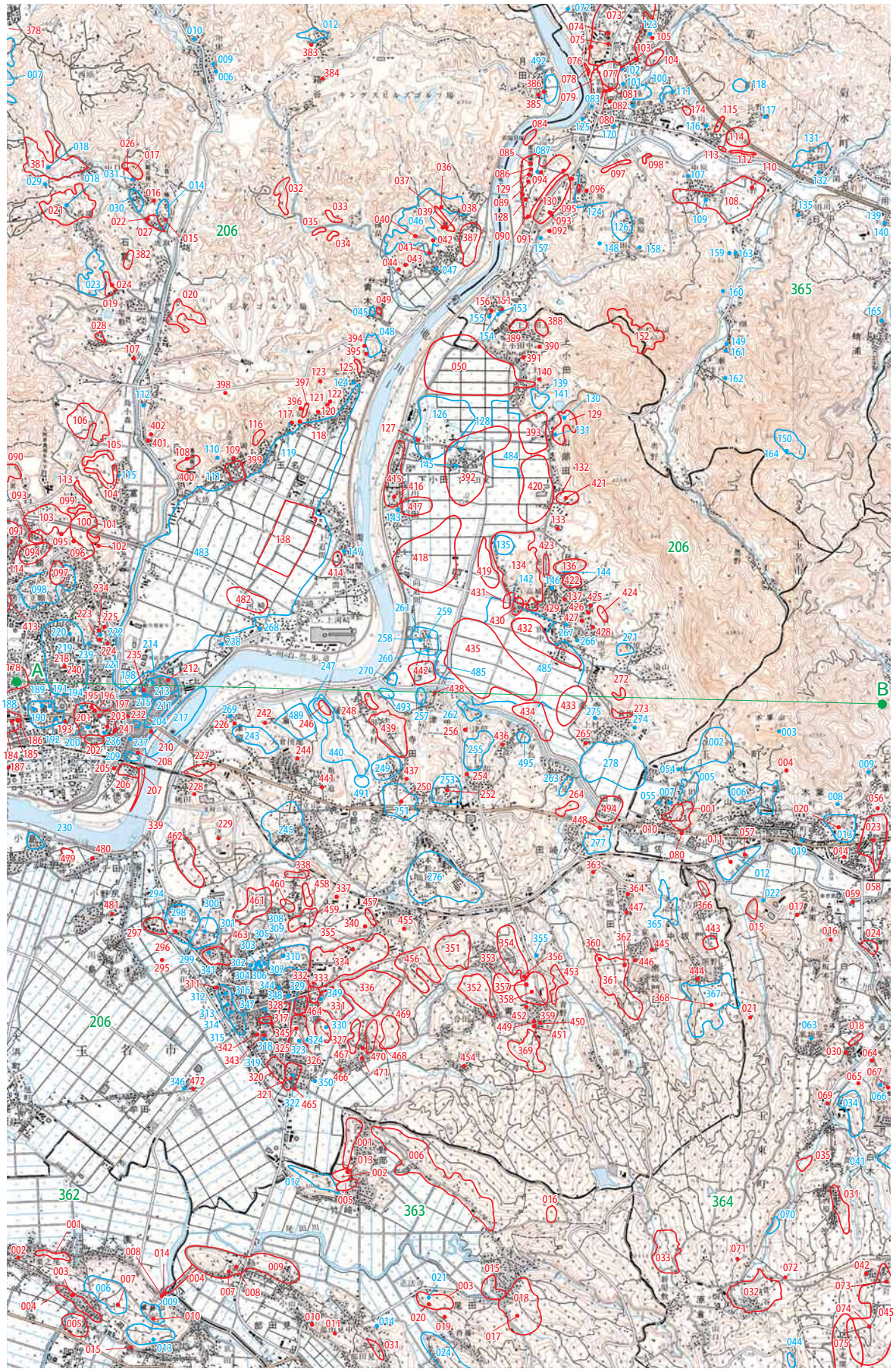
これらの古墳の存在から古墳時代の当市域には、かなりの勢力をもった豪族が存在したことが窺える。

【歴史時代】（約1,400年前～）

古代律令制下、当市域は玉名郡（日本書記では玉杵名郡）に属し、「和名抄」に見える日置・下宅・宗部・大町・江田の各郷に属していたと考えられる。昭和29年、31年、立願寺地区の発掘調査により礎石群が確認され、布目瓦が出土したことから玉名郡衙跡と推定された。その付近からは多量の焼米と７個の礎石や炭化材が出土し、「三代実録」貞観17年（875）６月20日条に見える玉名郡倉に比定された。また、奈良中期から平安中期に至る軒平瓦・鬼面瓦などが出土し、法起寺様式の伽藍配置をもつ寺跡であることが確認され、玉名郡寺跡と考えられている。このように郡の中心ともいうべき３つの建造物の遺構がまとまった形で発見されたのは、全国的にも珍しく、梅林から元玉名にかけての条里制遺構とともに、まさしく玉名郡の中心地にふさわしい条件を備えている。

寛政６年（1794）菊水町江田の鶯原から出土した火葬骨蔵壺の墓誌銅板から、玉名郡司日置氏の存在が明らかになった。同氏は古墳時代から古代を通して、玉名郡内に勢力を有しており、現在疋野原付近に伝承される疋野長者伝説や装飾古墳に代表される古墳群の築造者も日置氏にかかわるものと推定される。

中世に入ると当市域にも多くの荘園が成立する。すでに11世紀はじめには、市南東部の菊池川左岸に太宰府天満宮安楽寺領の玉名荘が成立し、伊倉には12世紀前半に宇佐宮領伊倉別符が成立した。また、鎌倉期には市東部に仁和寺仏母領の玉名荘があった。南北朝期には菊池郡を拠点とする菊池氏が南朝方として活動し、正平年間（1346～1370）には菊池武光の弟武尚が大野荘まで進出している。大野荘には、肥後の対明貿易港の１つとして、中国明の類書「図書篇」に「達加什（たかせ）」と見える高瀬があり、菊池一族が同港を通じて明や朝鮮と貿易活動をしていたことが判明する（海東諸国記）。また、伊倉荘では、本堂山の板碑群の中に渡海行者の存在を示すものや、「大明振倉謝公墳」と刻まれた明人墓碑が



青：中世を含む遺跡　赤：中世を含まない遺跡

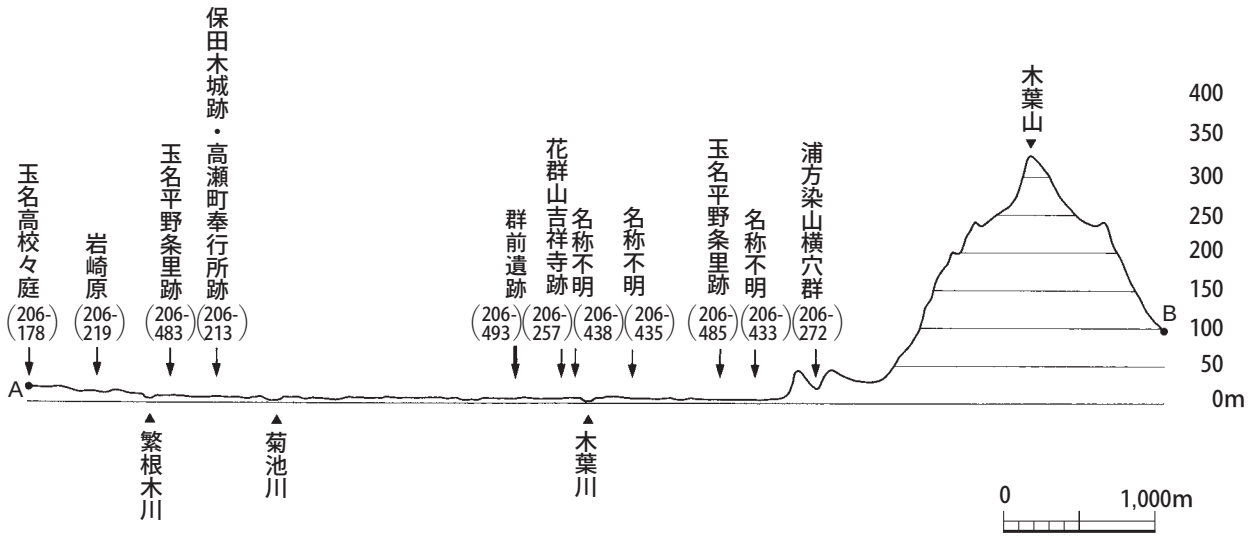
図（Fig）1　群前遺跡周辺遺跡地図　S＝1／50,000

あり、中国との交流があったことを示している。このような港を制圧し、自己の管理下に置くことは、菊池氏にとって非常に重大な課題であり、高瀬進出のねらいもそこにあったといえよう。

現在玉名市には10の中世城が確認されている。

天正15年（1587）豊臣秀吉の九州仕置後、当市域は佐々成政、翌年には加藤清正の支配に属した。清正は菊池川の流路を変更し、大干拓事業を行い、新地を開いた。当時の千田川原一帯は、菊池川の三角州とした川が分流し、長年にわたる土砂の堆積が進行していた。清正は現在の伊倉船津へ流れていた菊池川本流を、大浜方面へ付け替えるため東塘・西塘を造り、さらに上流左岸の桃田・千田・小島に堤防を築き、旧本流を締め切り、菊池川の流路を変えたと伝えられる。この事業は天正17年に着工され、完成までに17年を要し、慶長10年（1605）に完成したと言われるが（藤公偉業記）、なお検討が必要とされる。この大改修工事ならびに干拓事業により、伊倉への船の交通は絶たれ、伊倉は港としての機能を失った。その代償として、当市域では小野尻・千田川原・小島・川島・北牟田・大浜の６か村にわたって広大な牟田新田が生まれ、後世の村の成立の基礎となった。横島・大園（現横島町）両村を加えれば、合計870町９反歩、石高5,976石の小田牟田新地が出現したといわれる。

寛政９年（1632）加藤氏に代わって細川氏が入封し、当市域も同氏の支配に属した。同12年には郡と村の中間に手永という肥後藩特有の行政区を設けた。玉名郡内には坂下、小田、伊倉、内田など14の手永が入り組む形で成立し、それぞれ伊倉孫左衛門手永のように、手永名を姓とした惣庄屋が支配した。しかし、寛文年間（1661～1673）頃には整理され、６手永となり、当市域は小田、内田、坂下、南関の４手永に文属し、高瀬だけは高瀬町として独立した行政単位であった。同町は加藤清正の菊池川改修により、地位が向上し、城北地方の一大中心地となった。菊鹿盆地や玉名平野の産地を控え、寛政12年（1800）ころには12にも及ぶ手永の年貢米が舟で菊池川を下り、高瀬に集約された。荷は舟から直接に町家の倉へ運び入れられた。現在でもその遺構の一部は残っている。また、同町は高瀬町奉行の支配下に置かれ、同町の隆盛に伴い商工業は活気を呈し、幕末期には菓物商、豆腐商、大工、舟乗、穀物商、桶屋、仕立屋、左官、畳職、鍛冶職、風呂職、薬店などの職業が見られたといわれる。



図(Fig)2　地形断面図　S＝1／50,000

熊本県（43）菊水町（365）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
365-072	観音堂五輪塔	原口　大江田	中世	石造物	
365-073	諏訪原	江田　諏訪原	弥生～平安	集落	弥生土器・須恵器・土師器
365-074	札木甕棺群	江田　皆行原	弥生	埋葬	弥生中期
365-075	江田駅跡推定地	江田　東	古代	包蔵地	
365-076	皆行原狸が浦横穴群	江田　狸ヶ浦	古墳	古墳	
365-077	中小路原	江田　中小路原	古代	包蔵地	
365-075	いご浦横穴	江田　氏無	古墳	古墳	
365-079	馬場堂ノ上	江田　堂ノ上	弥生・古墳	埋葬	弥生後期　甕棺群
365-080	若宮古墳	江田　中小路	古墳	古墳	前方後円墳
365-081	若宮舟形石棺	江田　中小路	古墳	埋葬	
365-082	江田穴観音古墳	江田　中小路	古墳	古墳	勾玉・金環、円墳
365-082	堂ノ上宝篋印塔	江田　堂ノ上	中世	石造物	
365-084	若園貝塚	江田　若園	縄文	貝塚	
365-085	清原石人	江田　清原	古墳	石造物	石製腰掛、石殿
365-086	京塚古墳	江田　清原	古墳	古墳	清原舟形石棺を含む、『玉名郡誌』
365-087	清原五輪塔	江田　清原	中世	石造物	
365-088	江田船山古墳	江田　大久保原	古墳	古墳	銅鏡・銀象嵌銘文太刀・剣・鎧・冠・沓など
365-089	虚空蔵塚古墳	江田　清原平	古墳	古墳	
365-090	塚坊主古墳	瀬川　清水原	古墳	古墳	
365-091	清水原家型石棺	瀬川　清水原	古墳	埋葬	家形石棺
365-092	松坂横穴群	瀬川　松坂	古墳	古墳	
365-093	姫塚古墳	瀬川　松坂	古墳	古墳	土器
365-094	清原	江田　大久保原ほか	縄文・弥生	包蔵地	縄文後期、弥生後期
365-095	北原横穴群	瀬川　北原	古墳	古墳	
365-096	長刀横穴群	瀬川　長力	古墳	古墳	１号が県指定・線刻の装飾がある
365-097	鴬原入口横穴	瀬川　東長力	古墳	古墳	
365-098	中原ボーシ下横穴群	瀬川　北帽子	古墳	古墳	
365-099	江光寺跡・江光寺五輪塔群	江田　江光寺	中世	寺社	50基
365-100	江田城跡（城山城跡）	江田　江光寺	中世	城	
365-101	真光寺跡	江田　中小路	中世	寺社	
365-102	光徳寺跡	江田　皆行原	中世	寺社	
365-103	天神平石棺墓	江田　天神平	古墳	埋葬	
365-104	立石島崎	原口　立石	弥生	埋葬	弥生中後期
365-105	立石寺跡	原口　野付		寺社	
365-106	三宝寺跡	江田　三宝寺	中世	寺社	
365-107	中原寺跡	瀬川　中原	中世	寺社	石塔群
365-108	西中原	瀬川　西中原	旧石器～古代	包蔵地	旧石器・マイクロコア・ナイフ
365-109	西原長者屋敷跡	瀬川　西原	中世	包蔵地	
365-110	中原北池の本石棺	瀬川　池元	弥生～古墳	埋葬	家形石棺
365-111	城讃岐守墓	江田　三宝寺	中世	墓	
365-112	牧野横穴群	江田　牧野	古墳	古墳	
365-113	寺山小原坂横穴群	江田　小原	古墳	古墳	
365-114	寺山小原	江田　小原	弥生	包蔵地	弥生中期
365-115	寺山宮の東横穴群	江田　寺山	古墳	古墳	
365-116	寺山寺跡	江田　寺山	中世	寺社	
365-117	園五輪塔	江田　長野	中世	石造物	
365-118	乙城跡	江田　長野	中世	城	
365-121	北原寺跡	瀬川　北原	縄文	包蔵地	縄文土器・石器・矢じり
365-122	大久保舟形石棺	江田　大久保	弥生・古墳	埋葬	
365-123	立石城跡	原口　野付	中世	城	
365-124	トンカラリン	瀬川　長力	縄文～近代	建造物	
365-125	熊野宮宝塔	江田　神屋敷	中世	石造物	
365-126	鴬原城・館跡	瀬川　鴬原	中世	城	
365-128	旧境家住宅	瀬川　清水原	近世	建造物	玉東町から移築
365-129	清原船形石棺	江田　清原	古墳	埋葬	舟形石棺
365-130	松坂原	瀬川　松坂原	弥生～古代	包蔵地	
365-131	牧野城跡	江田　牧野	中世	城	中世城、『玉名郡誌』
365-132	古閑の五輪塔群	用木　北富尾	中世	石造物	五輪塔
365-135	田川寺跡	日平　田川	中世	寺社	
365-139	徳丸六地蔵	用木　徳丸	中世	石造物	
365-140	徳丸寺跡	用木　徳丸	中世	寺社	
365-148	イッチョ墓	瀬川　鴬原	中世	墳墓	日置郡公を葬る、銅版墓誌２出土
365-149	日平の宝篋印塔	日平	中世	石造物	
365-150	日平城跡（花簇城跡）	日平　城	中世	城	花簇城ともいう、小森氏代々在城
365-151	椿山古墳	瀬川　古寺原	古墳	古墳	円墳、前方後円形
365-152	禿石	日平　本谷・笹原		祭祀	山上に立つ自然石祭祠説あり
365-153	椿山五輪塔	瀬川　白石	中世	石造物	
365-154	西福寺跡	瀬川　古寺原	中世	寺社	
365-155	会所跡五輪塔	瀬川　古寺原	中世	包蔵地	
365-156	内田郷会所跡	瀬川　本村	近世	包蔵地	
365-157	龍善寺跡	瀬川　浦	中世	寺社	
365-158	鴬原五輪塔	瀬川　鴬原	中世	石造物	
365-159	山下五輪塔	瀬川　中原	中世	石造物	
365-160	畑五輪塔	日平　畑	中世	石造物	
365-161	月浦明泉寺跡	日平（通称月浦）	中世	寺社	月浦宅敷地が寺跡、という古老の話
365-162	花簇寺跡	日平　瀬戸	中世	寺社	
365-163	田川寺跡	日平　田川	中世	寺社	
365-164	花簇山吉祥寺跡	日平　城	中世	寺社	
365-165	大木戸五輪塔	蜻浦　大木戸	中世	石造物	
365-170	横枕宝塔	江田　横枕	中世	石造物	延慶三年の銘
365-174	寺上前	江田　寺上前	旧石器	包蔵地	

熊本県（43）玉名市（206）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
206-006	川床磨崖五輪塔	三ツ川（通称川床）	中世	石造物	磨崖線刻五輪塔片多数
206-007	三ツ川六反製鉄跡	三ツ川（通称六反）	古代・中世	生産	＊昭和52年６月20日指定、ほぼ完形
206-009	玉蓮寺跡	三ツ川　前田	中世	寺社	最近まで阿弥陀堂・堂守があった
206-010	西福寺跡	三ツ川　権現尾	中世	寺社	

表（Tab）１　周辺遺跡一覧表（1）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
206-012	前平	箱谷　前平	縄文～中世	包蔵地	表面採取品、細長両刃尖頭器
206-014	石貫ナギノ横穴群	石貫　ナギノ	古墳	古墳	繁根木川上流域45個、８個装飾
206-015	後田古墳	石貫　後田	古墳	古墳	舟形石棺現存、鉄器副葬
206-016	石貫穴観音横穴	石貫　安世寺	古墳	古墳	５基内２基装飾、千手観音像あり
206-017	太平寺横穴群	石貫　太平寺	古墳	古墳	７基、角形羨門、妻入り天井
206-018	筧口鍛冶跡	石貫　刀研	中世	生産	ふいご羽口、鉄滓散乱、石貫同田貫か
206-019	古城横穴群	石貫　古城原	古墳	古墳	25基内１基装飾
206-020	石貫葉柊	石貫　葉柊	弥生・古墳	包蔵地	弥生土器片多量、土師器
206-021	広福寺門前	石貫　門前	古墳	包蔵地	青磁片・土師器・須恵器包含
206-022	藤原為安の墓	石貫　椰野原	古代	墓	菊池氏の一族
206-023	古城城跡	石貫　古城原	中世	城	古城横穴群のある上の台地全体
206-024	古城洞穴	石貫　古城原		包蔵地	古城横穴群中２群、南より３番目崖下
206-025	広福寺歴代墓地・大智塔	石貫　馬場	中世	墓地	広福寺歴代墓地、五輪塔
206-026	堪空上人墓	石貫　太平寺	古代	墓	
206-027	ナギノ	石貫　椰野原	古墳	包蔵地	土師器・須恵器
206-028	上栗山	石貫　上栗山	古墳	包蔵地	土師器・須恵器多数及び石器
206-029	広福寺裏製鉄跡	石貫　仁田尾	古代・中世	生産	
206-030	安世寺跡	石貫　安世寺	中世	寺社	第１・２世墓市指定
206-031	太平寺跡	石貫　太平寺	中世	寺社	
206-032	塔の尾横穴	石貫　塔の尾	古墳	古墳	１基、風化
206-033	横畠横穴群	青木　横畠	古墳	古墳	８基、５・６号に円文を認める
206-034	六反横穴群	青木　六反	古墳	古墳	４基
206-035	二俣横穴群	青木　二俣	古墳	古墳	２基、保存度概してよし
206-036	水尻横穴群	溝上　水尻	古墳	古墳	２基
206-037	城迫間横穴群	溝上　城迫間	古墳	古墳	７基、４号三角線刻、６号舟浮彫
206-038	真福寺東古墳	溝上　前田	古墳	古墳	舟形石棺蓋発見
206-039	真福寺古墳	溝上　前田	古墳	古墳	墳丘を失う、舟形石棺遺存、鉄斧出土
206-040	赤禿古墳	溝上（通称赤禿）	古墳	古墳	小山の頂上にあり、人骨・鉄剣出土
206-041	前田古墳	溝上　前田	古墳	古墳	割に大型の舟形石棺のこる
206-042	宮の後古墳	溝上　下前田	古墳	古墳	円墳、舟形石棺、寄棟屋根蓋
206-043	田代阿弥陀塚古墳	溝上　田代	古墳	古墳	円墳、箱式棺、舟形系の蓋石
206-044	田代中の塚古墳	溝上　田代	古墳	古墳	円墳、舌状台地突端、小墳丘石材露出
206-045	青木磨崖梵字群	青木　田代上前田	中世	石造物	熊野社境内20数個の梵字あり
206-046	溝の上城跡	溝上　城の原	中世	城	山城、本丸跡に社、近くに清泉あり
206-047	溝の上六地蔵	溝上　下前田	中世	石造物	玉名市内最古、延徳３年10月４日
206-048	玉名の平城跡	玉名　平城	中世	城	菊池川右岸に屹立、眺望地
206-049	青木横穴	青木　上前田	古墳	古墳	青木梵字の北40m１基、羨門損壊
206-050	上小田宮の前	上小田　宮の前など	弥生	包蔵地	弥生土器・石斧・土師器・須恵器
206-090	蛇が谷古墳群	立願寺　蛇が谷	古墳	古墳	封土中に舟形石棺、現在なし、鉄器出土
206-091	玉名郡家跡	立願寺　石丸	古代	包蔵地	上立願寺部落北辺、布目瓦多量散布
206-093	松尾原	立願字松　尾原ほか	弥生	埋葬	
206-094	立願寺跡	立願寺　塔の尾	古代	寺社	高台上、法起寺式
206-095	大塚古墳	立願寺　大塚	古墳	古墳	大円墳、保存良好
206-096	小塚古墳	立願寺　大塚	古墳	古墳	大円墳、保存良好
206-097	玉名郡倉跡	立願寺　西の段	古代	包蔵地	礎石７個配列
206-098	下立願寺	立願寺　西の段	縄文～中世	集落	単式甕棺、弥生土器片散布
206-099	富尾いたび横穴群	富尾　居柊	古墳	古墳	13基崖下に北面する
206-100	大塚・惣萩	立願寺　大塚など	弥生・古墳	包蔵地	弥生、土師器・須恵器片散布する
206-101	冷水横穴群	富尾　冷水	古墳	古墳	冷水台地の北、17基か不明
206-102	冷水塚古墳	富尾　冷水	古墳	古墳	円墳、冷水台地上、舟形石棺をも現在なし
206-103	松尾	立願寺　松尾など	古墳	包蔵地	土師器・須恵器片散布
206-104	富尾原横穴群Ａ	富尾　原	古墳	古墳	Ａ群富尾天満南裾13基、装飾２基，Ｂ群10数基
206-105	富尾浦谷横穴群	富尾　辻・浦谷	古墳	古墳	Ａ群２基，Ｂ群東裾に10数基、完形が多い。
206-106	岩原	富尾　岩原	古墳	包蔵地	富尾の北、完形須恵器・土師器多数出土
206-107	石貫の十字ある板石	石貫　六枝		石造物	上部に十字陰刻あり
206-108	西原古墳参考地	玉名　西原	古墳	古墳	玉名山西端部、楕円状の封土
206-109	大坊古墳	玉名　出口	古墳	古墳	横穴２室、三角連続彩色あり
206-110	大坊寺跡	玉名　東屋敷	中世	寺社	大坊前天満宮社地、糸切皿が出土する
206-111	大坊五輪塔群	玉名　大坊	中世	石造物	部落中５～６基祀る
206-112	小畑六地蔵塔	石貫　小畑	中世	石造物	玉名～南関県道端
206-113	富尾中尾横穴群	富尾　中尾	古墳	古墳	
206-114	上立願寺石天神	立願寺　塔の尾		寺社	神体は立願寺跡の礎石か
206-115	富尾磨崖阿弥陀	富尾　原	中世	石造物	磨崖仏
206-116	岡箱式石棺群	玉名　上原	弥生	埋葬	妙修寺の墓地内３基・２基保存
206-117	永安寺西古墳	玉名（通称永安寺）	古墳	古墳	横穴単式、円文線刻
206-118	永安寺東古墳	玉名（通称永安寺）	古墳	古墳	横穴複式、円・三角・舟・馬を描く
206-119	永安寺跡・永安寺古塔碑群	玉名（通称永安寺）	中世	寺社	東古墳の東隣、玉名大神宮西、五輪塔・宝塔、在銘
206-120	伝玉依姫塚	玉名　釈迦		石造物	社伝で上記古塔群をいう
206-121	馬出古墳（1～2号）	玉名　馬出	古墳	古墳	円墳、横穴式、舟形・箱式石棺。出土品市指定
206-122	小路古墳	玉名　小路	古墳	古墳	27mの山上にあった。他へ復元。出土品市指定
206-123	絵下経塚古墳	玉名　絵下	古墳	古墳	玉名大神宮裏山にあり、封土・周溝あり
206-124	大永・弘治の板碑群	玉名　浦小路	中世	石造物	元玉名の地蔵堂前に２基あり
206-125	元玉名横穴群	玉名　実極田	古墳	古墳	風化、２基
206-126	上小田古屋敷	上小田　古屋敷	縄文～中世	包蔵地	土師器・須恵器片散布
206-127	下小田西丸塚	下小田　陣の浦	古墳	古墳	五輪塔部分あり、中世墳墓か
206-128	下小田養寺丸塚	下小田　養寺	中世	墳墓	養音寺跡という、板碑あり
206-129	小森田松	山部田　猿喰	古代	包蔵地	墓標に「金誉秀清尼」とあり
206-130	長建寺跡	山部田　瀬戸坂	中世	寺社	木葉山の西裾、現在形跡なし
206-131	諏訪宮跡	山部田　出羽	中世	寺社	熊野宮に合祀、現在形跡なし
206-132	小森田七右衛門墓	山部田　新宮	近世	墓	内田郷惣庄屋、旧白石堰建設者
206-133	山下古墳・山下古墳碑	山部田　山下	古墳	古墳	前方後円墳、舟形棺。弘化５年石碑前方部石棺上
206-134	高城	下　高城	古墳	包蔵地	土師器・須恵器・青磁片少量散布
206-135	下村城跡	下　高城	中世	城	本丸跡に薬師堂・五輪塔群あり
206-136	秋丸	下　秋丸	弥生	包蔵地	弥生土器多量出土
206-137	松村・永鳥兄弟墓地	下　井尻	近世	墓	幕末勤王志士兄弟
206-138	両迫間日渡	両迫間　日渡	弥生・古墳	包蔵地	弥生土器・土師器・須恵器包含、水田中
206-139	徳丸古墳群	上小田　下徳丸など	古墳	古墳	前方後円墳３基並列、舟形石棺１
206-140	上小田下丸塚	上小田　堂の後	古代	墳墓	円墳状を呈する

表（Tab）２　周辺遺跡一覧表 ⑵

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
206-141	上小田城跡	上小田下　徳丸など	中世	城	中世丘城古墳、改造の形跡
206-142	大宝院跡	下　和田	中世	寺社	
206-143	金光寺跡	川部田　東屋敷	中世	寺社	
206-144	海福寺跡	下　白丸	中世	寺社	
206-145	養音寺跡	下小田　養寺	中世	寺社	
206-146	普門寺跡	下　田中	中世	寺社	
206-147	長慶寺跡	両迫間　上川端	中世	寺社	
206-178	玉名高校々庭	中　楢林	弥生・古墳	包蔵地	弥生土器・土師器包含、石斧も出土
206-184	南出	中　内田	弥生	包蔵地	弥生カメ棺、合口カメ棺。青磁碗、玉名高校蔵
206-185	南出地下式横穴	中　内田	古墳	古墳	国道208号沿い、近くは弥生以降遺跡
206-186	南出甕棺群	中　内田	弥生	埋葬	国道208号沿い、近くは弥生以降遺跡
206-187	だいの島古墳	中（通称だいの島）	古墳	古墳	玉名駅南、台地南凸端、箱棺
206-188	肥後同田貫刀鍛冶跡	亀甲　上畑・内田	中世	生産	広範囲に鉱滓・羽口埋蔵、子孫分住、刀鍛冶跡
206-189	肥後同田貫歴代刀工の墓	亀甲　上畑	中世	墓地	初代～12代？墳墓７基あり、同田貫刀工
206-190	玉名亀甲	亀甲	縄文～中世	包蔵地	
206-191	上畑丸塚	亀甲　上畑	縄文～中世	包蔵地	国道208号北入、墓地の一隅楕円状封土
206-192	円秀寺跡	亀甲　東	中世	寺社	凸版工場南・跡地に地蔵堂あり
206-193	坂下会所跡	繁根木　馬場	近世	包蔵地	
206-194	豪潮宝篋印塔	繁根木　堂の後	中世	石造物	法務局裏墓地内、文化５年建立、市内３つの１つ
206-195	高瀬藩士墓	繁根木　堂の後	近世	墓地	法務局裏墓地内、２基
206-196	伝左山古墳	繁根木　北	古墳	古墳	国道208号沿線径37mの円墳、出土品多量
206-197	繁根木地下式横穴群（４基）	繁根木　馬場	古墳	古墳	国道208号沿線、出土品なし
206-198	繁根木山寿福寺跡	繁根木　馬場	中世	寺社	国道208号南沿線、跡地郡役所をおく
206-200	稲荷山古墳（他4石碑）	繁根木　馬場	古墳	古墳	八幡宮裏、前方後円墳の封土、朝顔埴輪
〃	豪潮法華妙典一字一石塔	繁根木　馬場	中世	石造物	八幡宮裏墓地、豪潮建立、法華経
〃	補陀落渡海碑	繁根木　馬場	中世	石造物	稲荷山古墳後円部上、永禄11、方圓・善心・道圓
〃	稲荷山薬師堂跡	繁根木　馬場	中世	寺社	稲荷山古墳後円部上、法隆寺系布目瓦大量
〃	宮の後豪潮宝篋印塔	繁根木　馬場	中世	石造物	八幡宮裏、明和４年豪潮19才建立
206-201	繁根木遺跡群	繁根木	弥生	包蔵地	稲荷山古墳の最下層、弥生土器群あり
206-202	繁根木貝塚	繁根木　馬場	縄文	貝塚	八幡宮境内全域、町筋南側、ＪＲ線路
206-203	繁根木箱式石棺（繁根木古墳）	繁根木　馬場	古墳	埋葬	八幡宮東、大正初期、方格規矩文鏡を出す
206-204	宝成就寺跡（古塔碑群･石仏群）	高瀬　下町	中世	包蔵地	多くの古塔碑・石仏を残す、跡地小学校建つ
206-205	西郷小兵衛戦死地	永徳寺　平	近代	軍事	繁根木川東岸に石標、明治10年２月27日戦死
206-206	高瀬御蔵・御米山床跡	永徳寺　馬場など	近世	蔵跡	藩営、慶長年、明治10年蔵跡・礎石・山床・石垣
206-207	高瀬船着場跡（高瀬津跡）	永徳寺　東河原	近世	包蔵地	蔵下川岸、２箇所石組、石畳現存
206-208	高瀬御茶屋跡	永徳寺　出口	近世	包蔵地	蔵跡北隣の地、井戸残る
206-209	大倉山永徳寺跡	永徳寺　出口	中世	寺社	蔵跡北隣の地、形跡なし
206-210	高瀬眼鏡橋	高瀬　下町	近世	建造物	高瀬裏川にかかる、嘉永元年二重拱橋
206-211	高瀬本町通	高瀬　保田木町など	縄文～近世	包蔵地	地道路3.5mの下層、鎌倉期の遺物大量出土
206-212	保田木貝塚	高瀬　保田木町	縄文	貝塚	城跡神社境内全域、阿高式中心
206-213	保田木城跡･高瀬町奉行所跡	高瀬　保田木町	中世～近世	城	保田木神社内、外濠一部残存、高瀬城ともいう
206-214	高瀬山清源寺跡	高瀬　保田木町	中世	寺社	保田木城西隣、墓地のみ残る
206-215	龍造寺隆信首塚	高瀬　横町	中世	墳墓	願行寺境内、主体は明治４年佐賀に移す
206-216	大覚寺豪潮宝篋印塔	高瀬　横町	中世	石造物	大覚寺本堂前、市内３基の１つ
206-217	高瀬菊池川河床	菊池川河床	古代・中世	包蔵地	
206-218	高瀬藩邸・藩丁跡	岩崎　中岩原	近世	包蔵地	玉名町小・玉名女子高敷地、現在形跡なし
206-219	岩崎原	岩崎（通称岩崎原）	弥生～中世	包蔵地	玉名女子高構内全、弥生土器多量、住居跡
206-220	岩崎Ａ	岩崎　池田	弥生～中世	包蔵地	大型甕棺・土師器・須恵器・弥生土器多量包含
206-221	岩崎城跡	岩崎　池田	中世	城	菅原神社々地、土畳・周濠あり
206-222	伝岩崎城主の墓	岩崎　池田	中世	墓	城跡北の一角、大自然石、板碑あり
206-223	岩崎古墳	岩崎　池田	古墳	古墳	菅原神社神体とする、箱棺か
206-224	岩崎古墳参考地	岩崎　池田	古墳	古墳	部落東端、円墳形、天満宮を祀る
206-225	池田地下式横穴群	岩崎　池田	古墳	古墳	
206-226	松林寺山古墳	向津留　下	古墳	古墳	大型舟形石棺露出、棺蓋不明
206-227	桃田貝塚	大倉　桃田原	縄文	貝塚	ＪＲ線北２箇所、阿高式～土師器・須恵器
206-228	桃田古墳	大倉　桃田原	古墳	古墳	伝箱石棺出土
206-229	高田古墳	大倉　高田	古墳	古墳	台地頂上、円墳内部不明
206-230	小島城跡	小島　居屋敷	中世	城	菊池川左岸の下、小島天神前薮あり
206-232	芭蕉句碑（時雨塚）	高瀬　横町	近世	石造物	繁根木川左岸明教寺内、自然石に刻句
206-233	金盆山玉飯寺跡	川崎　出の上	中世	寺社	川崎八幡神宮寺墓地のみのこる
206-234	池田支石墓参考地	岩崎　池田	弥生	埋葬	城内に安山岩巨石１個
206-235	高瀬官軍墓地	高瀬　横町	近代	墓地	昭和36年発掘改葬、合祀する
206-236	阿弥陀如来鋳立像	繁根木　馬場	中世	彫刻	
206-237	長福寺跡	高瀬　八日町	中世	寺社	
206-239	岩崎Ｂ	岩崎　池田	縄文～中世	包蔵地	
206-240	高瀬藩校自明堂跡	岩崎　中岩原	近世	包蔵地	
206-241	玉名御郡所跡	繁根木　馬場	近世	包蔵地	
206-242	飯塚古墳	向津留　飯塚	古墳	古墳	円墳、保存度良し
206-243	亀頭迫	大倉　亀頭迫など	弥生～中世	包蔵地	土師器、弥生後期
206-244	木村鉄太の墓	大倉　亀頭迫	近代	墓	木村家墓地内、日本最初世界一周者
206-245	立山	大倉（通称立山）	弥生～中世	包蔵地	弥生後期、土師器等散布
206-246	城が辻古墳群（１～５号）	寺田　城が辻	古墳	古墳	１号箱式石棺・２号円墳、完形遺存・５号丘陵先端
206-247	城が辻城跡	寺田　城が辻	中世	城	
206-248	寺田古墳群（１～４号）	寺田　宇土	古墳	古墳	１号台地北端、２号舟形、３号箱式石棺、４号処女墳
206-249	吉丸	寺田　吉丸	古代・中世	包蔵地	菊花文入瓦器多量出土
206-250	ナカント塚古墳	寺田　吉丸	古墳	古墳	部落西南畑中、封土あり、内部不明
206-251	吉丸西	寺田　吉丸	縄文～中世	包蔵地	
206-252	久保地下式横穴	寺田　久保	古墳	古墳	国道208号線の北大穴窟、出土品なし
206-253	寺田久保	寺田　久保	縄文～中世	包蔵地	
206-254	世間部塚古墳	寺田　世間部	古墳	古墳	「塚さん」という、山伏塚か
206-255	部田	津留　部田	弥生～中世	包蔵地	高台畑地、磨製大型石鏃出土
206-256	上津留古墳	津留　小部田	古墳	古墳	円墳、高台北端に位置、径25mの封土遺存
206-257	花群山吉祥寺跡	津留　堂園	中世	寺社	峡い高台上、跡地に毘沙門天を祀る
206-258	安楽寺跡	津留　太郎丸	中世	寺社	跡地に氏神菅原神社を祀る
206-259	安楽寺居館跡	津留　太郎丸	中世	包蔵地	跡地に氏神菅原神社を祀る、
206-260	菅原神社の六地蔵	津留　白柏子	中世	石造物	
206-261	安楽寺	津留	中世	寺社	
206-262	上津留	津留　部田	縄文～中世	包蔵地	付近畑地耕作で発見と伝えられる

表（Tab）３　周辺遺跡一覧表 ⑶

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
206-263	朝日寺跡	安楽寺　生見	中世	寺社	跡地に観音堂・板碑あり、規模拡大
206-264	田崎横穴群	田崎　楢山	古墳	古墳	国道208号沿い、３基と造りかけ
206-265	随月古墳	安楽寺　随月	古墳	古墳	
206-266	善応寺跡	下　平野	中世	寺社	
206-267	賢長寺跡	下　桑迫	中世	寺社	
206-268	金盆山玉飯寺跡	川崎　畑尾	中世	寺社	
206-269	金地山松林寺跡	向津留　下	中世	寺社	
206-270	津留中林	津留　中林	縄文～中世	包蔵地	
206-271	随岸寺跡	安楽寺　陀羅原	中世	寺社	境内の洞穴中に不動尊を祀る
206-272	浦方染山横穴群	安楽寺（通称裏方）	古墳	古墳	梅林小学校裏手谷合い、４基風化する
206-273	蓑田横穴群	安楽寺　蓑田	古墳	古墳	稲佐への県道東入り、数基
206-274	長福寺跡	安楽寺　蓑田	中世	寺社	横穴近くの薮中跡地に観音堂・五輪塔
206-275	安楽寺京塚	安楽寺　京塚	中世	経塚	十王社を祀る
206-276	一本松	田崎　一本松ほか	弥生～中世	包蔵地	甕棺群あり
206-277	田崎	田崎　天神原・辻	古墳～中世	包蔵地	台地畑、土師器・須恵器片少量散布
206-278	中神久	安楽寺　中神久	古代・中世	包蔵地	古代・中世遺物散布
206-294	城が崎城跡	伊倉北方　五社	中世	城	町北端舌状丘陵地、城の遺構は残らない
206-295	五社支石墓参考地	伊倉北方　五社	弥生	埋葬	十五社石祠、旧城跡にあり、台石は掌石か
206-296	中北古墳	伊倉北方　五社	古墳	古墳	県道に面する南小突端に箱式石棺をもつ
206-297	城が崎貝塚	伊倉北方　五社下	弥生	貝塚	町北端舌状台地上、南裾一帯弥生貝層出土多量
206-298	城が崎	伊倉北方　五社	弥生～中世	包蔵地	町北端舌状台地上、広範に弥生中期遺物を含む
206-299	中北Ａ	伊倉北方	弥生～中世	埋葬	小児合口式４基出土、１期鉄斧、外副葬品
206-300	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-301	中北	伊倉北方　五社	縄文～中世	包蔵地	
206-302	振倉謝公墳	伊倉北方	中世	墓	安山岩自然石板碑形式、本堂山にあり
206-303	大宮司宇佐一族の墓・石碑	伊倉北方　堂山	中世	石造物	７基あり、市指定３基
206-304	中尾山報恩寺跡	伊倉北方　堂山	中世	寺社	本堂山、墓地だけが残る
206-305	補陀落渡海碑	伊倉北方　堂山	中世	石造物	本堂山墓地内にあり、日照渡海、天正４年建立
206-306	本堂山古塔碑群	伊倉北方　堂山	中世	石造物	本堂山報恩寺跡あり、板碑12基、外塔
206-307	本村屋敷古塔碑群	伊倉北方　本村屋敷	中世	石造物	板碑１基、五輪塔部分多数散乱
206-308	福田寺跡	伊倉北方　本村屋敷	中世	寺社	跡地に豪壮な地蔵堂・宝篋印塔・五輪塔あり
206-309	福田寺跡宝篋印塔	伊倉北方　本村屋敷	中世	石造物	地蔵堂前にあり、「文政十有一年戊子春」
206-310	本村	伊倉北方　本村	縄文～中世	包蔵地	
206-311	吉利支丹墓碑	伊倉北方　北方・八龍	近世	墓	蒲鉾型、花崗岩、華十字を一方に刻む
206-312	桜井川製鉄跡	伊倉北方　西屋敷	古代・中世	生産	鉱滓散布する
206-313	桜井山安住寺跡	伊倉南方　西屋敷	中世	寺社	伊倉五山の一、祠・大銀杏（県指）あり
206-314	伊倉丹倍津跡	伊倉北方　八龍など	中世	包蔵地	天正以前まで貿易港をして栄えた
206-315	唐人町	伊倉　唐人町	中世	包蔵地	
206-316	唐人町貝塚	北方	弥生～中世	貝塚	
206-317	鍛冶屋町	伊倉南方　西屋敷		貝塚	貝塚散布地、鉱滓多く散布
206-318	肥後四位宮の墓	伊倉南方　東屋敷	中世	墓	浜沂郭公、中国式の異形壮重な型、元和５年建立
206-319	西屋敷六地蔵塔	伊倉南方　西屋敷	中世	石造物	民家の一角、石垣中にたたみこむ
206-320	片諏訪貝塚	片諏訪　屋敷	縄文～鎌倉	貝塚	
206-321	片諏訪	片諏訪　屋敷	弥生	包蔵地	貝塚のある台地一帯
206-322	清国父恵助の墓	伊倉南方　片諏訪	中世	墓	刀匠清国の墓といっているが疑問あり
206-323	伊倉城跡古碑	片諏訪　中城	中世	石造物	伊倉台地南端、五輪塔片がある
206-324	中ん城跡	片諏訪　中城	中世	城	伊倉台地南端、眺望地、形跡を止めぬ
206-325	印鑰神社古墳	宮原　土井内	古墳	古墳	円筒埴輪・須恵器・土師器出土
206-326	宮原土井の内	宮原　土井内	弥生	包蔵地	弥生石器・土器出土
206-327	禮社	宮原　禮社	弥生	包蔵地	弥生土器散布
206-328	伊倉宮原町	宮原　屋敷	弥生	包蔵地	弥生土器散布
206-329	屋敷古塔碑群	宮原　屋敷	中世	石造物	五輪塔・重塔部分あり
206-330	伊倉南八幡宮社寺古塔碑群	宮原　屋敷	中世	石造物	板碑・五輪塔・宝篋印塔部分
206-331	伊倉宮川	宮原　宮川	弥生	包蔵地	弥生土器・石器
206-332	伊倉八幡宮境内	宮原　北方ほか	縄文	包蔵地	縄文土器、阿高式・御領式を多く含む
206-333	伊倉八幡古墳	伊倉北方　宮の後		古墳	北八幡宮境内、社前に巨石材２個あり
206-334	伊倉宮の後	伊倉北方　宮の後	縄文	包蔵地	縄文、阿高式・御領式土器・石斧・石鏃
206-335	伊倉宮の後甕棺群	伊倉北方　宮の後	弥生	埋葬	合口甕棺多数
206-336	伊倉古宮原	宮原　古宮原	弥生	包蔵地	弥生土器・土師器・須恵器散布
206-337	垣塚古墳	伊倉北方　東垣塚	古墳	古墳	くり抜き石棺形式出土、封土不明
206-338	岩井口横穴	伊倉北方　岩井口	古墳	古墳	伊倉台西端崖面、かなり崩壊
206-339	中北アカハゲ古墳	伊倉北方（通称赤禿）	古墳	古墳	高田古墳下に一封土あり、古墳と思われる
206-340	伊倉犬塚古墳	伊倉北方　鳥越	古墳	古墳	現在封土を失う
206-341	中北長照寺跡	伊倉北方　伊倉屋敷	中世	寺社	跡地に観音堂あり、寺の遺構なし
206-342	老女つやの墓	伊倉南方　西屋敷		墓	法号釈妙香年三俵賜文化元年三月没、六十八才
206-343	鍛冶屋町製鉄跡	伊倉南方　東屋敷	古墳	生産	土師器・須恵器、伊倉刀を打つ
206-344	伊倉山太平寺跡	宮原　屋敷	中世	寺社	伊倉五山の一、観音堂あり
206-345	長福寺跡	伊倉南方　東屋敷	中世	寺社	伊倉五山の一、観音堂あり
206-346	北牟田塚１号・２号	北牟田　居屋敷	中世	墳墓	２基中世墳墓、木棺・完全人骨、昭和53年発見
206-347	福願寺跡	伊倉北方　馬場屋敷	中世	寺社	
206-348	潮音寺跡	宮原	中世	寺社	
206-349	神宮寺跡	宮原　屋敷	中世	寺社	
206-350	青雲寺跡	片諏訪　屋敷	中世	寺社	
206-351	青野原	青野　原・北原	弥生・古墳	包蔵地	
206-352	合田	青野　合田	弥生・古墳	包蔵地	
206-353	青野屋敷跡	青野　合田・田の尻	中世	包蔵地	古井戸、現在雑木林
206-354	青野本村曲畑	青野　本村・田の尻	弥生・古墳	包蔵地	弥生～古墳土器多量包含
206-355	七浦経塚	青野　本村・七浦	中世	経塚	内容不明
206-356	青野古墳	青野　本村	古墳	古墳	
206-357	青野地下式横穴	青野　田の尻	古墳	古墳	現在埋没する
206-358	青野天神原古墳	青野　天神原	古墳	古墳	現在天神石祠建つ
206-359	青野天神原	青野　天神原	弥生・古墳	包蔵地	弥生～古墳期土器包含
206-360	青野火葬墓跡	青野　天神原・辻	古代	包蔵地	八弁花文瓦器蓋付深鉢（火葬骨入）、蓋付碗
206-361	中坂門田	中坂門田　西	弥生・古墳	包蔵地	
206-362	京塚古墳	中坂門田　京塚	古墳	古墳	内容不明
206-363	島田一族墳墓地	北坂門田　水落		墓地	宮大工、自然石切石５基
206-364	白骨どん古墳	北坂門田　井戸	古墳	古墳	小円墳、箱型石棺露出
206-365	古閑	中坂門田　古閑	古墳～中世	包蔵地	須恵器・土師器片

表（Tab）４　周辺遺跡一覧表 ⑷

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
206-366	鎧田横穴群	中坂門田　古閑	古墳	古墳	数基、１基は保存良好
206-367	開野内原	中坂門田、開野ほか	古墳～中世	包蔵地	須恵器・土師器
206-368	落武者竹村治兵一門の墓	中坂門田、開野　内原		墓	稲荷神社前にあり
206-369	青野本村堂の久保	青野　本村堂の久保	弥生・古墳	包蔵地	
206-378	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-381	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-382	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-383	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-384	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-385	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-386	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-387	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-388	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-389	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-390	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-391	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-392	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-393	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-394	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-395	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-396	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-397	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-398	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-399	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-400	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-401	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-402	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-413	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-414	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-415	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-416	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-417	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-418	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-419	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-420	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-421	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-422	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-423	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-424	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-425	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-426	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-427	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-428	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-429	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-430	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-431	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-432	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-433	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-434	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-435	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-436	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-437	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-438	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-439	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-440	寺田山口	寺田山口	縄文～中世	包蔵地	玉名市遺跡地図にあり
206-441	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-442	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-443	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-444	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-445	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-446	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-447	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-448	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-449	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-450	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-451	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-452	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-453	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-454	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-455	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-456	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-457	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-458	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-459	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-460	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-461	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-462	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-463	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-464	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-465	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-466	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-467	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-468	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-469	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-470	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-471	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-472	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-479	名称不明				玉名市遺跡地図にあり

表（Tab）5　周辺遺跡一覧表 ⑸

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
206-480	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-481	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
206-482	柳町	河崎柳町	縄文～平安	集落	県調査、文字資料
206-483	玉名平野条里跡	玉名、迫間ほか	古代・中世	生産	
206-484	玉名平野条里跡		古代・中世	生産	
206-485	玉名平野条里跡		古代・中世	生産	
206-489	玉名平野条里跡		古代・中世	生産	
206-491	吉丸前	寺田　吉丸前	縄文・中世	包蔵地	
206-492	前田	月田　前田	縄文～近世	集落	
206-493	群前	津留　群ノ前	中世	集落	
206-494	北の崎	安楽寺　田崎	弥生～古代	集落	
206-495	剣抜	安楽時　舟島	縄文～近世	包蔵地	

熊本県（43）玉東町（364）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
364-001	稲佐廃寺跡	稲佐　切畑	古代	寺社	古代寺院、塔礎石・金堂基壇の一部、布目瓦多量
364-002	稲佐城跡	稲佐	中世	城	同上地、本丸跡に熊野神を祀る
364-003	伊形霊両の墓	木葉　往生松	中世	墓	時習館居寮、詩作、国文に長じた
364-004	宇蘇浦官軍墓地	木葉　宇蘇	近代	墓地	西南役戦死者333を葬る、谷村計介墓もあり
364-005	宮の元	稲佐　切畑	弥生～中世	包蔵地	
364-006	山口	山口　長宗	弥生～中世	包蔵地	
364-007	立福寺跡	稲佐	中世	寺社	
364-008	円久寺跡	上木葉	中世	寺社	
364-009	大城寺跡	上木葉	中世	寺社	
364-010	稲佐切畑	稲佐　切畑	弥生	包蔵地	熊野神社全域、弥生土器片多量
364-011	窪田越前塚	木葉　久保田	古墳	古墳	墳丘上に箱式石棺の一部露出
364-012	町下	木葉　町下	古代・中世	包蔵地	青磁・土師器・須恵器・瓦器破片
364-013	木葉宇都宮城跡	木葉　丸田	中世	城	小森田城跡、役場裏手
364-014	高月官軍墓地	木葉　高月	近代	墓地	西南役戦死者976柱を葬る
364-015	音丸	白木　上古閑	弥生・古墳	包蔵地	弥生土器・土師器
364-016	箱井古墳	白木　箱井	古墳	古墳	高台上小円墳、石材露出する
364-017	上古閑古墳	白木　上古閑	古墳	古墳	箱形、蓋入母屋の石棺
364-018	二郎丸横穴群	白木　二郎丸	古墳	古墳	２基
364-019	揚の六地蔵	木葉　前田	中世	石造物	銘があるが風化し、不詳
364-021	白木柏軒の墓	白木　口の坪	近世	墓	
364-022	世尊寺跡	木葉　世尊寺	中世	寺社	真言宗、寺号築地蓮華院に移す
364-023	土生野	木葉　土生野	縄文～古代	包蔵地	須恵器・土師器
364-024	助吉古墳	二俣　助吉	古墳	古墳	封土を失い、石材堆積
364-030	小清水横穴	白木　小清水	古墳	古墳	風化深い、２基
364-031	西原製鉄跡	原倉　西原	古代	生産	鉱滓・焼灰あり
364-032	原倉	原倉　畑ほか	弥生	包蔵地	弥生土器・石器
364-033	原倉西	原倉　建が迫ほか	古墳	包蔵地	須恵器
364-034	城山城跡	上白木　城山ほか	中世	城	山北小校地一帯
364-035	太朗丸権現山	上白木　太朗丸	古代	生産	スラッグ・ふいごの羽口
364-041	座主古塔碑群	上白木　座主	中世	石造物	笠塔婆・五輪塔
364-042	立岩石器製作	原倉　立岩屋敷	縄文	生産	石斧・剥片多数
364-044	釜の口製鉄跡	原倉　山口原	古代・中世	生産	鉱滓多量散布、ふいごの羽口、焼土
364-045	東山西	原倉　荒平	縄文～弥生	包蔵地	縄文後晩期御領式、弥生
364-054	寺山板碑	稲佐　寺口	中世	石造物	
364-055	ガランさん板碑	稲佐　馬場屋敷	中世	石造物	
364-056	官軍本営跡	木葉　部田見	近代	戦跡	
364-057	天神山古墳	木葉　町下	古墳	古墳	
364-058	官軍病院跡（正念寺）	木葉　生野	近代	包蔵地	
364-059	眼鑑橋跡	二俣　鍛冶場	近世	包蔵地	
364-063	山北八幡宮仁王像	白木　栗地原	中世	建造物	
364-064	阿蘇火砕流埋没炭化木出土地	上白木　小林		記念物	
364-065	阿蘇火砕流埋没炭化木出土地	上白木　黒牟田		記念物	
364-066	即身成仏の碑	上白木　小林	中世	石造物	
364-067	弾痕の家	上白木　小林	近世	建造物	
364-069	眼鑑橋跡	上白木　鐘丸	近世	包蔵地	
364-070	清田原製鉄	原倉　清田原	古代・中世	生産	
364-071	官軍砲台跡	原倉　七ツ松	近代	軍事	
364-072	道標（追分石）	原倉　清田原	近世	石造物	
364-073	薩軍砲台跡	原倉　立岩原	近代	戦跡	
364-074	菖蒲谷製鉄所跡	原倉　荒平	古代	生産	
364-075	六本楠	原倉	縄文	包蔵地	
364-080	乃木少佐奮戦の地	稲佐　平迫	近代	軍事	

熊本県（43）横島町（362）

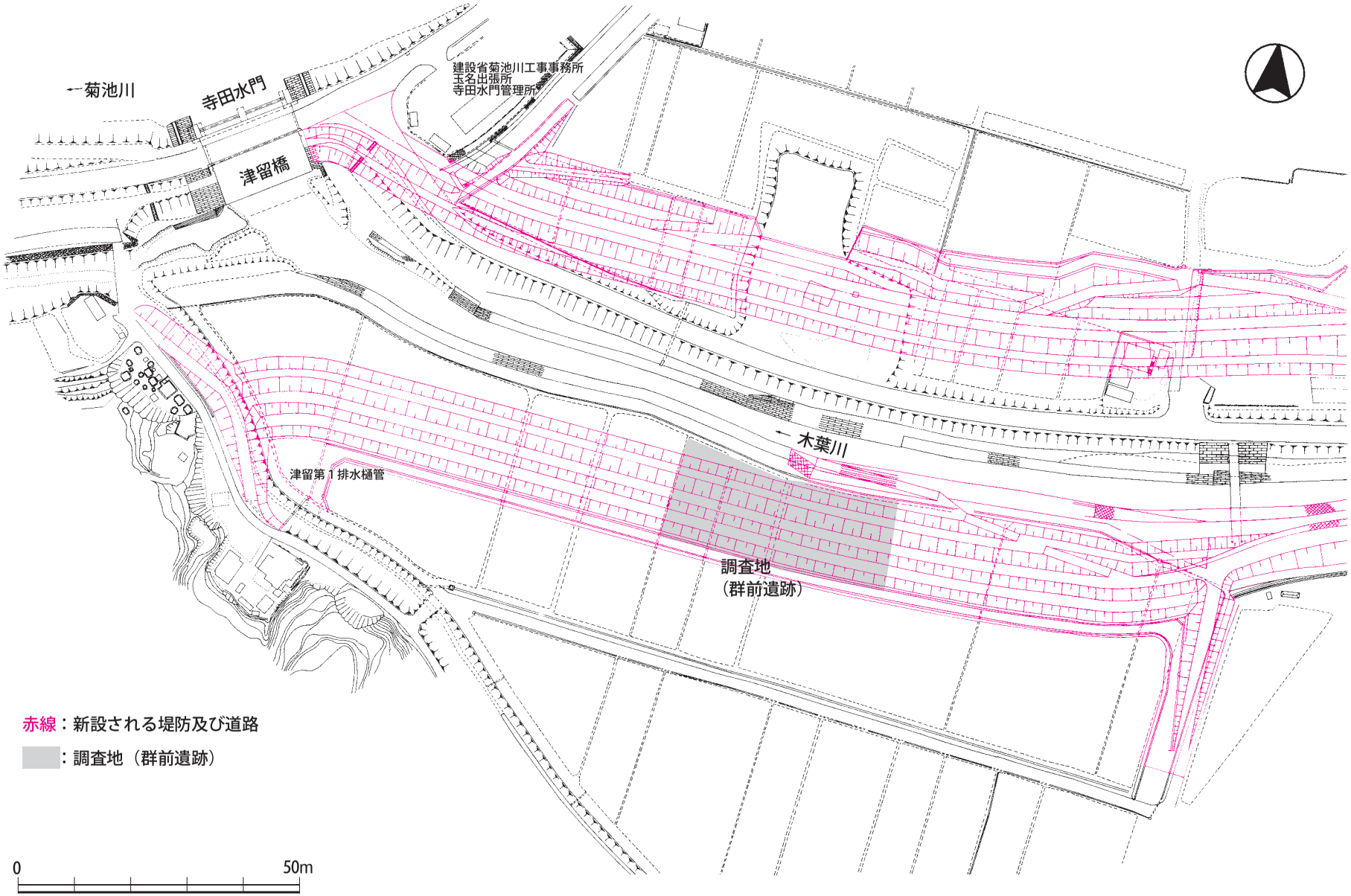
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
362-001	大園貝塚	大園　大園	弥生	貝塚	弥生土器・石斧
362-002	孝女つやの碑	横島　栗之尾	近世	石造物	部落神社境内、自然石
362-003	池辺吉十郎家屋敷跡	横島　外平	近世	包蔵地	外平に塾を開く
362-004	ビナワラ貝塚	横島　外平	縄文	貝塚	縄文
362-005	キャアガラワラ貝塚	横島　外平	縄文	貝塚	縄文
362-006	外平貝塚	横島　外平	弥生・中世	貝塚	主に土師器
362-007	池辺吉十郎の墓	横島　外平	近世	墓	西南役薩軍熊本隊長、長崎で刑死
362-008	人柱の跡	横島　京泊	近世	縁地	石塘築堤の犠牲
362-009	横島城跡	横島　京泊	中世	城	加藤求馬助の居城という
362-010	横島経塚	横島　京泊	近世	経塚	石塘築堤の折の経文を納める
362-011	京泊	横島　京泊	中世	包蔵地	中世遺物分布
362-013	顕松寺跡（見正寺跡）	横島　京泊	中世	寺社	島津対竜造寺軍との戦火で焼失、再建立
362-014	まぶ（水路）	横島　京泊	近世	建造物	三村章太郎の掘窄、80m
362-015	津波石	横島　京泊	近世	石造物	

表（Tab）6　周辺遺跡一覧表 ⑥

熊本県（43）天水町（363）

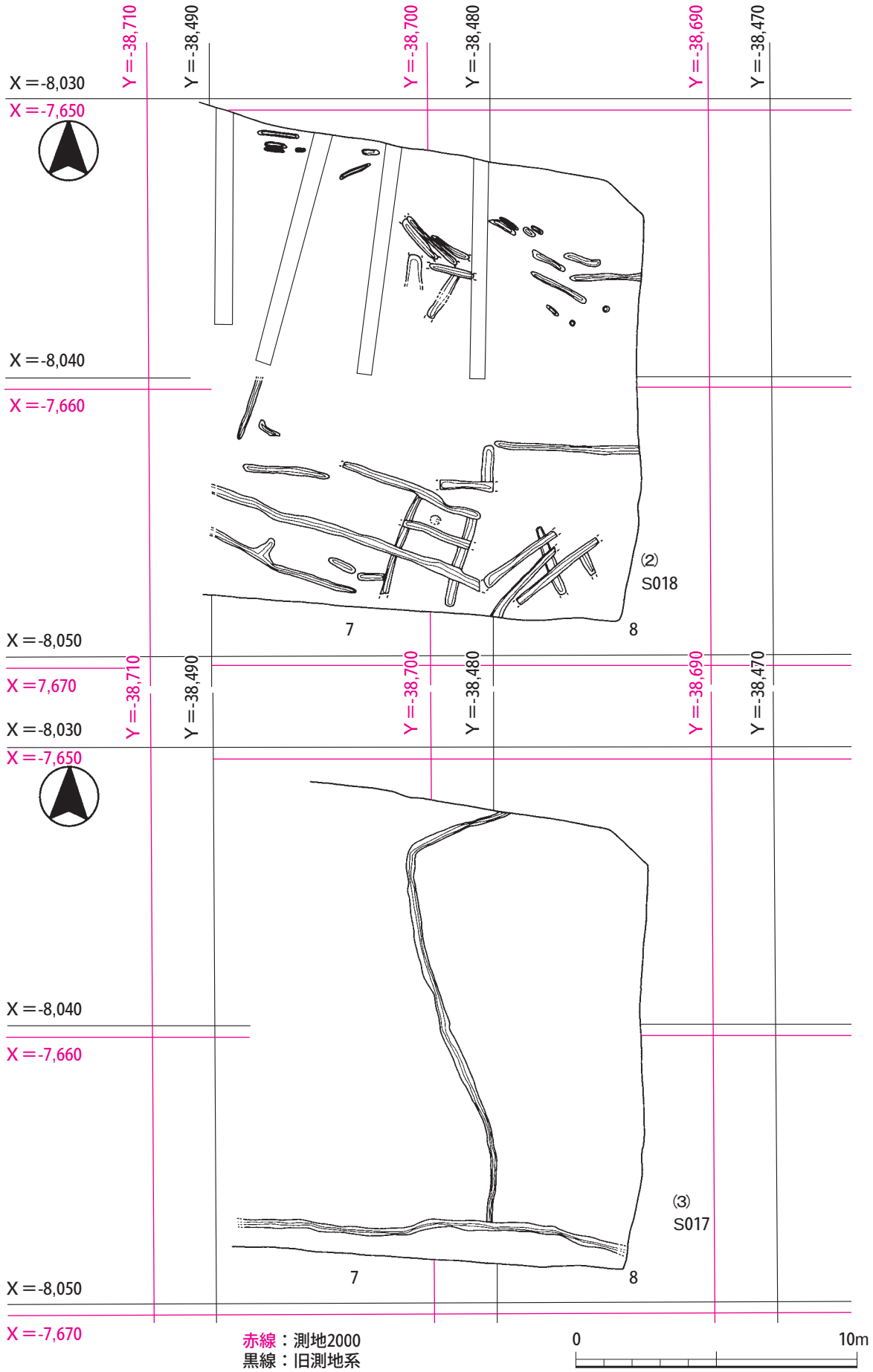
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
363-001	野部田	野部田 前田・平	弥生	包蔵地	弥生、住居･集落
363-002	竹崎貝塚	竹崎　山崎	縄文・弥生	貝塚	阿高式土器・石斧・石錘
363-003	斉藤山貝塚	尾田 正法寺平	弥生前期	貝塚	鉄斧
363-004	石塘	部田見 石塘	近世	建造物	加藤清正干拓工事、十八間堤の称あり
363-005	竹崎	竹崎 本村屋敷	弥生	埋葬	甕棺散布地
363-006	野部田東	野部田 平	縄文	包蔵地	縄文末期、御領式土器
363-007	久島貝塚	部田見 久島原	縄文	貝塚	縄文土器
363-008	久島古墳	部田見 久島	古墳	古墳	参考地・久島山東中腹
363-009	久島	部田見 久島	縄文～古墳	包蔵地	
363-010	塚の神西古墳	部田見 徳丸	古墳	古墳	箱式石棺
363-011	塚の神古墳	部田見 徳丸	古墳	古墳	円墳、円筒埴輪片散乱、塚の神石祠あり
363-012	海奇山遍照院金剛寺跡	竹崎 山崎	中世	寺社	真言宗、跡新寺建つ
363-013	野部田石畳道	野部田 際目	近世	建造物	約110m旧野部田より伊倉への街道
363-014	空西寺跡（宏済寺跡）	部田見 寺原	中世	寺社	
363-015	尾田貝塚	尾田 本村屋敷	縄文	貝塚	曾畑式・阿高式土器、人骨、獣骨
363-016	山神平	野部田 山神平	弥生	包蔵地	弥生中期の土器片出土
363-017	下強当石棺群	尾田 下強当	弥生～古墳	埋葬	箱式石棺群
363-018	尾田	尾田　尾田原ほか	古墳	包蔵地	土師器・須恵器
363-019	正法寺平古墳	尾田 正法寺平	古墳	古墳	箱式石棺破損
363-020	正法寺平地下式横穴	尾田 正法寺平	古墳	古墳	一部埋没、内部不明
363-021	正法寺跡	立花 正法寺	中世	寺社	板碑２基あり
363-024	米ノ山	立花 米ノ山	縄文～中世	包蔵地	
363-031	迫横穴群	部田見 迫	古墳	古墳	５基

表（Tab）7　周辺遺跡一覧表（7）

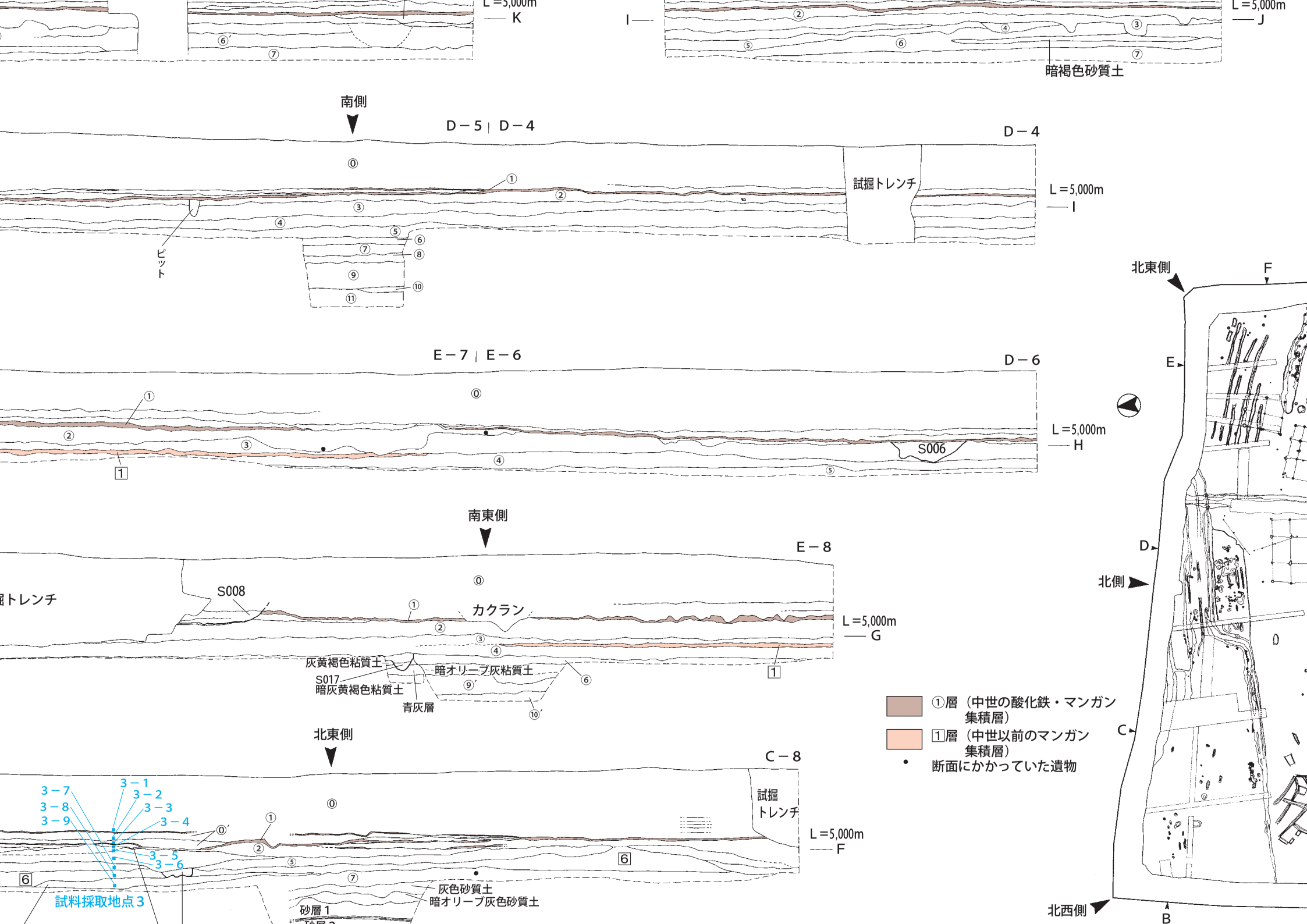


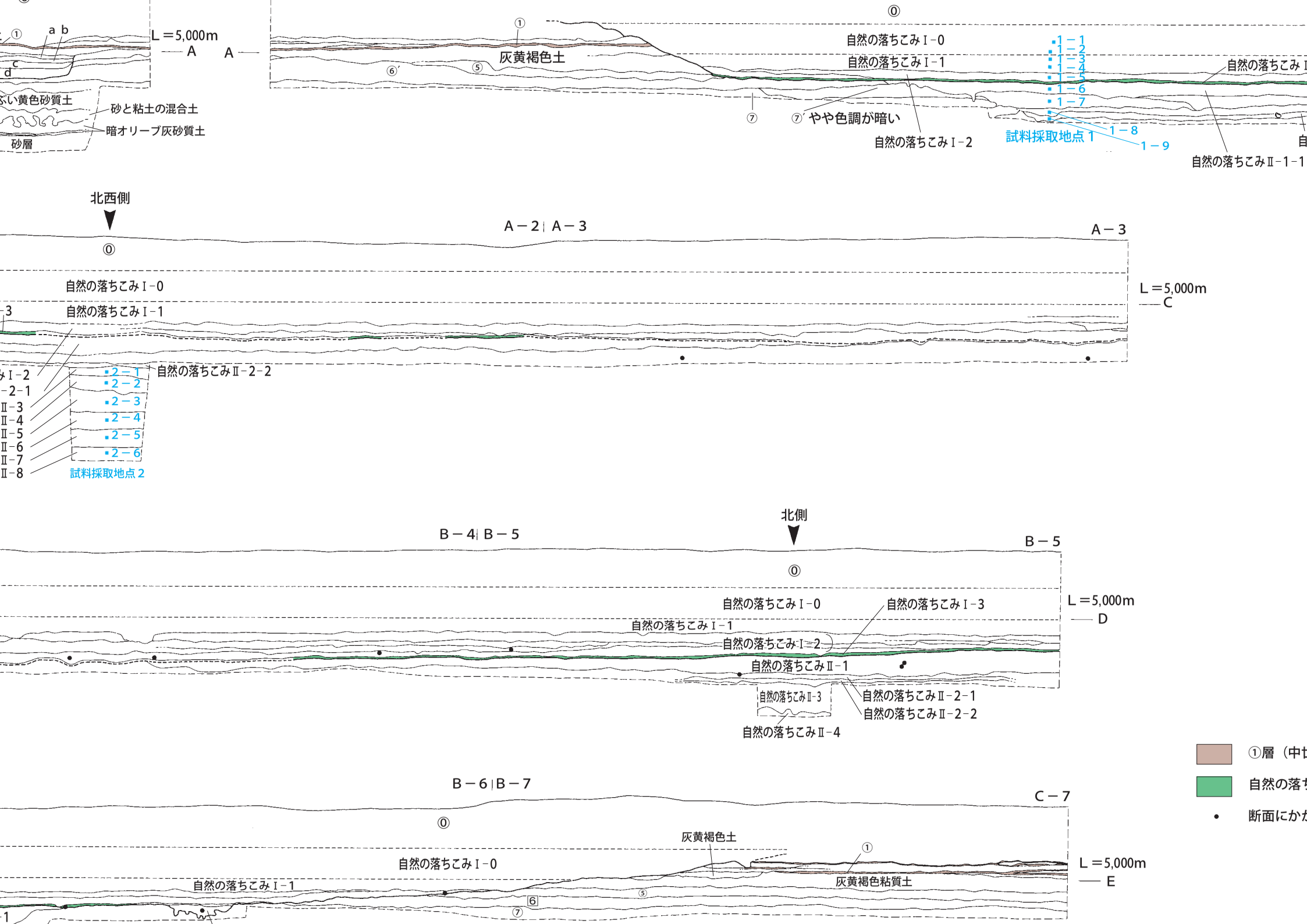
図（Fig）３　群前遺跡周辺調査区配置図　Ｓ＝1／1,000

地点２
自然の落ちこみⅠ
試料２
試料３
^{14}C
試料１
S006 ^{14}C
S020
S019
S006
試掘トレンチ
試掘トレンチ
S015
S016
S010
C-4ピット１
S012
S002
S003
S001
S014
C－6ピット7
a
a′
S013
S005
S004
S011
S007
植物珪酸体分析試料採取地点
生物痕跡試料採取地点
^{14}C分析試料カーボン採取地点



図（Fig）5　遺構配置図⑵⑶　S＝1／200


L＝5,000m
K
I
L＝5,000m
J
暗褐色砂質土
南側
D－5
D－4
D－4
試掘トレンチ
L＝5,000m
I
ピット
E－7
E－6
D－6
L＝5,000m
H
S006
南東側
E－8
S008
カクラン
L＝5,000m
G
灰黄褐色粘質土
暗オリーブ灰粘質土
S017
暗灰黄褐色粘質土
青灰層
北東側
C－8
試掘
トレンチ
L＝5,000m
F
3－1
3－2
3－3
3－4
3－5
3－6
3－7
3－8
3－9
試料採取地点3
灰色砂質土
暗オリーブ灰色砂質土
砂層1
①層（中世の酸化鉄・マンガン集積層）
1層（中世以前のマンガン集積層）
断面にかかっていた遺物
北東側
F
E
D
北側
C
北西側
B


L＝5,000m
A
a b
c
d
ぶい黄色砂質土
砂と粘土の混合土
暗オリーブ灰砂質土
砂層
灰黄褐色土
自然の落ちこみⅠ-0
自然の落ちこみⅠ-1
自然の落ちこみⅠ-2
やや色調が暗い
試料採取地点１
1－1
1－2
1－3
1－4
1－5
1－6
1－7
1－8
1－9
自然の落ちこみⅡ-1-1
北西側
A－2
A－3
自然の落ちこみⅠ-0
自然の落ちこみⅠ-1
L＝5,000m
C
自然の落ちこみⅡ-2-2
2－1
2－2
2－3
2－4
2－5
2－6
試料採取地点２
北側
B－4
B－5
自然の落ちこみⅠ-0
自然の落ちこみⅠ-3
自然の落ちこみⅠ-1
自然の落ちこみⅠ-2
自然の落ちこみⅡ-1
自然の落ちこみⅡ-3
自然の落ちこみⅡ-2-1
自然の落ちこみⅡ-2-2
自然の落ちこみⅡ-4
L＝5,000m
D
B－6
B－7
C－7
灰黄褐色土
自然の落ちこみⅠ-0
自然の落ちこみⅠ-1
灰黄褐色粘質土
L＝5,000m
E
①層（中世
自然の落ち
断面にかか

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の方法

調査方法は、10m四方のグリッド法を採用した。

まず、約3,000㎡について中世の酸化鉄・マンガンの集積層までを重機で除去した後、以下の層を土層観察用ベルト（幅80㎝）を残しながら、一区画（10m×10m）毎に人力で掘り下げていく方法をとった。なお、調査区北側の約１／３に広がる自然の落ちこみⅠについては確認面が中世の酸化鉄・マンガンの集積層より更に50㎝程高いが、中世の酸化鉄・マンガンの集積層に合わせて表土剥ぎを行った。こうして掘り出した遺物は、必要に応じて一括取り上げまたは出土位置及び高度を記入した上で、取り上げを行った。ベルトは土層の確認をしながら遺物を取り上げた後に取り外した。存在が確認された遺構については、その都度調査を行い、全体を１／10，１／20の縮尺で実測図を作成したほか、遺構の配置を確認するための全体図としては、１／100の地形測量図を作成した。また、それぞれの調査段階において、適宜モノクロとカラースライドの２種類を用いて写真撮影を実施した。コンタ図は表土剥ぎを行い、精査をした段階で作成したが、正確なレベルではないため図化しなかった。表土剥ぎは、おおよそ５ｍラインで中世の酸化鉄・マンガンの集積層と考えられる層より約５～10㎝下の面で行った。南西側がやや高く、北西側が川側へやや落ちる傾向にあるようだ。

更に自然の落ちこみⅠより下層には川側に落ちる黒褐色粘質土層に遺物が入ることからその包含層（自然の落ちこみⅡ）調査も行った。また、調査区東側に広がる畝状遺構や溝状遺構の調査の為に約50㎝掘り下げて遺構の確認調査を行った。

第２節　調査区の設定

本調査に先立ち平成13年度（2001年度）８月６～７日、11月５～15日に事業予定地内において試掘・確認調査が可能な場所に任意に47箇所の試掘坑を設定し、重機を用いて遺跡の分布調査を実施した。その結果９・25～28トレンチに遺物や遺構が確認され、約3,000㎡が本調査対象範囲となった。しかし、堤防の法面や表土剥ぎで約130㎝地表面を下げることによる法面が必要となるため実際の本調査面積は3,000㎡より若干少なくなった。

なお、調査区には、測量の基準とするための調査用グリッド（区画）を10m間隔で設置した。グリッド設定は、４級基準点測量によって導き出された国土座標Ⅱ系のメッシュの方向に沿ったもので、㈱有明測量開発への業務委託で行い、東西軸をアルファベット大文字で、南北軸を算用数字で示した。尚、今回の調査は旧日本測地系で行ったが、図４・５の赤で示したグリッドは世界測地系（日本測地系2000）の座標値である。

第３節　層位と包含層（図６・７参照）

本遺跡の基本的な土層は次のとおりである。但し調査区内で同じ層がうまく続かないエリアや部分的に確認される新たな層が多く見られる。沖積地の特性といえるだろう。ここでは調査区内の深掘りをした場所で上下の層が確認できる層の周辺について詳細を述べる。基本的に南側のＤ－５グリッドの深堀りと北西側のＡ－２グリッドの深掘りの土層を基準として記述する。部分的に確認される層については土層断面図に記述する。自然の落ちこみについては酸化鉄・マンガンの集積層までを自然の落ちこみⅠ、それ以下を自然の落ちこみⅡとして区分した。

（南側：Ｄ－５グリッド）

⓪層　灰黄褐砂質土（Hue 10YR 4/2：90～130㎝）
１層より上層をまとめて表示した。

①層　暗褐色土（２～５㎝）
酸化鉄やマンガン粒を多く含み、ややしまる土層である。中世の遺物を多く含んでいることから中世の酸化鉄・マンガンの集積層と考えられる。水田耕作にかかわる床土の可能性も考えられるが、当時の木葉川の氾濫域の可能性が高いのではないかと想定している。
この層は自然の落ちこみⅠに切られてはいるが、調査区全域にわたっている。

②層　褐灰粘質土（Hue 10YR 4/1：０～20㎝）
粒子が細かくてややしまる粘質土。１～２㎜大のマンガン粒が全体にまばらに含まれる。

③層　にぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4/3：20～

32cm）
粒子が細かくてややしまる粘質土。１～２㎜大のマンガン粒が多量に含まれる。

④層　灰黄褐色粘質土（Hue 10YR 4/3：11～30cm）
粒子が細かくてやわらかい粘質土。３層より粘質が強い。

⑤層　黒褐色粘質土（Hue 7.5YR 3/2：12～24cm）
粒子が細かくて粘質が強い。

⑥層　灰黄褐色粘質土（Hue 10YR 6/2：10～13cm）
粒子が細かくややしまる。粘性はそれほど強くない。酸化鉄の縦状の筋がある。

⑦層　灰色粘質土（Hue 5YR 6/1：16～20cm）
所々に砂粒を含み非常に硬くしまる粘質土。２～５㎜大のマンガン粒が多量に含まれる。

⑧層　灰色粘砂土（Hue 5YR 10/1：12～17cm）
７層と比較して砂質が強く、マンガン粒が多い。

⑨層　オリーブ褐色砂層（Hue 2.5YR 4/4：44～53cm）
やや粒子が小さくかたくしまる。

⑩層　緑灰色砂層（Hue 10GY 5/1：０～12cm）
青灰色の砂の粒子はやや小さく硬くしまる。

⑪層　オリーブ褐色砂層（Hue 2.5YR 4/4：34cm～）
砂の粒子は大小があり、互層となっている。

（南東側：Ｄ－８グリッド）

⓪層　灰黄褐砂質土（Hue 10YR 4/2：90～130cm）

①層　暗褐色土（２～５cm）

②層　褐灰粘質土（Hue 10YR 4/1：10～20cm）

③層　にぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4/3：20～32cm）

1層　暗褐色土　①層より下層にあるマンガンの集中部。水田に伴う床土の可能性も考えられるが、断面の観察より低い落ちの部分にできたマンガンの集中部の可能性が高いと考えられる。

④層　灰黄褐色粘質土（Hue 10YR 4/3：14～20cm）

⑥層　灰黄褐色粘質土（Hue 10YR 6/2：10～13cm）

暗オリーブ灰粘質土（Hue 2.5GR 4/1：18～35cm）
きめが細かくてややしまる粘質土。粘性はあまり強くない。

⑨′層　灰オリーブ色砂層（Hue 5YR 4/2：10～32cm）

⑩′層　暗オリーブ灰色砂層（Hue 2.5GY 4/1：21cm～）

（北東側：Ｃ－８グリッド）

⓪層　灰黄褐砂質土（Hue 10YR 4/2：90～130cm）

①層　暗褐色土

②層　褐灰粘質土（Hue 10YR 4/1：10～20cm）

⑤層　黒褐色粘質土（Hue 7.5YR 3/2：12～24cm）

6層　灰黄褐色粘質土（10～25cm）
シルト質のやや白っぽい粘質土。

⑦層　灰色粘質土（Hue 7.5YR 6/1：16～20cm）

灰色砂質土（13～23cm）
マンガン粒が多く含まれる。

暗オリーブ灰色砂質土（Hue 2.5GR 4/1：２～22cm）
部分的に粘土のブロックが入る砂質土。

砂層１（25～43cm）
きめが粗く、しまる砂層。所々に１～３cm大の礫が含まれる。下層には３～４cmの酸化鉄の中に薄いマンガンがサンドイッチ状に入る酸化鉄層がある。非常に硬くしまる。

砂層２（16～25cm）
砂粒はやや細かい。小～中粒の互層となっている。下層には１～４cmの砂鉄の層が確認される。

砂層３（20cm～）
きめが粗く、１㎜大の砂粒が集中している。下層には２～３cm大の礫や軽石が入る。

（南西側：Ｄ－１グリッド）

⓪層　灰黄褐砂質土（Hue 10YR 4/2：90～130cm）

①層　暗褐色土

黄灰色粘質土（Hue 2.5Y 5/1：０～16cm）
マンガン粒や酸化鉄粒が多く含まれる硬くしまる層。赤褐色粒も含まれる。

灰黄褐色土（Hue 10YR 4/2：０～42cm）
きめが細かくて硬くしまる。マンガン粒が多く含まれる。

②層　褐灰粘質土（Hue 10YR 4/1：０～20cm）

⑥′層　暗灰黄色粘質土（Hue 2.5Y 5/2：５～42cm）

シルト質でマンガン粒が多く含まれる。⑥層と比較してやや色調が暗い。

⑦層　灰色粘質土（Hue 5YR 6/1：16～20㎝）

にぶい黄色砂質土（Hue 2.5Y 6/3：28～41㎝）

縦筋状の酸化鉄やマンガンが入る。下層ほど砂粒が多い。

砂と粘土の混合土層（２～22㎝）

砂の目は細かい。

暗オリーブ灰砂質土（12～28㎝）

所々に酸化鉄の層が入る。下層には４～６㎝の硬くしまる酸化鉄とマンガンの集積層がある。

砂層（26㎝～）

少し粗目の砂層。所々に１～10㎝大の礫が含まれる。

※ａ，ｂ，ｃ，ｄは断面にかかる遺構埋土

（北西側：Ａ－２グリッド）

⓪層　灰黄褐砂質土（Hue 10YR 4/2：80～90㎝）

自然の落ちこみⅠ－０層　灰黄褐砂質土（０～60㎝）

自然の落ちこみⅠ－１層　暗灰黄砂質土（Hue 2.5Y 5/2：14～20㎝）

きめが細かくかなりしまる。マンガン粒が多く入る。遺物を含む。

自然の落ちこみⅠ－２層　暗灰黄砂質土（Hue 2.5GR 5/2：20～36㎝）

きめが細かくかなりしまる。マンガン粒はほとんど含まれず、色調がやや明るい。遺物を含む。

自然の落ちこみⅠ－３層　暗褐色土（３～６㎝）

酸化鉄やマンガンを多く含み、ややしまる。中近世期の水田床土と考えられる。特に木葉川側の北側で薄くなり、他の層との区別がつきにくくなる。遺物を含む。

自然の落ちこみⅡ－１層　暗灰黄色粘質土（Hue 2.5Y 4/2：18～33㎝）

自然の落ちこみⅠより下層の川側に落ち込んだ層である。マンガン粒や酸化鉄粒が多く含まれ硬くしまる粘質土層。赤褐色粒も含まれる。遺物を稀に含む。

自然の落ちこみⅡ－１－１層　黄灰色粘質土（Hue 2.5Y 4/1：９～16㎝）

縦筋状の酸化鉄が多く、色調が明るい層。

自然の落ちこみⅡ－１－２層　暗灰黄色粘質土（Hue 2.5Y 4/2：９～16㎝）

自然の落ち込みⅡ-1-1層と比較してやや色調が暗く、粘性が強い層。遺物を稀に含む。

自然の落ちこみⅡ－２－１層　オリーブ黒色粘質土（Hue 5YR3/1：14～26㎝）

自然の落ちこみⅠより下層にあり、木葉川側に落ち込んでいる層。粘質はさほど強くないが、ややしまる粘質土。酸化鉄の縦筋が入る。遺物を稀に含む。

自然の落ちこみⅡ－２－２層　黄褐色粘質土（Hue 2.5Y 5/6：３～10㎝）

自然の落ちこみⅠより下層にあり、木葉川側に落ち込んでいる層。きめが細かくややしまる粘質層。色調が黄色である。遺物を稀に含む。

自然の落ちこみⅡ－３層　オリーブ黒色粘質土(Hue 10YR 3/1：10～20㎝)

きめが細かく粘性が強いが、ややしまる。遺物を稀に含む。

自然の落ちこみⅡ－４層　オリーブ黒色粘質土(Hue 7.5YR 3/2：26～35㎝)

砂粒を多く含む粘質土。やや硬くしまる。以下の層には遺物は含まない。

自然の落ちこみⅡ－５層　灰色粘質土（Value N4/：32～46㎝）

非常にきめが細かく粘性が強い。

自然の落ちこみⅡ－６層　オリーブ黒色粘質土（30～33㎝）

色調が青く、粘性が強い。

自然の落ちこみⅡ－７層　オリーブ黒色粘質土（30～32㎝）

色調は青色が主体だが、部分的にこげ茶、黒色で混ざりあう。

自然の落ちこみⅡ－８層　オリーブ黒色粘質土（28㎝～）

粘性が強く、色調がこげ茶色である。

（北側：Ａ－２グリッド）

⓪層　灰黄褐砂質土（Hue 10YR 4/2：60～70㎝）

自然の落ちこみⅠ－０層　灰黄褐砂質土（０～60㎝）

自然の落ちこみⅠ－１層　暗灰黄砂質土（Hue 2.5Y 5/2：14～20㎝）

自然の落ちこみⅠ－２層　暗灰黄砂質土（Hue 2.5Y 5/2：20～36㎝）

灰色砂質土、暗灰色砂質土、黒灰色粘質土の３層に分かれる。

自然の落ちこみⅠ－３層　暗褐色土（３～６㎝）

自然の落ちこみⅡ－１層　暗灰黄色粘質土（Hue 2.5Y 4/2：18～33㎝）

自然の落ちこみⅡ－２－１層　オリーブ黒色粘質土（Hue 5YR 3/1：14～26㎝）

自然の落ちこみⅡ－２－２層　黄褐色粘質土（Hue 2.5Y 5/6：３～10㎝）

自然の落ちこみⅡ－３層　オリーブ黒色粘質土（Hue 10YR 3/1：12～20㎝）

自然の落ちこみⅡ－４層　オリーブ黒色粘質土（Hue 7.5YR 3/2：26～35㎝）

第Ⅳ章　調査の結果

第１節　はじめに（図８～32）

この調査区で確認された遺構は19である。それぞれの遺構が確認された層位は遺構ごとにやや異なるが、おおよそ標高約５ｍである。基本的には先述したとおり①層（中世に堆積したと考えられる酸化鉄やマンガンの集積層）の５～10㎝下が表土剥ぎ後の遺構確認面になる。

【S001】土坑：中世
【S002】土坑：中世
【S003】土坑：中世
【S004】土坑：中世
【S005】土坑：中世
【S006】　溝　：中世
【S007】土坑：中世
【S008】溝状遺構：近世
【S010】土坑：中世
【S011】掘立柱建物：中世
【S012】掘立柱建物：中世
【S013】掘立柱建物：中世
【S014】掘立柱建物：中世
【S015】畝状遺構：中世
【S016】畝状遺構：中世
【S017】　溝　：中世
【S018】畝状遺構：中世
【S019】杭列：近世以降
【S020】杭列：近世以降

第２節　遺　構

１）土坑（S001：図８）

［確認位置］Ｄ－４，５グリッドの境、Ｄ－５内に位置する。確認面の標高は約５ｍであり、基本土層の②層の褐灰粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。

［形状、大きさ、土層など］平面形が楕円形で一部に出っ張りがある。断面の状況はやや凹凸がみられるが、概ね逆かまぼこ形を呈する。長さは長軸が約140㎝であるが、わずかな出っ張った部分を除くと128㎝、幅は108㎝、深さが約25㎝である。層は２層に分かれる。１層は緑灰色粘質土（Hue 10GY1/6）で焼土、炭化物をブロック状に多量に含む。上層には軽石や遺物を含む。２層は暗緑灰色粘質土（Hue 10GY1/4）で焼土、炭化物をブロック状に多量に含む。S002とS003と並んでいる。

［推察される遺構の性格、時期など］焼土や炭化物が小さなブロック状に多く含まれる事からこの場所で物を燃やした可能性が高い。また粘土塊（２～４㎝大）が４個含まれることから土師器などを野焼きした燃焼土坑の可能性も考えられる。粘土塊の胎土と土師皿の胎土が酷似していることからもその可能性が窺える。出土遺物や付近の状況から中世の遺構と考えられる。古代の須恵器が数点出土しているが当時の紛れ込みであろう。

［出土遺物］

出土遺物は土器片が約30点で、そのほとんどが中世の遺物であった。その中から３点を紹介する。

１は、中世の土師器で、土鍋の口縁部と考えられる。残存高は8.6㎝である。調整は外面は刷毛目、内面は刷毛目後ナデを行い、口縁部には縄状の圧痕と考えられる痕跡が確認される。美農口雅朗氏の編年概略（以下美濃口編年）の９期（13世紀前半～中葉）にあたる肥前系近似の土鍋である。

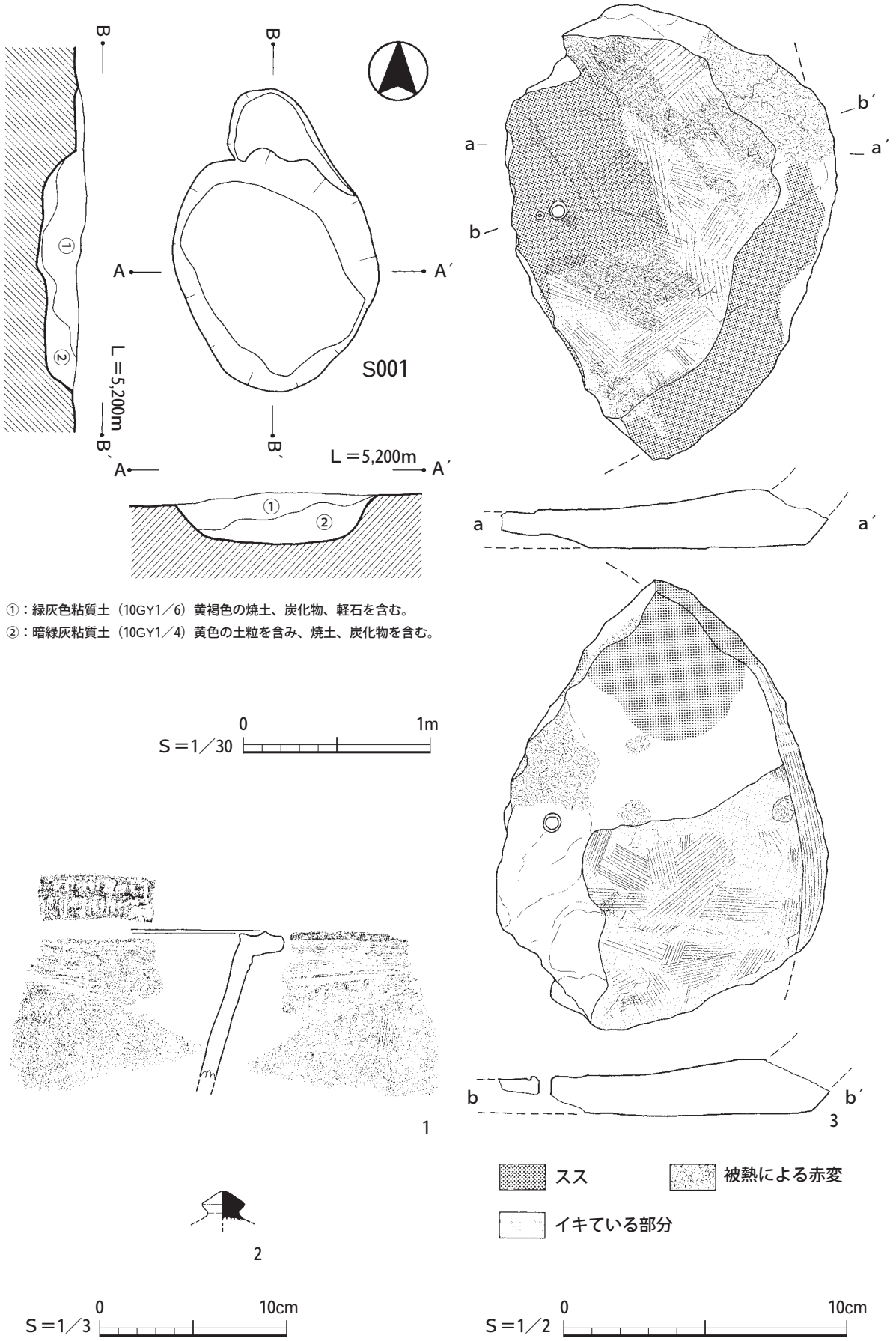
２は、古代の須恵器、坏蓋のつまみである。残存高は1.55㎝である。回転ナデによる調整痕跡が確認される。

３は、中世の滑石製品である。石鍋の底部（復元底径が25.8㎝）の転用品と考えられ、部分的にススや被熱による赤変がみられる。中央やや左側に径約4.5㎜の穿孔と径約１㎜で深さ径約１㎜の穿孔途中の穴が確認される。使用方法は不明だが、温石として利用しようとした可能性が考えられる。長さ15.9㎝、幅11.6㎝、厚さが1.3～1.9㎝、重さが410.6ｇである。

２）土坑（S002：図９）

［確認位置］Ｂ－４，５グリッドの境に位置する。確認面の標高は約５ｍであり、基本土層の②層の褐灰粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。

［形状、大きさ、土層など］平面形がほぼ楕円形である。断面の状況は概ね逆かまぼこ形を呈する。長



図(Fig)8　燃焼土坑(S001)・出土遺物実測図　S＝1／30，1／3，1／2

さは78㎝、幅は75㎝、深さが約20㎝である。層は１層で緑灰色粘質土（Hue 10GY1/6）で焼土、炭化物をブロック状に僅かに含む。S001と同様な土層である。S001とS003が並んでいる。

［推察される遺構の性格、時期など］ S001と同様に焼土や炭化物が小さなブロック状に多く含まれる事からこの場所で物を燃やした可能性が高い。また粘土塊（１～３㎝大）が８個含まれることから土師器などを野焼きした燃焼土坑の可能性も考えられる。同様に粘土塊の胎土と土師皿の胎土が酷似していることからもその可能性が窺える。出土遺物や付近の状況から中世の遺構であると考えられる。

［出土遺物］

出土遺物は土器片が約20点あり、総重量134ｇで、全て中世の土師器であった。その中から２点を紹介する。

４は、中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。残存高は7.5㎝である。口縁部はやや肥厚し、体部外面に２条の凸帯を巡らす。その上部に斜格子状のスタンプを連続して押し、下部には重孤文状の文様が施されている。下部の重孤文状の文様はスタンプなのか工具などによるものなのかは不明である。体部は内外面ともナデ調整で、内面にはススが多く付着している。胎土には赤褐色粒が多く含まれる。

５は、中世土師器の小皿と考えられる。復元口径は10.0㎝、復元底径は6.8㎝、器高は1.4㎝である。器面の調整は回転ナデ、底部は糸切り離しと考えられる。胎土に金雲母を多量に含んでいる。

３）土坑（S003：図９）

［確認位置］ Ｂ－４，５グリッドの境に位置する。確認面の標高は約５ｍであり、基本土層の②層の褐灰粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。

［形状、大きさ、土層など］ 平面形はほぼ正円形である。断面の状況は概ね逆かまぼこ形を呈する。長さは63㎝、幅は56㎝、深さが約10㎝である。層は１層で緑灰色粘質土（Hue 10GY1/6）で焼土、炭化物をブロック状に僅かに含む。S001と同様な土層である。S001とS002に挟まれている。

［推察される遺構の性格、時期など］ S001とS002に挟まれており、焼土や炭化物が小さなブロック状に多く含まれる事から燃焼土坑など同様な性格が考えられ、時期も中世の遺構と推定される。

［出土遺物］ ２点の土器片が出土しているが、いずれも中世の土師器と瓦器である。小片であるためにここでは割愛する。

４）土坑（S004：図９）

［確認位置］ Ｄ－７グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.2ｍであり、基本土層の②層の褐灰粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。S005とS007に近接する。

［形状、大きさ、土層など］ 平面形はほぼ正円形である。断面の状況は概ね逆かまぼこ形を呈する。長さ、幅ともに75㎝、深さが約28㎝である。層は１層で灰色粘質土（Hue 5Y1/5）で焼土、炭化物を僅かに含む。

［推察される遺構の性格、時期など］ きれいな掘り込みではあるが、性格は不明である。遺構の時期は中世であろう。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

［出土遺物］ ３点の土器片が出土しているが、いずれも中世の土師器と瓦器である。小片であるためにここでは割愛する。

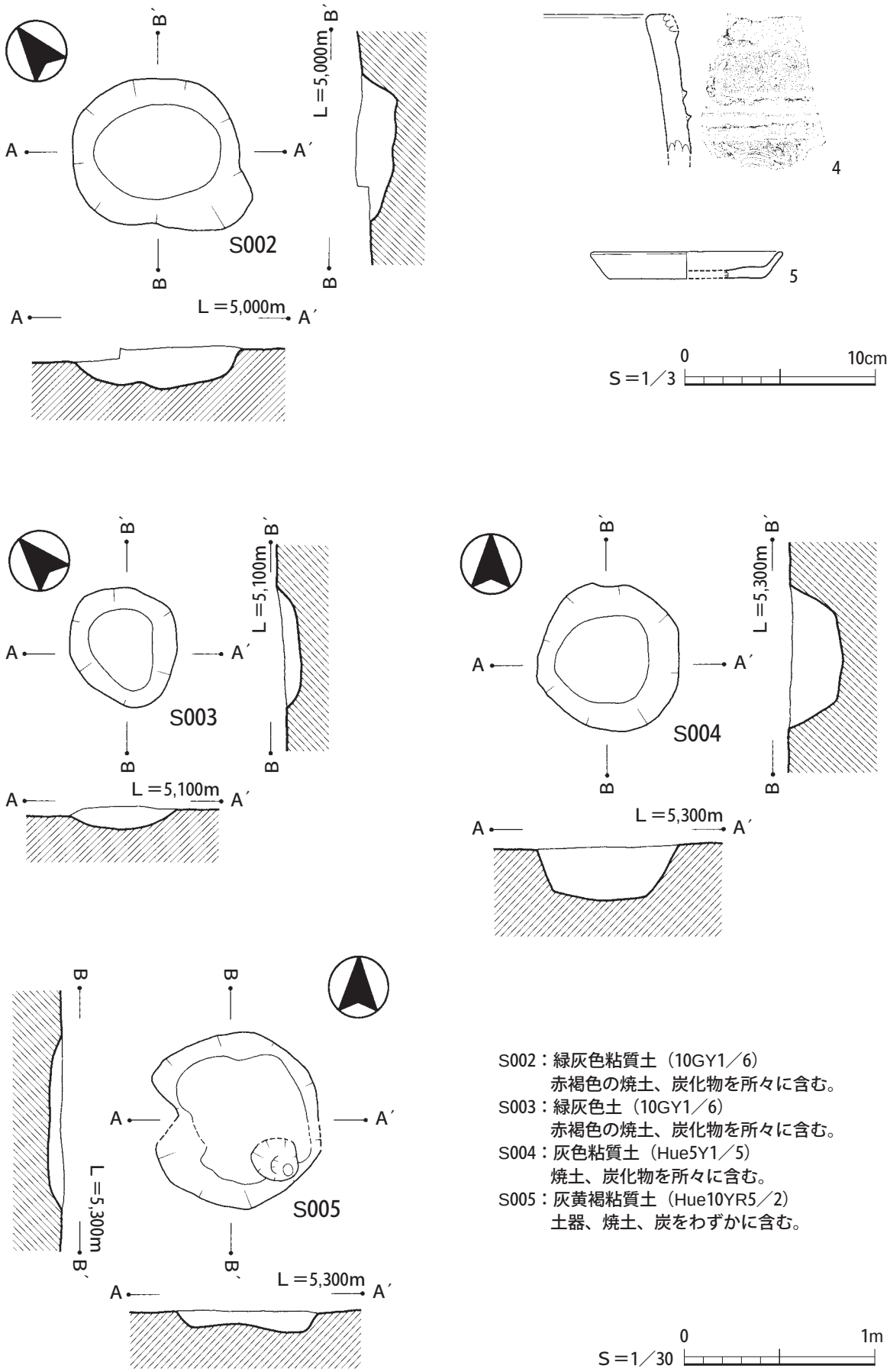
５）土坑（S005：図９）

［確認位置］ Ｄ－７グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.2ｍであり、基本土層の②層の褐灰粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。S004とS007に近接する。

［形状、大きさ、土層など］ 平面形は一部がややへこみのある円形である。断面の状況は概ね逆かまぼこ形を呈するが、S004と比較すると浅い。また、遺構内の隅にピット状の落ちが見られるがS004に付随するものではなく、S004が掘りこまれる前のピットであった可能性が高い。長さ92㎝、幅72㎝、深さが約10㎝である。埋土は１層で灰黄褐色粘質土（Hue 10YR5/2）で焼土、炭化物を僅かに含む。

［推察される遺構の性格、時期など］ 人為的な掘り込みであることは確実であるが、性格は不明である。出土遺物から中世の遺構であると考えられる。

［出土遺物］ ５点の土器片が出土しているが、１点



図(Fig)9　燃焼土坑(S002, 003)、土坑(S004, 005)・出土遺物実測図　S ＝1／30, 1／3

（古代の須恵器）以外はいずれも中世の土師器と瓦器である。小片であるためにここでは割愛する。

６）土坑（S007：図10）

［確認位置］ Ｄ－７グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.18ｍであり、基本土層の②層の褐灰粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。S004とS005に近接する。

［形状、大きさ、土層など］ 平面形は長楕円形である。断面の状況は概ね逆かまぼこ形を呈する。長さ246㎝、幅186㎝、深さが最深部で48㎝である。層は１層で灰色粘質土（Hue 10Y5/1）が主体的で褐色粘質土（Hue 7.5YR4/4）が混在する。土器、焼土、炭化物を僅かに含む。

［推察される遺構の性格、時期など］ 土坑の最下部の中央から長軸が欠損した磨製石斧が出土している。周囲の状況や遺構内出土の土器から鑑みて遺構自体は中世の可能性が高いと考えられるが、磨製石斧自体は縄文時代の遺物であろう。欠損した面と石斧自体の面の風化の度合いが違うので、意図的に欠損した可能性も考えられる。当時の人々が付近で採集した磨製石斧を何らかの理由で欠損して埋めたものであろうか？遺構の時期は出土遺物から中世と考えられる。

［出土遺物］ 15点の土器片が出土しているが、いずれも中世の土師器と瓦器である。小片であるためにここでは土器の紹介は割愛して磨製石斧１点だけの紹介をする。

６は、欠損した磨製石斧である。長さ11.1㎝、幅5.5㎝、厚さ3.0㎝、重さ305.7ｇを測る。磨製石斧を作成した際の敲打痕や磨り痕跡が残存している。

７）土坑（S010：図11）

［確認位置］ Ｃ－４グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.00ｍである。

［形状、大きさ、土層など］ 長さ120㎝、幅50㎝、深さは５～６㎝である。埋土は暗褐色粘質土で、３～５㎜大のカーボン、５～８㎜大の焼土を所々に含み、ややしまる粘質土である。桃の炭化種子も13個出土した。

［推察される遺構の性格、時期など］ 非常に浅い土坑である。明らかにS001，002，003の様にその場で物を焼いた燃焼土坑の可能性は低いが焼土やカーボンが含まれ、桃の炭化種子が出土していることから付近で焼かれた土が埋められたものであろうか？古来より桃は魔除けの力があると信じられてきたものであるため祭祀的な儀式に使用された可能性も否定できない。出土遺物や付近の状況から中世の遺構と考えられる。古代の遺物が２点出土しているが当時の紛れ込みであろう。

［出土遺物］ ６点の土器片が出土しているが、古代と中世の土器片が混在している。ここでは２点の古代の遺物を紹介する。

７は、古代の土師器で甕の口縁部である。外面には刷毛目、内面にはナデ、ケズリが推察される。残存高は8.0㎝である。

８は、古代の須恵器で長頸壺の口縁部と考えられる。残存高は1.5㎝と小片である。

８）掘立柱建物（S011：図12）

［確認位置］ Ｃ－６，Ｄ－６，７グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.10ｍであり、基本土層の②層の褐灰粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。

［規格］ ２間×３間の総柱で両側に庇を持つ掘立柱建物。桁行6.03ｍ（20.1尺）、梁行4.26ｍ（14.2尺）、庇が平均で約1.10ｍ（3.7尺）北北東と南南西に広がる。

［軸の方位］ 桁行方向（長軸）は東南東と西南西方向である。梁行方向（短軸）は北より北東に17.5度傾いている。S006は北より北東に6.5度傾いており、軸の差は約11度である。

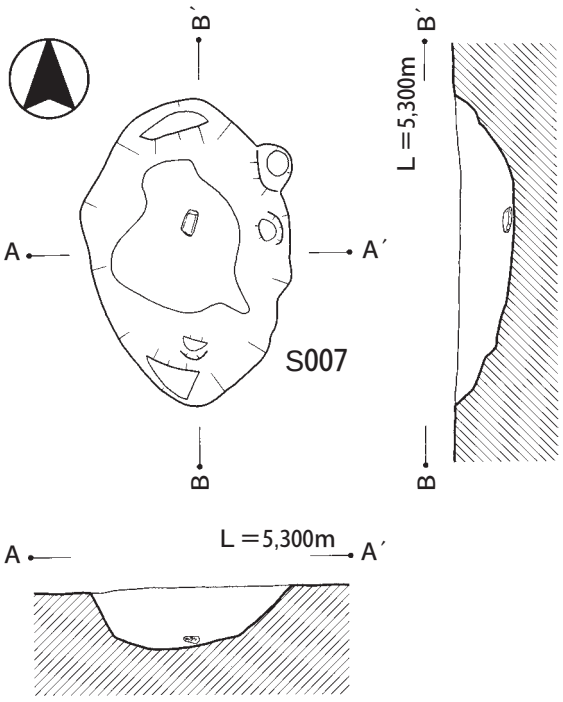
［柱穴の掘り形径と深さ］ 身舎の柱の掘り形直径は18～40㎝で平均は24.0㎝、深さは平均で25.3㎝。庇の柱の掘り形直径は12～24㎝で平均は16.6㎝、深さは平均で17.6㎝。掘り形の直径も深さも庇より身舎の方が大きくかつ深いようだ。

［柱痕跡］ 20ある柱の内、柱痕跡が確認されたのは２つだけである。９番ピット（柱径７㎝、長さ12㎝）と15番ピット（柱径13㎝、長さ13㎝）であった。

［柱間の寸法：梁］

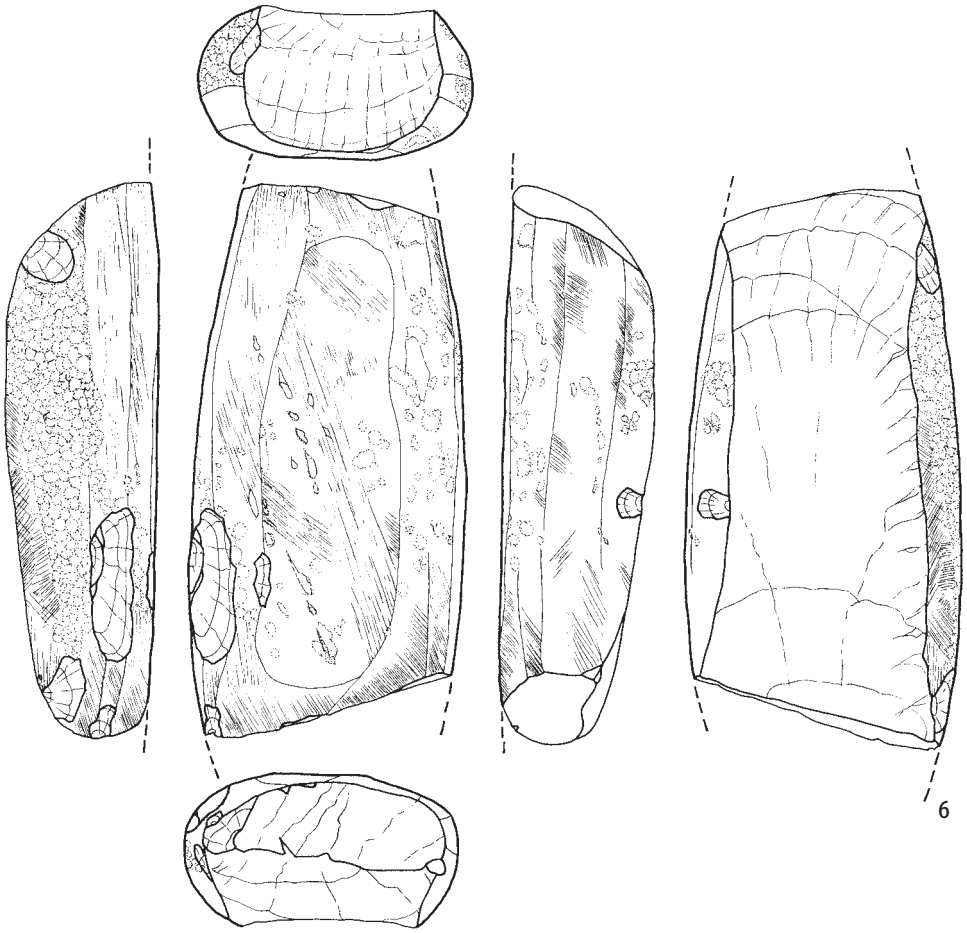
Ｐ：ピット、（　）：平均値、単位：ｍ

Ｐ５－13：2.20＋2.06（2.13：7.1尺）



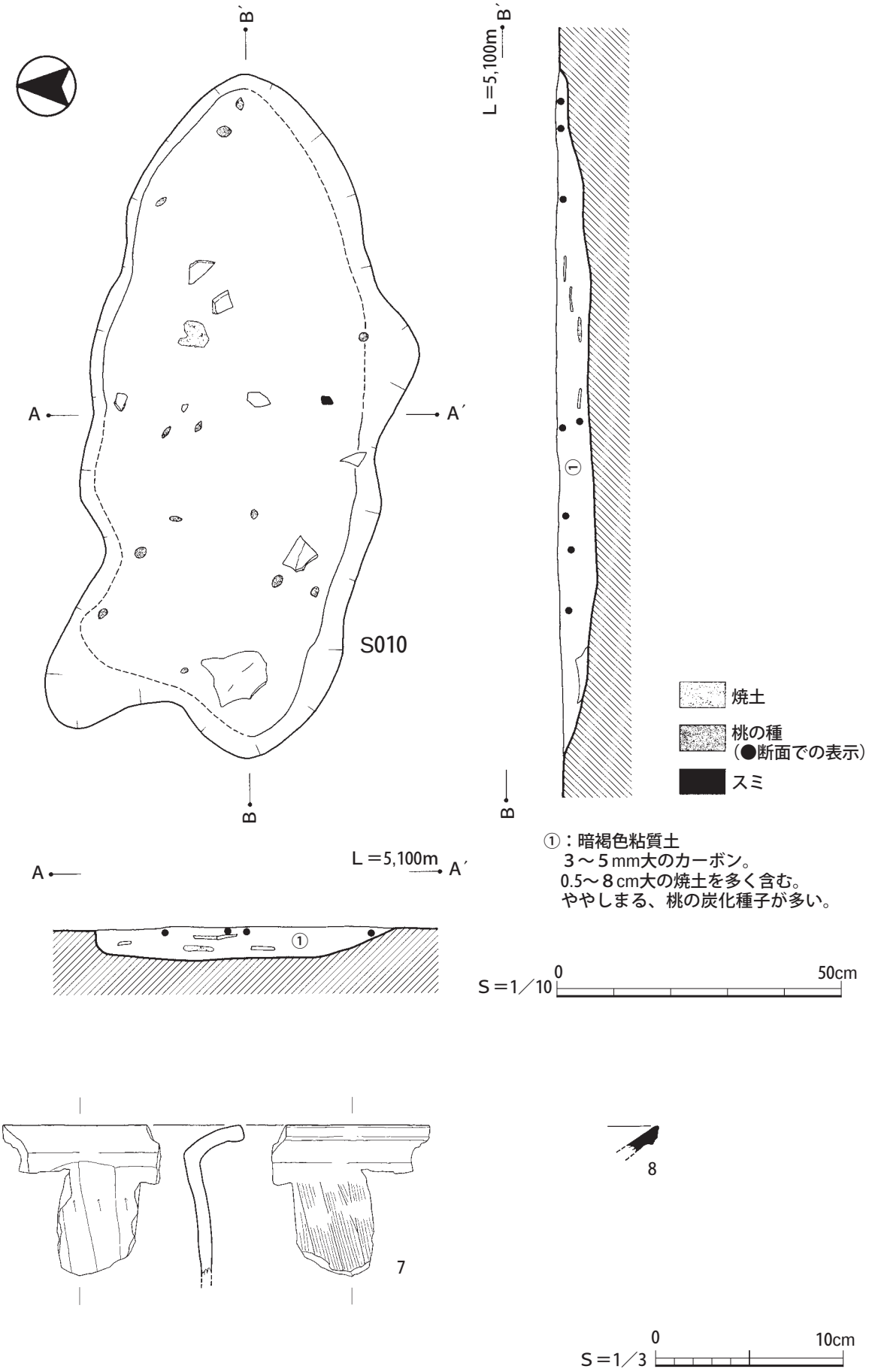
灰色粘質土（Hue10Y5／1）
Hue7.5YR4／4（褐）が混じる。
土器、炭化物、焼土を含む。

S＝1／30　0　1m

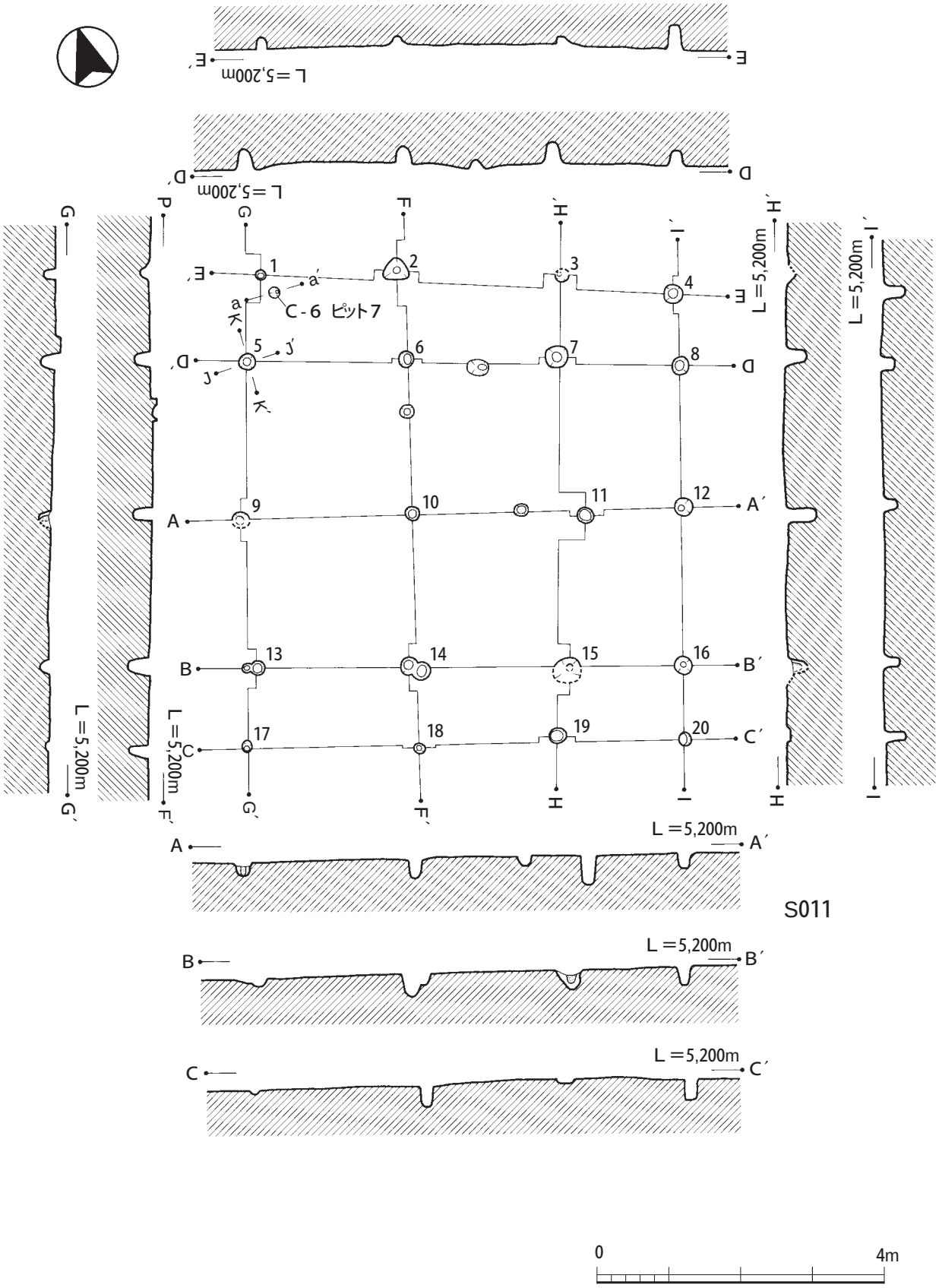


S＝2／3　0　10cm

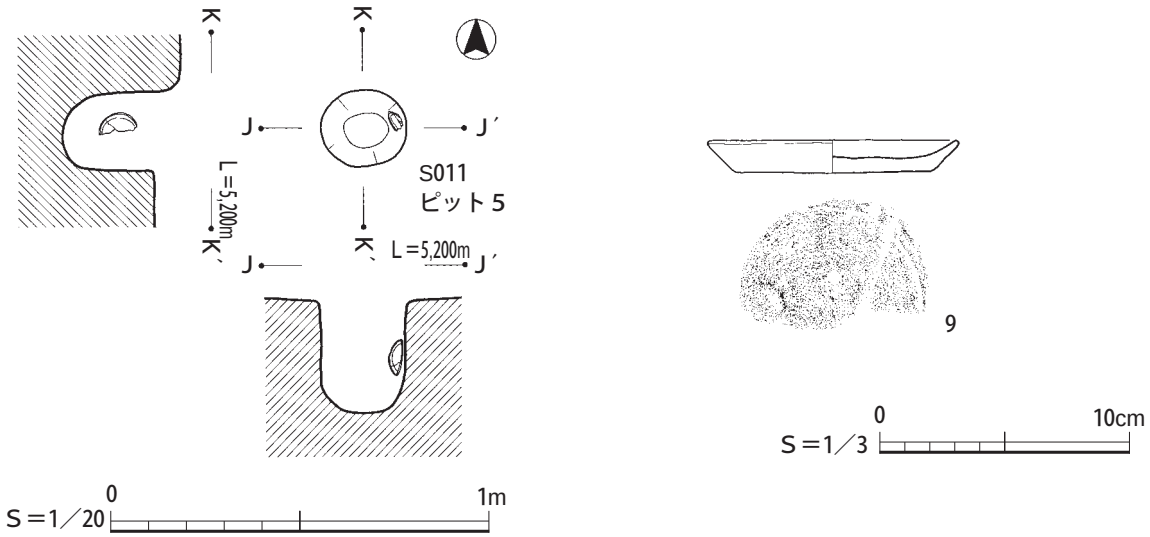
図(Fig)10　土坑(S007)・出土遺物実測図　S＝1／30，2／3



図(Fig)11　土坑(S010)・出土遺物実測図　S＝1／10，1／3



図(Fig)12　掘立柱建物(S011)実測図　S＝1／80



図（Fig）13　ピット（S011ピット5）・出土遺物実測図　S ＝1／20，1／3

Ｐ６－14：2.18＋2.12（2.15：約7.2尺）

Ｐ７－15：2.20＋2.09（2.15：約7.2尺）

Ｐ８－16：1.97＋2.20（2.09：約7.0尺）

［柱間の寸法：桁］

Ｐ５－８：2.25＋2.12＋1.66（2.01：6.7尺）

Ｐ９－12：2.40＋2.40＋1.34（2.05：約6.8尺）

Ｐ13－16：2.14＋2.24＋1.56（1.98：6.6尺）

［柱間の寸法：庇］

Ｐ１－４：1.88＋2.29＋1.57（1.91：約6.4尺）

Ｐ17－20：2.38＋1.92＋1.76（2.02：約6.7尺）

［柱間の寸法：梁と庇の間］

Ｐ１－５，13－17：1.20＋1.13（1.17：3.9尺）

Ｐ２－６，14－18：1.22＋1.12（1.17：3.9尺）

Ｐ３－７，15－19：1.15＋0.98（1.07：約3.6尺）

Ｐ４－８，16－20：0.98＋1.02（1.00：約3.3尺）

［総面積］39㎡（約11.8坪）【身舎：25.7㎡（約7.9坪）、庇：13.3㎡（約4.0坪）】

［推察される遺構の性格、時期など］規格が２間×３間の総柱で両側に庇を持つ掘立柱建物である。梁行6.03m（20.1尺）、桁行4.26m（14.2尺）、庇が平均で約110㎝（3.7尺）北北東と南南西に広がる。総面積は39㎡（11.8坪）であるが、この掘立柱建物の詳細な性格は不明であるが、建物の軸方向からS013と同時期の建物であろうと推察される。しかし、S006（溝）との軸方向の差が約11度あることから同時期ではないと考えられるが、その前後関係は不明である。時期判定の決め手となるのが５番ピットから出土した土師器の小皿（遺物番号：９）である。底部が糸切り離しであることから12世紀以降（中世）であることは間違いない。

［出土遺物］５番ピットから１点の土師器が出土している。

９は、中世の土師器で小皿である。底部は糸切り離しで指頭押圧が見られる。復元口縁径が10.0㎝、復元底径が7.5㎝、器高は1.35㎝である。

９）掘立柱建物（S012：図14）

［確認位置］Ｃ，Ｄ－５，６グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.05mであり、基本土層の②層の褐灰粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。

［規格］２間×３間の総柱建物。平均で桁行7.08m（23.6尺）、梁行4.38m（14.6尺）である。

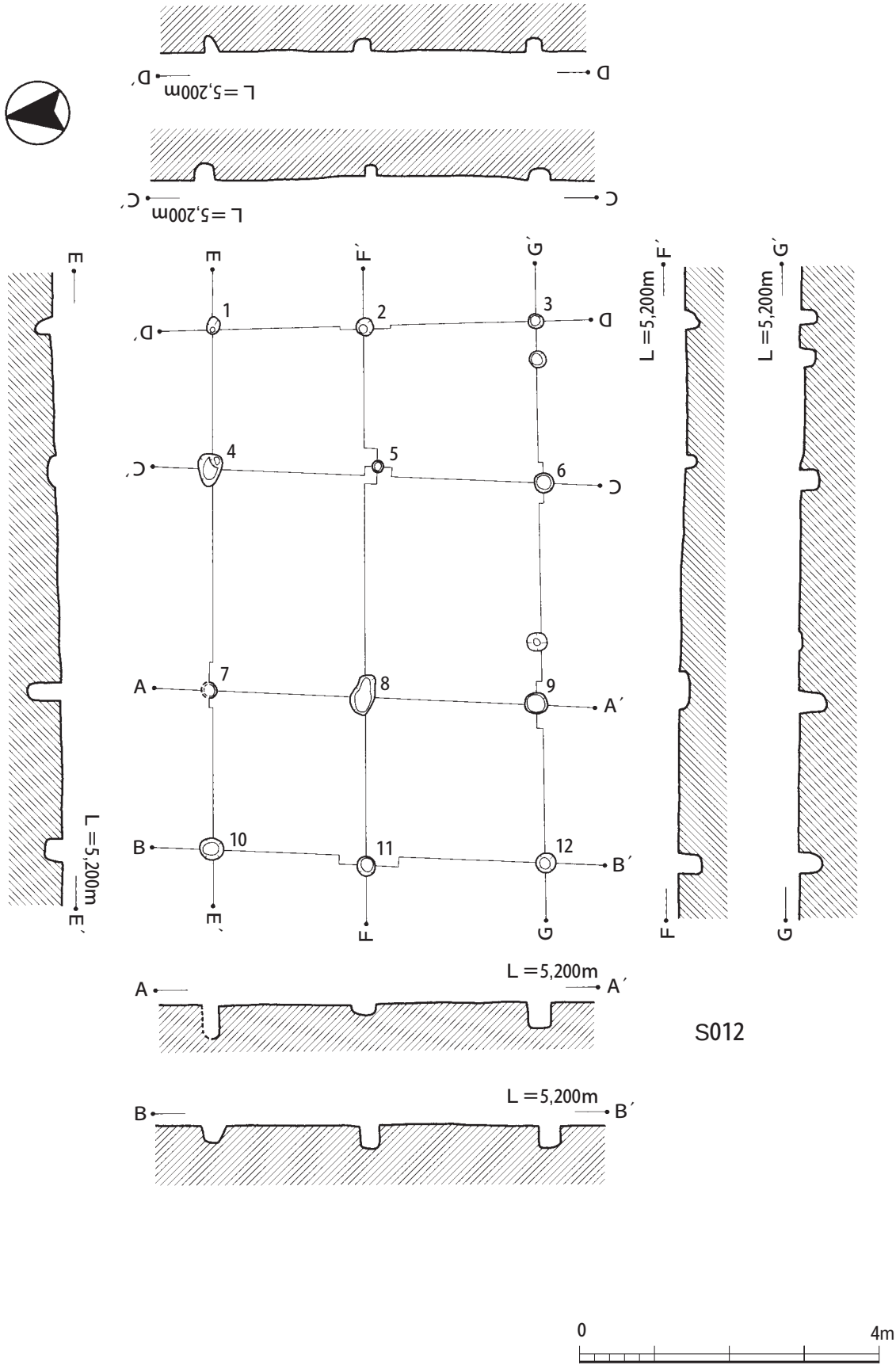
［軸の方位］桁行方向（長軸）はほぼ東西方向である。梁行方向（短軸）は北より北東に9.5度傾いている。S006は北より北東に6.5度傾いており、軸の差は約３度である。

［柱穴の掘り形径と深さ］柱穴の掘り形直径は14～30㎝で平均は24.4㎝、深さは平均で24.5㎝。

［柱痕跡］12ある柱穴の内、柱痕跡は１つも確認されなかった。

［柱間の寸法：梁］

Ｐ：ピット、（　）：平均値、単位：m



図(Fig)14　掘立柱建物(S012)実測図　S＝1／80

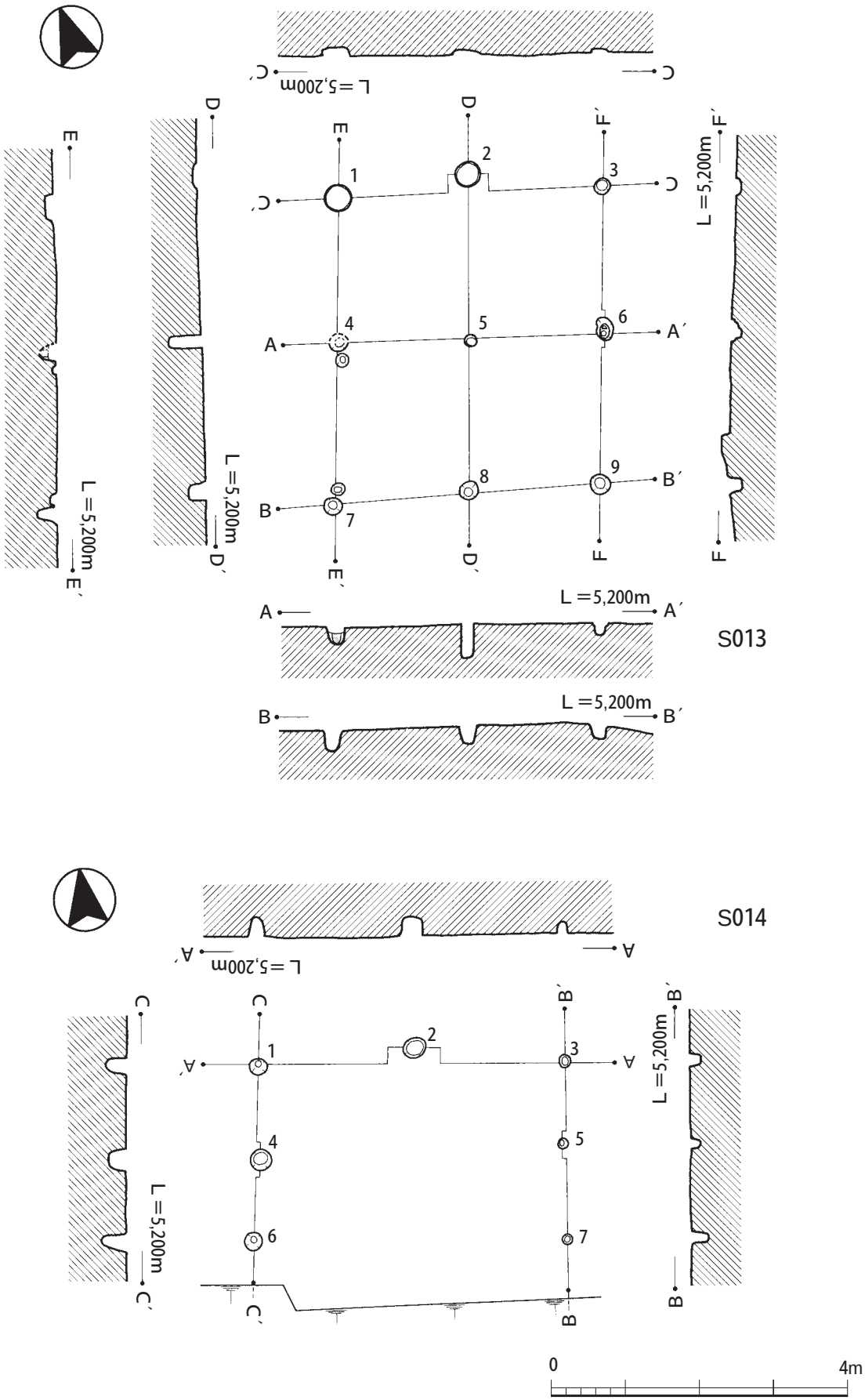
Ｐ１－３：2.02＋2.30（2.16：7.2尺）
Ｐ４－６：2.20＋2.21（2.21：約7.4尺）
Ｐ７－９：2.10＋2.27（2.19：7.3尺）
Ｐ10－12：2.04＋2.36（2.20：約7.3尺）
［柱間の寸法：桁］
Ｐ１－10：1.86＋2.96＋2.11（2.31：7.7尺）
Ｐ２－11：1.83＋3.07＋2.24（2.38：約7.9尺）
Ｐ３－12：2.14＋2.97＋2.11（2.41：約8.0尺）
［総面積］31㎡（約9.4坪）
［推察される遺構の性格、時期など］規格が２間×３間の総柱建物である。桁行方向（長軸）はほぼ東西方向で平均桁行7.08ｍ（23.6尺）、梁行4.38ｍ（14.6尺）である。総面積は31㎡（約9.4坪）で、この掘立柱建物の詳細な性格は不明であるが、建物の梁行方向からS006（溝）やS014（掘立柱建物）とほぼ並行しており、同時期につくられたものと推定される。
［出土遺物］中世の土師器が15点出土しているが、小片であるためにここでは割愛する。

10）掘立柱建物（S013：図15）

［確認位置］Ｃ，Ｄ－７グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.05ｍである。
［規格］２間×２間の総柱建物。平均桁行で4.15ｍ（13.8尺）、梁行3.60ｍ（12.0尺）である。建物自体が北北東側に約５度傾いておりやや菱形に近い形状を呈している。
［軸の方位］桁行方向（長軸）は北北東－南南西方向である。桁行方向は北より北東に22.5度傾いている。S006は北より北東に6.5度傾いており、軸の差は約16度である。
［柱穴の掘り形径と深さ］柱穴の掘り形直径は21～35㎝で平均は26.4㎝、深さは平均で20.1㎝。
［柱痕跡］９ある柱穴の内、柱痕が確認されたのは４番ピット（柱径22㎝、長さ22㎝）だけである。
［柱間の寸法：梁］
Ｐ：ピット、（　）：平均値、単位：ｍ
Ｐ１－３：1.75＋1.83（1.79：約6.0尺）
Ｐ４－６：1.78＋1.84（1.81：約6.0尺）
Ｐ７－９：1.82＋1.77（1.80：6.0尺）
［柱間の寸法：桁］
Ｐ１－７：1.96＋2.17（2.07：6.9尺）
Ｐ２－８：2.22＋2.09（2.16：7.2尺）
Ｐ３－９：1.99＋2.02（2.01：6.7尺）
［総面積］14.3㎡（約4.3坪）
［推察される遺構の性格、時期など］規格が２間×２間の総柱建物である。桁行方向（長軸）は北北東－南南西方向で平均桁行で4.15ｍ（約13.8尺）、梁行3.60ｍ（12.0尺）である。総面積は14.3㎡（約4.3坪）とやや狭い。いぜれにせよこの掘立柱建物の詳細な性格は不明であるが、建物の軸線方向からS011（掘立柱建物）とほぼ並行しており、同時期の建物と考えられる。
［出土遺物］出土遺物はなし。

11）掘立柱建物（S014：図15）

［確認位置］Ｄ－５グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.05ｍであり、基本土層の②層の褐灰粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。
［規格］２間×３間以上の掘立柱建物と考えられるが、全体像は不明で南側の調査区外に続いている。平均桁行で2.34ｍ以上（7.8尺以上）、梁行4.14ｍ（13.8尺）である。
［軸の方位］桁行方向（長軸）はほぼ南北方向で、北より北東側に約6.0～8.5度傾いている。S006は北より北東に6.5度傾いており、軸の差はほとんどない。
［柱穴の掘り形径と深さ］柱穴の掘り形直径は15～35㎝で平均は21.0㎝、深さは平均で22.9㎝。
［柱痕跡］７ある柱穴の内、柱痕跡は１つも確認されなかった。
［柱間の寸法：梁］
Ｐ：ピット、（　）：平均値、単位：ｍ
Ｐ１－３：2.08＋2.06（2.07：6.9尺）
［柱間の寸法：桁］
Ｐ１－６：1.26＋1.08（1.17：3.9尺）
Ｐ２－７：1.09＋1.28（1.19：約4.0尺）
［総面積］11.4㎡以上（約3.5坪以上）
［推察される遺構の性格、時期など］規格が２間×３間以上の掘立柱建物である。桁行方向（長軸）はほぼ南北方向である。全容がつかめないこともあり、この掘立柱建物の詳細な性格は不明であるが、建物



図(Fig)15　掘立柱建物(上：S013、下：S014)実測図　S＝1／80

の桁行方向からS006（溝）やS014（掘立柱建物）とほぼ並行しており、同時期につくられたものと推定される。

［出土遺物］出土遺物はなし。

12）畝状遺構（S015：図16）

［確認位置］Ｃ－７、８グリッド内に位置する。確認面の標高は約4.90ｍであり、基本土層、北側に広がる灰黄褐色粘質土から⑤層の黒褐色粘質土にかけて確認された。

［形状、大きさ、土層など］形状は細長くほぼ等間隔（約１ｍ）に６～７列に並んで南南東－北西西に続いている。断面形は逆かまぼこ形である。幅は20～50㎝、深さは８～10㎝、長さは最長で12.6ｍ続いている。層は１層で、にぶい黄褐色砂質土（Hue 10YR4/3）で２～３㎜のマンガン粒を多く含み、ややしまる砂質土。色調がやや白い。

［推察される遺構の性格、時期など］形状から耕作に伴い畝をつくる際に掘った溝の跡と考えられる。ここでは畝状遺構としておく。時期は不明だが、付近の遺構の状況や確認土層から中世前後と推定されよう。

［出土遺物］この遺構内からの出土遺物はないが、畝より下層からの出土遺物は確認されている。古代土師器の甕（45）と弥生後期の甕（46）であるが、包含層内の遺物として後述する。

13）畝状遺構（S016：図17）

［確認位置］Ｃ、Ｄ－２，３グリッド内に位置する。確認面の標高は約4.85ｍであり、基本土層②層の褐灰色粘質土から③層の黄褐色粘質土にかけて確認された。

［形状、大きさ、土層など］形状は基本的には細長く３方向に向いている。１群：北西西－南東東方向、２群：北東－南西方向、３群：北北東－南南西方向に分かれる。切り合いがうまくつながらず、新旧関係は不明。長さは0.7～4.7ｍと部分的にしかつながらない。幅も0.3～0.6ｍが主流だが、0.8ｍもある。間隔も不規則であるが。層は１層でS015と同様でにぶい黄褐色砂質土（Hue 10YR4/3）で２～３㎜のマンガン粒を多く含み、ややしまる砂質土。色調がやや白っぽい。

［推察される遺構の性格、時期など］形状からS015と同様に耕作に伴い畝をつくる際に掘った溝の跡と考えられる。ここでも畝状遺構として把えておく。この遺構は、南側の壁（Ｄ－２，３グリッド）に続いており、少なくとも３回の耕作の跡と考えたい。時期は不明だが、付近の遺構の状況や確認土層から中世前後と推定されよう。

［出土遺物］この遺構内からの出土遺物はない。

14）杭列（S019：図18）

［確認位置］Ｃ、Ｄ－５グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.00ｍである。

［形状、大きさ、土層など］北北西－南南東方向に３つの杭が並んでいる。角度は北より北西側に11度傾いている。杭の間隔はＡ－Ｂが2.63ｍ、Ｂ－Ｃが2.48ｍである。杭の大きさはいずれも径が約４㎝で３～19㎝残存しており、金属による刃物痕跡が窺えた。また、杭の周りの土層は周りの土とは違い青灰色粘質土であった。

［推察される遺構の性格、時期など］耕作に伴う杭列であろうか？時期は不明だが、付近の遺構との切り合い状況や確認土層から中世以降（S012より後）でおそらく近世以降の可能性が高いと考えられる。S020と同時期であろう。

［出土遺物］この遺構内からの出土遺物はない。

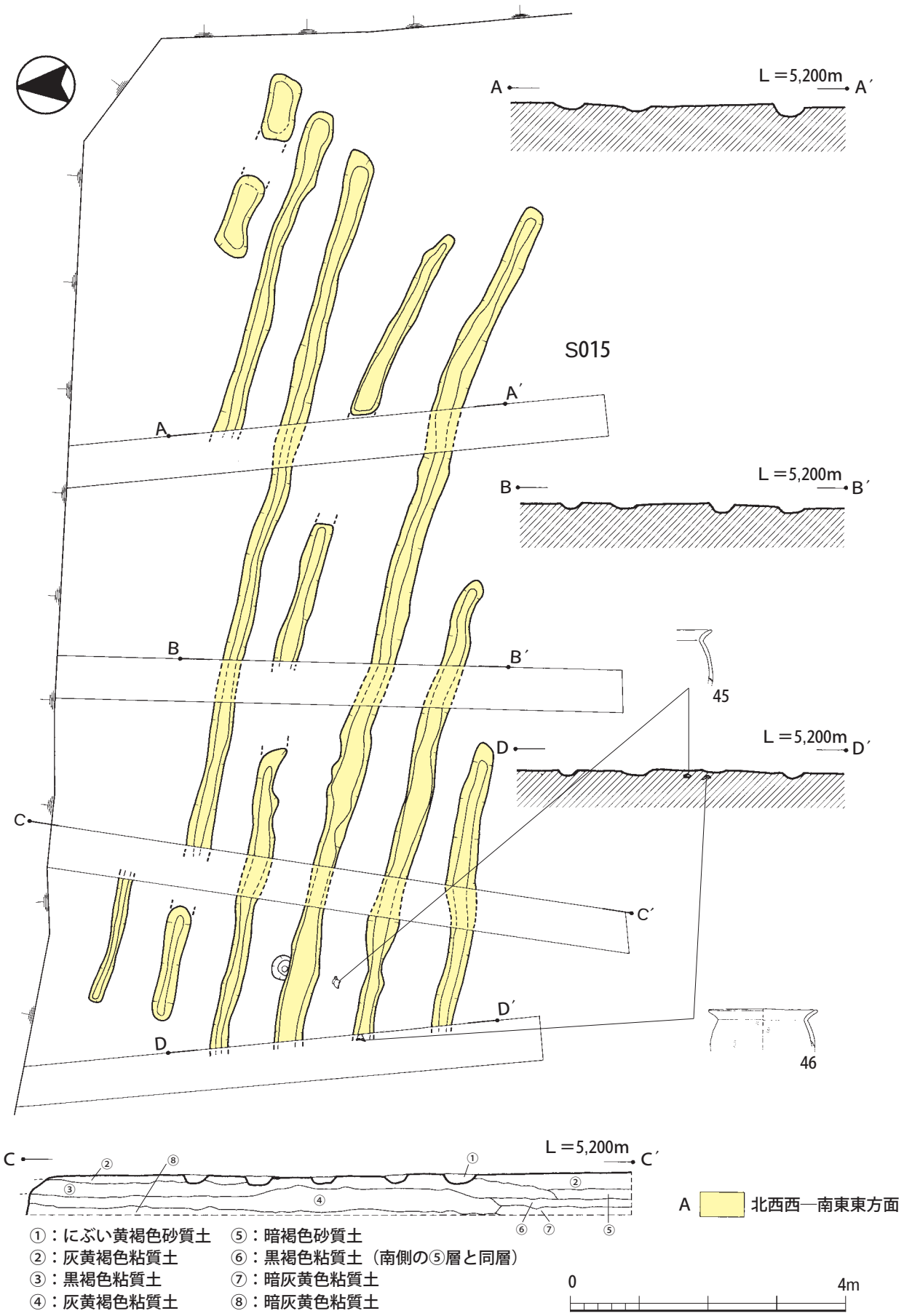
15）杭列（S020：図18）

［確認位置］Ｃ－５，６グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.00ｍである。

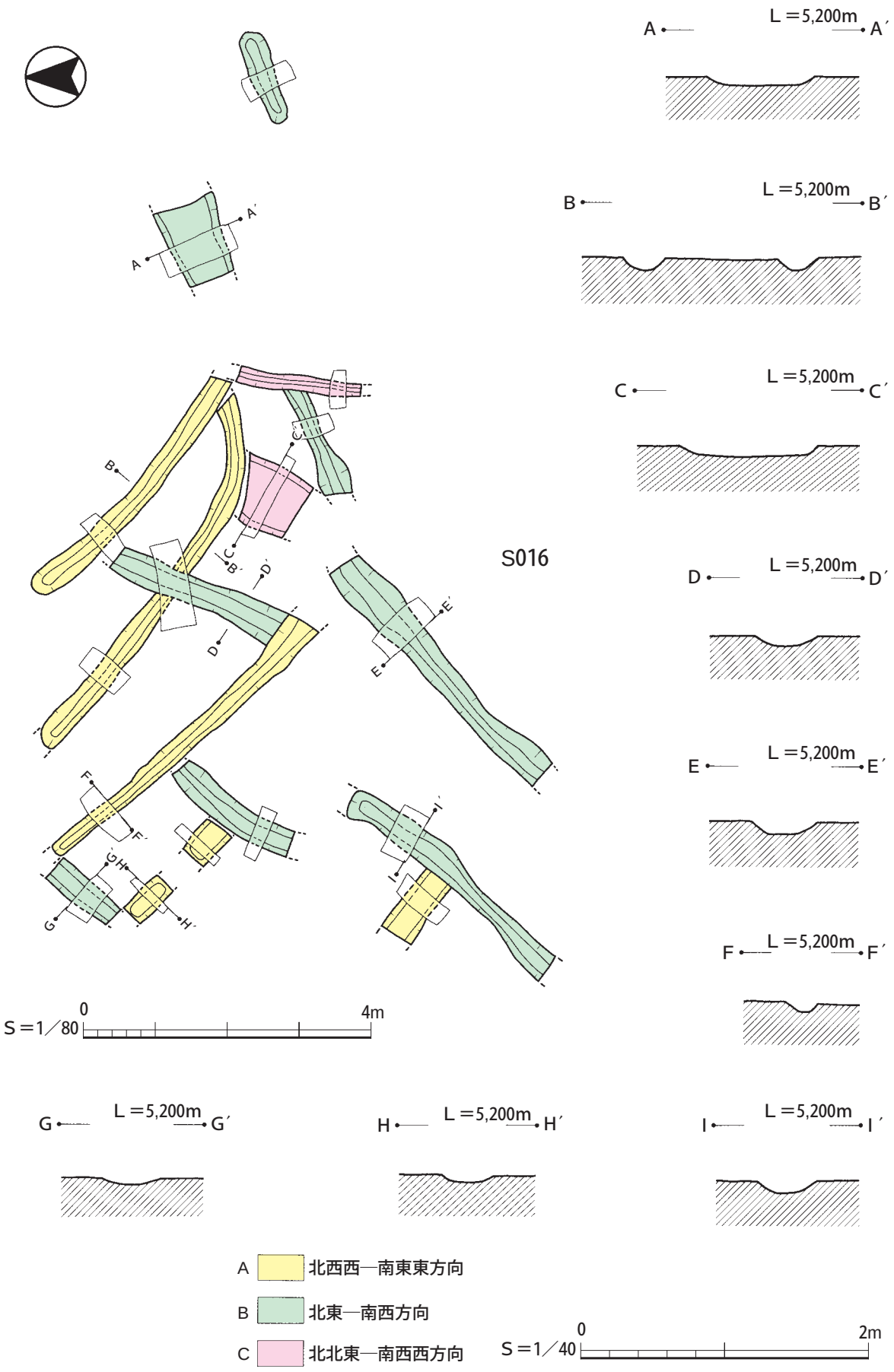
［形状、大きさ、土層など］北東－南西方向に４つの杭が並んでいる。角度は北より北西側に58.5度傾いている。杭の間隔はＤ－Ｅが0.85ｍ、Ｅ－Ｆが2.25ｍ、Ｆ－Ｇが1.90ｍである。杭の大きさはいずれも径が約２～３㎝で５～24㎝残存しており、金属による刃物痕跡が窺えた。また、杭の周りの土層は周りの土とは違い青灰色粘質土であった。

［推察される遺構の性格、時期など］S019と同様に耕作に伴う杭列であろうか？時期は不明だが、付近の遺構との切り合い状況や確認土層から中世以降でおそらく近世以降の可能性が高いと考えられる。S019と同時期であろう。

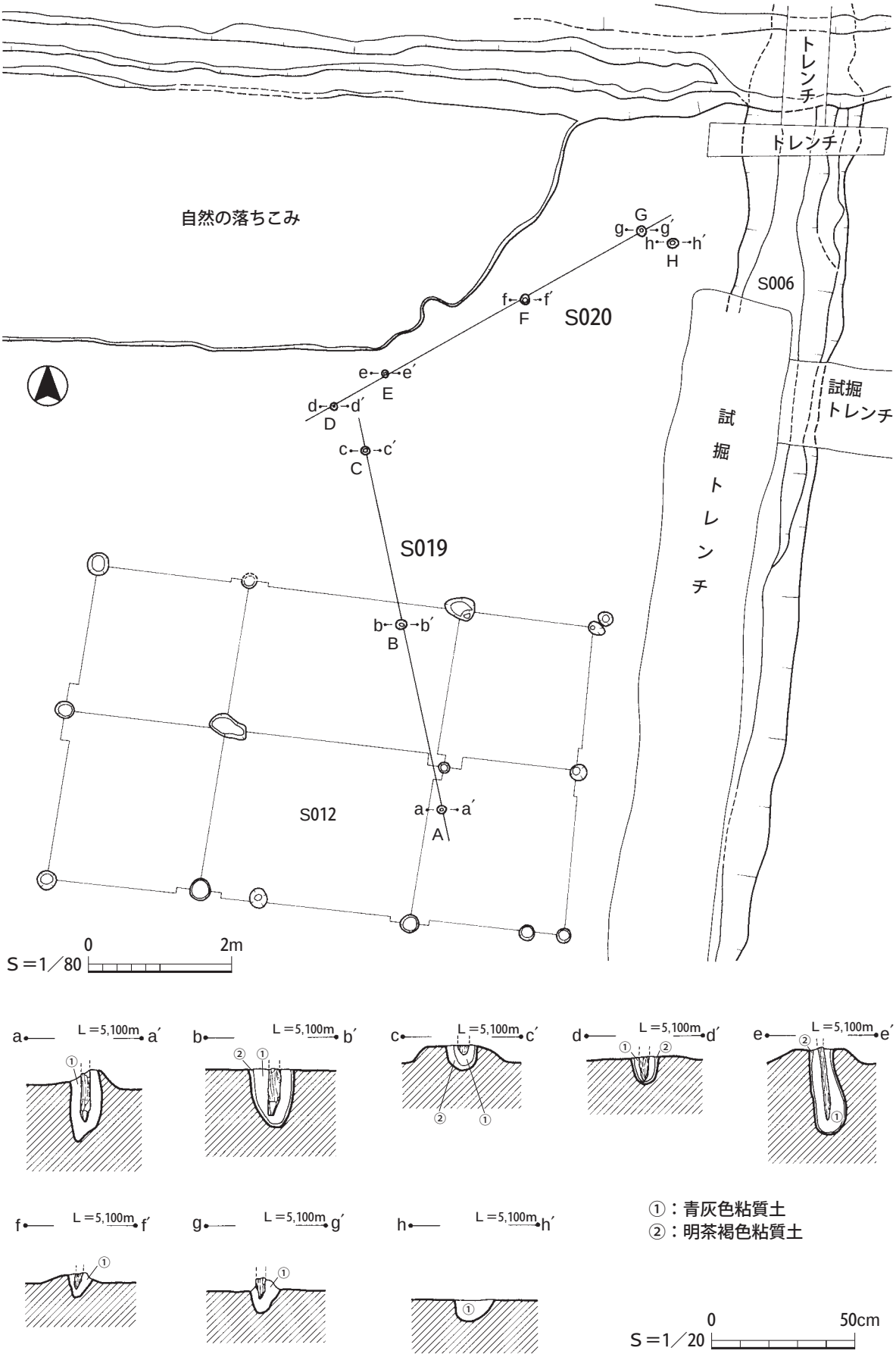
［出土遺物］この遺構内からの出土遺物はない。



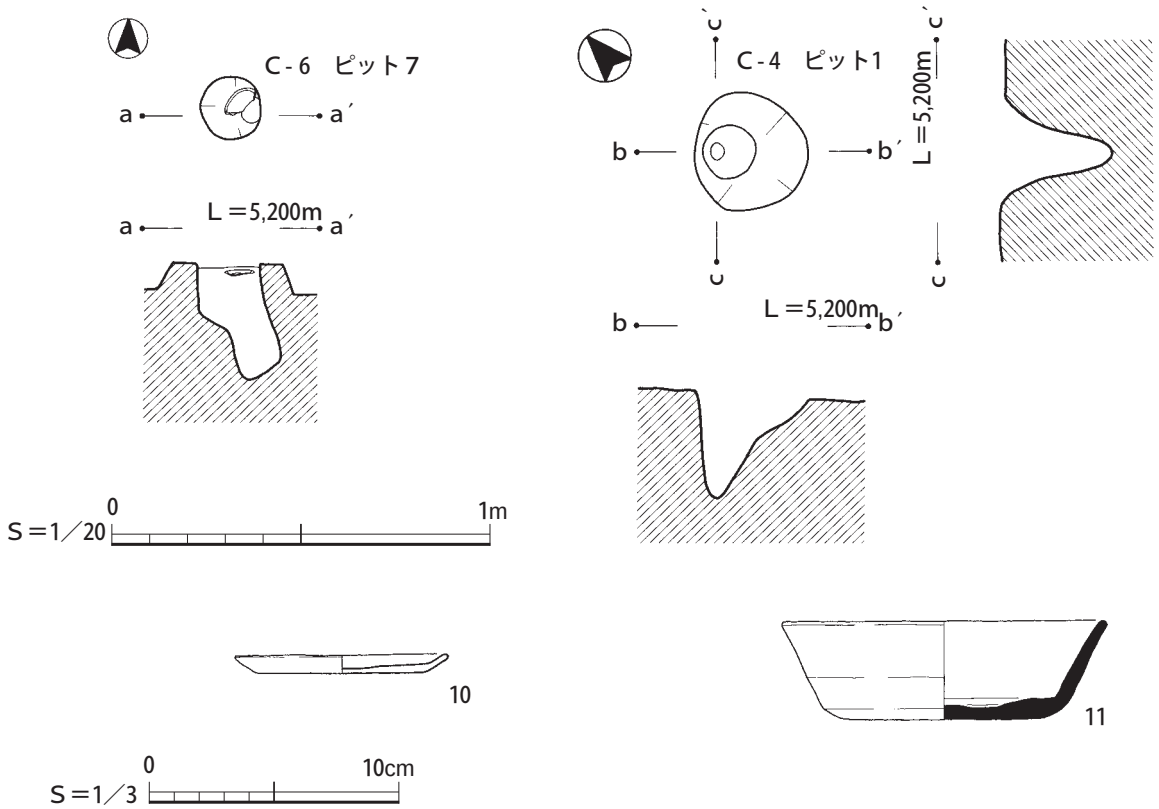
図(Fig)16　畝状遺構群(S015)実測図　S＝1／80



図(Fig)17　畝状遺構群(S016)実測図　S＝1／80，1／40



図(Fig)18　杭列(S019，020)実測図　S＝1／80，1／20



図(Fig)19　ピット(左：C-6 ピット7、右：C-4 ピット1)・出土遺物実測図　S＝1／20，1／3

16）ピット群【C－6グリッドのピット7、C－4グリッドのピット1】（図19）

［確認位置］ C－6グリッドとC－4グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.00～5.10mである。

［形状、大きさ、土層など］ C－6グリッドのピット7は径約33㎝、深さ約66㎝であるが、断面はややいびつな形状をしている。土層は暗褐色粘質土で焼土やカーボンを含む。

C－4グリッドのピット1は径約30～32㎝、深さ約28㎝である。土層は暗茶褐色粘質土ある。

［推察される遺構の性格、時期など］ 形状から掘立柱建物の柱の1つの可能性が考えられよう。しかし、それぞれに対応する堀立柱建物は特定できていない。ここではいずれも遺物を含んでいたピットとして紹介する。

［出土遺物］

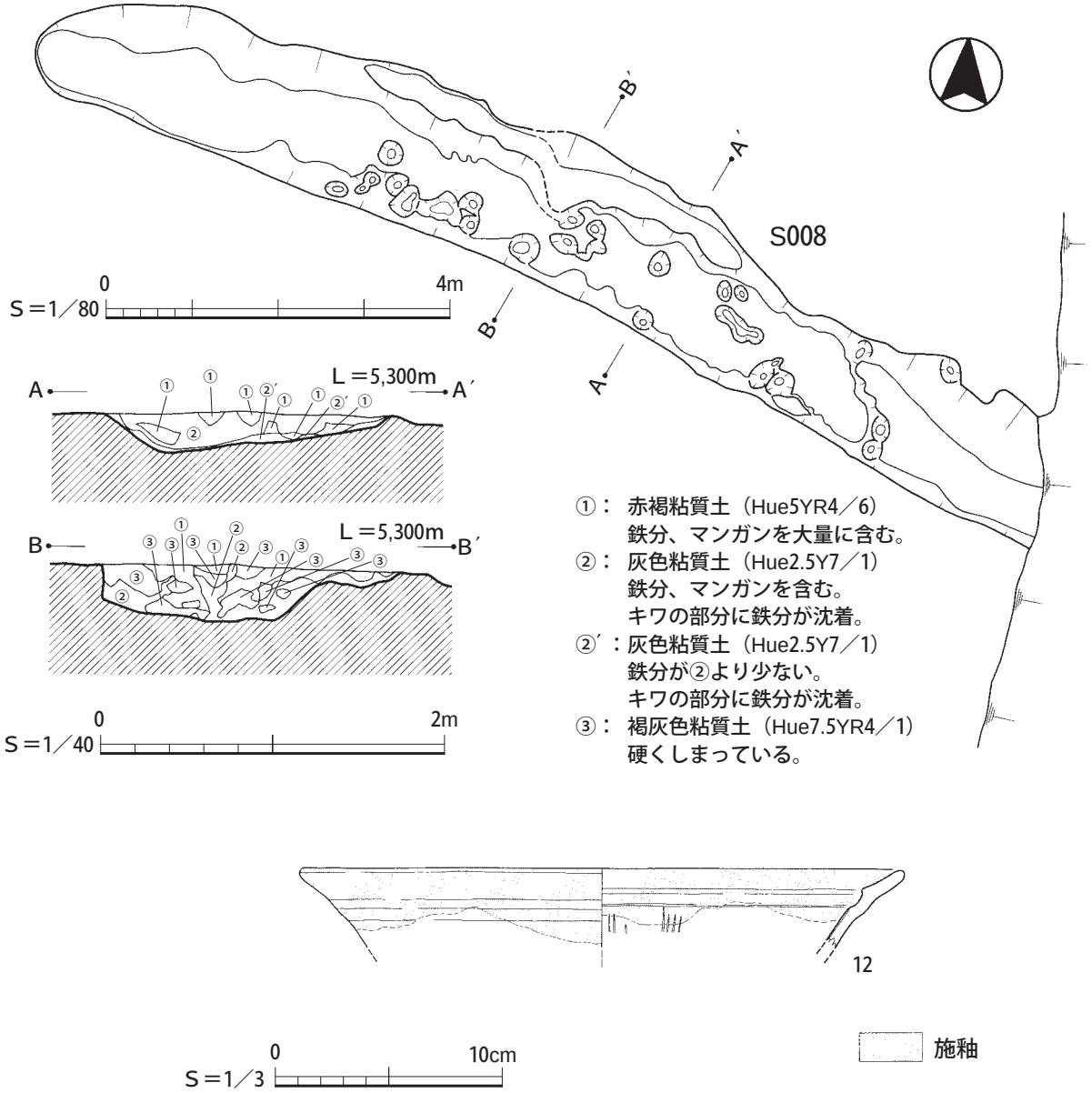
10は、中世の土師器で小皿である。底部は糸切り離しである。復元口縁径が8.5㎝、復元底径が6.8㎝、器高は0.75㎝である。底部が糸切り離しであることから美濃口編年では13世紀代と考えられようか？

11は、古代の須恵器で坏である。復元口径13.0㎝、復元底径7.0㎝、器高は3.95㎝を測る。焼きがあまく形状から9C前半期のものであろうか？6点が接合しており、1点はS005より出土、5点はC－4グリッドのピット1より出土していることから、C－4グリッドのピット1から出土した遺物として捉えたい。但しややローリングを受けていることからC－4グリッドのピット1が直ちに古代のピットとは言い難く、流れ込みの遺物と考えられる。

17）溝状遺構（S008：図20）

［確認位置］ C－7、D－7，8グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.20mであり、基本土層の①層を切る形で確認された。

［形状、大きさ、土層など］ 東南東から西南西に伸びる溝状遺構でC－7とD－7の境あたりで若干高まり途中でなくなっている。本来は西側に続いていたことも十分に考えられる。基本土層の①層を切る形で確認されたことから表土剥ぎの際に削り取ったことも考えられる。長さ12.6m、幅1.5～1.6m、深さが最深部で35㎝である。埋土は大まかに3層に分



図(Fig)20　溝状遺構(S008)・出土遺物実測図　S＝1／80，1／40，1／3

層でき、１層の赤褐色粘質土（Hue 5Y4/6）、２層の灰色粘質土（Hue 2.5YR7/1）、３層の褐灰色粘質土（Hue 7.5Y4/1）が混在する。

［推察される遺構の性格、時期など］中世期の酸化鉄・マンガン集積層と考えられる①層を切ることや出土遺物の中に近世（17Ｃ中頃）の擂鉢と考えられる陶器が含まれていることから近世期（17Ｃ中頃以降）の水田等に伴う溝ではないかと考えられる。

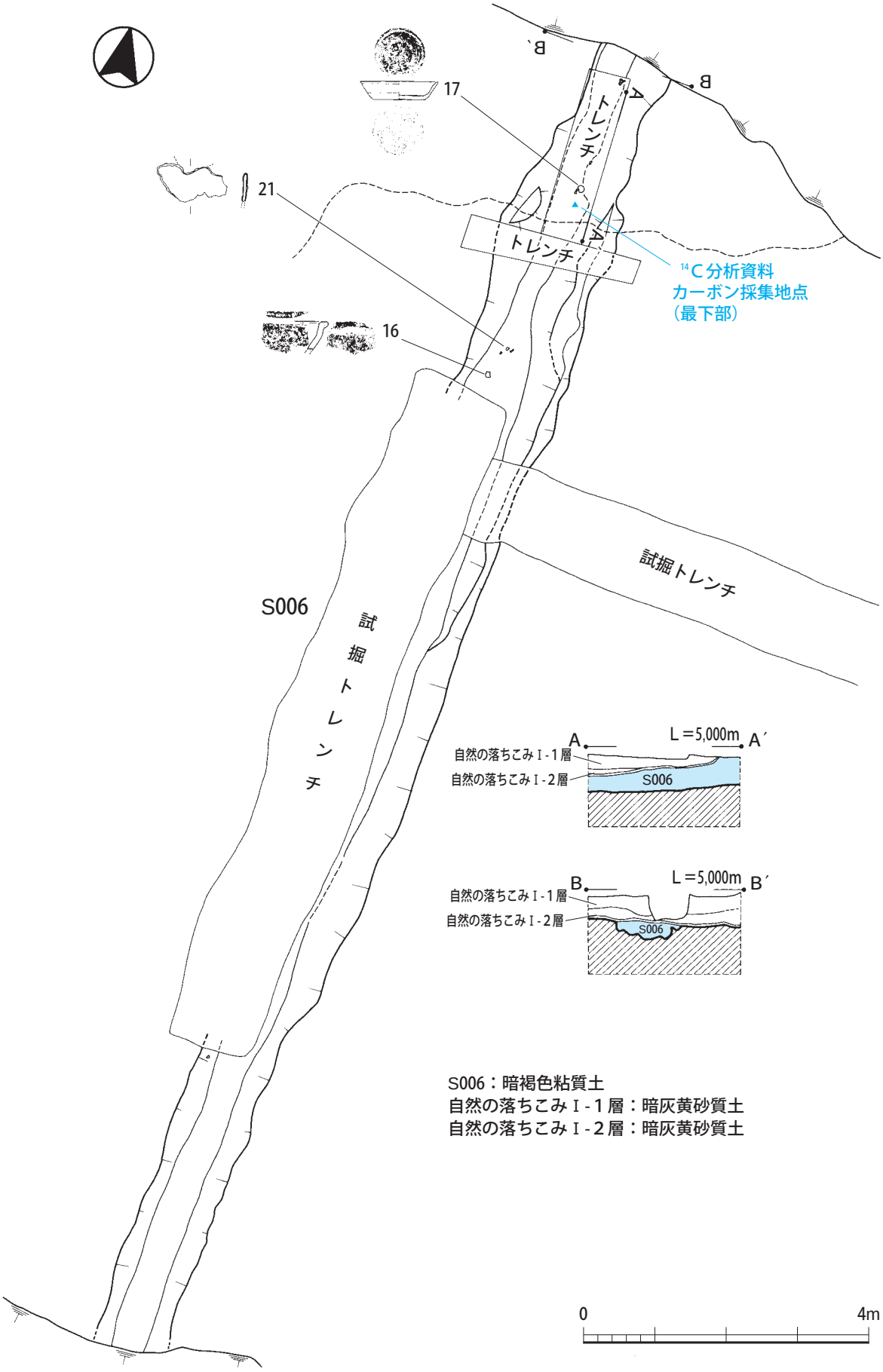
［出土遺物］約150点の土器片が出土しているが、１点を除きいずれも中世の土師器、瓦質土器と青磁である。ここでは１点の陶器を紹介をする。

12は、近世期の陶器で擂鉢である。４本単位のスリ目が確認できる口縁部周辺のみに鉄釉がかかっていることと、口縁部の形態から家田氏の陶器編年ではⅢ期（1650～1690年代）にあたると考えられる。

18）溝（S006：図21）

［確認位置］Ｂ、Ｃ、Ｄ－６グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.1ｍであり、基本土層①層の中世床土と考えられる暗褐色土を剥いだ段階で確認された。

［形状、大きさ、土層など］幅が約1.0～1.3ｍ、深さ約0.18～0.25ｍほぼ南から北へ続く溝である。長



図(Fig)21　溝(S006)実測図　S＝1／80

さは約19.6mあるが北側や南側へ更に続くものと考えられる。北側では自然の落ちこみにより部分的に削平されている。また、高低差が約0.4mあり、南側が高く、北側が低い。土層は１層で暗褐色粘質土であり、マンガン粒が多く、所々にカーボンを含む。

［推察される遺構の性格、時期など］中世の溝と考えられる。遺構の軸は北より北東側に約6.5度を示しており、S012（遺構軸の角度は9.5度）やS014（遺構軸の角度は6.0～8.5度）と同時期の遺構と考えられる。また南側が高く北側が低く高低差があることから南側から北側へ流れていたことが考えられる。北側にあった旧木葉川に注いでいたであろう。

この遺構の時期は出土遺物、特に後述する遺物番号16と17（溝最下部出土）を美濃口編年に照らし合わせると９期（13世紀前半～中葉）にあたる。また、溝底部にあった炭化物の放射性炭素年代測定（ＡＭＳ：ＰＬＤ－2064）による暦年代範囲はＡＤ1155年～1220年（71.9％）を示しており、13世紀前半と合致する。しかし、このデータは溝の廃絶期に近い時期と考えられるので、開始期も含めた時期も考慮すると12世紀後半～13世紀後半と幅広く想定しておきたい。

更に、溝に沿って３～10㎝大の生物痕跡と考えられる穴が無数に確認された。自然の落ちこみにも広がっており、平均して４～６㎝の大きさである。これらのいくつかはカニやミミズなどの動物による生息痕跡の可能性も考えられるが、穴がやや大きいことからほとんどが植物の痕跡と判断した。この植物の痕跡と考えられる穴の土壌を自然の落ちこみにおいて植物珪酸体分析した結果、ウシクサ族、ネザサ族、キビ族、イネ、イネ頴破片、クマザサ属型、ヨシ属、他のタケ亜科の順にプラントオパールが多く検出されたが、母植物の同定まではできていない。おそらく溝の水辺に生えるイネ以外の植物痕跡であろう。

［出土遺物］ビニール袋（11号）約１袋分の遺物が出土している。約50％が土師器の小皿、30％瓦器であり、残りが青磁の小片などでほとんどが中世の遺物であった。

ここでは10点の遺物を紹介する。

13は中世の須恵器で大甕の体部である。Ｄ－６グリッドの一括資料である。内面は刷毛後ナデで外面は格子目の叩きが残る。やや瓦質気味で焼きはあまり良くない。

14は中世の土師器で土鍋の口縁部である。Ｄ－６グリッドの一括資料である。胎土や焼きは16と酷似しているが口縁部は刷毛目で調整している。外面にススが付着している。

15は中世の須恵器で壺の体部の資料である。S006のＢ－６グリッドの一括資料１点と自然の落ちこみＩのＣ－２グリッドの一括資料１点が接合している。自然の落ちこみＩの耕作の際にS006内が削平され、遺物が掻き出されたものと考えられる。内面はヘラ状の工具による削り後ナデ、指頭圧痕が見られ、外面は格子目の叩き後ナデが残る。焼きは良好である。

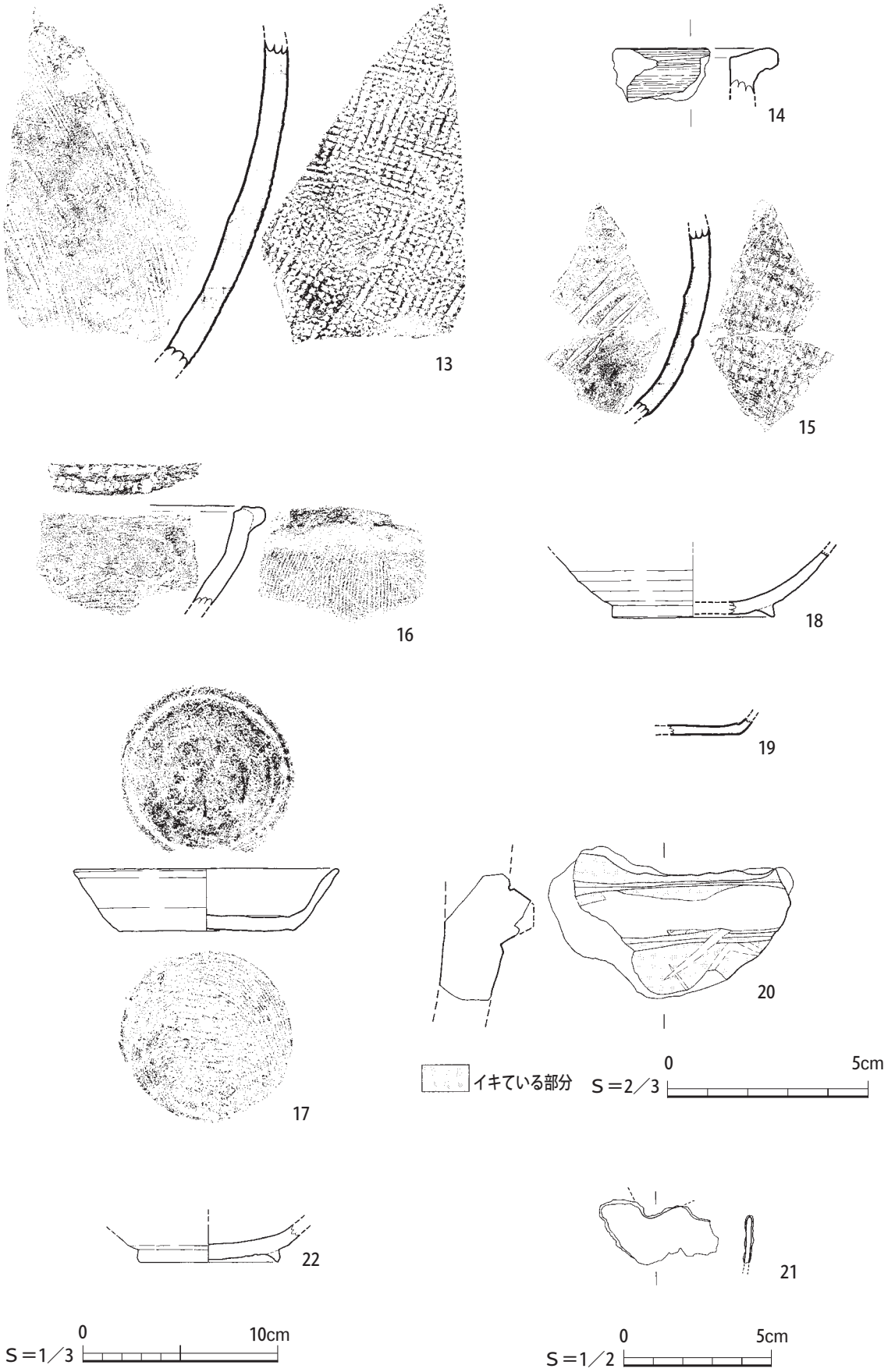
16は中世の土師器で土鍋の口縁部である。Ｃ－６グリッドの点上げ資料（溝の最下部）である。胎土や焼きは14と酷似しているが口縁部は縄目の痕跡が２列にわたり確認される。外面にはススが付着している。美濃口編年の９期（13世紀前半～中葉）にあたる肥前系近似の土鍋である。

17は中世の土師器で坏である。Ｂ－６グリッドの点上げ資料（溝の最下部）である。復元口径13.4㎝、器高3.2㎝。内面見込み部にはナデ調整、底部には糸切り離し後簾状の圧痕が見られる。坏の口径値で考えると美濃口編年の９期（13世紀前半～中葉）にあたると考えられる。

18は中世の瓦器の椀である。Ｄ－６グリッドの一括資料である。復元底径8.3㎝。器高3.4㎝。外面にはヘラ削りの痕跡が確認される。

19は白磁で皿の底部である。Ｂ－６グリッドの一括資料である。山本信夫氏の太宰府土器型式と国産陶器・貿易陶器編年（以下山本編年）による時期区分ではＦ期（13世紀中頃～14世紀初頭）にあたると考えられる。

20は滑石製の石鍋の破片で、Ｃ－６グリッドの一括資料である。口縁部直下にある削り出された鍔の部分にあたり、被熱のためか全体的に赤味を帯びている。産地としては長崎県西彼杵半島（西彼杵町・大瀬戸町・琴海町・外海町）が有望である。木戸雅



図(Fig)22　溝(S006)出土遺物実測図　S＝1／3，2／3，1／2

寿氏の石鍋編年試案表では形式分類Ⅲ－ａｂ類で12～13世紀代のものと考えられる。

21は鉄製品であるが、器種は不明である。Ｄ－６グリッドの点上げ資料（溝の最下部）であり、長さ2.30㎝～、幅4.10㎝～、厚さ0.20㎝である。Ｌ字状の生きの部分があるが、器種や形状は不明である。

22は中世の瓦器で椀である。Ｂ－６グリッドの一括資料である。復元底径7.2㎝、残存高1.9㎝。焼成が非常に良く、やや須恵質である。

19）畝状遺構（S018：図23）

［確認位置］ Ｃ、Ｄ－７，８グリッド内に位置する。確認面の標高は約4.70～4.80ｍであり、S015の下層に位置する。基本土層③層の黄褐色粘質土から④層の暗褐色粘質土にかけて確認された。

［形状、大きさ、土層など］ 形状は基本的には細長く６方向に向いている。Ａ群：北西－南東方向、Ｂ群：北東－南西方向、Ｃ群：北北東－南南西方向、Ｄ群：北北西－南南東方向、Ｅ群：東西方向、Ｆ群：南北方向に分かれる。幅も0.25～0.4ｍが主流、長さは0.7～10.0ｍと部分的にしかつながらない。間隔も不規則であるがＡ群の南側は1.15～1.20ｍとほぼ等間隔に並んでいる。層は１層でS015と同様でにぶい黄褐色砂質土（Hue 10YR4/3）であり、色調がやや白い。

［推察される遺構の性格、時期など］ 形状から畑の耕作に伴う畝をつくる時に掘った溝の跡で畝状遺構と考えられる。少なくとも６回以上の耕作の跡と考えたい。時期は不明だが、付近の遺構の状況や確認土層から中世・又はそれ以前と推定されよう。

［出土遺物］ この遺構からの出土遺物はない。

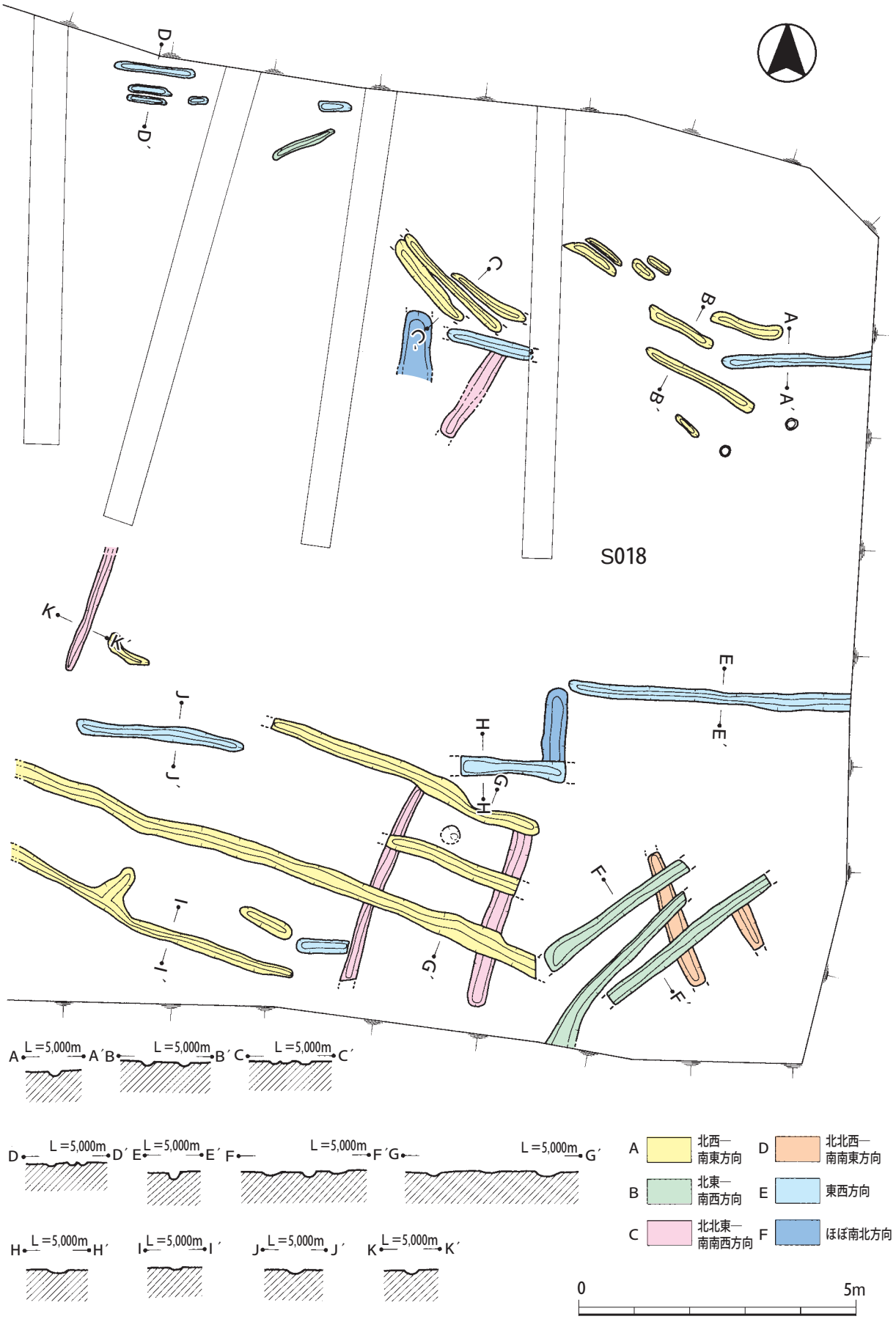
21）溝（S017：図24）

［確認位置］ Ｃ－７、８グリッド内に位置する。確認面の標高は約4.4～4.5ｍであり、基本土層⑥層や６層の灰黄褐色粘質土上面で確認された。

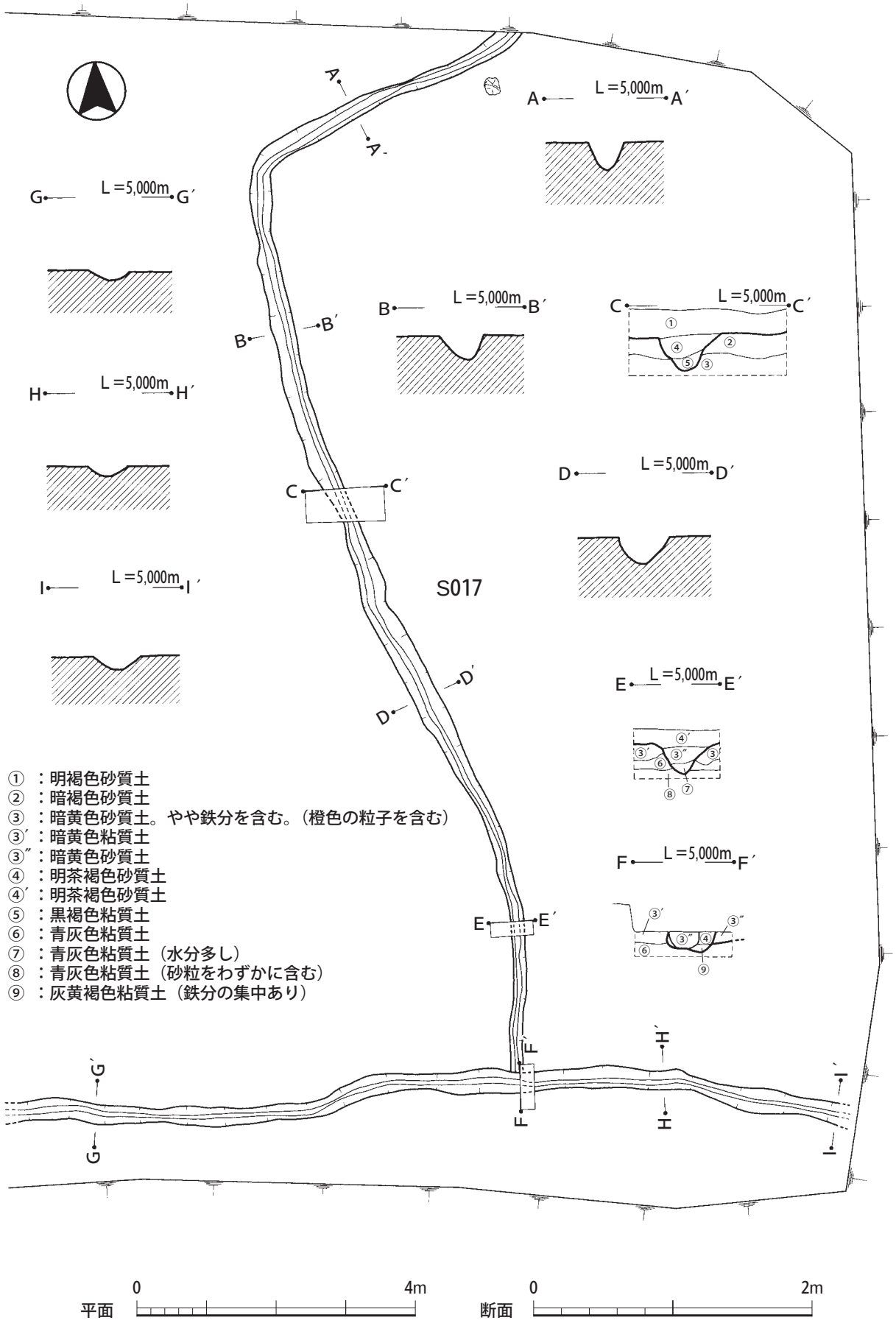
［形状、大きさ、土層など］ 形状は細長く大きくカーブしながらやや南北に流れる溝（長さ約92ｍ）とほぼ東西に続く溝（長さ約66ｍ）である。幅は0.3～0.4ｍ、深さは0.4～0.5ｍである。層は、やや南北方向は大きく２層（明茶褐色砂質土と黒褐色粘質土）に分層され、ほぼ東西方向は１層（暗黄色砂質土）である。高低差は南北（北側がやや高い）で約10㎝、東西（東側がやや高い）で約４㎝である。

［推察される遺構の性格、時期など］ カーブしたり形状が直線に伸びていることから区画の意味あいが強いと考えられる。それとも水田耕作に伴う溝状遺構であろうか？この遺跡の中で一番深い層から確認された遺構である。詳細な時期は不明だが土器片が３点出土していることから中世・又はそれ以前と考えられる。断面Ｆの状況から南北より東西の流れの方がより強かったことや、高低差があることから北から南側へかつ東から西へ流れていたものと推測される。おそらく西側で旧木葉川に合流していたのであろう。

［出土遺物］ 土器片が３点出土しているが、小片であり、表面もローリングを受けて調整も不明であるためここでは割愛する。



図(Fig)23　畝状遺構群(S018)実測図　S＝1／100



図(Fig)24　溝(S017)実測図　S＝1／80、1／40

第３節　遺物

［包含層］

ここで紹介する遺物は、遺構と自然の落ちこみ以外のエリアから出土した遺物を包含層という項目で紹介する。この包含層は表土剥ぎを行った以下の層、すなわち基本土層の①層である中世の酸化鉄とマンガンの集積層と考えられる暗褐色土の約５～10㎝下の層がほとんどである。この包含層からは青色の網コンテナ（46×62×18）㎝１箱の遺物が出土した。その中から30点の遺物を紹介する。

23は近世以降の磁器の染め付けで椀の口縁部である。東トレンチから出土した。外面には染め付け文様の一部が描かれているが詳細は不明である。

24は近世以降の陶器で壺の口縁部と考えられる。Ｄ－６グリッドから出土した。口縁部は外側に巻き込むように反る。内外面共に釉がかかっている。

25は近世以降の磁器で染め付け皿の底部で肥前産と考えられる。Ｄ－７グリッドから出土した。内面には見込み部に２本の線が、外面には高台に２本の線がその両端の底部と体部にそれぞれ１本ずつの線が描かれている。

26は中世の瓦質土器で火鉢の体部破片である。一括資料である。内面は斜め方向の刷毛目調整、外面は二条の断面三角形の突帯を持つ。

27は中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。Ｃ－３グリッドからの出土である。口縁部はやや内径しており、外側にやや肥厚気味に突帯を持つ。外面は二条の断面三角形の突帯を持ち、その上部には花文状のスタンプが観察される。

28は中世の瓦器の椀で口縁部の破片である。表土剥ぎの際の一括資料である。外面にはヘラ削り後ナデ、棒状工具によるミガキの痕跡が確認される。

29は中世の瓦器の椀で口縁部の破片である。Ｄ－５グリッドからの出土である。内面はナデ後、棒状工具によるミガキ、外面にはヘラ削り後ナデ、棒状工具によるミガキの痕跡が確認される。

30は中世の土師器で小皿の口縁部～底部の破片である。表土剥ぎの際の一括資料である。器高は1.3㎝。見込み部はナデ調整で底部は糸切り離し。

31は中世の土師器で小皿のほぼ完形の資料である。Ｃ－７グリッドからの出土である。口径は9.0㎝、底径は7.2㎝、器高は1.5㎝。見込み部はナデ調整、底部は糸切り離しである。美濃口編年では５～６期（12世紀前半～後半）で肥えられよう。

32は中世の土師器で坏の口縁部から底部にかけての資料である。Ｃ－６グリッドからの出土である。器高は2.95㎝。見込み部はナデ調整、底部は糸切り離し。復元口径は、15.2㎝で美濃口編年では６～７期（12世紀後半～末）で把えられよう。

33は中世の土師器で坏と考えられる資料で口縁部から底部にかけての破片である。Ｃ・Ｄ－５・６グリッドからの出土である。器高は3.05㎝。

34は中世の土師器で坏と考えられる資料で底部から体部にかけての破片である。Ｃ－６グリッドから出土した４点の破片が接合している。復元底径は10.2㎝。

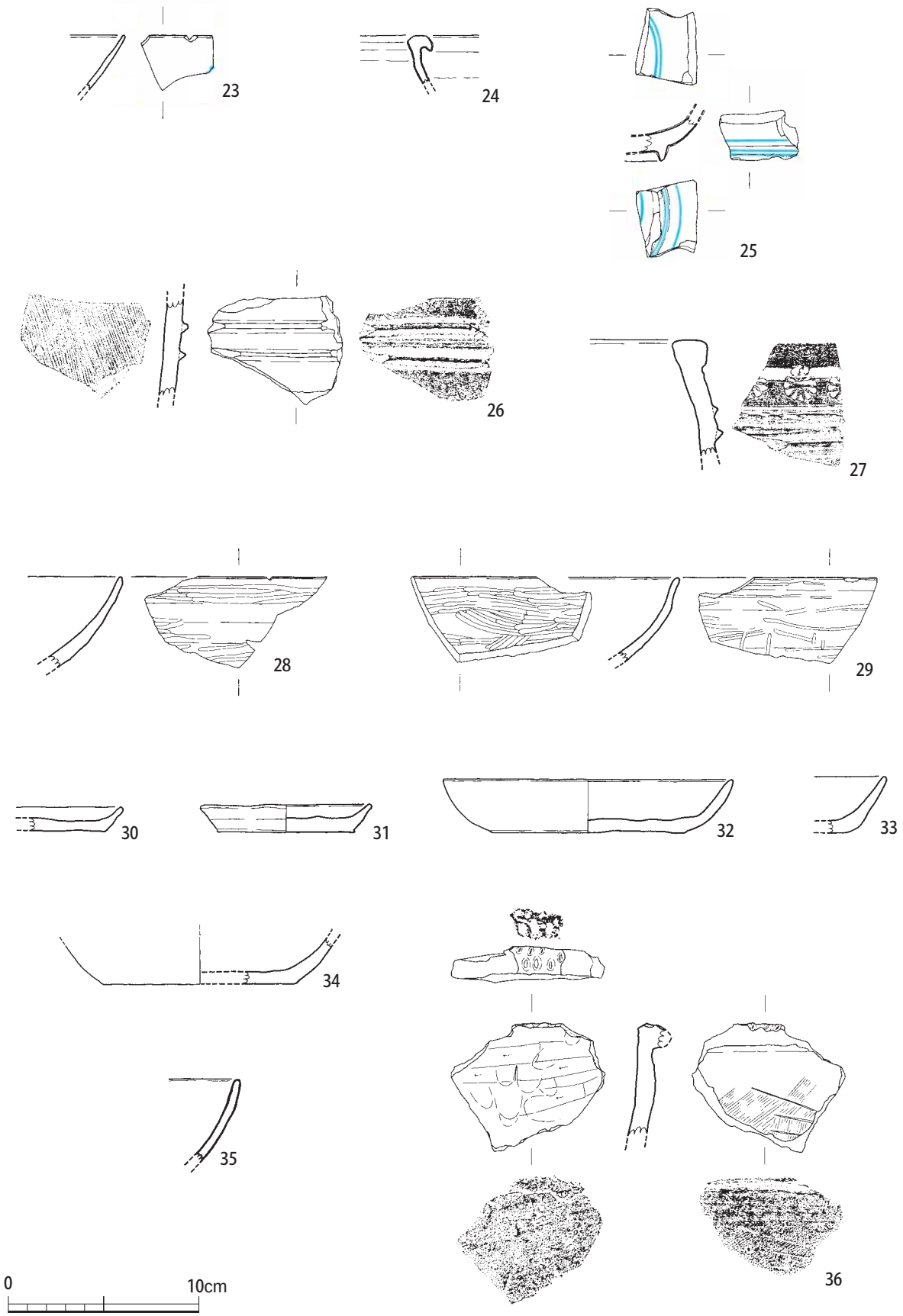
35は中世の須恵器で椀の口縁部の資料である。Ｃ－６グリッドから出土している。残存高は4.4㎝で焼成は良好である。

36は中世の土師器で土鍋の口縁部である。Ｃ－５グリッドからの出土である。内面はヘラ削りと指頭圧痕が、外面には刷毛目後部分的にナデ調整が見られ、口縁部には２条の縄目の圧痕と考えられる文様が観察される。美濃口編年では９期（13世紀前半～中葉）で肥えられよう。

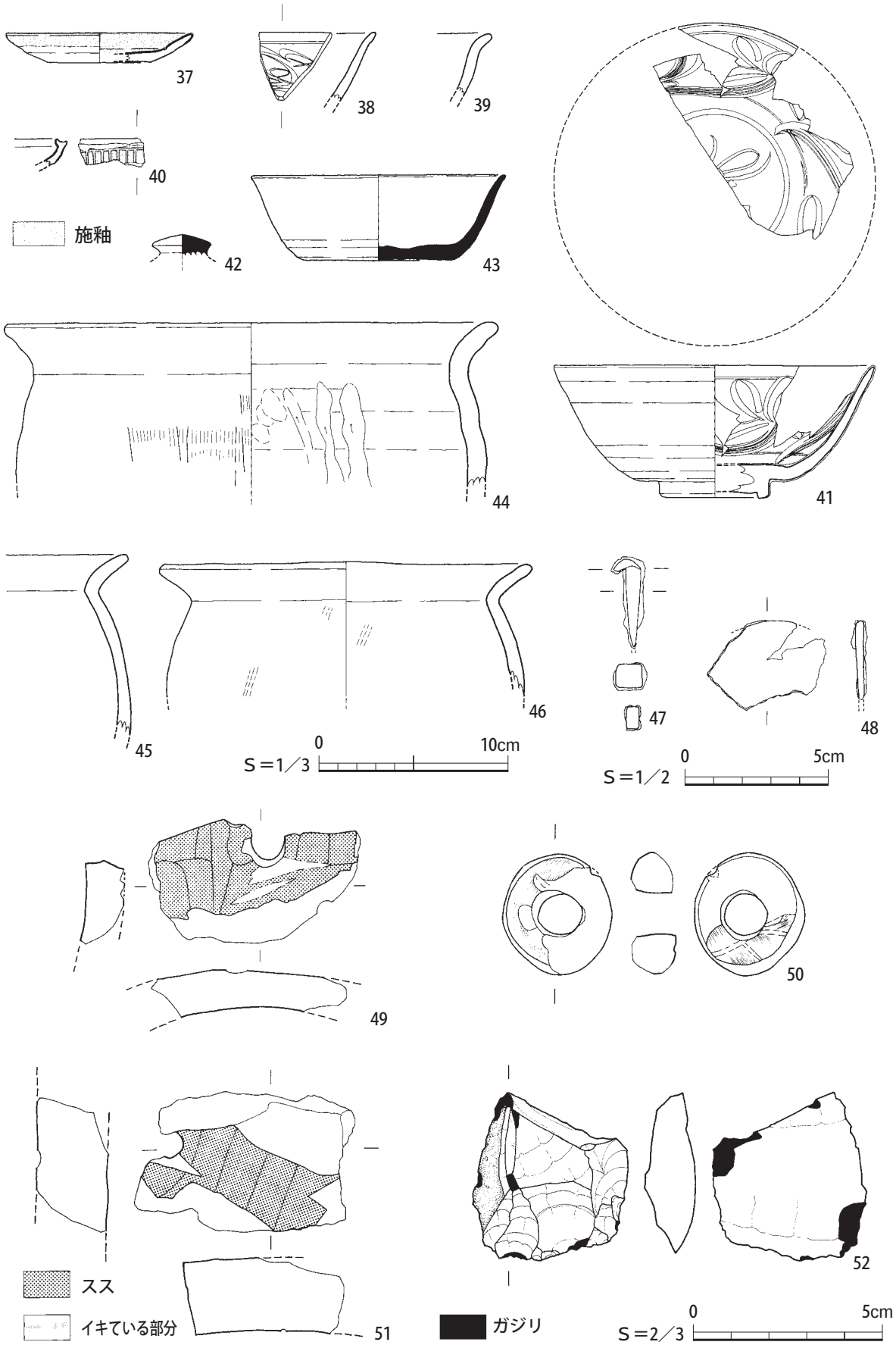
37は輸入磁器で同安窯系青磁皿Ⅰ類の口縁部から底部にかけての資料である。表土剥ぎの際に出土した。復元口径は9.8㎝、復元底径は5.4㎝、器高は1.55㎝。山本編年による時期区分でＤ期（12世紀中頃～後半）にあたると考えられる。

38は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅰ類の口縁部である。Ｃ－３グリッドからの出土である。残存高は3.6㎝。内外面共に釉がかかり、内面にはヘラの片彫りによる施文が確認される。山本編年による時期区分でＤ期（12世紀中頃～後半）にあたると考えられる。

39は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅳ類の口縁部である。一括資料である。口縁部がやや外反する。残存高は3.3㎝。山本編年による時期区分でＧ期（14世紀初頭～15世紀前半？）にあたると考えられる。



図(Fig)25　包含層出土遺物実測図 (1)　S＝1／3



図(Fig)26　包含層出土遺物実測図 ②　S＝1／3，2／3，1／2

40は輸入磁器で景徳鎮窯の磁器、合子の身の口縁部である。Ｃ－６グリッドからの出土である。口縁部がやや外反する。残存高は1.5㎝。外面に連子状の文様が見られる。時期は､13世紀初頭～前半にあたると考えられる。

41は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅰ類の口縁部から底部にかけての破片である。Ｂ－３，Ｃ－３・４・５グリッドから出土した10点の資料が接合している。復元口径は16.6㎝、復元底径は5.9㎝、器高6.95㎝、復元高台径5.4㎝、高台高0.8㎝である。内面にはヘラ描きの片彫りによる施文が見られる。山本編年による時期区分でＤ期（12世紀中頃～後半）にあたると考えられる。

42は古代の須恵器で坏蓋のつまみである。Ｃ－１グリッドの西壁からの出土である。残存高は1.05㎝。

43は古代の須恵器で坏の口縁部から底部にかけての破片である。Ｃ－４グリッドから出土した２点の資料が接合している。復元口径は13.4㎝、復元底径は7.8㎝、器高4.5㎝である。

44は古代の土師器で甕の口縁部から胴部上半部にかけての破片である。Ｃ・Ｄ－４グリッドから出土した５点の資料が接合している。復元口径は25.6㎝。内面はナデ後下から上へのケズリ、外面は刷毛目後部分的にナデ調整を行っている。

45は古墳時代の土師器で甕の口縁部から胴部上半部にかけての破片である。Ｃ－７グリッドから出土。残存高は10.8㎝。器面が荒れているが、外面は刷毛目の痕跡が僅かに確認される。内面はケズリと考えられる。５世紀後半から６世紀にかけての資料か？

46は弥生時代後期の土器で甕の口縁部から胴部上半部にかけての破片である。Ｃ－７・８グリッドから出土した４点の資料が接合している。復元口径は19.2㎝で残存高は7.1㎝。器面が荒れているが、内外面共に刷毛目の痕跡が僅かに確認される。

47は鉄製品で釘と考えられる。Ｃ－４グリッドから出土しており、長さ3.10㎝～、幅0.95ｍ、厚さ0.95㎝である。上部は先端部が屈曲した頭になっている。先端部が僅かに欠損しているがほぼ完形品である。

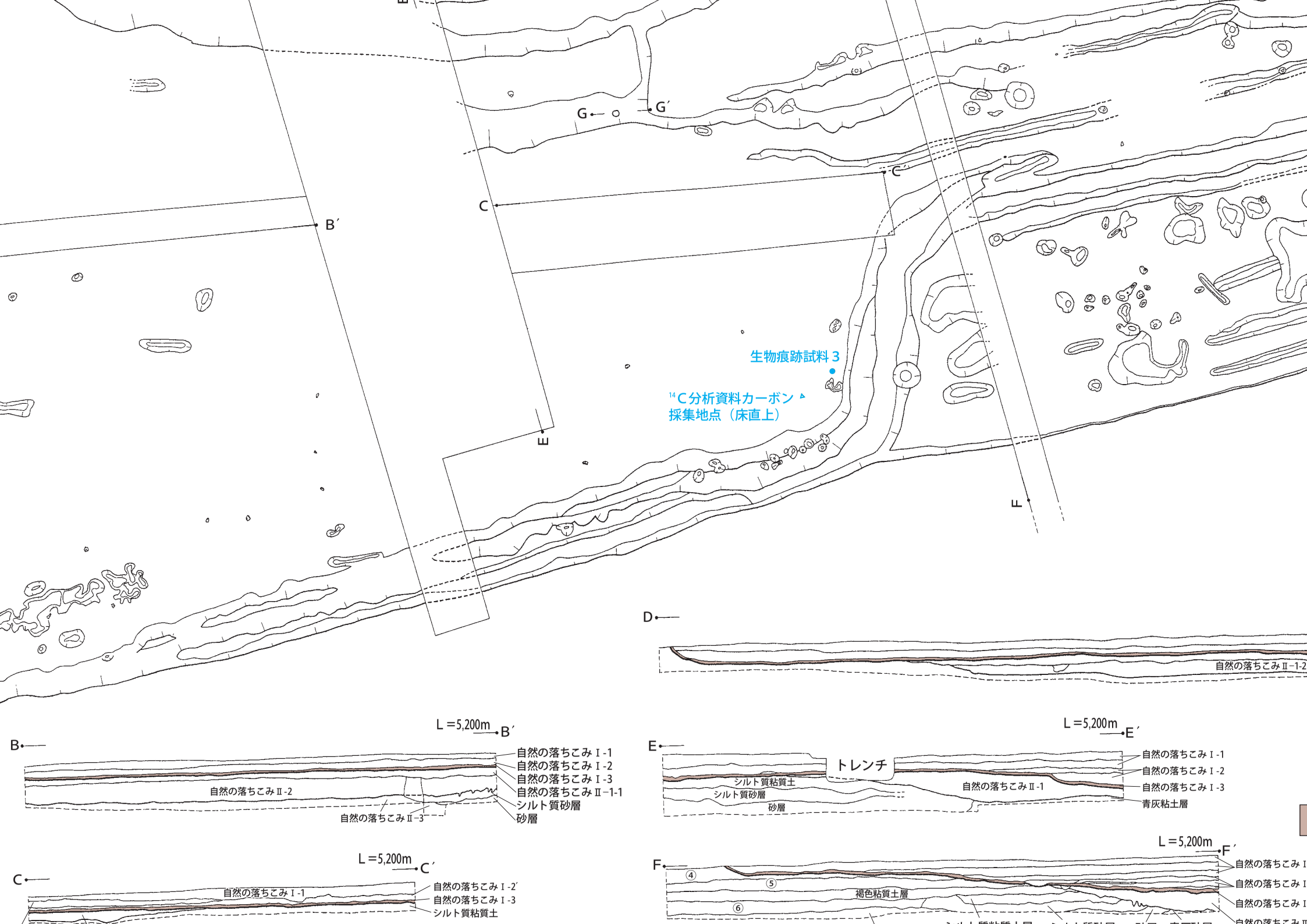
48は鉄製品で器種は不明である。東側のトレンチから出土しており、長さ3.20㎝～、幅4.20㎝～、厚さ0.30㎝である。生きの部分は僅かであるがやや丸みを帯びている。

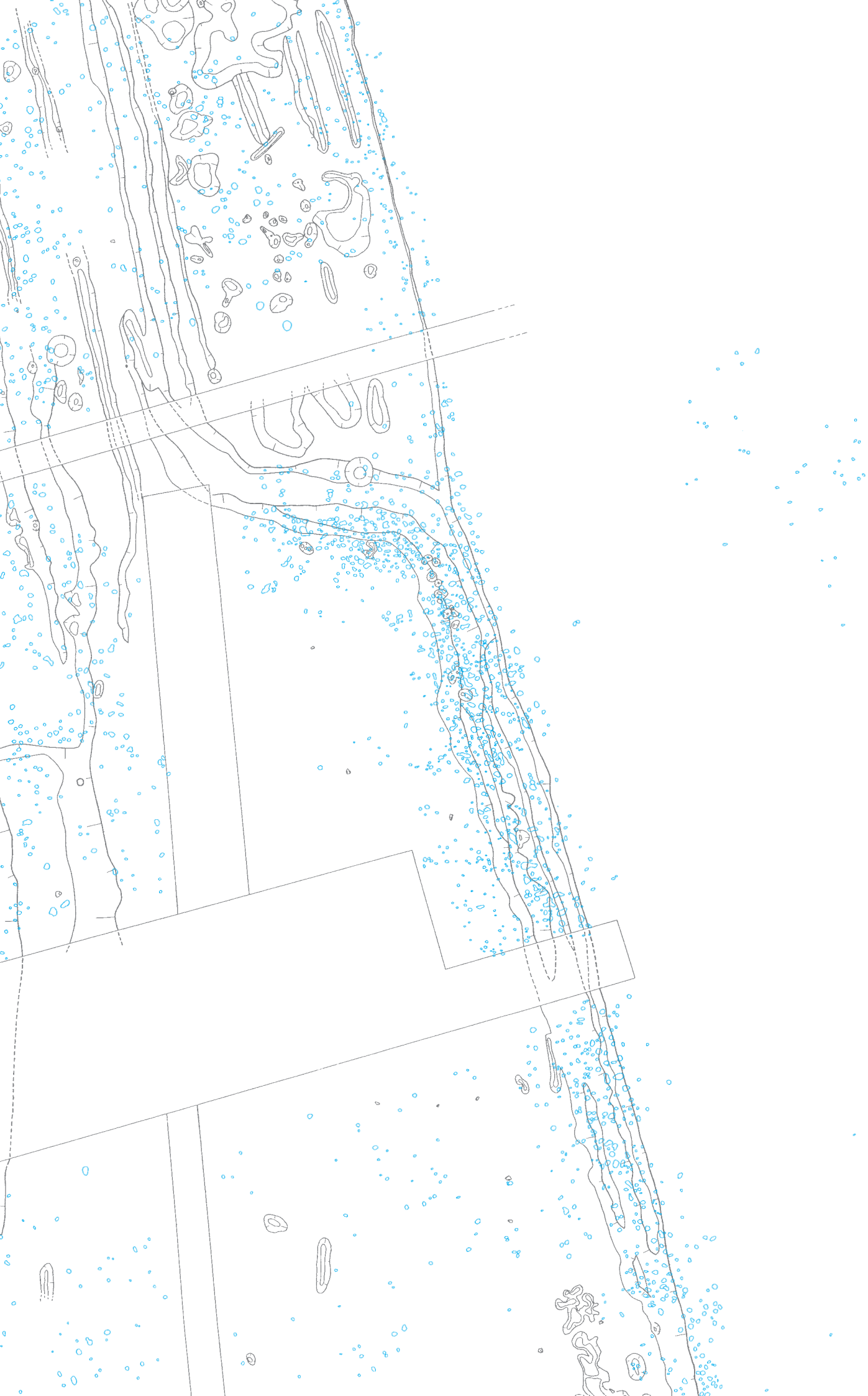
49は滑石で温石の破片と考えられる。厚さ1.00㎝。Ｃ－５・６，Ｄ－６周辺グリッドから出土。外面には石鍋作成時についたケズリ痕跡や使用時についたとみられるススも観察されることから石鍋の転用品であろう。

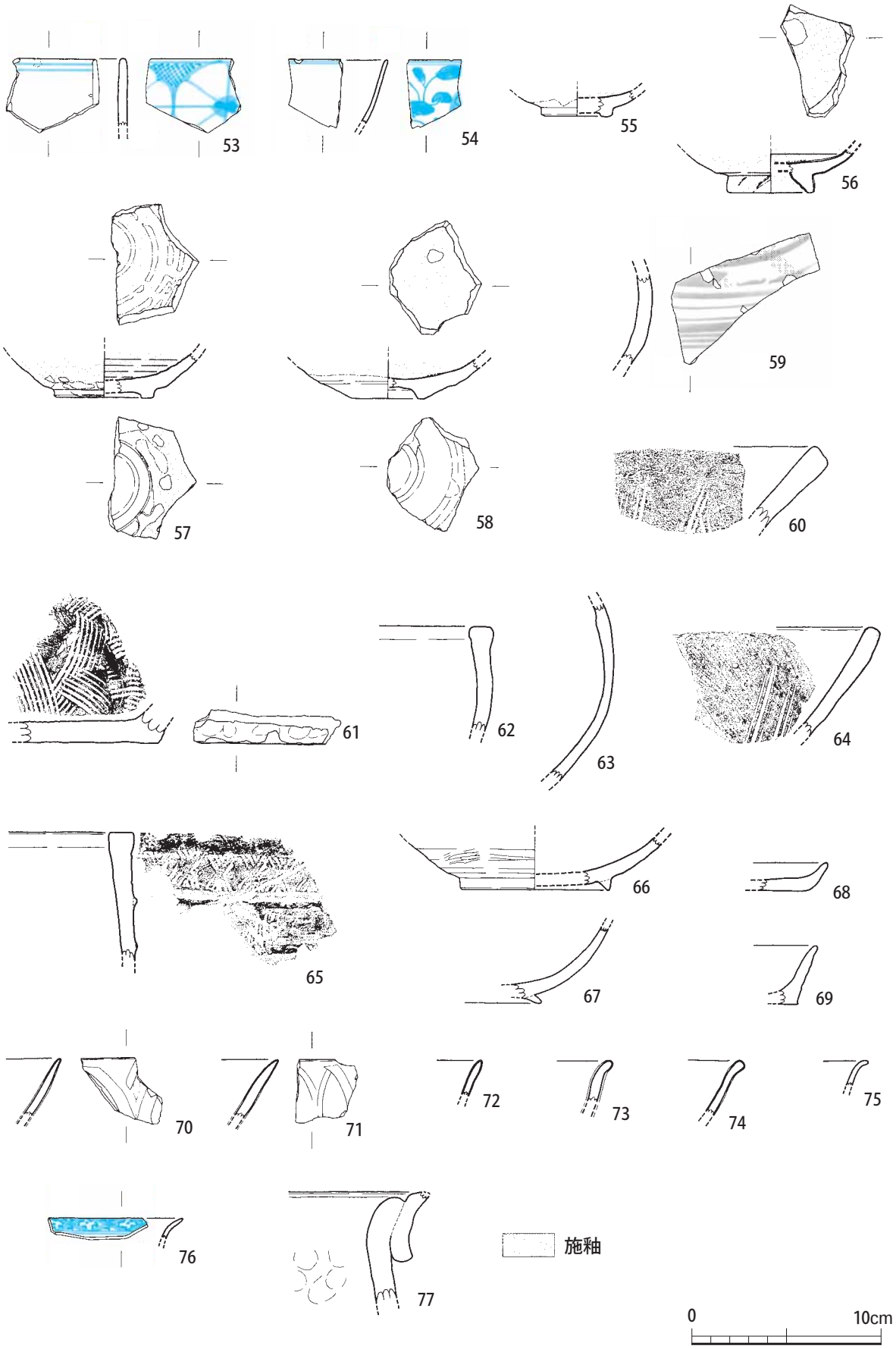
50は80と同様で滑石の製品である。リング状になっているが用途は不明である。Ｃ－２グリッドの北側ベルトから出土。長さ3.20㎝、幅2.95㎝、厚さ1.20㎝、重さ13.20ｇである。径0.11㎝の穿孔がみられる。

51は滑石で温石の破片と考えられる。厚さ1.90㎝。一括資料である。49と同様に外面には石鍋作成時についたケズリ痕跡や使用時についたとみられるススも観察されることから石鍋の転用品であろう。

52は安山岩剥片である。Ｃ－５・６グリッドから出土。一部礫面を残しているもののかなりローリングを受けている。背面には求心状に剥片を獲得した痕跡が残されている。最終剥離の際に折れたために打面や打点部を欠損している。ガジリも多い。長さ4.40㎝、幅4.10㎝、厚さ1.20㎝、重さ23.51ｇである。


B′
C
C′
G
G′
E
F
生物痕跡試料３
14C分析資料カーボン
採集地点（床直上）
D
自然の落ちこみⅡ-1-2
L＝5,200m
B
B′
自然の落ちこみⅠ-1
自然の落ちこみⅠ-2
自然の落ちこみⅠ-3
自然の落ちこみⅡ-1-1
シルト質砂層
砂層
自然の落ちこみⅡ-2
自然の落ちこみⅡ-3
L＝5,200m
E
E′
トレンチ
シルト質粘質土
シルト質砂層
砂層
自然の落ちこみⅡ-1
自然の落ちこみⅠ-1
自然の落ちこみⅠ-2
自然の落ちこみⅠ-3
青灰粘土層
L＝5,200m
C
C′
自然の落ちこみⅠ-1
自然の落ちこみⅠ-2′
自然の落ちこみⅠ-3
シルト質粘質土
L＝5,200m
F
F′
④
⑤
⑥
褐色粘質土層
自然の落ちこみⅠ





図(Fig)29　自然の落ちこみⅠ　上層及び一括出土遺物実測図 (1)　S＝1／3

第４節　自然の落ちこみ

調査から整理の段階まで水田跡ではないかと考えてきたが、最終的に木葉川側への自然の落ちこみと判断した。

平面、断面の観察により酸化鉄とマンガンの厚く硬い集積層が確認された。確認面から酸化鉄とマンガンの集積層までを自然の落ちこみⅠ、それ以下の青灰色粘質土を主体とする層を自然の落ちこみⅡと便宜上区別した。しかし自然の落ちこみⅡは深掘りトレンチの深さまでしか確認していない。

［確認位置］Ａ－２・３，Ｂ・Ｃ－２～６グリッド内に位置する。確認面の標高は約5.6ｍであり、基本土層①層である中世の酸化鉄やマンガンの集積層と考えられる暗褐色土を切り込む形で確認された。

［形状、大きさ、土層など］東西約50m、南北約12mにわたり確認され、Ｃ－４・５グリッド境でやや高まりＬ字状に段差がつく。また、Ｂ－５・６グリッドには２条の浅い溝が南北に確認され、Ｂ－３・４グリッドでは北側（旧木葉川側）にやや落ち込んでいる。西側に長く、北側は旧木葉川付近まで続くものと考えられる。自然の落ちこみⅠは４層に分層、深さは断面の確認面から酸化鉄とマンガンの集積層まで1.08mになる。自然の落ちこみⅡは深掘りトレンチの最深部まで10層に分層、標高は2.30mであった。また、自然の落ちこみの調査面積に占める割合は、標高約5.0mより上層のデータは断面でしかわからないが、約30％にあたる。

［推察される性格、時期など］先述した通り木葉川側への自然の落ちこみと考えられる。自然の落ちこみⅠには酸化鉄とマンガンの集積層が確認されることから木葉川の氾濫原であり、常時とまではいかなくとも水があったりなかったりする湿地帯に似た環境だったと推測される。上層では近世の遺物が多く、下層では中世の遺物が多い傾向にあることから中世～近世にかけてはそのような状況であったのであろう。

自然の落ちこみⅡは青灰色粘質土層が主体であることから常時水に浸されていた環境だったと推測される。上層には中世の遺物を希に含むが、下層は無遺物層である。

ただ、植物珪酸体分析の結果においてイネのプラントオパールがかなりの高密度で検出されていることから、部分的にあるいは一時期に水田が営まれていた可能性も否定できない。しかし畦畔は検出されていない。

Ｂ－４グリッドには杭が１本確認された。幅約13～14cm、長さ約142cmの大きさで、やや斜めに打ち込まれた状態（約71度）であった。確認面が自然の落ちこみⅠの①層上面であることからかなり新しい時代のものであることが予想される。

［生物痕跡］当初この生物痕跡はイネ株の痕跡かと考えられたが、アシ属やヨシ属などの植物、もしくはカニや魚などの動物が開けた穴の痕跡と考えた方が妥当と思われる。その大きな理由として生物痕跡は自然の落ちこみの縁やＳ006に集中して確認されることが挙げられる。

［出土遺物【自然の落ちこみⅠ】］ビニール袋（11号）約２袋分の土器が出土しているがほとんどローリングを受けている。約50％が土師器の小皿、約20％が瓦器や瓦質土器であり、残りが近世の陶磁器や中世の青・白磁や須恵器であった。また、上層では近世の遺物が多く、下層では中世の遺物が多い傾向にあった。

ここでは58点の遺物（上層及び出土層不明の一括遺物：36点、下層：22点）を紹介する。

（上層及び出土層不明の一括遺物）

53は近世以降の磁器の染め付けで湯飲み椀の口縁部で、肥前産である。Ｃ－５グリッドから出土した。内面には口縁部近くに２本の線が、外面には花柄の文様が描かれている。野上建紀氏編年ではⅤ期にあたり1780～1810年代のものであると考えられる。

54は近世以降の磁器の染め付けで椀の口縁部で、肥前産である。Ｃ－５グリッドから出土した。内面には口縁部近くに２本の線が、外面には葉と枝が描かれている。

55は近世以降の陶器で椀の底部と考えられる。Ｃ－４グリッドから出土した。釉は白色で高台周辺にはかかっていない。

56は近世以降の陶器で椀の高台部から体部下半部である。Ｂ－３グリッドから出土した。復元底径は

4.2㎝、高台径は4.75㎝、高台高は0.9㎝、残存高は2.3㎝。内外面共にほとんど釉がかかっている。見込み部に目跡が残る。

57は近世以降の陶器で椀の底部から体部下半部である。Ｃ－３グリッドから出土した。内外面共にほとんど釉がかかっている。

58は近世以降の陶器で椀の底部から体部下半部と考えられる。Ｂ－３グリッドから出土した。高台部周辺を除いて灰色の釉がかかっている。高台は底部側のみを削り出している。

59は近世以降の陶器で水注の体部である。Ｃ－４グリッドの上層からの出土である。内面は無釉であるが、外面には緑と白の釉がかかっている。

60は中世の瓦質土器で擂鉢の口縁部である。Ｂ－３グリッドの南北トレンチ上層からの出土である。焼きがあまり良くなく、スリ目の単位は不明。

61は中世の瓦質土器で擂鉢の底部である。Ｂ－３グリッドの上層からの出土である。内面はナデ後７本単位のスリ目が、外面にはナデと指頭圧痕が観察される。

62は中世の瓦質土器で鉢の口縁部である。Ｂ－３グリッドからの出土である。焼きがあまり良くなく、内外面とも器面ナデ、内面にわずかな刷毛目の痕跡が窺える。

63は中世の須恵器で壺の体部である。Ｂ－４グリッド北トレンチからの出土である。内外面ともにナデ調整である。

64は中世の須恵器で擂鉢の口縁部である。Ｂ－２グリッドのトレンチ壁からの出土である。焼きは非常に良いが、スリ目の単位は不明。

65は中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。Ａ・Ｂ－２グリッドの上層からの出土で２点が接合している。焼きがあまり良くないが、内面はナデが、外面には突帯があり、突帯と口縁部との間には三角状スタンプが、突帯の下部には連子状スタンプが観察される。

66は中世の瓦器で椀の底部である。Ｂ－５・６グリッド壁からの出土である。復元底径7.8㎝、残存高2.8㎝である。内面はナデ、外面にはヘラ削り後ミガキ痕が観察される。

67は中世の瓦器で椀の底部である。東西トレンチからの出土である。内面はミガキ痕、外面にはヘラ削り後ミガキ痕が観察される。

68は中世の土師器で小皿である。Ｂ－５グリッドの下層からの出土である。口縁部から底部にかけての資料であるが口径や底径の復元は不可能である。器高は1.5㎝。底部は糸切り離しである。

69は中世の土師器で坏である。Ｂ－３グリッド東西トレンチからの出土である。口縁部から底部にかけての資料であるが口径や底径の復元は不可能である。器高は3.1㎝。外面にはススが付着している。

70は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅱ類（旧Ⅰ-５）の口縁部である。Ｂ－５グリッドからの出土である。残存高は3.05㎝。内外面共に釉がかかり、外面には鎬入りの連弁文が確認される。山本編年による時期区分でＥ期（13世紀初頭～前半）にあたると考えられる。

71は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅱ類（旧Ⅰ-５）の口縁部である。Ｃ－２グリッドからの出土である。残存高は3.15㎝。内外面共に釉がかかり、外面には連弁文が確認される。山本編年による時期区分でＥ期（13世紀初頭～前半）にあたると考えられる。

72は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅱ類（旧Ⅰ-５）の口縁部である。Ｃ－５グリッドからの出土である。残存高は1.8㎝。内外面共に釉がかかっているが、文様は確認できない。山本編年による時期区分でＥ期（13世紀初頭～前半）にあたると考えられる。

73は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅳ類の口縁部である。Ｂ－２グリッド上層からの出土である。残存高は2.2㎝。口縁部の先端部がやや外反する。内外面共に釉がかかっているが、文様は確認できない。山本編年による時期区分でＧ期（14世紀初頭～15世紀前半？）にあたると考えられる。

74は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅰ類の口縁部である。Ｂ－３グリッド上層からの出土である。残存高は2.9㎝。口縁部の先端部がやや外反する。釉はやや白味を帯びくすんでいる。また、内外面共に釉がかかっているが、文様は確認できない。山本編年による時期区分でＤ期（12世紀中頃～後半）にあたると考えられる。

75は輸入磁器で景徳鎮窯系の染め付けの椀か皿の口縁部である。Ｂ－３グリッドからの出土である。残存高は1.3㎝。口縁部の先端部がやや外反する。内外面共に釉がかかっているが、染め付け部は確認できない。山本編年による時期区分でＧ期（14世紀初頭～15世紀前半？）にあたると考えられる。

76は輸入磁器で景徳鎮窯系の染め付けの椀か皿の口縁部である。Ｃ－２グリッドからの出土である。残存高は1.1㎝。口縁部の先端部がやや外反する。内外面共に釉がかかっており、外面には染め付け文様が確認される。16世紀の染め付けと考えられる。

77は中世の陶器で常滑窯の甕である。Ｂ－４グリッドからの出土である。残存高は5.9㎝。内外面は回転ナデを行う。内面には指頭圧痕が残る。口縁部は外反させ、Ｎ字状に整形。口縁体の幅は3.2㎝中野晴久氏の編年図では８型式にあたり14世紀後半に相互すると考えられる。

78は古代の土師器で甕の口縁部である。Ｂ－４グリッドからの出土である。残存高4.4㎝。内面は削りの後ナデ、外面には横ナデ後刷毛目調整が観察される。

79は古代の須恵器で甕の口縁部付近の胴部である。Ｂ－３グリッドから出土しており、４点が接合している。残存高4.8㎝。内面は同心円状の当て具痕跡、外面には格子目タタキ後ナデが観察される。

80は滑石の製品であるが用途は不明である。長さ2.45㎝、幅2.20㎝、厚さ1.85㎝、重さ14.28ｇである。Ｂ－４グリッドから出土。径９㎜穿孔がみられる。

81は粘板岩製と考えられる磨製石器の一部である。長さ1.70㎝～、幅2.10㎝～、厚さ0.10～0.20㎝、重さ0.79ｇである。Ｂ－４グリッドから出土。器種は不明。厚さが均一ではない。

82は流紋岩（天草砥石？）製の砥石の一部である。長さ5.30㎝～、幅3.70㎝～、厚さ3.50㎝～、重さ60.51ｇ～である。Ｂ－４グリッドから出土。１面のみに僅かに磨り面を残している。

83は砂岩製と考えられる石製鍋の底部と考えられる。長さ3.60㎝～、幅8.20㎝～、厚さ5.30㎝～、重さ117.93ｇである。Ｃ－５グリッドから出土。一部にススが付着している。

84は鉄製品で鎌と考えられる。Ｃ－４グリッドから出土しており、長さ3.10㎝、幅6.60㎝～、厚さ0.20㎝である。先端部と基部が一部欠損している。

85は鉄製品で釘と考えられる。Ｃ－３グリッドから出土しており、長さ2.70㎝～、幅0.90㎝、厚さ0.70㎝である。上部と下部が欠損している。

86は鉄製品で釘と考えられる。Ｂ－３グリッドから出土しており、長さ5.50㎝～、幅1.30㎝、厚さ1.00㎝である。Ｘ線撮影で確認したところ、上部は先端部が屈曲した頭になっている。下部は欠損している。

87は鉄製品であるが器種は不明である。Ｂ－４グリッドからの出土資料である。長さ2.05㎝～、幅2.00㎝～、厚さ0.45㎝である。一部生きの部分が丸くなっているがその他は欠損している。

88は銅銭で近世期に日本で鋳造された寛永通宝である。一括資料である。出土当時は寛永通宝と読めたがその後一部が欠損し不明になった。初鋳は西暦1626年であるがその種類は数百種にも及ぶ。

（下層）

89は中世の須恵器で東播系鉢の口縁部である。Ｂ－４グリッドからの出土である。口縁端部が上下に拡張され肥厚する。

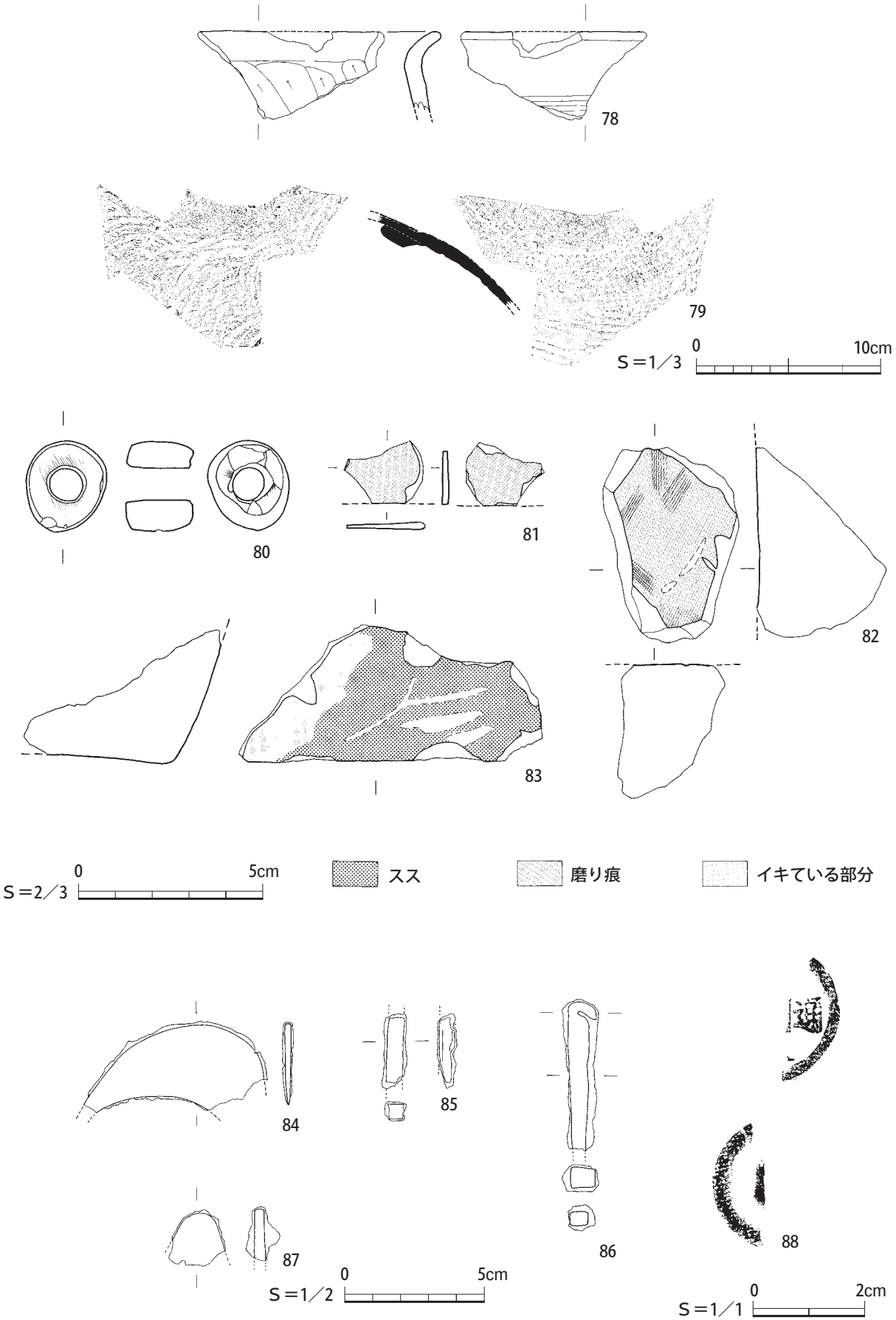
90は中世の須恵器で擂鉢の口縁部である。Ｂ－５グリッドからの出土である。焼きは非常に良いが、スリ目の単位は不明。

91は中世の瓦質土器で擂鉢の底部である。Ｂ－５グリッドからの出土である。内面には６本単位のスリ目、外面には指頭圧痕が残る。

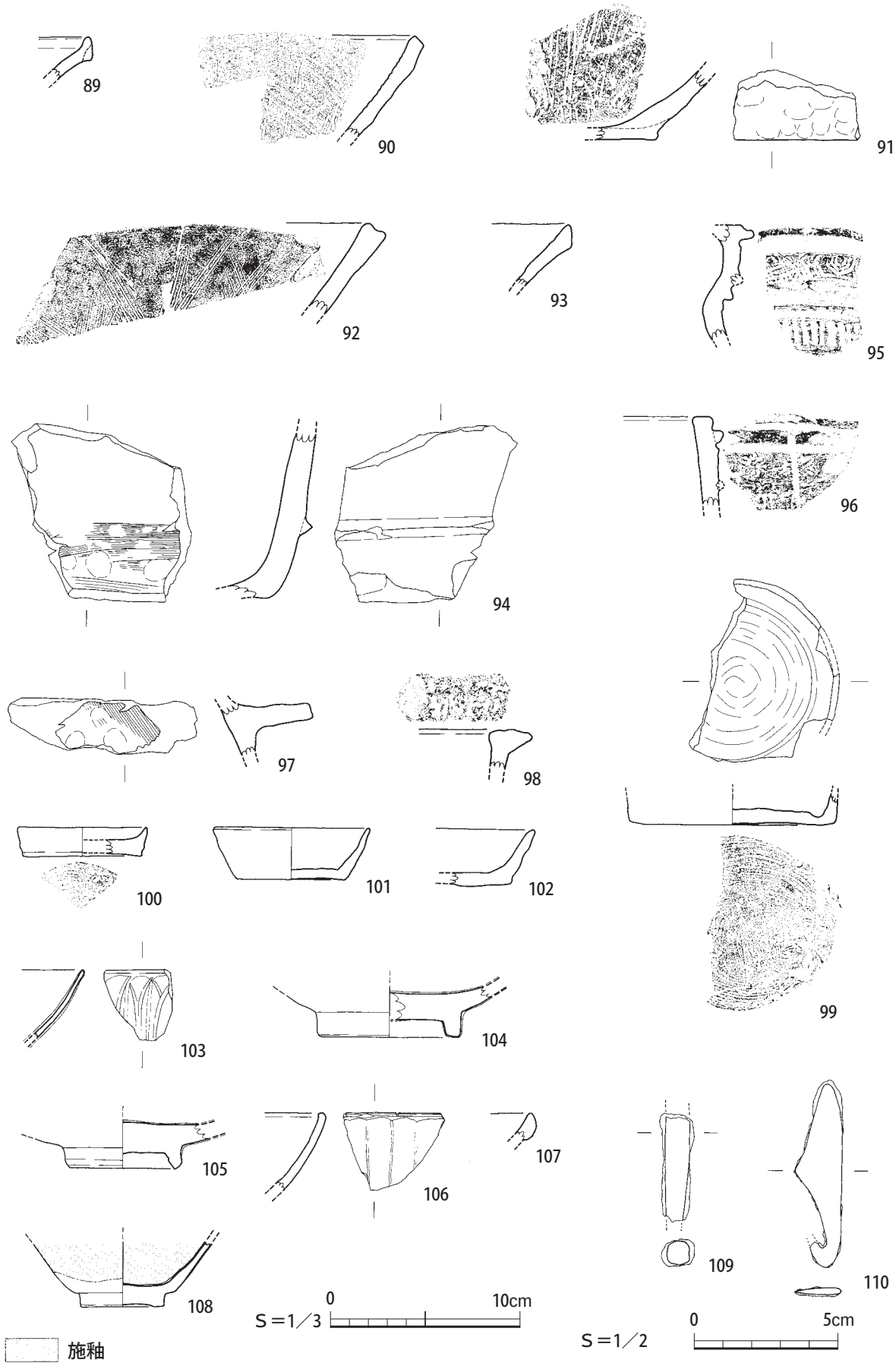
92は中世の瓦質土器で擂鉢の口縁部である。Ｃ－２グリッドからの出土で２点が接合している。内面には６本単位のスリ目が確認される。口唇部には指ナデによると見られる緩やかな段ががつく。

93は中世の瓦質土器で鉢の口縁部である。Ｂ－４グリッドからの出土である。口縁部が玉縁状に肥厚する。

94は中世の瓦質土器で火鉢の体部下半部で底部付近の資料であり、脚部が欠損した状態であると考えられる。Ｃ－３・４グリッドから出土した２点の遺物が接合している。内面には刷毛目後ナデ調整で指



図(Fig)30　自然の落ち込みⅠ　上層及び一括出土遺物実測図 ⑵　S＝1／3，2／3，1／2，1／1



図(Fig)31　自然の落ち込みⅠ　下層出土遺物実測図 ⑶　S＝1／3，1／2

頭圧痕が残り、外面には三角状の突帯が見られる。

95は中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。Ｃ－２グリッドからの出土である。口縁部には内外面に鍔状の突帯が見られるが内面側は欠損している。外面は２条の突帯を持ち、その上部に六角柱状や三角状のスタンプが、下部に連子状のスタンプが見られる。

96は中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。Ｃ－３グリッドからの出土である。外面は口縁部のすぐ下に１条の突帯を持ち、さらに2.5㎝下に突帯を持っているが下の突帯は欠損している。欠損した突帯の上部に方形の放射状のスタンプが、下部に連子状のスタンプが見られる。

97は中世の瓦質土器で釜の鍔部であると考えられる。Ｃ－４グリッドからの出土である。鍔部は長さ3.0㎝突出しており、厚さは0.8～1.0㎝である。

98は中世の土師器で土鍋の口縁部である。Ｂ－４グリッドからの出土である。内外面は器面が荒れており、非常に脆弱である。口縁部には２条の縄目の圧痕と考えられる文様が観察される。美濃口編年の第９期（13世紀前半～中葉）と考えられる。

99は中世の土師器で坏の底部から体部下半部の資料である。復元底径は10.7㎝、残存高は1.6㎝。Ｂ－２グリッドからの出土である。見込み部はナデ調整、底部は糸切り離し。

100は中世の土師器で小皿の口縁部～底部の破片である。復元口径は6.8㎝、復元底径は6.2㎝。Ｂ－２グリッドからの出土である。底部は糸切り離し。

101は中世の土師器で坏の口縁部から底部の資料である。復元口径は8.0㎝、復元底径は5.6㎝、器高は2.7㎝。３点が接合しており、全てＣ－４グリッドからの出土である。底部は糸切り離し後ナデ調整と考えられる。

102は中世の土師器で坏の口縁部から底部の資料である。器高は3.05㎝。底部は糸切り離し後ナデ調整と考えられる。Ｂ－２グリッドからの出土である。

103は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅲ類の口縁部である。Ｂ－２グリッドからの出土である。残存高は3.7㎝。内外面共に釉がかかり、外面には鎬入りの連弁文が確認される。山本編年による時期区分でＦ期（13世紀中頃～14世紀初頭）にあたると考えられる。

104は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅳ類の底部である。Ｂ－５グリッドからの出土である。復元底径は7.2㎝、復元高台径は7.6㎝、高台高は1.3㎝、残存高は2.8㎝。山本編年による時期区分でＧ期（14世紀代）にあたると考えられる。

105は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅳ類の底部である。Ｂ－２グリッドからの出土である。底径は5.6㎝、高台径は6.2㎝、高台高は1.1㎝、残存高は2.5㎝。山本編年による時期区分でＧ期（14世紀代）にあたると考えられる。

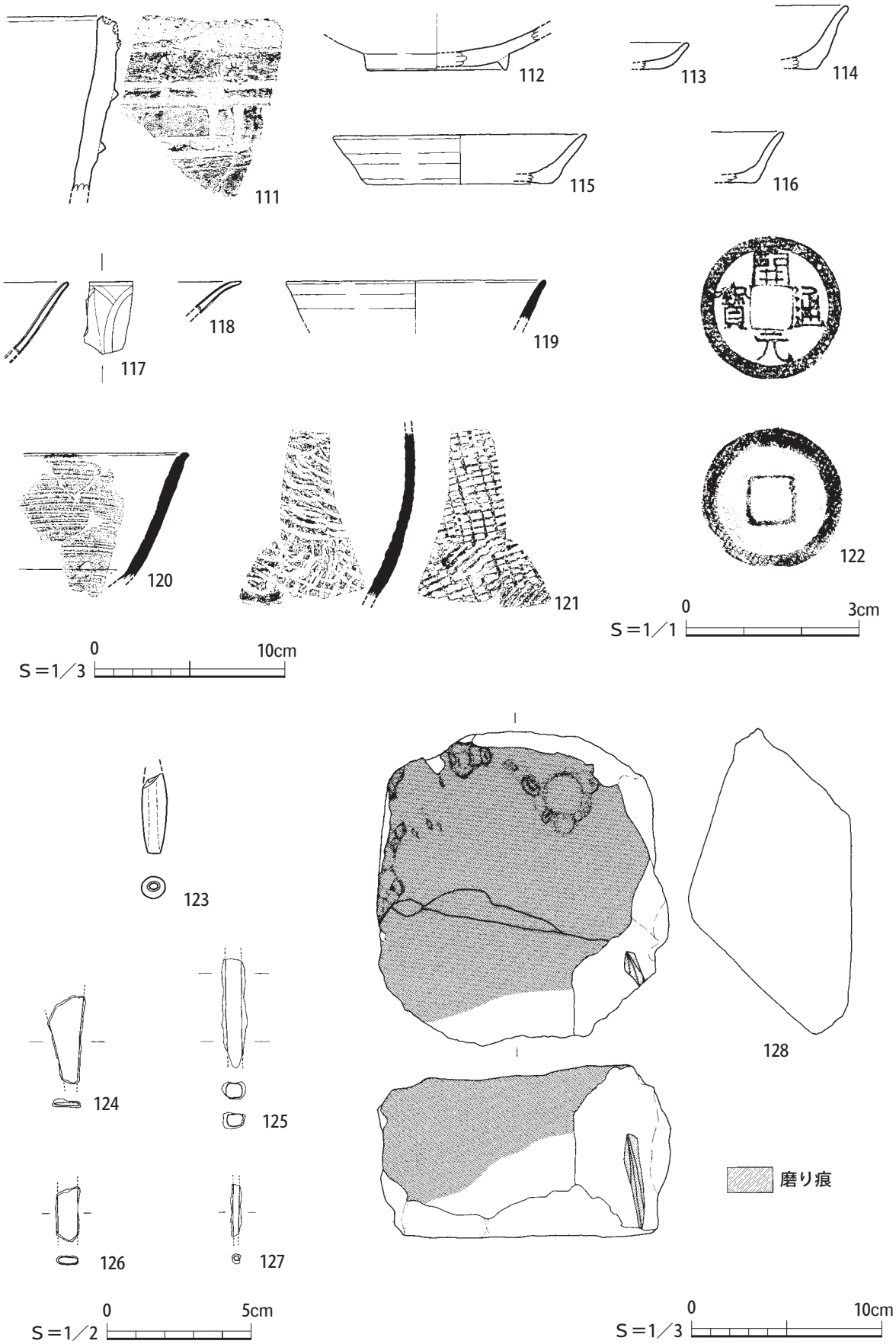
106は輸入磁器で青磁の椀の口縁部である。Ｃ－４グリッドから出土した３点の破片が接合している。内外面共に乳白色の釉がかかっているが、口唇部だけは深緑色の釉である。青磁蓮弁文碗Ｃ群で15世紀後葉～16世紀前葉にあたると考えられる。

107は輸入磁器で白磁椀の口縁部である。Ｂ－３グリッドからの出土である。玉縁口縁の口縁部のみしか残存していない。残存高は1.4㎝。山本編年による時期区分でＣ期（11世紀後半～12世紀前半）にあたると考えられる。

108は中世の陶器で天目椀の底部から体部下半部にかけての資料である。Ｂ・Ｄ－３グリッドから出土した３点の破片が接合している。内外面共に黒と茶色の釉がかかっているが、高台部周辺は無釉である。中国からの輸入品と考えられるが産地は不明である。

109は鉄製品で釘と考えられる。Ｂ－３グリッドから出土しており、長さ4.85㎝～、幅1.20㎝、厚さ0.95㎝である。上部と下部が欠損している。

110は鉄製品で刀子と考えられる。一括資料である。長さ6.40㎝、幅1.6５㎝、厚さ0.20㎝である。先端部が欠損している。



図(Fig)32　自然の落ちこみⅡ　出土遺物実測図　S＝1／3，1／2，1／1

［出土遺物【自然の落ちこみⅡ】］

自然の落ちこみⅡからの出土遺物は１層～３層である。４層以下からの遺物の出土は認められなかった。この包含層からは青の網コンテナ約1/2箱の遺物が出土した。その中から18点の遺物を紹介する。

111は中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。Ｂ－４グリッドからの出土である。外面には３条の突帯を持っているが、部分的に欠損している。突帯の間に菊花文のスタンプと連子状のスタンプが見られる。

112は中世の瓦器の椀で底部の破片である。Ｂ－４グリッドからの出土である。復元底径は7.4㎝、高台径7.6㎝、高台高0.8㎝。

113は中世の瓦質土器で小皿の口縁部から底部にかけての破片である。Ｂ－２グリッドの自然の落ちこみⅡ－１層からの出土である。器高は1.4㎝。底部には僅かな糸切り離し痕跡が見られ、内面にはススが付着している。

114は中世の土師器の坏で口縁部から底部にかけての破片である。Ｂ－５グリッドの自然の落ちこみⅡ－１層からの出土である。器高は3.3㎝。底部には僅かな糸切り離し痕跡が見られる。

115は中世の土師器の坏である。口縁部から底部にかけての破片である。Ｂ－５グリッドの自然の落ちこみⅡ－１層からの出土である。復元口径は13.2㎝、復元底径は9.8㎝、器高は2.6㎝。美濃口編年では９期（13世紀前半～中葉）で捉えられよう。

116は中世の土師器の坏。口縁部から底部にかけての破片である。Ｂ－４グリッドの自然の落ちこみⅡ－１層からの出土である。器高は2.7㎝。

117は輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅱ類（旧Ⅰ－５）の口縁部である。Ｂ－２グリッドからの出土である。残存高は3.8㎝。内外面共に釉がかかり、外面には鎬入りの連弁文様が確認される。山本編年による時期区分でＥ期（13世紀初頭～前半）にあたると考えられる。

118は輸入磁器で白磁の皿Ⅳ類の口縁部である。Ｂ－４グリッドからの出土である。残存高は1.7㎝。内外面の口縁部の先端部に３～５㎜ほど無釉で口ハゲである。山本編年による時期区分でＦ期（13世紀中頃～14世紀初頭）にあたると考えられる。

119は古代の須恵器で坏の口縁部の破片である。Ａ・Ｂ－２，Ｃ－４・６グリッドから出土した３点の資料が接合している。自然の落ちこみⅡ－２層からの出土である。復元口径は13.6㎝。

120は古代の須恵器で坏の口縁部から胴部にかけての破片である。Ｂ－４・６，Ｃ－６グリッドから出土した４点の資料が接合している。自然の落ちこみⅡ－１層からの出土である。残存高は5.8㎝。

121は古代の須恵器で甕の胴部の破片である。Ｂ－２，Ｃ－３グリッドから出土した２点の資料が接合している。自然の落ちこみⅡ－１層からの出土である。内面は同心円の当て具痕跡、外面は格子目の叩き痕跡が残る。残存高は8.7㎝。79と同一個体の可能性が高い。

122は銅銭で初鋳が西暦621年に唐で鋳造されたとされる開元通宝である。Ｂ－３グリッドの自然の落ちこみⅡ－１層から出土している。しかし、元素分析を行っていないので本銭か模鋳銭かは不明である。書体は篆書である。

123は土錘の破片である。自然の落ちこみⅡ－１層からの出土である。長さは2.75㎝～、幅は0.8㎝、厚さは0.8㎝。穴の直径は３～４㎜。

124は鉄製品である。器種は不明だが、刀子の可能性もある。Ｂ－４グリッドの自然の落ちこみⅡ層から出土しており、長さ3.10㎝～、幅1.30㎝、厚さ0.30㎝である。

125は鉄製品で釘と考えられる。自然の落ちこみⅡ層から出土しており、長さ3.80㎝～、幅0.90㎝、厚さ0.60㎝である。

126は鉄製品であるが器種は不明である。自然の落ちこみⅡ層から出土しており、長さ0.90㎝～、幅1.90㎝～、厚さ0.30㎝である。

127は鉄製品である。非常に細く、器種は不明である。下層から出土しており、長さ1.90㎝～、幅0.40㎝、厚さ0.35㎝である。

128は砂岩製の砥石である。磨り痕跡がある箇所は上面部と側面部の一部である。特に側面部は細長い磨り痕跡が顕著である。Ｂ－５グリッドの自然の落ちこみⅡ－３層から出土しており、長さ16.60㎝、幅15.30㎝、厚さ8.50㎝、重さが2,800ｇである。

植物珪酸体分析

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

玉名市津留に所在する群前遺跡は菊池川の支流小葉川の左岸、標高約５ｍの沖積地に立地している。この群前遺跡において行われた発掘調査で、中世～近世の自然に形成されたと考えられている落ちこみが検出されている。この落ちこみから採取された土壌試料について稲作を検証する目的で植物珪酸体分析を行った。合わせてさらにその下位層についても稲作を検討する目的で植物珪酸体分析を行った。

この植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）のうち機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネの機動細胞珪酸体個数から稲作の有無についての検討も行われており（藤原1984）、こうしたことから群前遺跡においても植物珪酸体分析から検出遺構等における稲作の有無について検討した。

１．試料

分析用試料は地点１（Ｂ－２グリッド），地点２（Ａ－２グリッド），地点３（Ｃ－８グリッド）より採取された24試料、および生物根痕跡土壌３試料の計27試料である。

地点１（９試料）：試料番号１－１は自然の落ちこみＩの０上層、１－２は同０下層、１－３は同１上層、１－４は同１下層、１－５は同２層、１－６は自然の落ちこみⅡ１－１層、１－７は同１－２層、１－８は同２－１層（青灰①層）、１－９は同２－２層（青灰②層）で、出土遺物から中世～近世と考えられている。

地点２（６試料）：試料番号２－１は自然の落ちこみⅡ３層、２－２は同４層、２－３は同５層、２－４は同６層、２－５は同７層、２－６は同８層である。層準は地点１の下位にあたることから少なくとも中世かそれ以前と考えられる。

地点３（９試料）：試料番号３－１は⓪下層、床土を挟んで下位の３－２は⓪′上層、床土を挟んで下位の３－３は⓪′下層、床土を挟んで３－４は②層、床土を挟んで３－５は灰黄褐色粘質土の上層、床土を挟んで３－６は灰黄褐色粘質土の下層、３－７は⑤層、３－８は$\boxed{6}$層、３－９は暗灰黄粘質土層で、さらに下位は砂層となっている。

生物根痕跡試料（３試料）：試料１はＢ－６グリッドの自然の落ちこみＩ３層上、試料２はＣ－２グリッドの自然の落ちこみＩ３層上、試料３はＢ－４グリッドの自然の落ちこみＩ３層上である。

これら27試料はおおむね粘土～シルトで、一部砂質あるいはやや砂質となっている。

２．分析方法

植物珪酸体分析は上記した27試料について下記の方法にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μｍ）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μｍ以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

３．分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表１）、それらの分布を図１（地点１），図２（地点２），図３（地点３），図４（生物根痕跡試料）に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

地点１：全試料からイネの機動細胞珪酸体が検出されており、少ない１－８で約8,000個、最も多い１－３で23,000個を示している。またイネの穎（籾殻）に形成される珪酸体の破片も多くの試料で観察されている。イネ以外について、多く得られたのは15,000個前後を示すウシクサ族で、次いでネザサ節型、ヨシ属となっている。またキビ族も全試料から得られている。

地点２：やはり全試料からイネの機動細胞珪酸体が検出されており、最も少ない２－４でも約37,000個と非常に多く得られている。また穎部破片が最上部と最下部で若干観察されている。イネ以外ではやはりウシクサ族が最も多く得られている。次いでキビ族が多く、個数としては大半が10,000個以上と機動細胞珪酸体の形成量が少ないキビ族としては非常に高い数値を示している。

地点３：最下部を除く上位８試料からほぼ10,000個以上のイネの機動細胞珪酸体が検出され、上位４試料では40,000個以上を示している。また上位５試料において穎部珪酸体の破片が連続して得られている。この上位試料においてネザサ節型が急増しており、キビ族やウシクサ族も同様の傾向を示している。反対にクマザサ属型やヨシ属は上位試料においてやや数値を下げている。

生物根痕跡試料：やはり大量のイネの機動細胞珪酸体が検出されており、試料２では約77,000個に達している。また穎部破片も全試料で観察されている。イネ以外ではウシクサ族が最も多く、イネが多産している試料２において分析試料中最も高い数値を示しており、この試料２ではキビ族も多産している。さらにネザサ節型も他の２試料に比べ試料２では突出した検出個数を示している。

４．稲作について

上記したように、地点３の最下部試料を除き大量のイネの機動細胞珪酸体が検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。群前試料においてはイネの機動細胞珪酸体が検出された各層で全てこの5,000個を越える個数が得られており、検出個数だけからみると稲作が行われていた可能性は高いと判断される。すなわち地点１の自然の落ちこみＩと考えられている遺構についてはそれを支持する結果が得られたと判断され、その下位層準においても稲作が行われていた可能性が高いことを示している。またさらに下位層にあたる地点２試料においてはさらに高い検出個数が示されており、時代については不明であるが地点２の最下部青灰⑧層堆積期には稲作が行われていた可能性は高いと判断されよう。地点３については中世以前を中心とした頃と考えられている試料３－７において15,000個のイネの機動細胞珪酸体が検出されており、この頃には稲作が行われており、中世になって発展期をむかえたと推測される。

５．遺跡周辺のイネ科植物

地点３のヨシ属をみると、上位試料に比べ下位試料に多い傾向が認められる。これは稲作の発展期をむかえた中世にヨシ属の生育地は急速に狭められた、すなわちヨシやツルヨシなどのヨシ属が生育していた湿地を切り開き稲作地が拡大したものと推測される。このイネの増加にともなってキビ族も多産しており、稲作の発展に呼応して水田雑草と考えられるキビ族（タイヌビエなど）も多く生育するようになったのであろう。

この稲作の発展から古代人の活発な活動が予想され、それにともなって稲作地周辺では日の当たる開けた空き地も増加したと考えられ、そうしたところにススキ，チガヤといったウシクサ族やゴキダケ，ケネザサ（ミヤコネザサ）などのネザサ節型のササ類が生育し、九州の草原にみられるススキーネザサ草原（伊藤秀三1977）的な景観をみせていたのであろう。

なお生物根痕跡部分についても植物珪酸体分析を行い、やはり大量のイネの機動細胞珪酸体が検出されている。しかしながら根の母植物について検討できるような産状、すなわち連なった状態の機動細胞珪酸体などは観察できず、現時点ではこの母植物については言及できなかった。

引用文献

伊藤秀三（1977）ネザサ草原－九州の草原，日本の植生宮脇昭編，学習研究社，pp.296.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究⑴－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－考古学と自然科学，９，ｐ.15－29.

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－，考古学ジャーナル，227，ｐ.２－７.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究⑵－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－，考古学と自然科学，11，ｐ.９－20.

表１　試料１ｇ当たりの機動細胞珪酸体個数

	試料番号	イネ（個/ｇ）	イネ穎破片（個/ｇ）	ネザサ節型（個/ｇ）	クマザサ属型（個/ｇ）	他のタケ亜科（個/ｇ）	ヨシ属（個/ｇ）	シバ属（個/ｇ）	キビ族（個／ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	ジュズダマ属（個/ｇ）	不明（個/ｇ）
自然の落ちこみ（Ⅰ）0	１－１	17,700	0	19,000	7,600	1,300	2,500	0	1,300	7,600	0	2,500
0	－２	10,600	3,500	9,500	1,200	1,200	1,200	0	1,200	16,600	0	8,300
1	－３	23,000	1,200	10,900	2,400	2,400	6,000	1,200	1,200	10,900	0	16,900
1	－４	15,000	2,300	5,800	3,500	0	1,200	0	4,600	9,200	0	11,500
2	－５	22,600	4,500	9,100	3,400	2,300	2,300	0	2,300	15,800	0	13,600
1-1	－６	22,800	0	13,200	0	3,600	6,000	0	2,400	28,800	0	26,400
1-2	－７	18,400	2,300	1,100	3,400	1,100	3,400	0	2,300	20,700	0	14,900
2-1	－８	7,600	0	2,500	1,300	0	2,500	0	2,500	15,200	0	10,100
自然の落ちこみ（Ⅱ）2-2	－９	11,400	1,100	6,900	1,100	0	2,300	0	1,100	14,900	0	14,900
3	２－１	69,200	1,300	14,400	7,800	1,300	0	1,300	13,100	23,500	0	24,800
4	－２	72,100	0	12,900	1,300	0	1,300	1,300	27,000	30,900	0	18,000
5	－３	50,200	0	3,800	0	1,300	3,800	0	7,500	16,300	0	8,800
6	－４	36,900	0	4,800	2,400	0	2,400	0	10,700	20,200	1,200	4,800
7	－５	62,000	0	6,500	1,600	0	8,200	1,600	17,900	13,000	1,600	11,400
8	－６	38,600	1,600	6,400	3,200	3,200	3,200	0	12,900	17,700	1,600	11,300
⓪	３－１	53,500	2,300	36,100	2,300	2,300	1,200	0	10,500	22,100	0	10,500
⓪′	－２	52,000	2,400	21,300	1,200	3,500	2,400	0	7,100	21,300	0	8,300
	－３	44,600	4,500	14,500	1,100	2,200	4,500	0	8,900	20,100	0	10,000
②	－４	43,000	1,200	9,500	0	0	1,200	0	2,400	9,500	0	3,600
灰黄褐色粘質土	－５	26,200	1,200	5,000	0	0	1,200	0	11,200	6,200	0	5,000
	－６	8,200	0	4,700	5,900	1,200	4,700	0	1,200	4,700	0	3,500
⑤	－７	15,000	0	2,300	4,600	0	4,600	1,200	3,500	19,700	0	16,200
⑥	－８	10,400	0	2,300	2,300	0	2,300	0	1,200	9,200	0	18,500
暗灰黄粘質土	－９	0	0	4,300	4,300	1,100	3,200	0	1,100	17,200	0	2,200
生物痕跡	①	43,200	4,700	8,200	4,700	0	2,300	0	10,500	17,500	0	15,200
	②	76,700	4,900	26,000	4,900	4,900	4,900	0	17,300	33,400	0	17,300
	③	26,300	2,300	5,700	4,600	0	2,300	0	3,400	19,400	0	9,100

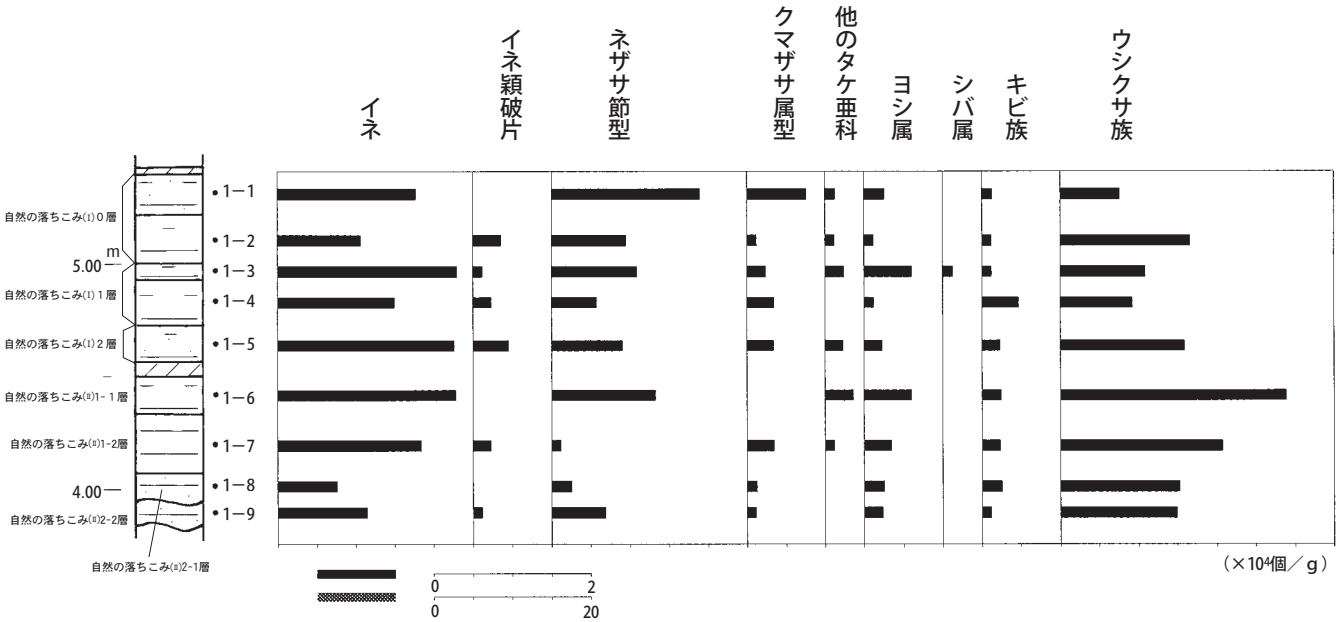


図１　地点１試料のプラント・オパール分布図

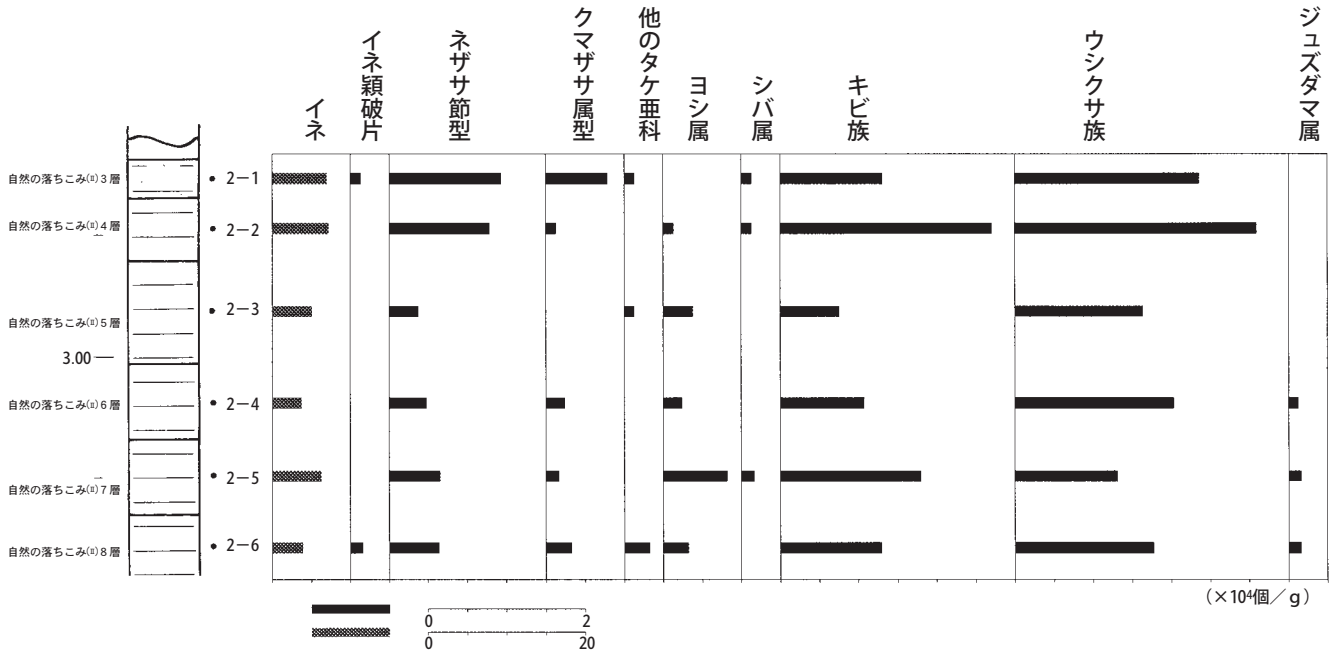


図２　地点２試料のプラント・オパール分布図

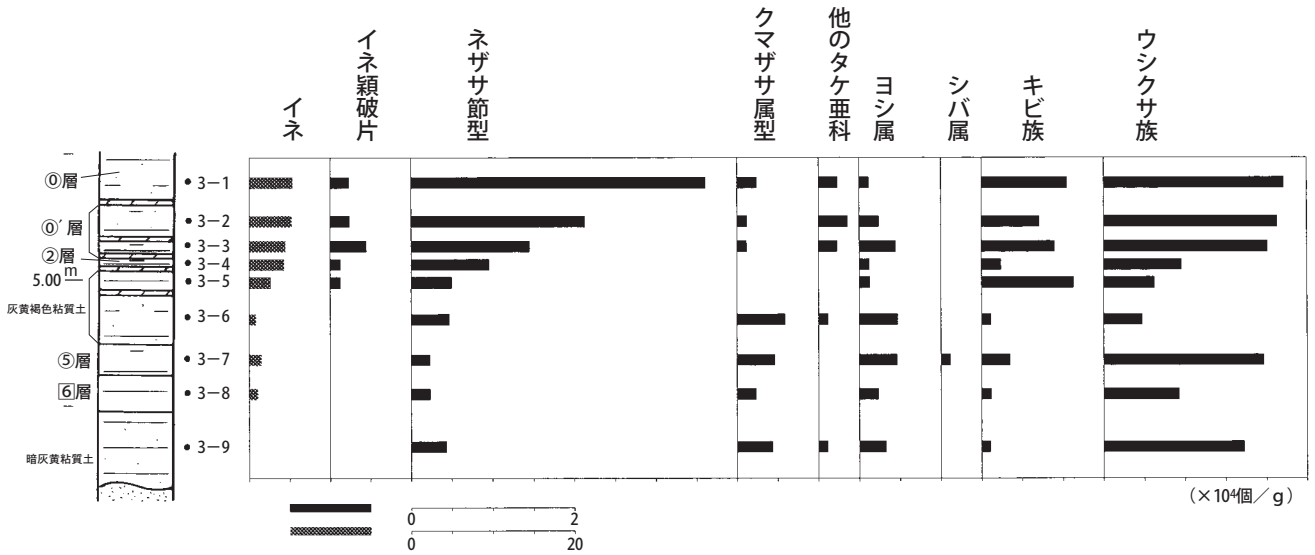


図３　地点３試料のプラント・オパール分布図

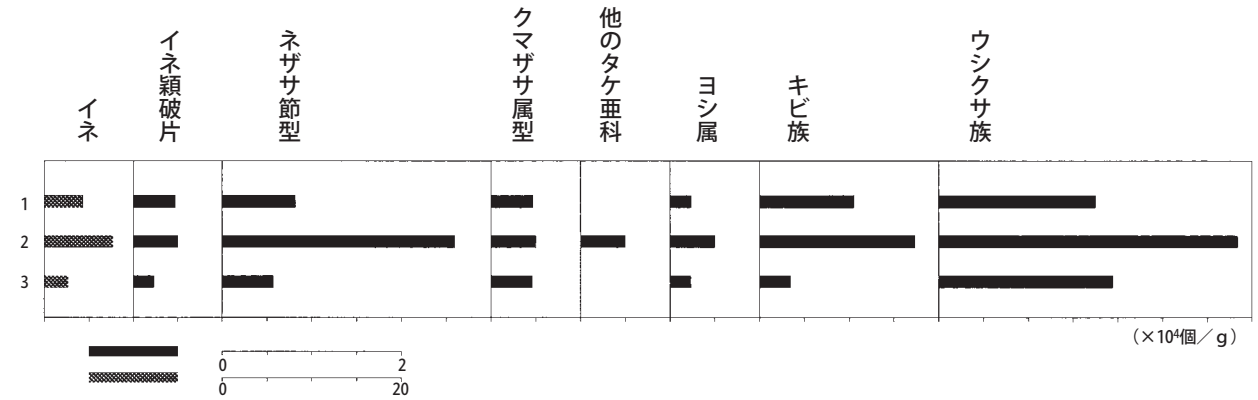
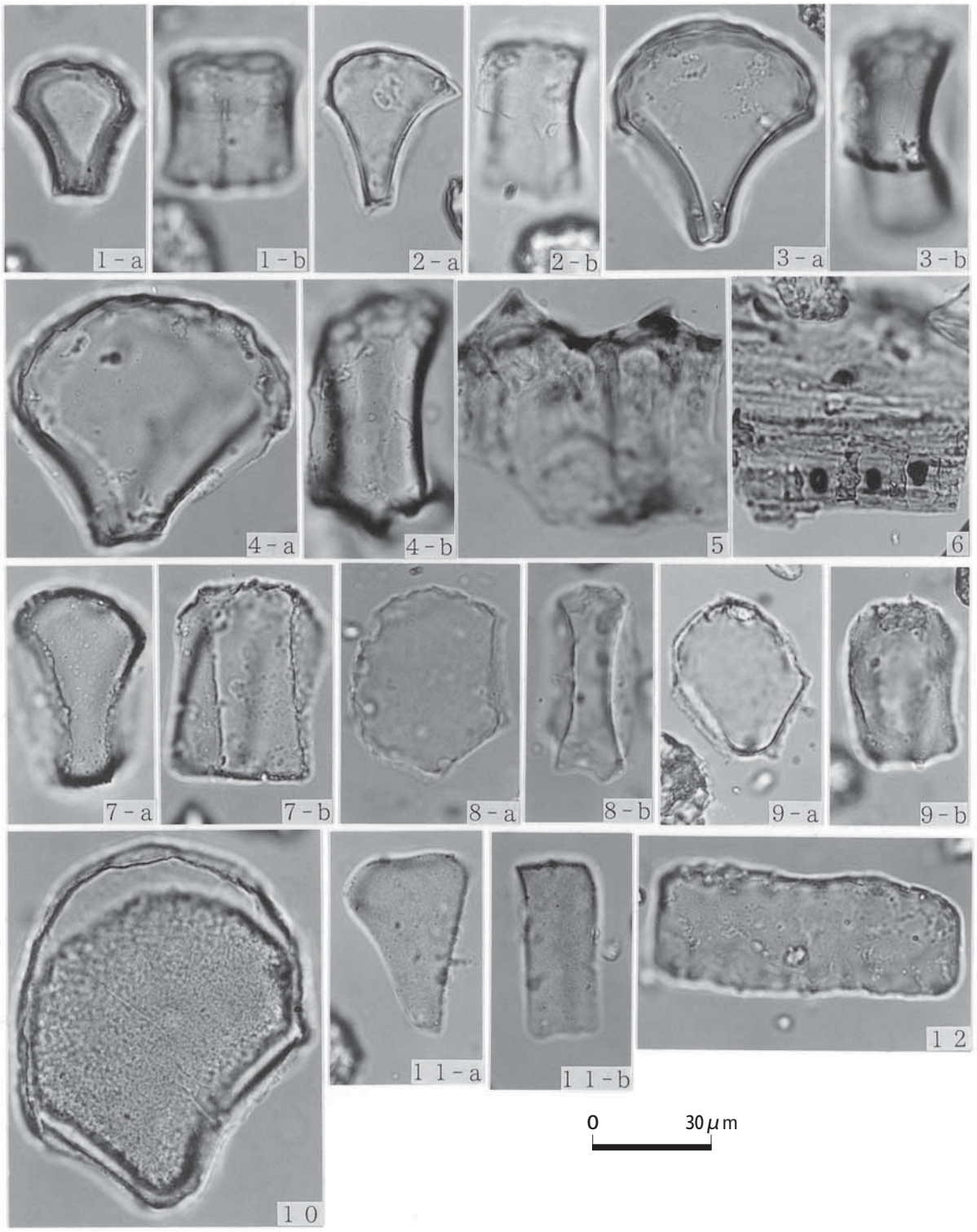


図４　生物根痕跡試料のプラント・オパール分布図



図版　群前遺跡のプラント・オパール（scale bar:30μm）

1～4：イネ（a：断面、b：側面）　1：1－1、2：1－6、3：1－7、4：1－9
5：イネ穎部破片　1－7
6：イネ型単細胞珪酸体列　1－7
7：ネザサ節型（a：断面、b：側面）　1－7
8：クマザサ属型（a：断面、b：側面）　1－6
9：他のタケ亜科（a：断面、b：側面）　1－1
10：ヨシ属（断面）　1－7
11：ウシクサ族（a：断面、b：側面）　1－6
12：キビ族（側面）1－6

群前遺跡から出土した炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

１．試料

炭化種実の検討は、合計13試料（Ｓ－10；No.１～No.13）について行った。試料は、既に取上げ済みであり、乾燥状態で袋に保存されたものである。

２．出土した炭化種実

出土したのは、いずれの試料もモモ炭化核であった。モモは栽培植物であり、食料源の１つであったと考えられる。各試料の状態・個数については、以下に示す通りであり、その一覧は表１に示した。なお、一覧表中の完形換算の欄は、破片数全体を完形に換算した場合、およそ何個分に相当するかを推定して示してある。

S-10（No.１）：完形１個。およその大きさは、長さ23㎜、幅18㎜、厚さ14㎜。

S-10（No.２）：完形１個（一部欠損あり）。およその大きさは、長さ23㎜、幅18㎜、厚さ不明。

S-10（No.３）：完形１個（一部欠損あり）。およその大きさは、長さ26㎜、幅20㎜、厚さ15㎜。

S-10（No.４）：破片が６個で完形１個分に満たないと推定される。

S-10（No.５）：１／２程度の破片が１個、それ以下の小片がおよそ10個。完形１～２個分。

S-10（No.６）：１／２程度の破片が１個、１／４以下の破片が６個。完形１～２個分。

S-10（No.７）：破片が８個でおよそ完形１個分。

S-10（No.８）：完形１個（一部欠損あり）。およその大きさは、長さ27㎜、幅不明、厚さ16㎜。

S-10（No.９）：完形１個。およその大きさは、長さ19㎜、幅13㎜、厚さ14㎜。

S-10（No.10）：破片が５個で完形１個分かやや満たないと推定される。

S-10（No.11）：完形１個。およその大きさは、長さ25㎜、幅21㎜、厚さ14㎜。

S-10（No.12）：完形１個。およその大きさは、長さ24㎜、幅18㎜、厚さ13㎜。

S-10（No.13）：１／２程度の破片が１個、１／４程度の破片が２個、小片が多数。完形１～２個分。

表１　モモ炭化核の出土個数一覧

個数の（　）内は半分ないし破片の数を示す。完形換算は破片数を完形に換算した推定個数。

試料名	個数	完形換算	試料名	個数	完形換算
S-10　No.１	1	1	S-10　No.８	1	1
S-10　No.２	1	1	S-10　No.９	1	1
S-10　No.３	1	1	S-10　No.10	（５）	１以下
S-10　No.４	（６）	１未満	S-10　No.11	1	1
S-10　No.５	（５＋小片）	１～２	S-10　No.12	1	1
S-10　No.６	（７）	１～２	S-10　No.13	（３＋小片）	１～２
S-10　No.７	（８）	1			

３．形態記載

モモ　*Prunus persica* Batsch　炭化核

核は完形であれば、楕円形で両凸レンズ形。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則な流れるような溝と穴がある。

放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

１．はじめに

群前遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を実施した。

２．試料と方法

試料は、S006から採取した炭化物１点、自然の落ちこみＩの３層から採取した炭化物１点の併せて２点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（ＡＭＳ）にて測定した。測定された^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}Ｃ濃度を用いて^{14}Ｃ年代を算出した。

３．結果

表１に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}Ｃ年代、^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}Ｃ年代値（yrBP）の算出は、^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}Ｃ年代が、その^{14}Ｃ年代誤差範囲内に入る確率が68％であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}Ｃ年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}Ｃ年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}Ｃ年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}Ｃ年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、１σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその１σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10％未満についてはその表示を省略した。１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

４．考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

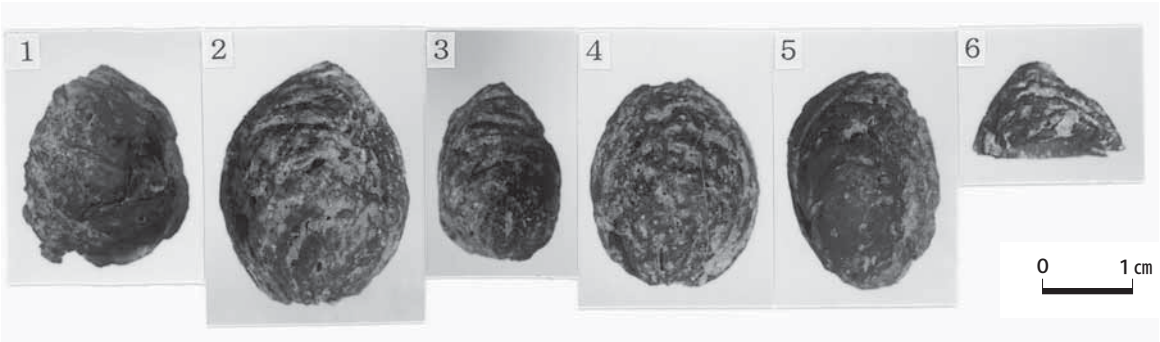
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代、ｐ．３－20．

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E.,Beck, J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.

表１．放射性炭素年代測定および暦年年較正の結果

測定番号（測定法）	試料データ	δ^{13}C (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2064 (AMS)	炭化物 S006	-23.5	870±40	cal AD 1190 cal AD 1205	cal AD 1060-1085(17.2%) cal AD 1120-1140(10.9%) cal AD 1155-1220(71.9%)
PLD-2065 (AMS)	炭化物 自然の落ちこみⅠ ③層直上	-28.7	290±40	cal AD 1640	cal AD 1520-1585(68.9%) cal AD 1625-1655(31.1%)



図版１　出土した炭化種実（スケールは１㎝）
１．モモ、炭化核、No.１　２．モモ、炭化核、No.８　３．モモ、炭化核、No.９
４．モモ、炭化核、No.11　５．モモ、炭化核、No.12　６．モモ、炭化核、No.13

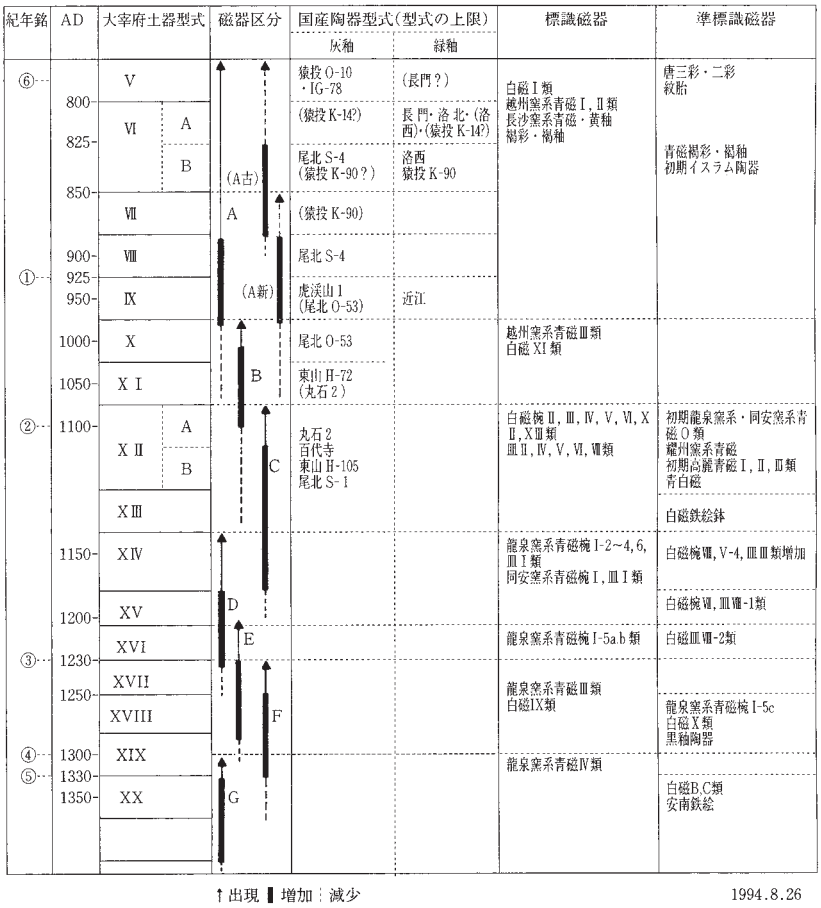
第Ⅵ章　総　　括

第１節　はじめに

群前遺跡の発掘調査により19の遺構が確認された。（図８～24参照）その内訳は近世以降と考えられる溝状遺構（１）、杭列（２）、中世（13世紀前半～中頃）の掘立柱建物（４）、溝（１）、土坑（７）、遺物が含まれないために時期は断定できないが中世・それ以前と考えられる畝状遺構群（３）、溝（１）である。

なお、先述した通り北側に広がる酸化鉄とマンガンの広がる層は当初水田跡と考えていたが、最終的には木葉川側への自然の落ち込みと判断したことを付け加えておく。この自然の落ち込みの中には中世の遺物が多く含まれており、時期が明確な遺物として山本編年の磁器区分Ｄ期（12世紀中頃～後半）、E期（13世紀初頭～前半）、Ｆ期（13世紀中頃～14世紀初頭）、Ｇ期（14世紀初頭～15世紀前半？）の輸入陶磁器が多くあり、古い遺物ではＣ期（11世紀後半～12世紀前半）の白磁碗の口縁部が１点含まれていた。新しい遺物では18世紀末～19世紀初頭の湯飲み椀の口縁部も出土している。中世～近世にかけて落ちこみがあったと考えられる。

それ以外の包含層の遺物は圧倒的に中世の遺物



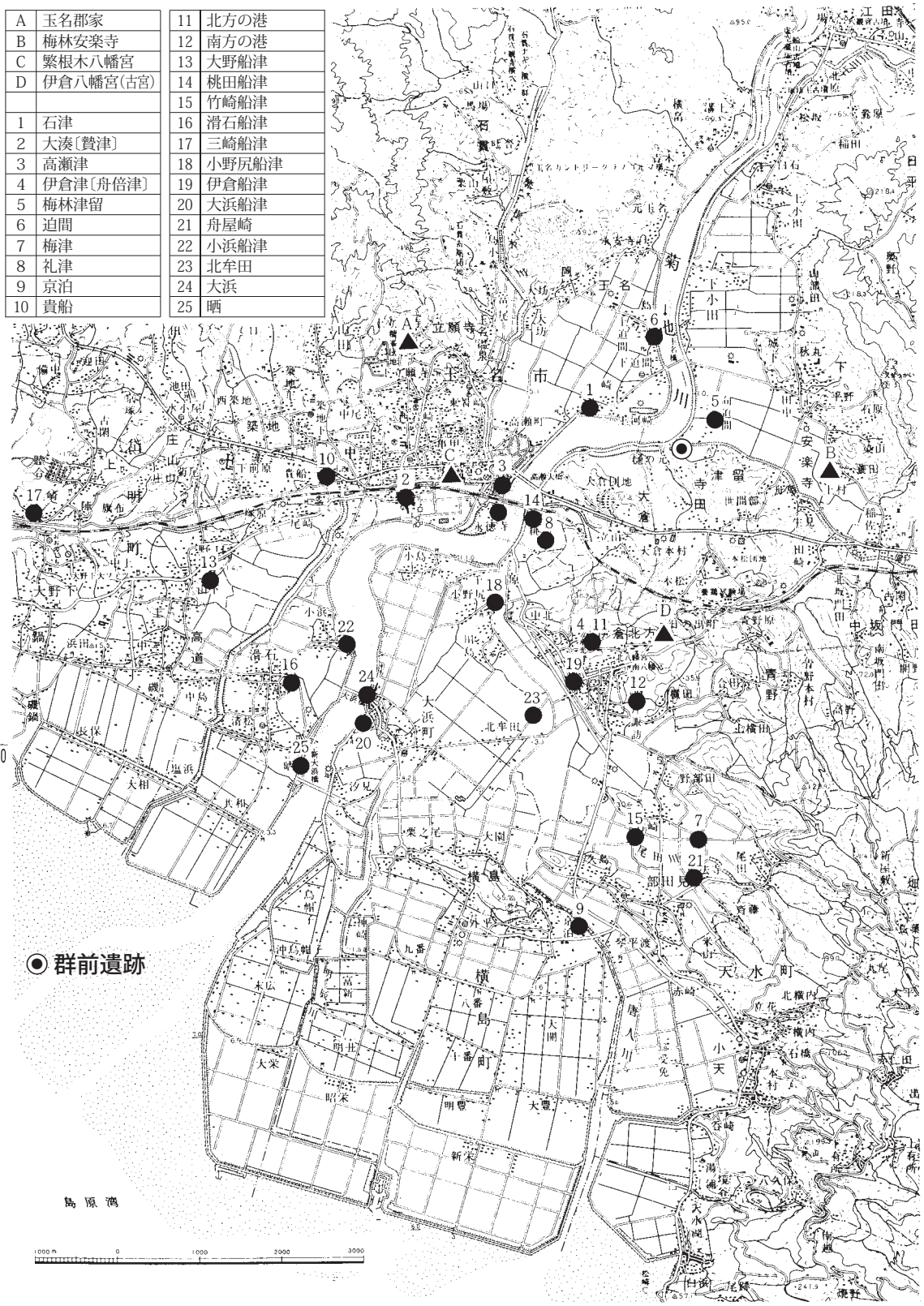
紀年銘資料　① AD. 927　延長５年，大宰府74次 SD205A 溝
② AD. 1091　寛治５年，平安京左京４条１坊 SE８井戸
③ AD. 1224　貞応３年，大宰府33次 SD605溝
④ AD. 1304　嘉元２年，大宰府109，111次 SD3200溝
⑤ AD. 1330　元徳２年，大宰府45次 SX1200池
⑥ AD. 784　延暦２年，長岡京102次 SD10201溝

①九州歴史資料館『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』1982
②田辺昭三・吉川義彦『平安京跡発掘調査報告左京四条一坊』1975　平安京調査会
③九州歴史資料館『大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報』1975
④九州歴史資料館『大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報』1989
⑤九州歴史資料館『大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報』1978
⑥長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第１集』1988

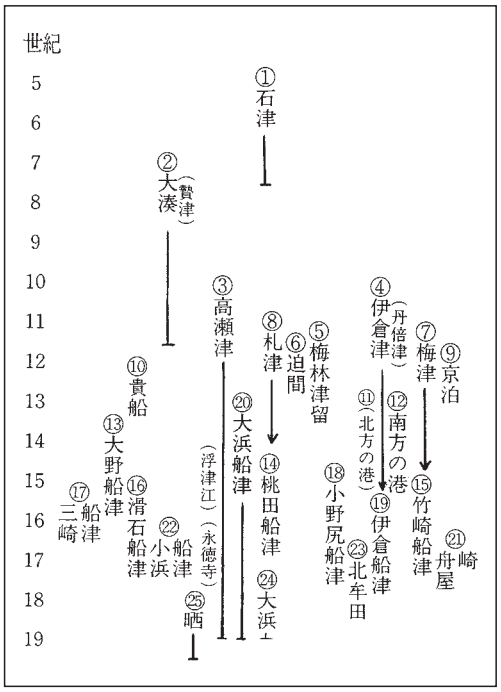
表（Tab）８　太宰府土器型式と国産陶器・貿易陶器編年（山本 1995）

【青磁、白磁、土師器（坏・皿）、須恵器、陶器、瓦器椀、瓦質土器（火鉢・擂り鉢）、滑石製品、鉄器など】が多く、ごく僅かに近世以降の陶磁器、古代の須恵器や土師器を含んでいた。古墳時代の土師器（甕）や弥生時代後期の甕が各１点ずつ出土したがローリングを受けており付近から流されてきたものと考えられる。

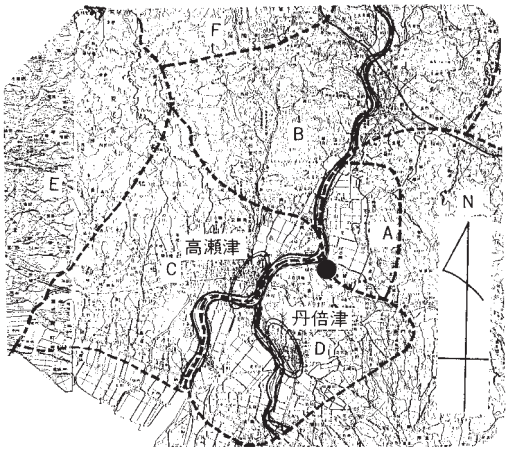
ここでは群前遺跡の中心時期である中世から近世にかけて私見を述べてみたい。



図（Fig）33　菊池川口の港の変遷要図（田辺 1988）



表（Tab）9　菊池川口の諸港の推定年代
（田辺 1988）



1．津と荘園関係図
A　安楽寺領玉名荘
B　仁和寺領玉名荘
C　大野別符
D　伊倉荘
E　野原荘
F　臼間荘
（荘域は工藤敬一による）

●：群前遺跡

図（Fig）34　津と荘園関係図
（田辺 1988に追筆）

図（Fig）35　群前遺跡周辺字図（玉名郡村図 津留村『玉名市史 資料篇1 絵図・地図』に加筆）

第２節　遺跡と環境

１　中世の遺構と遺物

１）歴史的背景

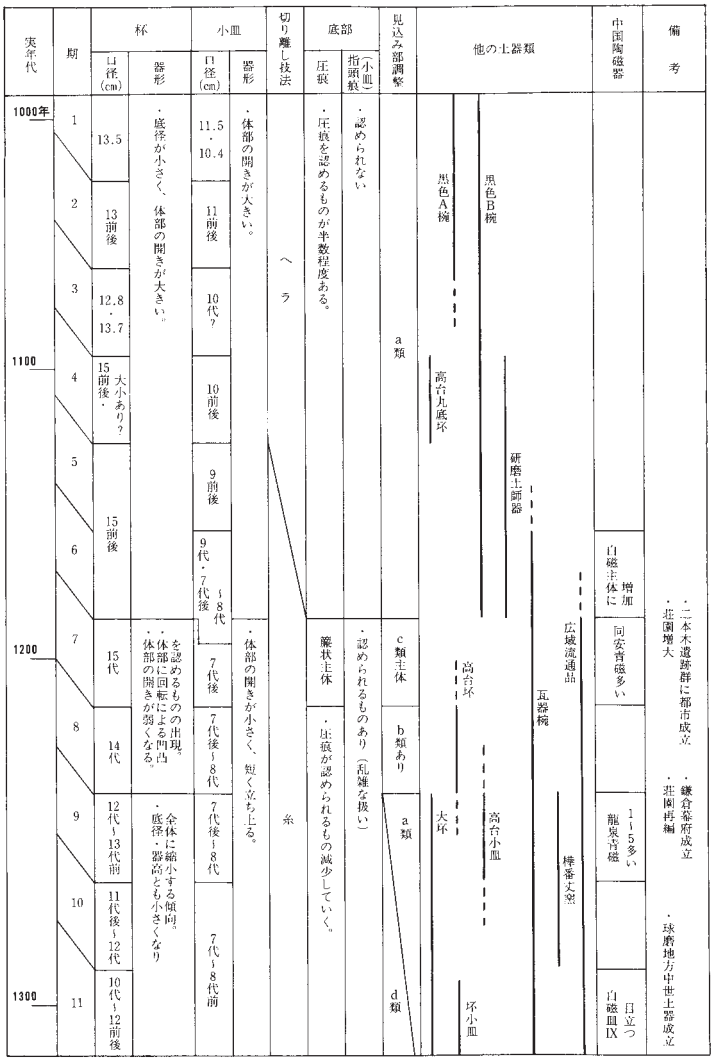
図34を見ると群前遺跡は中世期には安楽寺領玉名荘と伊倉荘との境に位置しているが、梅林天満宮の側にあることから安楽寺領玉名荘に属していたと考えられる。

当時は菊池氏等の海外貿易を含めた海上活動の拠点港として高瀬津や丹倍津が存在していた（西田1987）。さらに津留にも港があったと推測される。

その理由として日置氏が自ら開発した伊倉荘を手放さねばならなくなった同じ承保元年（1074年）に、大宰府で実力のあった菊池則隆が大宰府安楽寺領の玉名荘に於けるシンボルである梅林天満宮を移転させたのはいかにも象徴的である。菊池氏は菊池川の上流地域の菊池地方に地盤を持つ豪族であるから、一部陸上交通路を使用しなければならない梅林安楽寺を拠点にするより、終始、菊池川の舟運を利用することができる菊池川沿いに拠点を移した方がはるかに便利であるに違いない。梅林安楽寺の脇を流れる木葉川と菊池川との合流点こそが移転地として最もふさわしい、そこが津留村なのであった。

また、対岸の河崎に同じ承保元年（1074年）に同じ菊池則隆によって、同じく天満宮が勧請されたことが挙げられよう。河川交通の場合、対向する地点に港が設けられることが極めて多いからである。

さらに「白拍子（しらびょうし）」という小字名（図35参照）が津留天満宮の鳥居の前に存在することが挙げられる。白拍子とは平安後期から南北朝時代にかけて流行した男装の麗人であることは説明を



表（Tab）10　熊本県北部～中央部編年概略（美濃口 1994）

要しないが、彼女達も港に集まる事が多い。それも港を管理したと考えられる神社の前であれば尚更である。白拍子の地は今は水田の中であるが昔は木葉川の川端であったと考えられる地形である。なお、参考までに述べると、「白拍子」という小字名は、山鹿市大字南島にもある。その地点は菊池川の支流である岩原川に沿うところである。

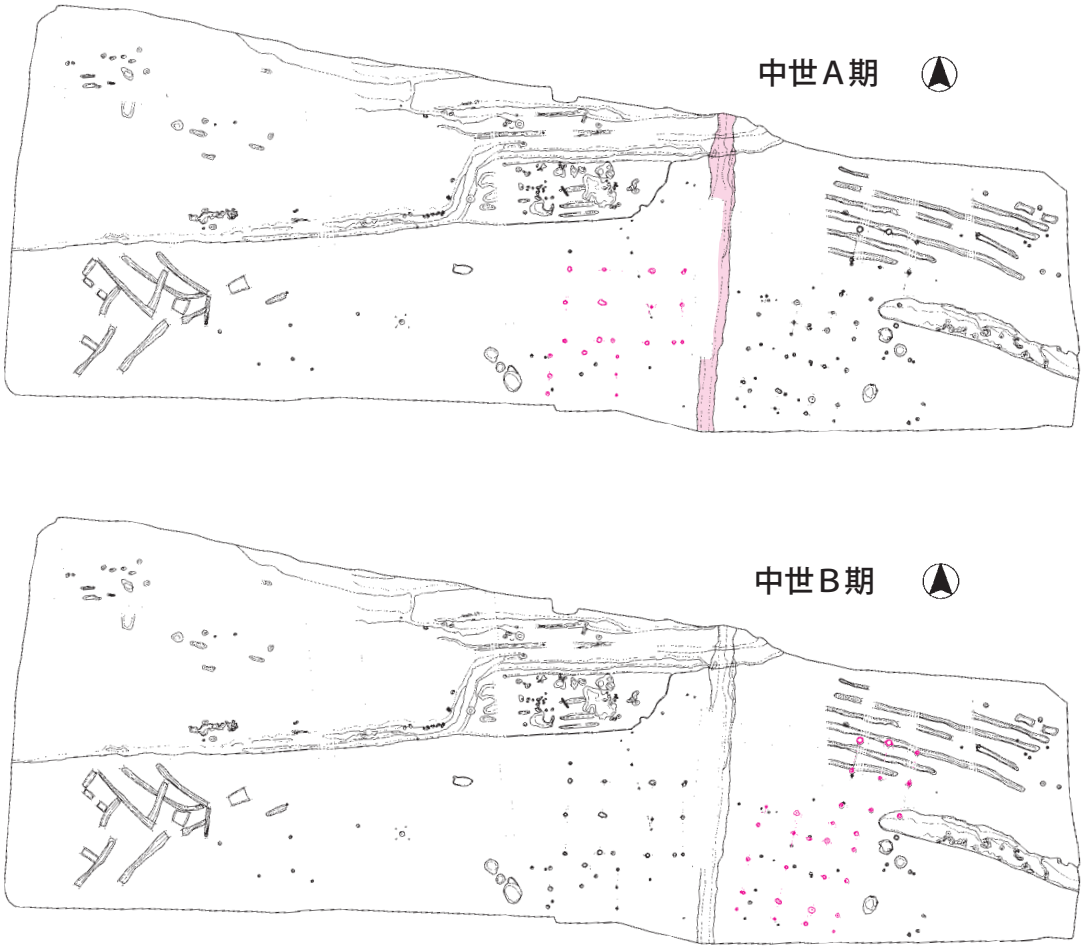
要約すると、玉名荘は玉名郡司日置氏が開発した荘園と推定され、国司や大宰府の府官を通じて大宰府安楽寺へしばしば寄進されているが、それも有力な府官であった菊池氏の介在が暗示される。11世紀になって国家の統率力が弱まり、それに伴い陰の貿易港として菊池川口の港の重要性が高まるにつれ、菊池氏の玉名への進出は本格的となって日置氏の没落が進み、日置氏の開発になる伊倉荘も売却することになった。安楽寺領玉名荘に於いては、大宰府安楽寺は梅林に安楽寺を起きその支配に努力をしていたと思われるが、菊池則隆によって安楽寺と一体をなす天満宮が菊池川に沿って菊池氏により便益の多い津留に移されていることは、安楽寺の支配も菊池氏によって揺るがされてきたと見られる。かくしてこの津留は菊池氏の港として発展することになったと考えている（田辺1987）。

２）グルーピングと時期

出土遺物から明確に中世の遺構と判明しているのは12基であり、それを３つにグルーピング（中世Ａ期～中世Ｃ期）したのが図36～37である。

まず、中世Ａ期においてほぼ南北に流れる溝（S006）、２間×３間で総柱の掘立柱建物（S012）、２間×３間以上の掘立柱建物（S014）が同時期の遺構と考えられる。

その理由として溝（北東に6.5度）と２つの掘立柱建物（北東に9.5度と6.0～8.5度）の軸線の方向がほぼ同じということが挙げられる。



図（Fig）36　群前遺跡遺構配置図（中世Ａ期、中世Ｂ期）

時期は出土遺物や^{14}Cの結果から12世紀後半～13世紀後半頃ではないかと考えられる。その理由は以下の条件による。ここでは溝という性格上、開始期から廃絶期までを幅広く把えておきたい。

① 溝の遺物（遺物番号：16,19）がそれぞれ美濃口編年の第９期（13世紀前半～中葉）、山本編年のＦ期（13世紀中頃～14世紀初頭）にあたること。

② 溝底面の炭化物の^{14}Ｃ年代（AMS法）がBP870年±40年であり、暦年代に比較した年代範囲がAD1155年―1220年（71.9％）になること。

次に中世Ｂ期において２間×３間の総柱で両側に庇を持つ掘立柱建物（S011）、２間×２間で総柱の掘立柱建物（S013）が同時期の遺構と考えられる。

その理由として２つの掘立柱建物（北東に17.5度と22.5度）の軸線の方向がほぼ同じということが挙げられる。溝（北東に6.5度）とは明らかに11～16度ずれている。

中世A期と中世B期の前後関係については中世Ｂ期も溝を意識していることから中世A期の後ではないかと考えられる。すなわち中世A期→中世B期という時間変遷が考えられる。しかし、あまり時間差はないであろう。

中世Ｃ期は残りの中世の遺構（７つの土坑）をまとめたものである。３つの土坑【S001,002,003（燃焼土坑を含む）】は覆土が酷似していることから同一時期と考えられるが、その他の遺構の前後関係は不明である。

その他は出土遺物がなく、時期不明の遺構である。３つの畝状遺構と溝で、いずれも耕作に関する遺構である。時期は中世の酸化鉄とマンガンの集積層（①層）の下層で確認されていることから中世期かそれ以前と考えられる。一番下層で確認された遺構は溝（S017）である。

３）遺跡の性格

田辺氏によれば、時期こそ明確にされていないが地名をもとに梅林天満宮の所在する津留は菊池氏の港として発展していったと考えられている。群前遺跡は梅林天満宮（直線距で約500m）の対岸とはいえ木葉川に接しており、津留の港ばかりではなく高瀬津や丹倍津との密接な結びつきがあったと考えられるだろう。

また、自然の落ち込みの中からではあるが唐物と考えられる天目茶碗（遺物番号：108）が出土していることから、付近の城館跡・寺院跡との関連性も考えられる。本遺跡から東に約350mの場所に花群山吉祥寺跡（中世）があり、現在跡地に毘沙門天が祀ってある。この花群山吉祥寺跡との関連性も考えられよう。

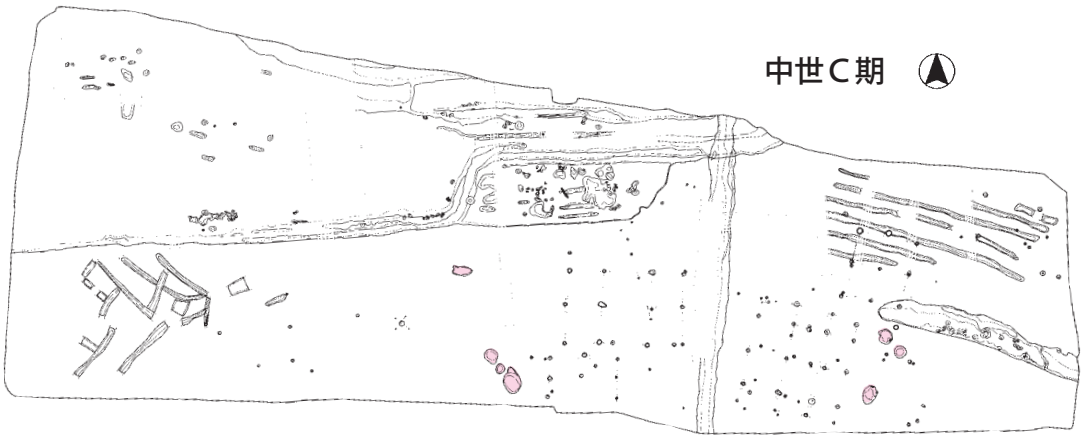
要約すればこの地は、12世紀後半～13世紀後半に、菊池氏の支配下に置かれた集落が存在した遺跡であると考えられる。

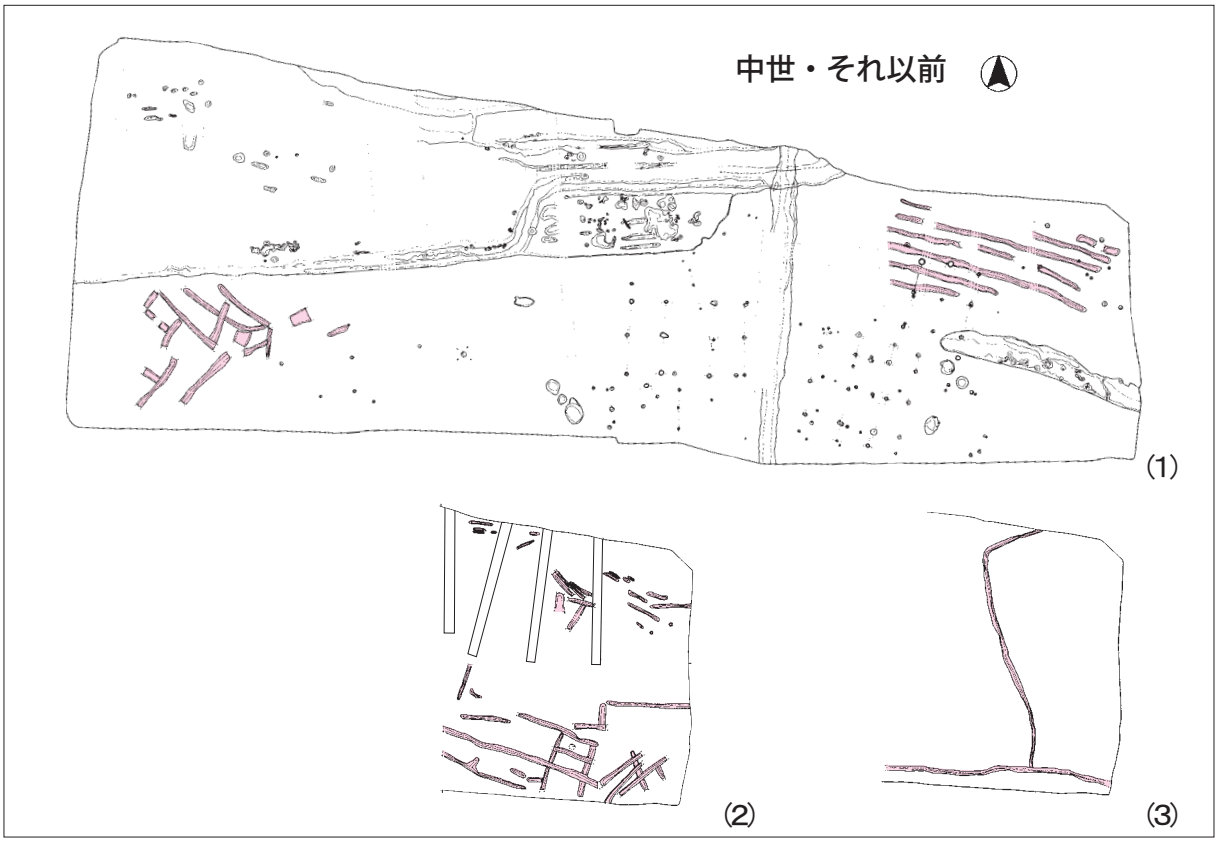
２　近世以降の遺構と遺物

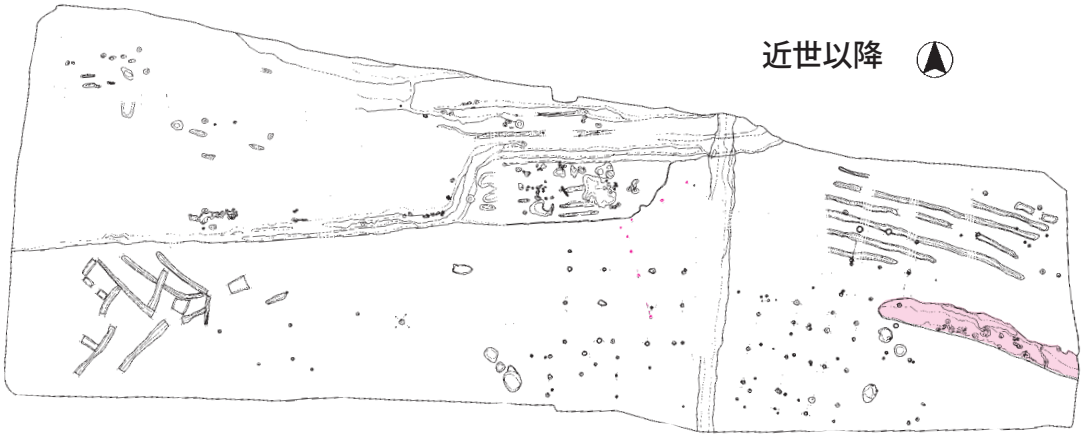
１）歴史的背景

天正15年（1587）豊臣秀吉の九州仕置後、当市域は佐々成政、翌年には加藤清正の支配に属した。清正は菊池川の流路を変更し、大干拓事業を行い、新地を開いた。当時の千田川原一帯は、菊池川の三角州とした川が分流し、長年にわたる土砂の堆積が進行していた。清正は現在の伊倉船津へ流れていた菊池川本流を、大浜方面へ付け替えるため東塘・西塘を造り、さらに上流左岸の桃田・千田・小島に堤防を築き、旧本流を締め切り、菊池川の流路を変えたと伝えられる。この事業は天正17年に着工され、完成までに17年を要し、慶長10年（1605）に完成したと言われるが（藤公偉業記）、なお検討が必要とされる。この大改修工事ならびに干拓事業により、伊倉への船の交通は絶たれ、伊倉は港としての機能を失った。その代償として、当市域では小野尻・千田川原・小島・川島・北牟田・大浜の６か村にわたって広大な牟田新田が生まれ、後世の村の成立の基礎となった。横島・大園（現横島町）両村を加えれば、合計870町9反歩、石高5,976石の小田牟田新地が出現したといわれる。

寛政９年（1632）加藤氏に代わって細川氏が入封し、当市域も同氏の支配に属した。同12年には郡と村の中間に手永という肥後藩特有の行政区を設けた。玉名郡内には坂下、小田、伊倉、内田など14の手永が入り組む形で成立し、それぞれ伊倉孫左衛門手永







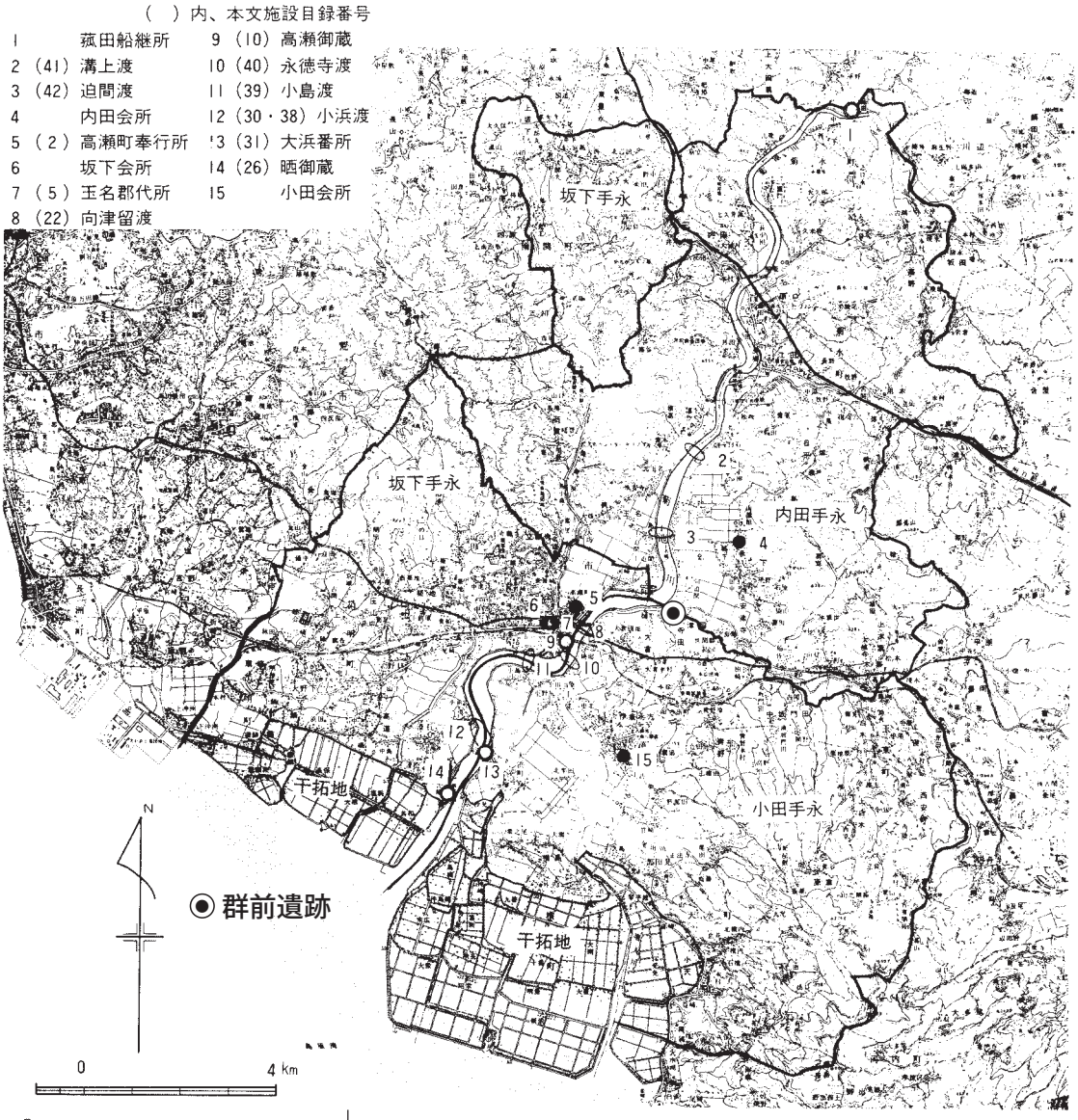
図(Fig)37　群前遺跡遺構配置図(中世Ｃ期、中世・それ以前、近世以降)

のように、手永名を姓とした惣庄屋が支配した。しかし、寛文年間（1661～1673）頃には整理され、６手永となり、当市域は小田、内田、坂下、南関の４手永に文属し、高瀬だけは高瀬町として独立した行政単位であった。同町は加藤清正の菊池川改修により、地位が向上し、城北地方の一大中心地となった。菊鹿盆地や玉名平野の産地を控え、寛政12年（1800）ころには12にも及ぶ手永の年貢米が舟で菊池川を下り、高瀬に集約された。荷は舟から直接に町家の倉へ運び入れられた。現在でもその遺構の一部は残っている。また、同町は高瀬町奉行の支配下に置かれ、同町の隆盛に伴い商工業は活気を呈し、幕末期には菓物商、豆腐商、大工、舟乗、穀物商、桶屋、仕立屋、左官、畳職、鍛冶職、風呂職、薬店などの職業が見られたといわれる。（村上1987）

群前遺跡は内田手永と小田手永の境に位置しているが、内田手永に属していたと考えられる。（図38参照）

２）遺跡の性格

明確に近世以降の遺構と判明しているのは図37の



「この地図は国土地理院発行の $\frac{1}{50,000}$（荒尾・玉名・山鹿）を使用したものである」

図（Fig）38　湊関係施設位置図（田辺 1988に追筆）

中にある溝状遺構（S008）と杭列（S019,020）である。いずれの遺構も表土剥ぎの指標となった中世の酸化鉄とマンガンの集積層（①層）を切る形で確認された。溝状遺構の中から家田氏の陶器編年ではⅢ期（1650～1690年代）と考えられる擂鉢の口縁が出土したことから少なくとも17世紀後半以降の遺構であると考えられる。

２つの杭列は出土遺物もなく時期は不明であるが、S008より新しい可能性も高い。S012や中世の酸化鉄とマンガンの集積層を切っていることから近世以降であろう。また、杭との間にある粘質土も中世の遺構覆土とは異なっていることからも頷ける。

図35は玉名郡村図【明治12年（1879）～明治15年（1882）に作成】であるが、この地図は近世の地名や土地利用が色濃く残されていると考えられる。群前遺跡は周辺を木葉川と溝に囲まれた耕地となっている。確認された遺構も耕作に関連する溝状遺構や杭列であることから、近世期は耕地として利用されていた可能性が高い。

第３節　今後の課題

群前遺跡の周辺では、これから県道、河川改修、新幹線建設事業等に伴う発掘調査が予定されている。

中世、近世の歴史解明のためには文献資料や金石文ばかりではなく、考古学の成果も合わせて考察することは言うまでもないが、今後玉名平野の発掘調査が進む中でまた新たな事実関係が解明されるであろう。

そのような積み重ねの中でこの遺跡の性格をもう一度問い直さなければならないと考える。

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径	底径	器高	高台高	高台径	残存高	調整		色調		胎土	焼成	出土地点	層位	備考
					(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)					
8	1	中世土師器	土鍋	口縁						8.6～	刷毛目後ナデ、横ナデ	細かい刷毛目	にぶい黄橙(10YR6/3)	黒褐(2.5Y3/1)	石英、長石、角閃石、輝石、砂粒	良好	S001(D-5)	―	肥前系土鍋
8	2	古代須恵器	坏（蓋）	つまみ						1.55～	欠損のため不明	回転ナデ	灰(10Y6/1)	灰(10Y6/1)		良好	S001	―	
9	4	中世瓦質土器	火鉢	口縁						7.5～	横ナデ	横ナデ、突帯、斜格子スタンプ、重孤文状の刷毛目	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい橙(7.5YR6/4)	石英、角閃石、赤褐色粒、黒褐色粒	良好	S002	―	内面：スス付着
9	5	中世土師器	小皿	口縁～底部	(10.0)	(6.8)	1.4				回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英、金雲母	良好	S002(D-4・5)	―	底部：回転糸切り離し？
11	7	古代土師器	甕	口縁						8.0～	ナデ、削り	刷毛目後ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	石英、角閃石、砂粒	良	S010(C-4)	―	
11	8	古代須恵器	長頸壺	口縁						1.5～	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい赤褐(5YR5/4)		良好	S010	―	荒尾産須恵器(9C～10C)?
13	9	中世土師器	小皿	口縁～底部	(10.0)	(7.5)	1.35				回転ナデ（粗い）	回転ナデ（粗い）	にぶい橙(5YR7/4)	にぶい橙(5YR7/4)	長石、角閃石、黒褐色粒	やや良	S011(ピット内)	―	底部：回転糸切り離し、内外面：指頭圧痕あり
19	10	中世土師器	小皿	口縁～底部	(8.5)	(6.8)	0.75				回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石、金雲母、黒褐色粒、赤褐色粒	やや良	C-6	―	底部：回転糸切り離し
19	11	古代須恵器	坏	口縁～底部	(13.0)	(7.0)	3.95				回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ削り	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	長石、角閃石、黒褐色粒、砂粒	不良	S005,ピット(C-4)	―	口縁部内外面に黒斑あり 底部：回転ヘラ切り
20	12	近世陶器	擂鉢	口縁						3.5～	横ナデ、工具による削り	回転ナデ、施釉	灰赤(10Y4/2)	灰褐(5YR5/2)		良好	S008(D-7・8)	―	４本単位のスリ目
22	13	中世須恵器	大甕（水甕）	体部						17.3～	刷毛目後ナデ	格子目タタキ	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	長石、角閃石、黒褐色粒、砂粒	不良	S006(D-6)	―	
22	14	中世土師器	土鍋	口縁部						2.4～	横方向の刷毛目後ナデ	横方向の刷毛目後ナデ、粗いナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	灰褐(7.5YR5/2)	石英、長石、角閃石、金雲母、赤褐色粒	良好	S006(D-6)	―	スス付着
22	15	中世須恵器	壺	体部						9.8～	ヘラ状工具による削り後ナデ、指頭圧痕	格子目タタキ後ナデ	灰(N5/)	灰(N4/)		良好	S006(B-6),自然の落ちこみⅠ(C-2)	―	
22	16	中世土師器	土鍋	口縁						5.9～	横方向の刷毛目後粗いナデ	横ナデ、縦方向の刷毛目後ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	褐灰(10YR6/1)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒、	良	S006(C-6)	―	肥前系土鍋
22	17	中世土師器	坏	口縁～底部	(13.4)		3.2				回転による粗いナデ	回転ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	石英、赤褐色粒	良	S006(B-6)	―	底部：回転糸切り離し
22	18	中世瓦器	椀	底部～体部		(8.3)				3.4～	ナデ	ヘラ削り	灰白(10Y8/1)	灰白(10Y8/1)		良好	S006(D-6)	―	底部：ヘラ切り後ナデ
22	19	中世白磁	皿	底部						0.8～	回転ナデ後施釉	回転ヘラ削り、施釉	灰白(10Y8/1)	灰白(10Y8/1)		良好	S006(B-6)	―	時期区分：F期(13C中～14C初)
22	22	中世瓦器	椀	底部		(7.2)				1.9～	ナデ	回転ヘラ削り、ナデ	灰(N6/)	灰(N6/)	石英、長石	良好	S006(B-6)	④-2層	高台：荒尾窯跡群系底面：ヘラ切り後部分的にナデ
25	23	近世以降磁器	染付椀	口縁						2.9～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	灰白(N8/)	灰白(N8/)		良好	東トレンチ	―	
25	24	近世以降陶器	壺	口縁						2.55～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	にぶい橙(7,5YR7/3)	灰白(7.5Y7/1)		良好	D-6	―	口唇部：回転ナデ（無釉）
25	25	近世以降磁器	染付皿	底部				0.7		2.4	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	明オリーブ灰(2.5GY7/1)		良好	D-7	―	
25	26	中世瓦質土器	火鉢	体部						5.05～	刷毛目	横ナデ、突帯	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	長石、雲母、黒褐色粒	良好		一括	
25	27	中世瓦質土器	火鉢	口縁						6.1～	回転ナデ	回転ナデ、突帯、花文状スタンプ	灰(N4/)	灰(N4/)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒	良好	C-3	―	
25	28	中世瓦器	椀	口縁						4.8～	ナデ	ヘラ削り後ナデ、棒状工具によるミガキ	灰(N4/)	灰白(N8/)		良好	表土はぎ	―	
25	29	中世瓦器	椀	口縁						4.5～	ナデ後棒状工具によるミガキ	ヘラ削り後ナデ、棒状工具によるミガキ	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	石英、輝石、金雲母	良好	D-5	―	
25	30	中世土師器	小皿	口縁～底部			1.3				回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐(7,5YR6/3)	にぶい褐(7.5YR6/3)	長石、黒褐色粒、赤褐色粒	良好	表土はぎ	―	底部：回転糸切り離し
25	31	中世土師器	小皿	ほぼ完形	9.0	7.2	1.5				回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石、雲母、赤褐色粒	良好	C-7	―	底部：回転糸切り離し
25	32	中世土師器	坏	口縁～底部	(15.2)	(10.2)	2.95				回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	石英、角閃石、金雲母、赤褐色粒	良好	C-6	―	底部：回転糸切り離し
25	33	中世土師器	坏	口縁～底部			3.05				回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	長石、輝石、金雲母、赤褐色粒	良	C・D-5・6	―	口縁部に黒斑あり かなり表面が磨耗している 底部：回転糸切り離し？
25	34	中世土師器	坏	底部～体部		(10.2)				2.5～	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	灰黄褐(10YR5/2)	石英、長石、雲母、赤褐色粒	良好	C-6	―	表面の磨耗が激しい 底部：回転糸切り離し？
25	35	中世須恵器	椀	口縁						4.4～	ナデ、横ナデ	横ナデ	灰(N4/)，灰(5Y6/1)	灰(N4/)	長石、角閃石	良好	C-6	―	
25	36	中世土師器	土鍋	口縁						5.95～	ヘラ削り・指頭圧痕	ナデ、刷毛目後部分的ナデ、突帯	明赤褐(5YR5/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	石英、長石、角閃石、金雲母、黒褐色粒	良好	C-5	―	肥前系土鍋
26	37	同安窯系青磁	皿	口縁～底部	(9.8)	(5.4)	1.55				回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉、回転ヘラ削り、無釉	明オリーブ灰(5GY7/1)	明オリーブ灰(5GY7/1)		良好	表土はぎ	―	時期区分：D期(12C後～13C前)
26	38	龍泉窯系青磁	椀	口縁						3.6～	回転ナデ後ヘラの片彫り、施釉	回転ナデ後施釉	灰オリーブ(5Y5/2)	灰オリーブ(5Y5/2)		良好	C-3	―	時期区分：D期(12C後～13C後)
26	39	龍泉窯系青磁	椀	口縁						3.3～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	オリーブ灰(2.5GY6/1)	灰オリーブ(7.5Y6/2)		良好		―	時期区分：G期(14C初～15C前)
26	40	景徳鎮窯系磁器	合子の身	口縁						1.5～	回転ナデ後施釉	回転ヘラ削り、ヘラによる施文後施釉	明緑灰(7.5GY8/1)	明緑灰(7.5GY7/1)		良好	C-6	―	時期区分：E期(13C) 口唇部：回転ナデ、無釉
26	41	龍泉窯系青磁	椀	口縁～底部	(16.6)	(5.9)	6.95	0.8	(5.4)		回転ナデ後ヘラ描きの片彫りによる施文後施釉	回転ナデ及び回転ヘラ削り後施釉、無釉	灰オリーブ(5Y5/3)	灰オリーブ(5Y5/3)		良好	C-3・4・5,B-3	３層、５層、上層	高台：削りだし 時期区分：E期(13C)
26	42	古代須恵器	坏（蓋）	つまみ						1.05～		回転ナデ	灰(N6/)	灰白(N6/)	黒褐色粒、砂粒	良好	C-1	―	西壁
26	43	古代須恵器	坏	口縁～底部	(13.4)	(7.8)	4.5				ナデ	ナデ、ヘラ削り	灰(5Y6/1),にぶい橙(5YR7/4)	灰(7.5Y4/1)		良好	C-4	―	底部：回転ヘラ切り
26	44	古代土師器	甕	口縁～胴部	(25.6)					8.7～	横方向のナデ後縦（下から上）方向の削り、ミガキ	縦方向の刷毛目後部分的横ナデ、横ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英、長石、角閃石、輝石、金雲母、赤褐色粒	やや良	C・D-4	上層	内面：指頭圧痕あり
26	45	古墳土師器	甕	口縁～胴部						10.8～	削り？	横ナデ、縦方向の刷毛目	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰黄褐(10YR6/2)	石英、長石、角閃石、雲母、黒褐色粒	良好	C-7	下層	5C後～6C?
26	46	弥生土器	甕	口縁～胴部	(19.2)					7.1～	横ナデ、刷毛目後ナデ	横ナデ、刷毛目後ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰黄褐(10YR6/2)	石英、長石、角閃石	やや良	C-7・8	―	調整が不明確
29	53	近世磁器	染付湯飲み椀	口縁						4.75～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉、花文文様	灰白(7.5Y8/1)	灰白(7.5Y8/1)		良好	C-5	―	肥前産
29	54	近世以降磁器	染付椀	口縁						3.4	染付文様のち施釉	染付文様後施釉	灰白(N8/)	灰白(N8/)		良好	C-5	―	肥前産
29	55	近世以降陶器	椀？	底部		(3.4)		0.45	(3.8)	1.3～	回転ナデ後施釉	回転ヘラ削り後施釉	灰白(5Y8/2)	灰白(5Y8/1)		良好	C-4	―	高台削り出し無釉
29	56	近世以降陶器	椀	高台部～体部下半部		(4.2)		0.9	(4.75)	2.3	回転ナデ後施釉	回転ナデ及び回転ヘラ削り後施釉	灰(5Y6/1)	灰白(5Y7/1)	黒褐色粒、赤褐色粒、砂粒	良好	B-3	―	見込み：目跡あり 畳付：部分的に無釉
29	57	近世以降陶器	椀	底部～体部下半部		(5.1)		0.45	(5.3)	2.4～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y5/2)		良好	C-3	―	外面：釉溜まりあり 底部：無釉
29	58	近世以降陶器	椀？	底部～体部下半部		(3.8)				2.1～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉、回転ヘラ削り、無釉	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)		良好	B-3	―	高台は底部側のみ削りだし 目跡あり
29	59	近世以降陶器	水注	体部						4.7～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	灰(N6/)			良好	自然の落ちこみⅠ(C-4)	上層	
29	60	中世瓦質土器	擂鉢	口縁						4.3～	横ナデ、スリ目	横ナデ	灰(N6/)	灰(N4/)	石英、長石、角閃石	やや良	自然の落ちこみⅠ(B-3)	―	擂目不明

表（Tab）11　土器観察表(1)

29	61	中世瓦質土器	擂鉢	底部						1.7～	ナデ後スリ目	ナデ、指頭圧痕	灰(7.5Y6/1)	灰(N6/)	石英、長石、角閃石	やや良	自然の落ちこみⅠ(B-3)	－	７本単位の擂目
29	62	中世瓦質土器	鉢	口縁						5.6～	ナデ、刷毛目痕	ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	石英、長石、角閃石	やや良	自然の落ちこみⅠ(B-3)	－	内面にススス付着、表面摩滅
29	63	中世須恵器	壺	体部						9.3～	回転ナデ	回転ナデ	灰(5Y6/1)	浅黄(2.5Y7/3)	長石、黒褐色粒	良好	自然の落ちこみⅠ(B-4)	－	
29	64	中世須恵器	擂鉢	口縁						5.8～	斜め方向のナデ、スリ目	横ナデ、ナデ	灰(N4/)	灰(N4/)	石英、長石、黒色粒	良好	自然の落ちこみⅠ(B-2壁)	－	単位不明（２本以上）
29	65	中世瓦質土器	火鉢	口縁						6.9～	ナデ	ナデ、突帯、三角状・連子状スタンプ	灰(5Y6/1)	灰白(5Y7/1)		良好	自然の落ちこみⅠ(A・B-2)	上層	全体にローリングを受けて磨耗している
29	66	中世瓦器	椀	体部～底部		(7.8)				2.8～	ナデ	ヘラ削り後ミガキ	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	小石	良好	自然の落ちこみⅠ(B-5・6)	－	
29	67	中世瓦器	椀	体部～底部				0.5		4.1～	ヘラミガキ	ヘラ削り後ミガキ	灰白(10Y7/1)	灰(N6/)		良好	自然の落ちこみⅠ	－	
29	68	中世土師器	小皿	口縁～底部			1.5				回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	石英、長石、角閃石、金雲母、赤色粒	良好	自然の落ちこみⅠ(B-5)	－	底部：回転糸切り離し
29	69	中世土師器	坏	口縁～底部			3.1				回転ナデ	回転ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英、長石	やや良	自然の落ちこみⅠ(B-3)	－	底部：回転糸切り離し、外面：ススス付着
29	70	龍泉窯系青磁	椀	口縁						3.05～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(7.5Y5/2)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-5)	－	鎬入・連弁磁器区分：E期(13C)
29	71	龍泉窯系青磁	椀	口縁						3.15～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉、連弁	灰オリーブ(7.5Y6/2)	灰オリーブ(7.5Y6/2)		良好	自然の落ちこみⅠ(C-2)	－	鎬不明瞭・連弁磁器区分：E期(13C)
29	72	龍泉窯系青磁	椀	口縁						1.8～	回転ナデ後施釉、工具による施文	回転ナデ後施釉	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y6/2)		良好	自然の落ちこみⅠ(C-5)	－	時期区分：E期(13C)
29	73	龍泉窯系青磁	椀	口縁						2.2～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	オリーブ灰(10Y5/2)	オリーブ灰(10Y5/2)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-2)	上層	時期区分：G期(14C～15C前?)
29	74	龍泉窯系青磁	椀	口縁						2.9～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	オリーブ灰(2.5GY6/1)	オリーブ灰(2.5GY6/1)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-3)	－	時期区分：D期(12C中～後半)
29	75	景徳鎮窯系染付	椀か皿	口縁						1.3～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	灰白(10Y8/1)	灰白(10Y8/1)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-3)	－	時期区分：G期(14C～15C前?)の染付
29	76	景徳鎮窯系染付	椀か皿	口縁						1.1～	回転ナデ後染付文様、施釉	回転ナデ後施釉	灰白(N8/)	灰白(N8/)		良好	自然の落ちこみⅠ(C-2)	－	
29	77	中世常滑窯	甕	口縁						5.9～	回転ナデ、指頭圧痕	回転ナデ、貼り付け	灰(N4/)	暗赤褐(5YR3/2)	長石、赤褐色粒	良好	自然の落ちこみⅠ(B-4)	－	
30	78	古代土師器	甕	口縁						4.4～	削り後指ナデ	横ナデ後刷毛目	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(2.5YR6/4)	石英、長石、角閃石、輝石、赤褐色粒、砂粒	良好	自然の落ちこみⅠ(B-4)	－	
30	79	古代須恵器	甕	胴部						4.8～	ナデ、同心円状の当て具痕	格子目タタキ後ナデ	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-3)	－	121と同一個体の可能性あり
31	89	中世須恵器	鉢	口縁						2.3～	回転ナデ	回転ナデ	灰(N5/)	灰(N6/)	長石	良好	自然の落ちこみⅠ(B-4)	下層	
31	90	中世須恵器	擂鉢	口縁						5.4～	刷毛目後スリ目、横ナデ	横ナデ	灰(N4/)	灰(N4/)	長石	良好	自然の落ちこみⅠ(B-5)	床直上	
31	91	中世瓦質土器	擂鉢	底部						3.6～	粗いナデ、スリ目	粗いナデ、指頭圧痕	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	石英、長石、角閃石、輝石	不良	自然の落ちこみⅠ(B-5)	下層	６本単位の擂目
31	92	中世瓦質土器	擂鉢	口縁						4.8～	横ナデ、スリ目	横ナデ	灰(N4/)	灰(N4/)	石英、長石、角閃石	良好	自然の落ちこみⅠ(C-2)	床直上	６本単位の擂目
31	93	中世瓦質土器	鉢	口縁						4.0～	横ナデ	ヘラ削り	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-4)	２層下	
31	94	中世瓦質土器	火鉢	体部下半部						8.65～	刷毛目後ナデ、指頭圧痕	横ナデ、突帯	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	長石、角閃石、雲母、赤褐色粒、黒褐色粒	良好	自然の落ちこみⅠ(C-3・4)	床直上、下層	
31	95	中世瓦質土器	火鉢	口縁						6.1～	回転ナデ	回転ナデ、突帯、六角柱状・三角状・連子状スタンプ	灰(N4/)	灰(N4/1)	石英、長石、角閃石、輝石、赤褐色粒	良	自然の落ちこみⅠ(C-2)	床直上	
31	96	中世瓦質土器	火鉢	口縁						4.7～	横ナデ	横ナデ、突帯、連子状・方形の放射状スタンプ	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR5/2)	石英、長石、角閃石、金雲母、赤褐色粒	良	自然の落ちこみⅠ(C-3)	下層	
31	97	中世瓦質土器	釜	鍔部						2.75～	刷毛目後ナデ、指頭圧痕	横ナデ	黄灰(2.5Y4/)	黄灰(2.5Y5/)		良好	自然の落ちこみⅠ(C-4)	下層	
31	98	中世土師器	土鍋	口縁						2.1～	横ナデ	横ナデ、刺突文？	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	石英、長石、角閃石、雲母	やや良	自然の落ちこみⅠ(B-4)	下層	肥前系土鍋
31	99	中世土師器	坏	底部		(10.7)				1.6～	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/3)	金雲母、赤褐色粒	良好	自然の落ちこみⅠ(B-2)	最下層	底部：回転糸切り離し、黒班
31	100	中世土師器	小皿	口縁～底部	(6.8)	(6.2)				1.5～	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	石英、金雲母、赤褐色粒	やや良	自然の落ちこみⅠ(B-2)	最下層	底部：回転糸切り離し
31	101	中世土師器	坏	口縁～底部	(8.0)	(5.6)	2.7				ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	角閃石、茶褐色粒	良	自然の落ちこみⅠ(C-4)	床直上	底部：回転糸切り離し後ナデ
31	102	中世土師器	坏	口縁～底部			3.05				回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/3)	角閃石、赤褐色粒	良好	自然の落ちこみⅠ(B-2)	最下層	底部：回転糸切り離し
31	103	龍泉窯系青磁	椀	口縁						3.7～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉、連弁	緑灰(7.5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-2)	下層	鎬わずかにあり 時期区分：F期(13C中～14C初)
31	104	龍泉窯系青磁	椀	底部		(7.2)		1.3	(7.6)	2.8～	回転ナデ後施釉	回転ヘラ削り後施釉	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y5/2)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-5)	下層	削りだし高台、一部施釉 時期区分：G期(14C)
31	105	龍泉窯系青磁	椀	底部		5.6		1.1	6.2	2.5～	回転ナデ後施釉	回転ヘラ削り後施釉	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y6/2)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-2)	床直上	削りだし高台　時期区分：G期(14C)
31	106	近世以降陶器	椀	口縁						4.05～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	灰白(2.5Y8/2)	淡黄(2.5Y8/3)		良好	自然の落ちこみⅠ(C-4)	床直上	
31	107	中世白磁	椀	口縁（玉縁）						1.4～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	灰白(7.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)		良好	自然の落ちこみⅠ(B-3)	床直上	時期区分：C期(11C後～12C前)
31	108	中世陶器	天目椀	底部～体部下半部		4.4		0.7	4.4	3.45～	回転ナデ後施釉	回転ヘラ削り後施釉	黒褐(2.5Y3/2)	黒(2.5GY2/1)		良好	自然の落ちこみⅠ(B・D-3)	床直上	
32	111	中世瓦質土器	火鉢	口縁						9.2～	ナデ	横ナデ、突帯、菊花文・連子状スタンプ	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒	良	自然の落ちこみⅡ(B-4)	－	
32	112	中世瓦器	椀	底部		(7.4)		0.8	7.6	2.3～	回転ナデ	ヘラ削り後回転ナデ	灰白(7.5Y7/1)	褐灰(10YR6/1)		良	自然の落ちこみⅡ(B-4)	－	高台貼付
32	113	中世瓦質土器	小皿	口縁～底部			1.4				回転ナデ	回転ナデ	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	石英	やや良	自然の落ちこみⅡ(B-2)	１層	底部：糸切り鎬わずかに残存 内面：ススス付着
32	114	中世土師器	坏	口縁～底部			3.3				回転ナデ	回転ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英、赤褐色粒	良好	自然の落ちこみⅡ(B-5)	１層	底部：回転糸切り離し
32	115	中世土師器	坏	口縁～底部	(13.2)	(9.8)	2.6				回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	金雲母、赤褐色粒	良好	自然の落ちこみⅡ(B-5)	１層	底部：回転糸切り離し？
32	116	中世土師器	坏	口縁～底部			2.7				ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	石英、茶褐色粒	やや良	自然の落ちこみⅡ(B-4)	－	底部：回転糸切り離し？
32	117	中世青磁	椀	口縁						3.8～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉、鎬蓮弁文	オリーブ灰(5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)		良好	自然の落ちこみⅡ(B-2)	１層	時期区分：E期(13C)
32	118	中世白磁	皿	口縁						1.7～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	明オリーブ灰(2.5GY7/1)		良好	自然の落ちこみⅡ(B-4)	－	口唇部：回転ヘラ削り、無釉 時期区分：F期(13C中～14C初)
32	119	古代須恵器	坏	口縁	(13.6)					2.1～	回転ナデ	回転ナデ	灰(10Y5/1)	暗オリーブ灰(2.5GY4/1)		良好	自然の落ちこみⅡ(A・B-2,C-4・6)	２・３層	
32	120	古代須恵器	坏	口縁～胴部						5.8～	板状工具による削り、横ナデ	回転ヘラ削り後ナデ	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)		良好	自然の落ちこみⅡ(B-4・6,C-6)	１層	
32	121	古代須恵器	甕	胴部						8.7～	同心円状の当て具痕	格子目タタキ、部分的平行タタキ	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	灰褐(5YR4/2)		良好	自然の落ちこみⅡ(B-2,C-3)	１層	79と同一個体の可能性あり

表（Tab）12　土器観察表⑵

図版番号	遺物番号	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材・石質	出土地点	層位	備　　考
8	3	滑石製品	15.90～	11.60～	1.3～1.9	410.60	滑石	S001	―	スス付着、被熱による赤変、石鍋の転用品
10	6	磨製石斧	11.10～	5.50	3.00	305.70	安山岩	S007	床直	欠損の風化度合いが違う
22	20	石鍋	3.90～	6.40～	2.30	58.63	滑石	S006(C-6)	―	
26	49	石鍋	3.30～	5.60～	1.00	25.24	滑石	C-5・6 D-6周辺	―	スス付着
26	50	滑石製品	3.20	2.95	1.20	13.20	滑石	C-2	―	リング状、北壁
26	51	石鍋	3.70～	5.90～	1.90	61.15	滑石	調査区	―	スス付着
26	52	剥片	4.40	4.10	1.20	23.51	安山岩	C-5・6	―	
30	80	滑石製品	2.45	2.20	1.85	14.28	滑石	自然の落ちこみⅠ(B-4)	―	用途不明、穴の直径９㎜
30	81	磨製石器	1.70～	2.10～	0.10～0.20	0.79	粘板岩	自然の落ちこみⅠ(B-2)	―	用途不明
30	82	砥石	5.30～	3.70～	3.50～	60.51	流紋岩	自然の落ちこみⅠ(B-4)	―	
30	83	石製鍋？	3.60～	8.20～	5.30～	117.93	砂岩	自然の落ちこみⅠ(C-5)	上層	スス付着
32	128	砥石	16.60	15.30	8.50	2.800	砂岩	自然の落ちこみⅡ(B-5)	３層	青灰粘土層、北壁

表(Tab)13　石器観察表

図版番号	遺物番号	種　別	器　種	部　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	層位	備　　考
22	21	鉄製品	不明		2.30～	4.10～	0.20	S006(D-6)	―	溝
26	47	鉄製品	釘		3.10～	0.95	0.95	C-4	３層	
26	48	鉄製品	不明		3.20～	4.20～	0.30	東トレンチ	―	
30	84	鉄製品	鎌		3.10	6.60～	0.20	自然の落ちこみⅠ(C-4)	―	
30	85	鉄製品	釘		2.70～	0.90	0.70	自然の落ちこみⅠ(C-3)	２層	
30	86	鉄製品	釘		5.50～	1.30	1.00	自然の落ちこみⅠ(B-3)	―	
30	87	鉄製品	不明		2.05～	2.00～	0.45	B-4	―	試掘
31	109	鉄製品	釘		4.85～	1.20	0.95	自然の落ちこみⅠ(B-3)	最下層	
31	110	鉄製品	刀子		6.40	1.65	0.20	不明	―	
32	124	鉄製品	刀子		3.10～	1.30	0.30	自然の落ちこみⅡ(B-4)	下層	
32	125	鉄製品	釘		3.80～	0.90	0.60	自然の落ちこみⅡ	１層	
32	126	鉄製品	不明		0.90～	1.90,～	0.30	自然の落ちこみⅡ	―	
32	127	鉄製品	釘		1.90～	0.40	0.35	自然の落ちこみⅡ	下層	

表(Tab)14　鉄器観察表

図版番号	遺物番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	層位	色調	焼成	胎土	備考
32	123	土錘	2.75～	0.8	0.8	自然の落ちこみⅡ	１層	橙(5YR6/6)	良好	石英、赤褐色粒、黒色粒、白色粒	穴３～４㎜

表(Tab)15　土錘観察表

図版番号	遺物番号	銭貨名	国名	初鋳年	書体	出土地点	層位	備考
30	88	寛永通宝	日本	1626	篆書	自然の落ちこみⅠ	―	
32	122	開元通宝	唐	621	篆書	自然の落ちこみⅡ(B-3)	１層	模鋳銭？

表(Tab)16　古銭観察表

引用・参考文献

村上豊喜・田邊哲夫　1987　「玉名市」　『角川日本地名大辞典　43　熊本県』　角川書店

田邊哲夫　1987 「菊池川口の港の変遷について(私案)」『高瀬湊関係歴史調査報告書(一)』 玉名市歴史資料集成第一集　玉名市、玉名市史編集委員会

西田道世　1987 「高瀬湊の地理的位置」『高瀬湊関係歴史調査報告書(一)』 玉名市歴史資料集第一集　玉名市、玉名市史編集委員会

玉名市・玉名市史編集委員会　1988　『高瀬湊関係歴史調査報告書（二)』　玉名市歴史資料集成第三集

玉名市・玉名市史編集委員会　1988　『高瀬湊関係歴史調査報告書（三)』　玉名市歴史資料集成第五集

玉名市・玉名市史編集委員会　1992　『玉名市史　資料篇１　絵図・地図』　玉名市

玉名市・玉名市史編集委員会　1993　『玉名市史　資料篇５　古文書』　玉名市

玉名市・玉名市史編集委員会　1994　『玉名郡衛』　玉名市歴史資料集成第12集―市政40周年記念―

美濃口雅朗　1994　「熊本県における中世前期の土師器について」　『中近世土器の基礎研究Ｘ』
日本中世土器研究会

山本信夫　1995　「中世前期の貿易陶磁器」　『概説中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　真陽社

中野晴久　1995　「中世陶器(常滑・渥美)」　『概説中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　真陽社

木戸雅寿　1995　「石鍋」　『概説中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編

中世土器研究会編　1995　『概説中世の土器・陶磁器』　真陽社

日本貨幣商協同組合　1998　『日本貨幣カタログ　1998』

大橋康二・西田宏子監修　1998　『古伊万里』　別冊太陽　日本のこころ63　平凡社

山本信夫　2000　『太宰府条坊跡XV』　－陶磁器分類編－　太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会

九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』－九州近世陶磁学会10周年記念－

家田淳一　2000　「陶器の編年２　擂鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯・灯火具」
『九州陶器の編年』－九州近世陶器学会10周年記念－　九州近世陶器学会

野上建紀　2000　「磁器の編年（色絵以外）１．碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶器の編年』
－九州近世陶器学会10周年記念－　九州近世陶器学会

水野哲郎　2000　『祇園遺跡』　熊本県文化財調査報告第188集　熊本県教育委員会

山下義満　2000　『灰塚遺跡（Ⅱ)』　熊本県文化財調査報告第197集　熊本県教育委員会

江戸遺跡研究会編　2001　『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房

小野正敏編　2001　『図解　日本の中世遺跡』　東京大学出版会

高谷和生　2001　『柳町遺跡Ｉ』　熊本県文化財調査報告第200集　熊本県教育委員会

東北中世考古学会編　2001　『中世の出土模鋳銭』　高志書院

東北中世考古学会編　2001　『竪穴と掘立―中世遺構論の課題―』　高志書院

九州近世陶磁学会　2002　『国内出土の肥前陶磁』　―西日本の流通をさぐる―　第一・二分冊
第12回九州近世陶磁学会　資料

網田龍生　2003　「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』
―考古学研究室創設30周年記念論文集―　龍田考古学

Figures

Fig 1 Distribution map around the *Murenomae* site (the scale 1:50,000)
Fig 2 Topographic section (the scale 1:50,000)
Fig 3 Section in the *Murenomae* site (the scale 1:1000)
Fig 4 Archaeological features (1) (the scale 1:200)
Fig 5 Archaeological features (2) (3) (the scale 1:200)
Fig 6 Section (1) (the scale 1:80)
Fig 7 Section (2) (the scale 1:80)
Fig 8 Earthen pit for burning (archaeological feature, No.1)・relics (the scale 1:30,1:3,1:2)
Fig 9 Earthen pits for burning (archaeological features, No.2,3)・Earthen pits (archaeological features, No.4,5)・relics (the scale 1:30,1:3)
Fig10 Earthen pit (archaeological feature, No.7)・relics (the scale 1:30,2:3,)
Fig11 Earthen pit (archaeological feature, No.7)・relics (the scale 1:10,1:3,)
Fig12 Embedded-pillar building (archaeological feature, No.11) (the scale 1:80)
Fig13 Pit (5th archaeological feature, No.11)・relics (the scale 1:20,1:3)
Fig14 Embedded-pillar building (archaeological feature, No.12) (the scale 1:80)
Fig15 Embedded-pillar building (archaeological features, above:No.13、below:No.14) (the scale 1:80)
Fig16 Feature of furrow (archaeological feature, No.15) (the scale 1:80)
Fig17 Feature of furrow (archaeological feature, No.16) (the scale 1:80,1:40)
Fig18 Stake lines (archaeological features, No.19,20) (the scale 1:80,1:20)
Fig19 Pits (left:No.7 C-6 grid, right:No.1 C-4 grid)・relics (the scale 1:20,1:3)
Fig20 Ditch (archaeological feature, No.8)・relics (the scale 1:80,1:40,1:3)
Fig21 Ditch (archaeological feature, No.6) (the scale 1:80)
Fig22 Relics of ditch (archaeological feature, No.6) (the scale 1:3,2:3,1:2)
Fig23 Features of furrow (archaeological feature, No.18) (the scale 1:100)
Fig24 Ditch (archaeological feature, No.17) (the scale 1:80,1:40)
Fig25 Relics (1) of layers including relics (the scale 1:3)
Fig26 Relics (2) of layers including relics (the scale 1:3,2:3,1:2)
Fig27 Natural hollow Ⅰ (the scale 1:80,1:40)
Fig28 Biological mark (archaeological feature, No.6) (the scale 1:80)
Fig29 Relics (1) of upper layer and hoards of natural hollow Ⅰ (the scale 1:3)
Fig30 Relics (2) of upper layer and hoards of natural hollow Ⅰ (the scale 2:3,1:2,1:1)
Fig31 Relics of lower layers of natural nollow Ⅰ (the scale 1:3,1:2)
Fig32 Relics of layers including relics under natural hollow Ⅱ (the scale 1:3,1:2,1:1)
Fig33 Map about changes of some ports at the mouth of the *Kikuchi* river (*Tanabe* 1988)
Fig34 Related map of some ports ports and some manors (added to *Tanabe's* data in 1988)
Fig35 Section map of a village around the *Murenomae* site (added to date map of *Tamana* city)
Fig36 Archaeological features of the *Murenomae* site (group A and B in medieval period)
Fig37 Archaeological features of the *Murenomae* site (group C in medieval period, before medievol period, after early modern period)

Tables

Tab 1 List of sites around the site (1)
Tab 2 List of sites around the site (2)
Tab 3 List of sites around the site (3)
Tab 4 List of sites around the site (4)
Tab 5 List of sites around the site (5)

Tab 6　List of sites around the site (6)
Tab 7　List of sites around the site (7)
Tab 8　Pottery type of *Dazaifu*, and chronology of domestic glazed pottery and trading glazed pottery (*Yamamoto* 1995)
Tab 9　Estimated age of some ports at the mouth of the *Kikuchi* river (*Tanabe* 1988)
Tab10　Chronicle from northern to central *Kumamoto* prefenture (*Minoguchi* 1994)
Tab11　Ovserving list of potteries (1)
Tab12　Ovserving list of potteries (2)
Tab13　Ovserving list of stone implements and weapons
Tab14　Ovserving list of iron tools
Tab15　Ovserving list of clay net sinkers
Tab16　Ovserving list of old coins

Photographic Plates

PL 1　Aerial photograph 1 (shot Mt. *Konoha* from the site)
PL 2　Aerial photograph 2 (shot *Unzenn* from the site)
PL 3　Aerial photograph 3 (shot around the site)
PL 4　Aerial photograph 4 (the whole view of the site)
PL 5　Section of layer (B,C-2 grid)
PL 6　Archaeological feature, No.15 under investigation
PL 7　Biological mark (natural hollow Ⅰ) under investigation
PL 8　Relics
PL 9　A kind of *Hazi* ware in medieval period 【cooking pot】 (relic No.1)
PL10　The whole view of the site (1)
PL11　The whole view of the site (2)
PL12　The whole view of the site (3)
PL13　Section 1 (northeast side :C-8 grid)
PL14　Section 2 (southwest side :C-2 grid)
PL15　Section 3 (southwest side :B-2 grid)
PL16　Section 4 (deep trench of southwest side :C,D-1 grid)
PL17　Archaeological features, No.1～3 under investigation
PL18　Archaeological feature, No.1 after investigation
PL19　Archaeological features, No.2,3 after investigation
PL20　Archaeological feature, No.4 after investigation
PL21　Archaeological feature, No.5 after investigation
PL22　A relic of archaeological feature, No.7 (relic No.7)
PL23　Archaeological feature, No.10 under investigation
PL24　Archaeological feature, No.10 under investigation
PL25　Archaeological feature, No.6 after investigation
PL26　Section of archaeological feature, No.6
PL27　Relics of archaeological feature, No.6 (distant view) ※Upper layer is archaeological feature, natural hollow Ⅰ
PL28　A relic of archaeological feature, No.6 (close view:relic No.17)
PL29　A relic of archaeological feature, No.6 (close view:relic No.16)
PL30　Archaeological features, No.11,13,8 after investigation
PL31　Section of archaeological feature, No.8
PL32　Archaeological features, No.12,14 after investigation
PL33　Embedded -pillar buildings (archaeological features, No. 11～14) after investigation

PL34 A relic (relic No.11:5th pit of archaeological feature, No.11)
PL35 A relic (relic No.12:7th pit of C-6 grid)
PL36 Pit－D of archaeological feature, No.20 under investigation
PL37 Pit－A of archaeological feature, No.19 under investigation
PL38 Stakes (left :natural hollow Ⅰ, right:Pit－B of archaeological feature, No.19)
PL39 Natural hollow after investigation
PL40 Biological mark of natural hollow Ⅰ under investigation
PL41 Section of bed layer, natural hollow Ⅰ
PL42 Section of natural hollow Ⅰ (layers under bed layer, natural hollow Ⅱ are 1st and 2nd layers bed layer)
PL43 A stake of natural hollow Ⅰ under investigation
PL44 A stake of natural hollow Ⅰ
PL45 A relic of natural hollow Ⅰ (relic No.105)
PL46 A relic (relic No.122 :layers including relics under natural hollow Ⅱ)
PL47 Archaeological feature, No.17 under investigation
PL48 Archaeological feature, No.17 after investigation
PL49 Archaeological feature, No.15 under investigation
PL50 Archaeological feature, No.15 after investigation
PL51 Archaeological feature, No.16 under investigation
PL52 Archaeological feature, No.16 after investigation
PL53 Archaeological feature, No.18 under investigation (north side)
PL54 Archaeological feature, No.18 after investigation (north side)
PL55 Archaeological feature, No.18 after investigation (south side)
PL56 View of investigation (1)
PL57 View of investigation (2)
PL58 View of investigation (3)
PL59 View of investigation (4)
PL60 Workers
PL61 Relics of archaeological features, No.1,2,7,8
PL62 Relics of archaeological features, No.10,11
PL63 Relics of archaeological feature, No.1 pit of C-4 grid
PL64 Relics of archaeological feature, No.6
PL65 Relics of upper layers and hoards (1) of natural hollow Ⅰ
PL66 Relics of upper layers and hoards (2) of natural hollow Ⅰ
PL67 Relics of upper layers and hoards (3) of natural hollow Ⅰ
PL68 Iron tools of natural hollow Ⅰ
PL69 Relics of lower layer (1) of natural hollow Ⅰ
PL70 Relics of lower layer (2) of natural hollow Ⅰ
PL71 Relics (1) of layers including relics
PL72 Relics (2) of layers including relics
PL73 Relics (3) of layers including relics
PL74 Relics (4) of layers including relics
PL75 Relics (1) of natural hollow Ⅱ
PL76 Relics (2) of natural hollow Ⅱ
PL77 Kinds of iron in the site
PL78 Clay clod of archaeological features, No.1,2

Summary

1. Beginning

Nineteen archaeological features were found through the investigative excavation of the *Murenomae* site. There were a ditch and two stake lines after early modern period, four embedded-pillar buildings, a ditch and seven earthen pits in medieval period, three archaeological features of three furrows and a ditch before medieval period.

I would like to say my opinion about the site from medieval period to early modern period.

2. Site and environment

1 Archaeological features and relics in medieval period

1) Grouping and time

We found twelve archaeological features in medieval period, judging from relics. I divided them into three groups (A,B,C).

Group A has a ditch(archaeological feature, No.6) which flowed from north to south and two embedded-pillar buildings(archaeological features, No.12,14). I supposed they were the same time, from the last half of 12th century to the last half of 13th century. Because those axes of a ditch (archaeological feature, No.6) and two embedded-pillar buildings(archaeological features, No. 12,14) pointed to almost the same direction. I supposed they were built and destroyed between the last half of 12th century and the last half of 13th century, through the result of radiocarbon dating and relics.

Group B has two embedded-pillar buildings(archaeological features, No.11,13). I supposed they were the same time. Because those axes of two embedded-pillar buildings(archaeological features, No.11,13) pointed to almost the same direction, but they were different from the axis of a ditch(archaeological feature, No.6). I supposed group A was older than group B, because group B folowed a ditch.

Group C has seven earthern pits(archaeological features, No.1,2,3,4,5,7,10) in medieval period. I supposed three earthern pits(archaeological features, No.1,2,3) were the same time, because their fill were very similar each other. But the others were not clear before and after.

Group D has three archaeological features of three furrows and a ditch. They had a relation to the cultivation. They were not clear before and after because of no relics.

2) Character of the site

Mr. *Tetsuo Tanabe* showed that *Tsuru* region which had *Bairin Tenmangu* shrine, developed as a port of the *Kikuti* family. I supported his theory, because there were many imported glazed wares in the site.

And there was a lustrous black iron-glazed stoneware (it is maybe a kind of imported glazed ware) in the site, I supposed it had a relation to some castles and temples near here. In fact, there is the ruin of *Hanamureyamakitsyouzi* temple (medieval period) near the site. I supposed this site was a village ruled by the *Kikuchi* family from the last half of 12th century to the last half of 13th century.

2 Archaeological features and relics after early modern period

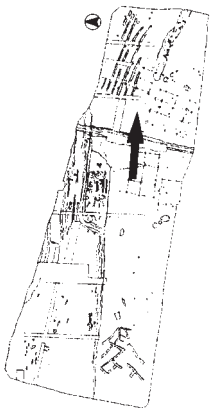
1) Character of the site

We found two archaeological features after early modern period, a ditch(archaeological feature, No.8) and two stake lines(archaeological features, No.19,20). A piece of earthenware bowl with inner textured surface used as a mortar, was found in a ditch. It was made in the latter half of 17th century, according to the ceramic chronology by Mr. *Zyunichi Ieda*. So I supposed this ditch was used after the latter half of 17th century. Two stake lines are not clear before and after because of no relics.

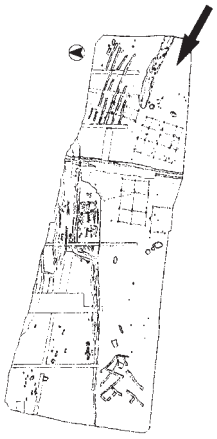
According to the map of *Tamana* county and village which was made between AD1879-1882, we can see the place names and land uses in the early modern period. Then the site which was surrounded by the *Konoha* river and a ditch, was used as a cultivated land. So I supposed the site was used for a in cultinated land in early modern period.

3. The last

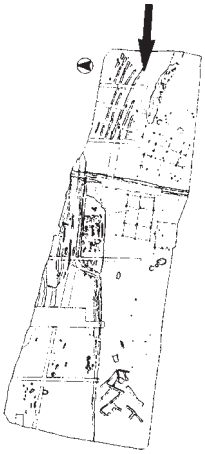
Some investigative excavations will be carried out around the site because of constructing prefectural road, the *Shinkansen* and river improvement. The character of this site will come to clear through these investigative excavations in the future.



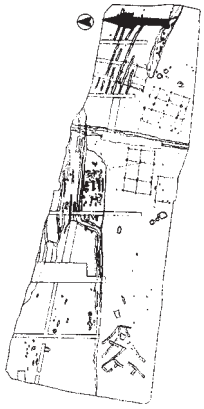
写真(PL)10
遺跡全景(1)



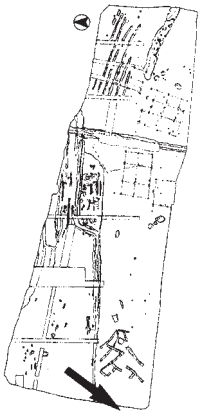
写真(PL)11
遺跡全景(2)



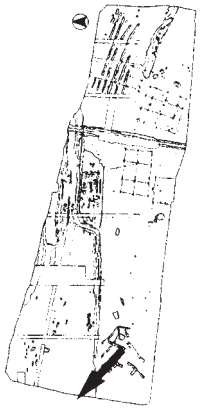
写真(PL)12
遺跡全景(3)



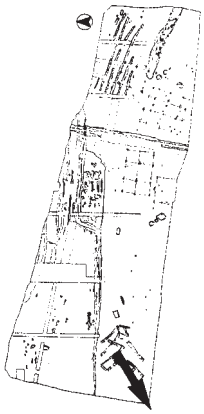
写真(PL)13
土層断面 1
(北東側：C－8)



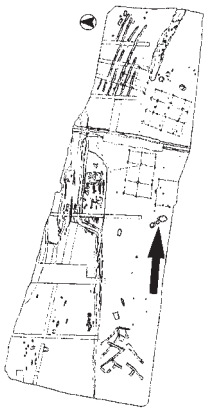
写真(PL)14
土層断面 2
(南西側：C－2)

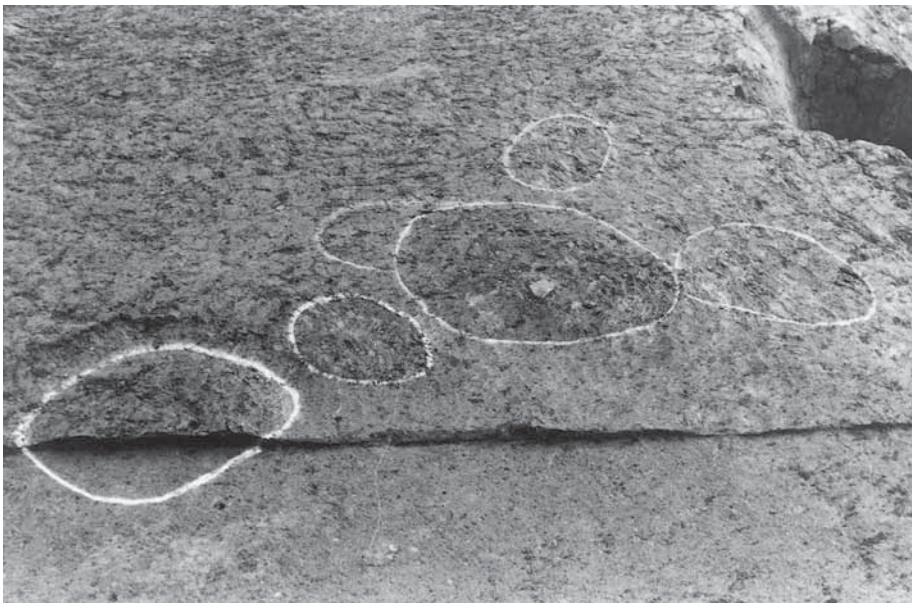


写真(PL)15
土層断面 3
(南西側：B－2)

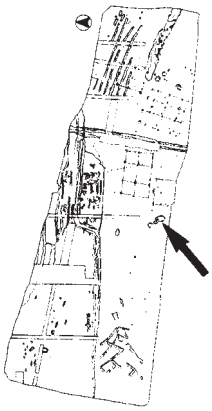


写真(PL)16
土層断面４
(南西深掘：C、D－1)

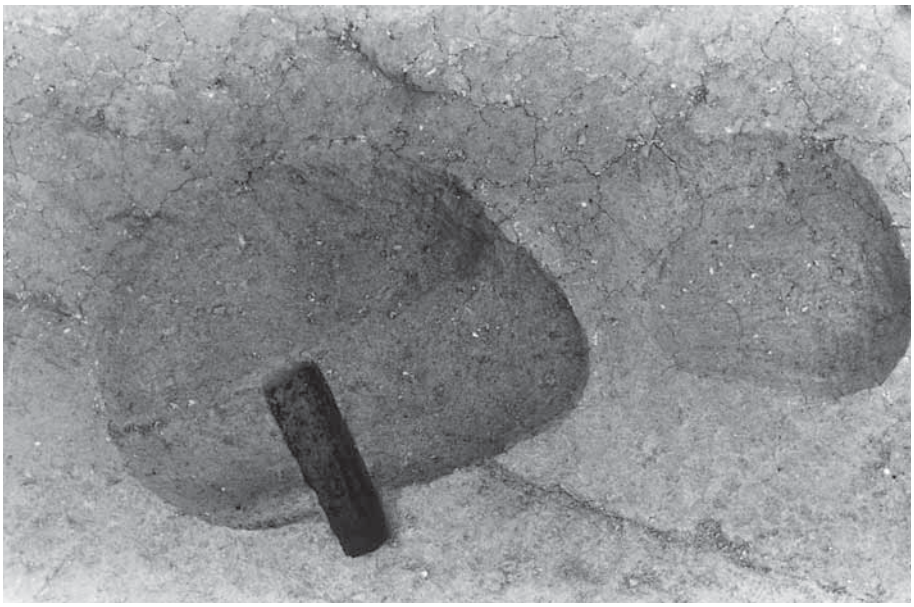


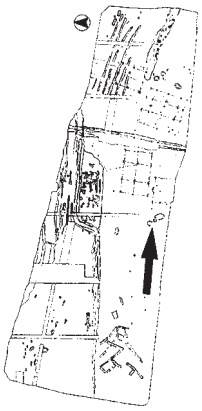


写真(PL)17
S001～003検出状況

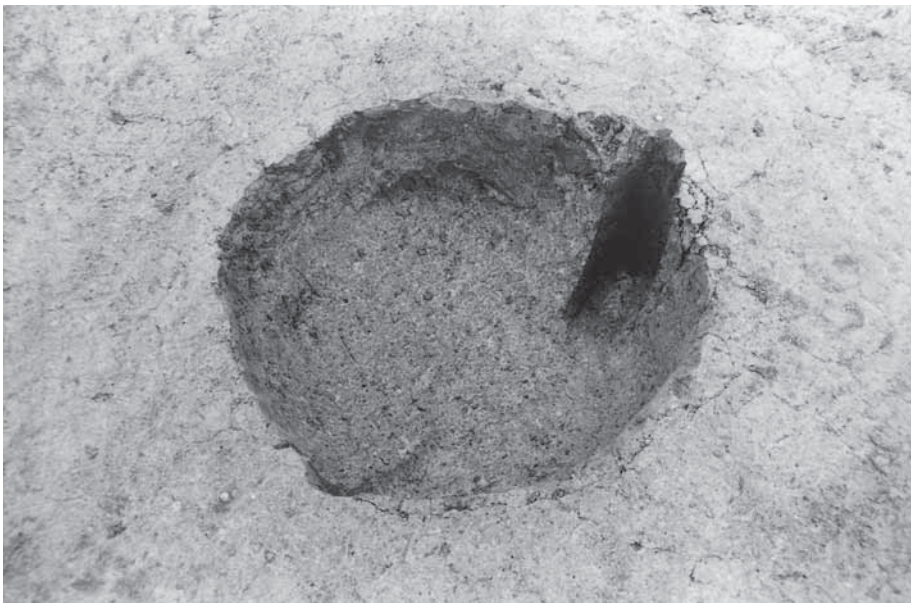


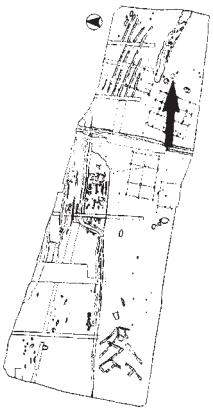
写真(PL)18
S001完掘状況



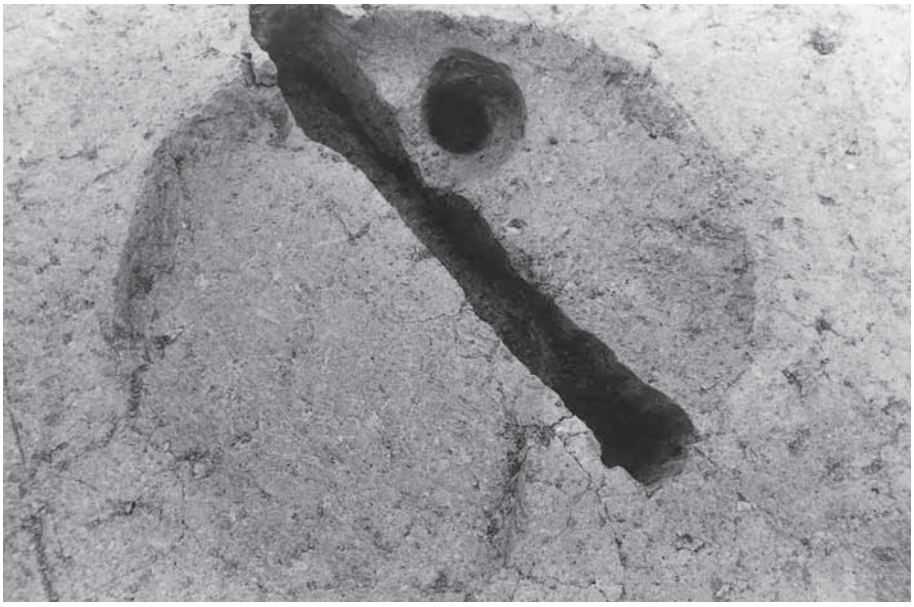


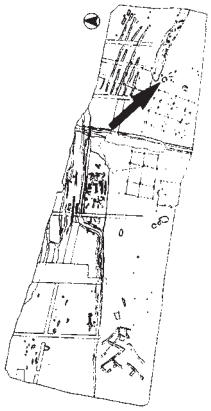
写真(PL)19
S002, 003完掘状況



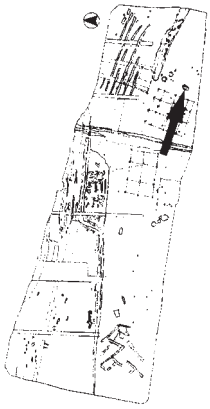


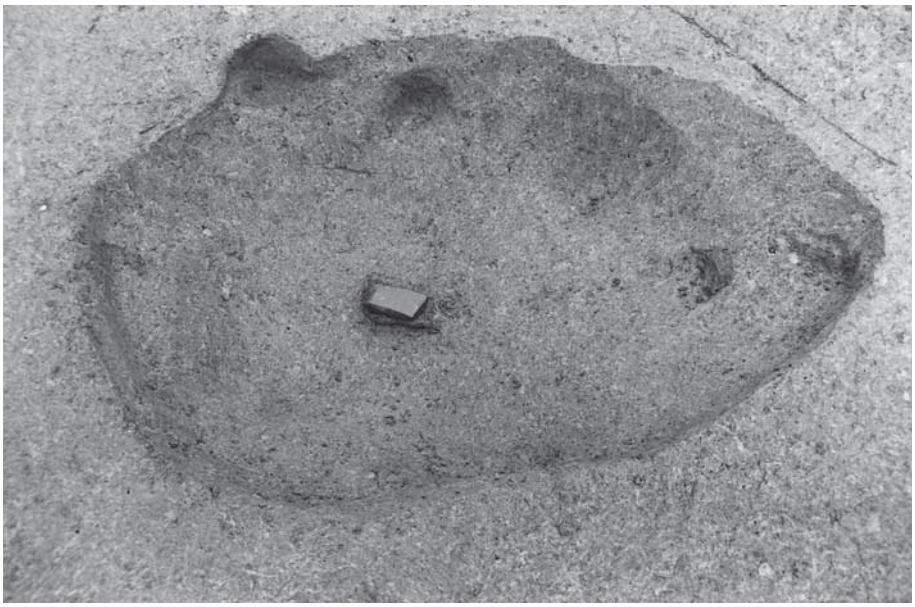
写真(PL)20
S004完掘状況



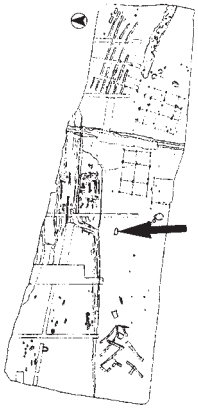


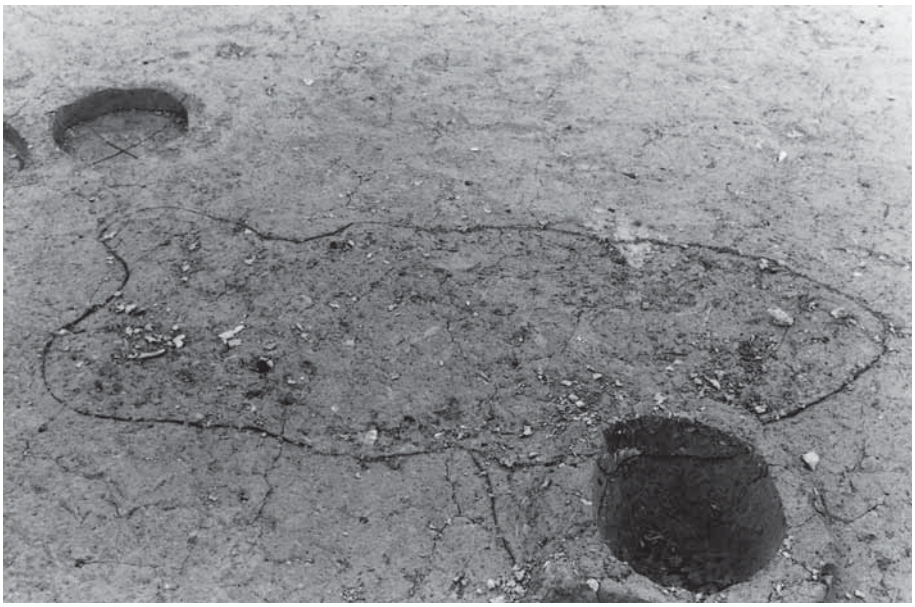
写真(PL)21
S005完掘状況



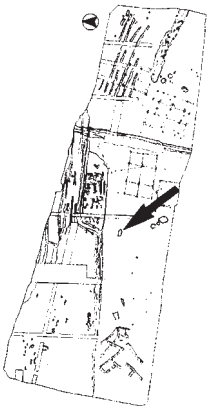


写真(PL)22
S007遺物出土状況
(遺物番号6)

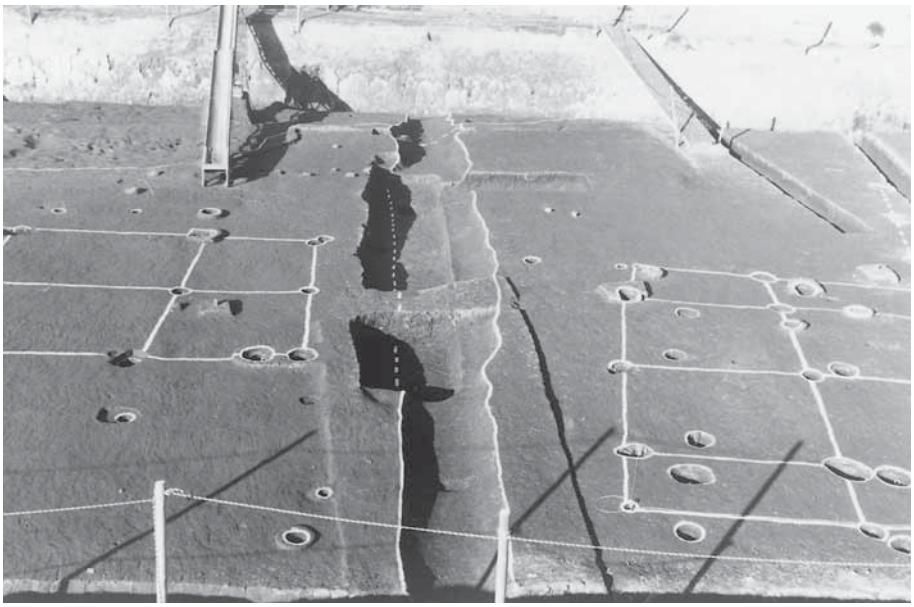


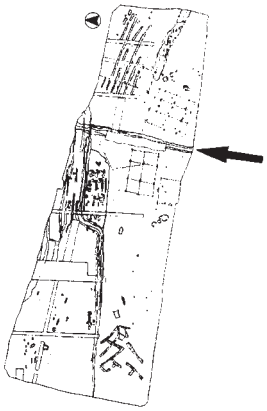


写真(PL)23
S010検出状況

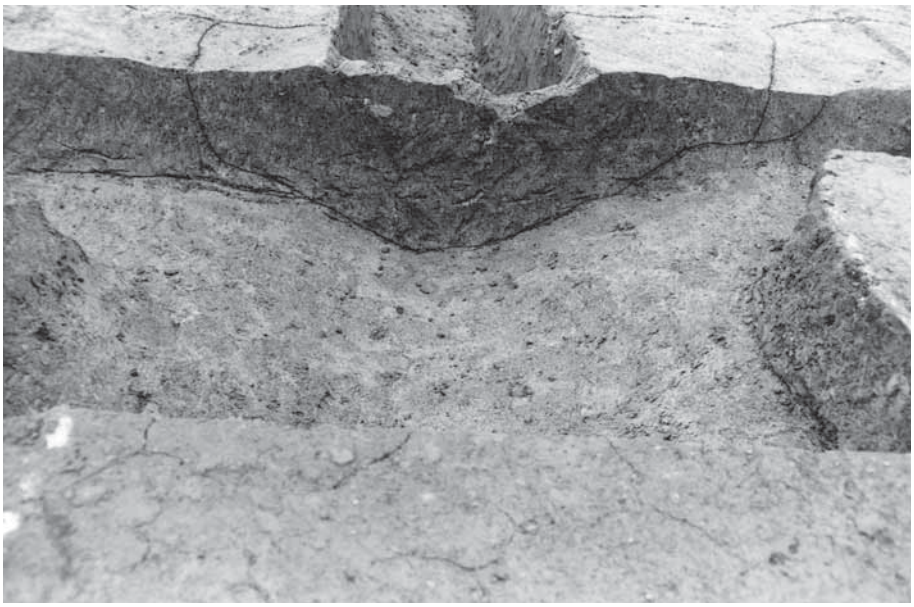


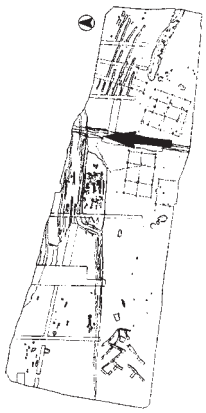
写真(PL)24
S010半裁状況



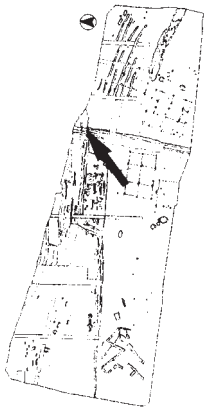


写真(PL)25
S006完掘状況

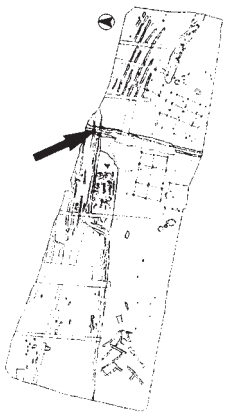




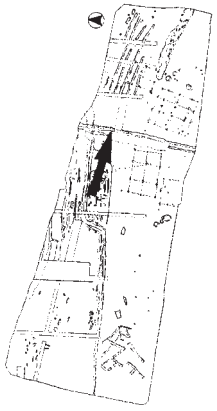
写真(PL)26
S006土層断面



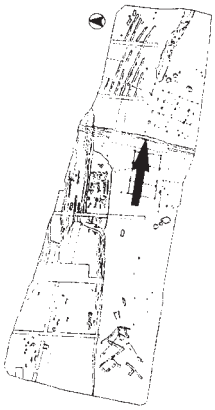
写真(PL)27
S006遺物出土状況
(遠景)上層は自然
の落ちこみⅠ

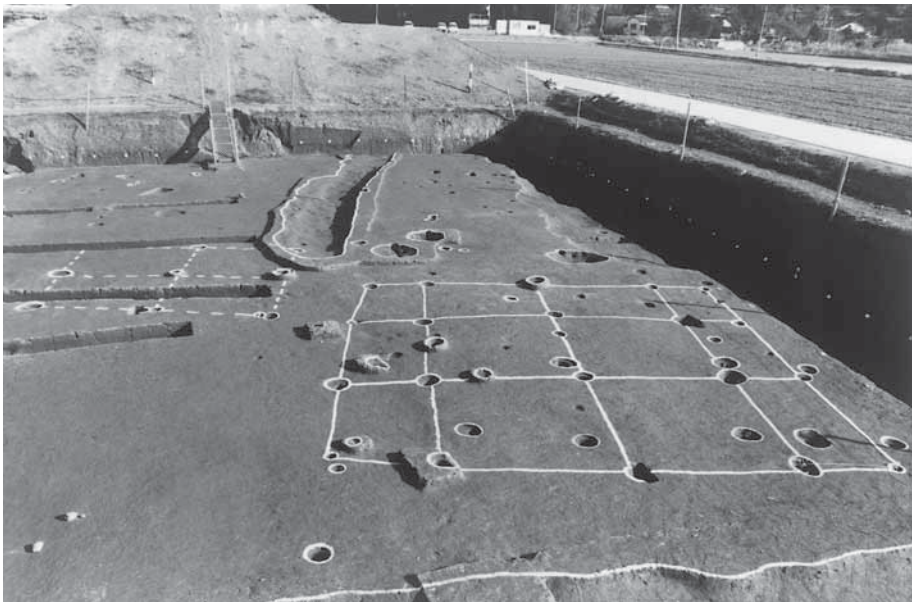


写真(PL)28
S006遺物出土状況
(近景：遺物番号17)

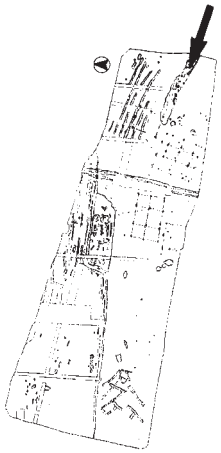


写真(PL)29
S006遺物出土状況
(近景：遺物番号16)

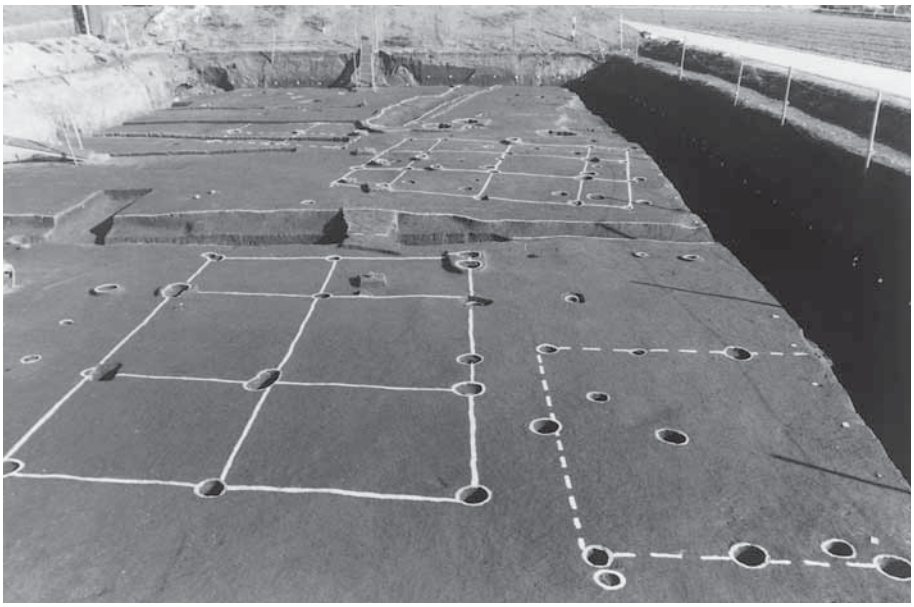


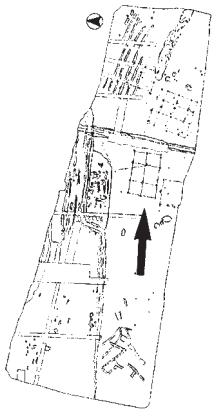


写真(PL)30
S011, 013, 008
完掘状況

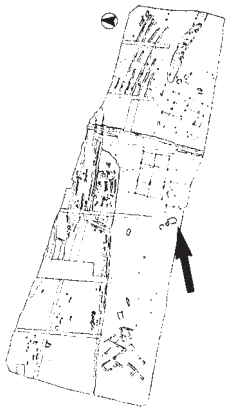


写真(PL)31
S008土層断面

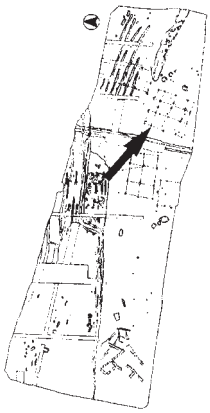


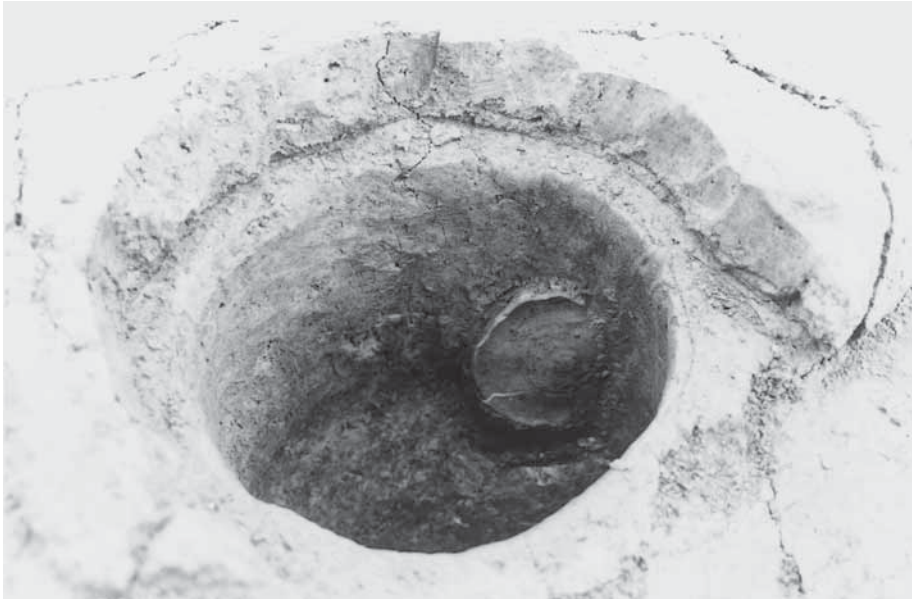


写真(PL)32
S012, 014完掘状況

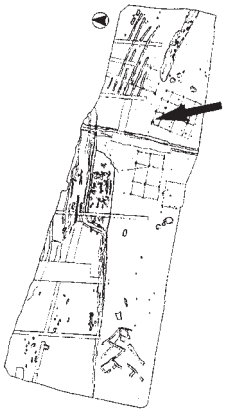


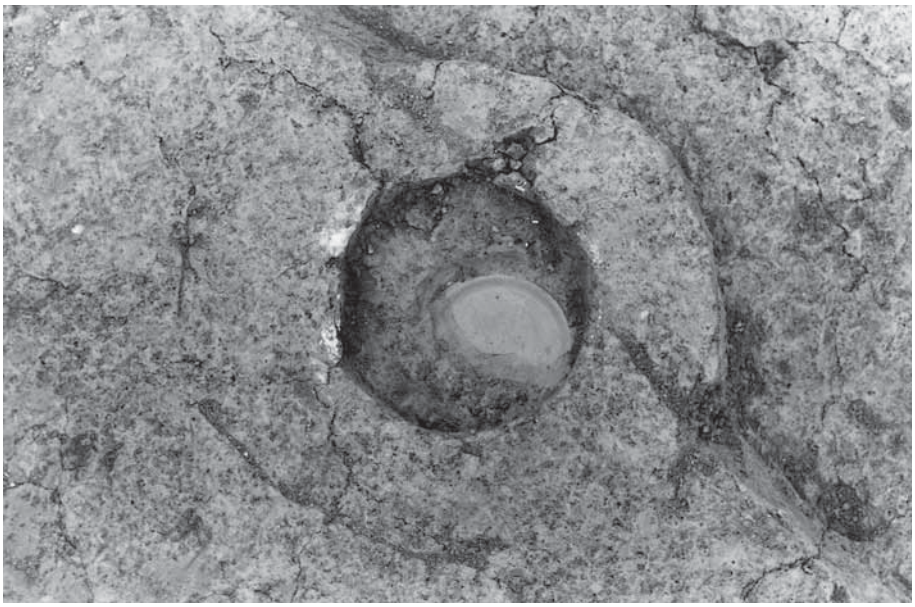
写真(PL)33
掘立柱建物群
(S011～014)
完掘状況



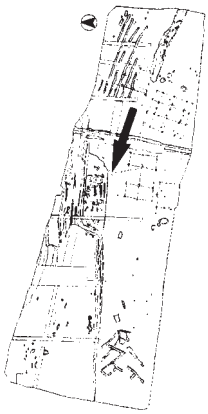


写真(PL)34
遺物出土状況
(遺物番号9：S011
のピット５)

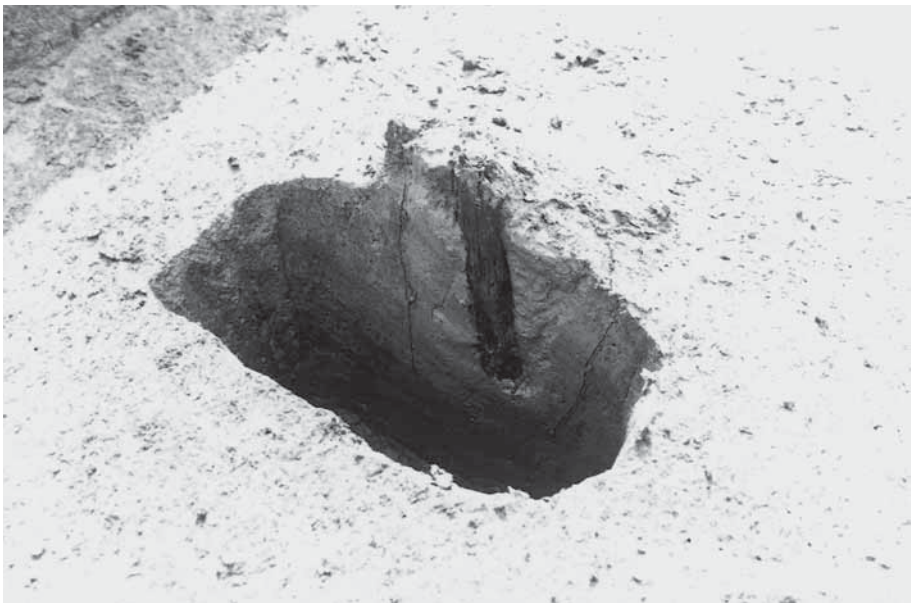


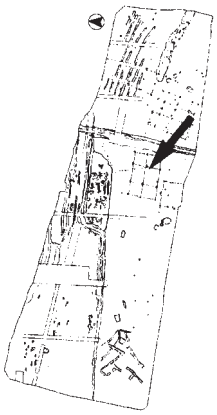


写真(PL)35
遺物出土状況
(遺物番号10：Ｃ－
６のピット7)



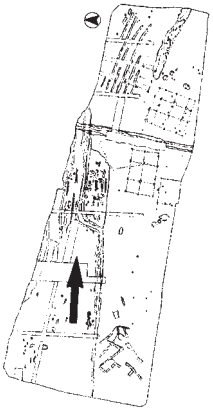
写真(PL)36
S020のピットＤ杭列
半裁状況



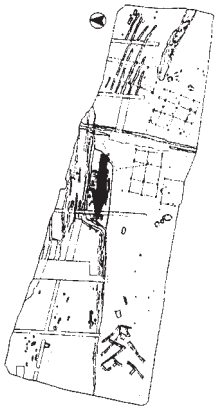


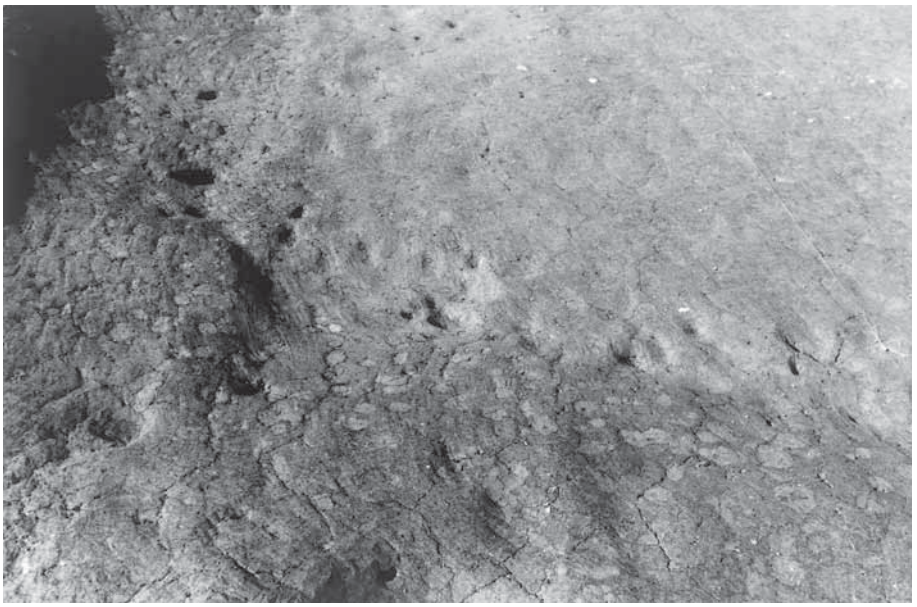
写真(PL)37
Ｓ019のピットＡ列
半裁状況

写真(PL)38
杭材
(左：自然の落ちこみＩ内, 右：S019のピットＢ)

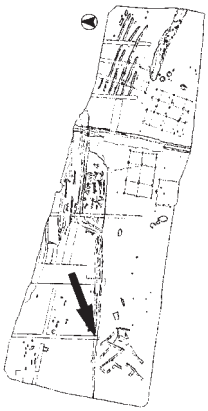


写真(PL)39
自然の落ちこみＩ
完掘状況

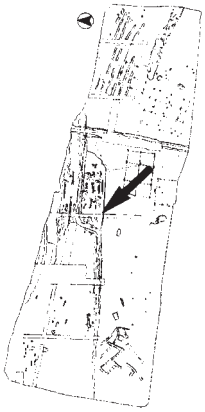




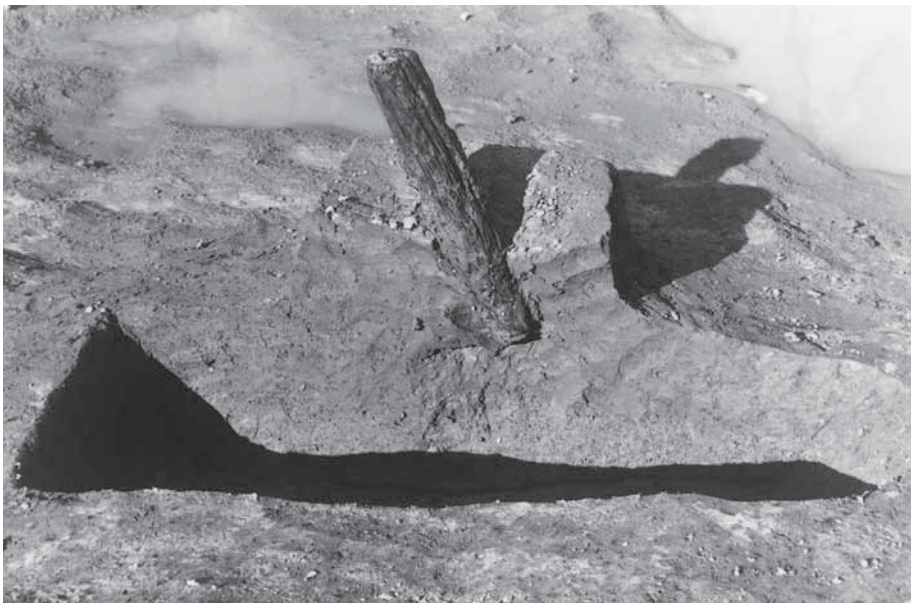
写真(PL)40
自然の落ちこみⅠ内
生物痕跡検出状況

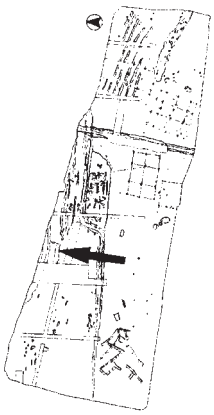


写真(PL)41
自然の落ちこみⅠ
床土断面状況

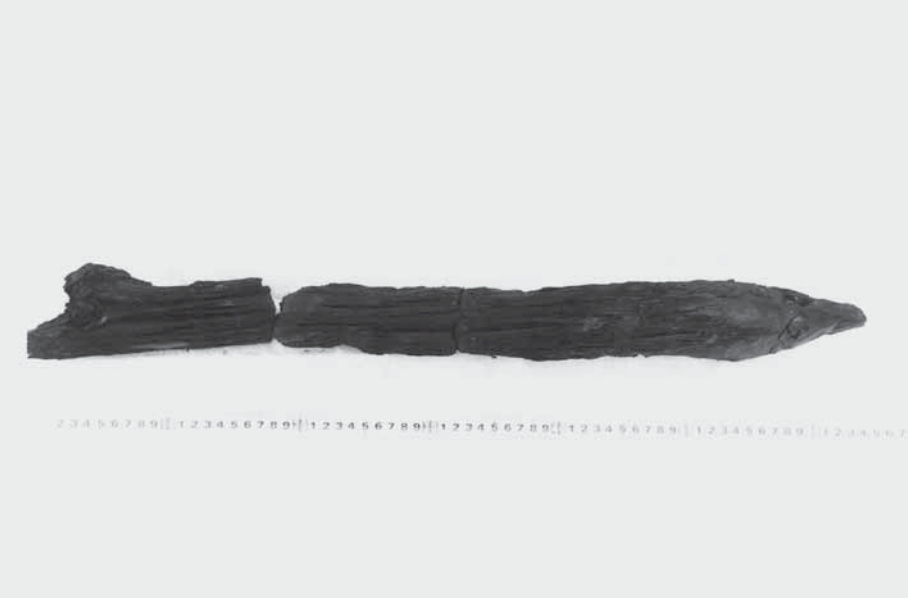


写真(PL)42
自然の落ちこみⅠ
土層断面
(下層は自然の落ちこみⅡ)

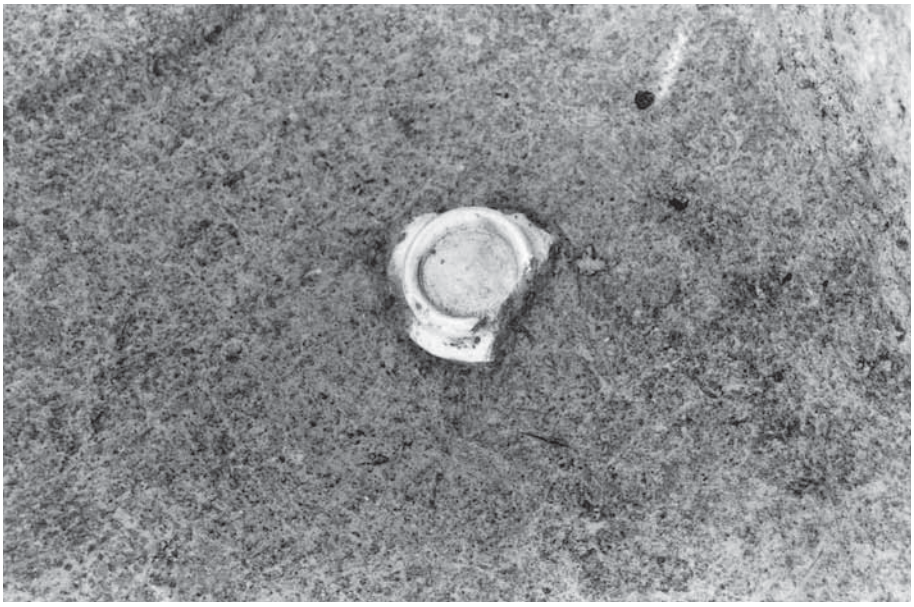


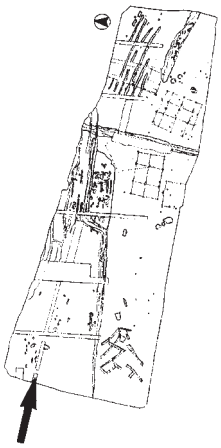


写真(PL)43
自然の落ちこみⅠ
内の杭半裁状況

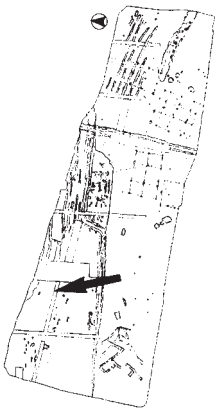


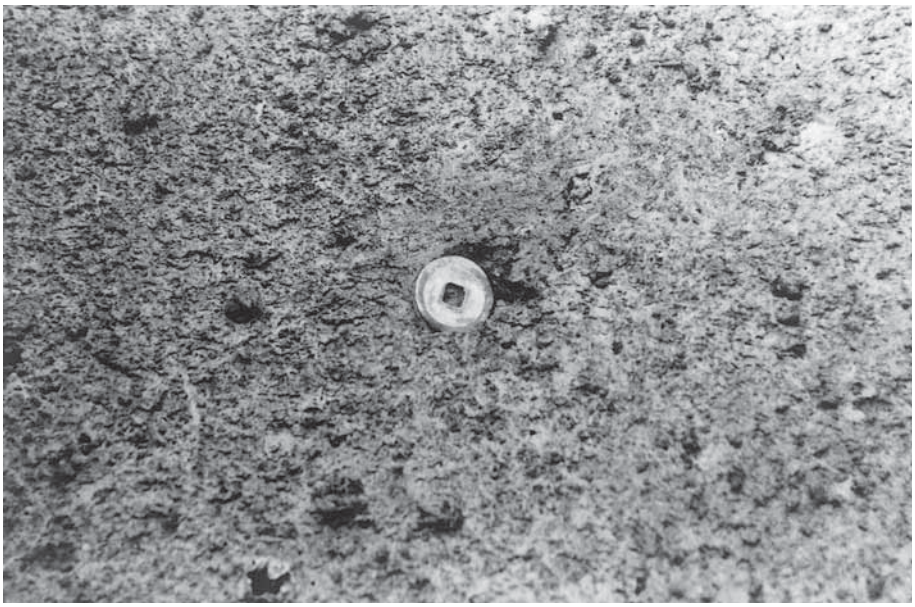
写真(PL)44
自然の落ちこみⅠ
内の出土杭



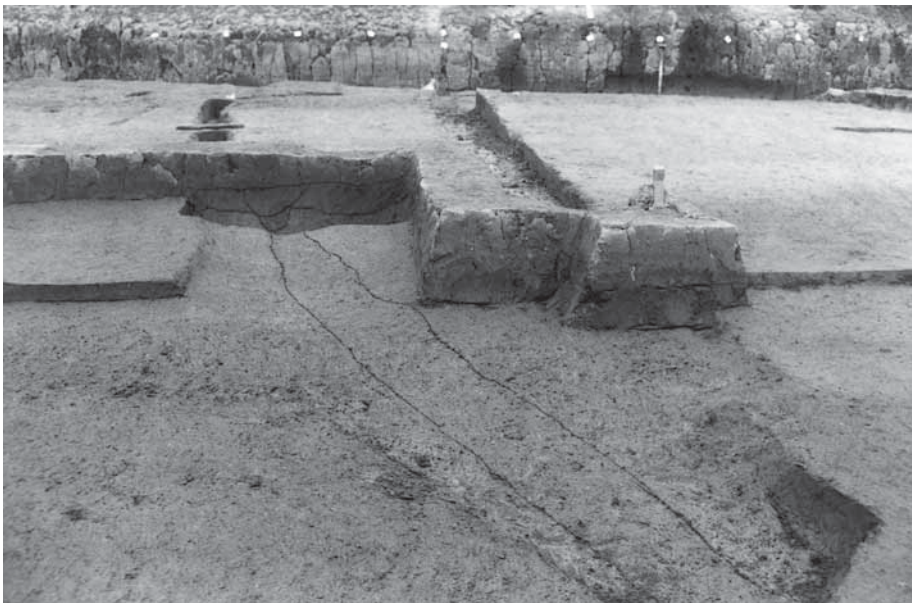


写真(PL)45
自然の落ちこみⅠ
遺物出土状況
(遺物番号105)

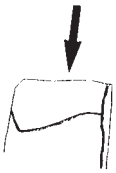




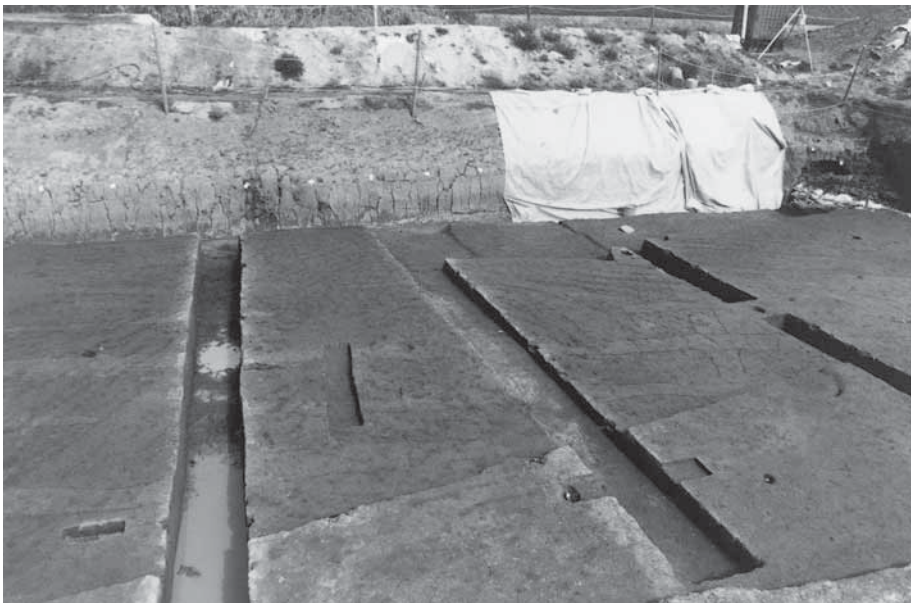
写真(PL)46
遺物出土状況
(遺物番号122：
自然の落ちこみ
Ⅱの包含層)

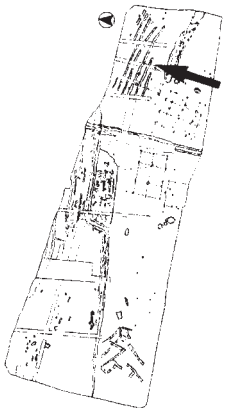


写真(PL)47
S017検出状況

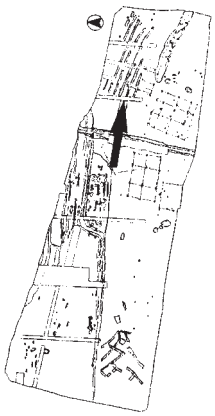


写真(PL)48
S017完掘状況

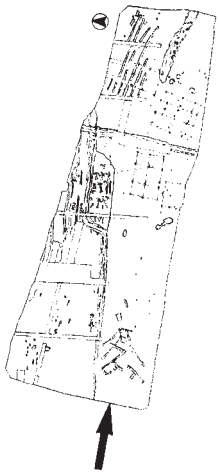




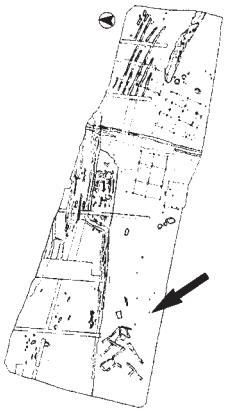
写真(PL)49
S015検出状況

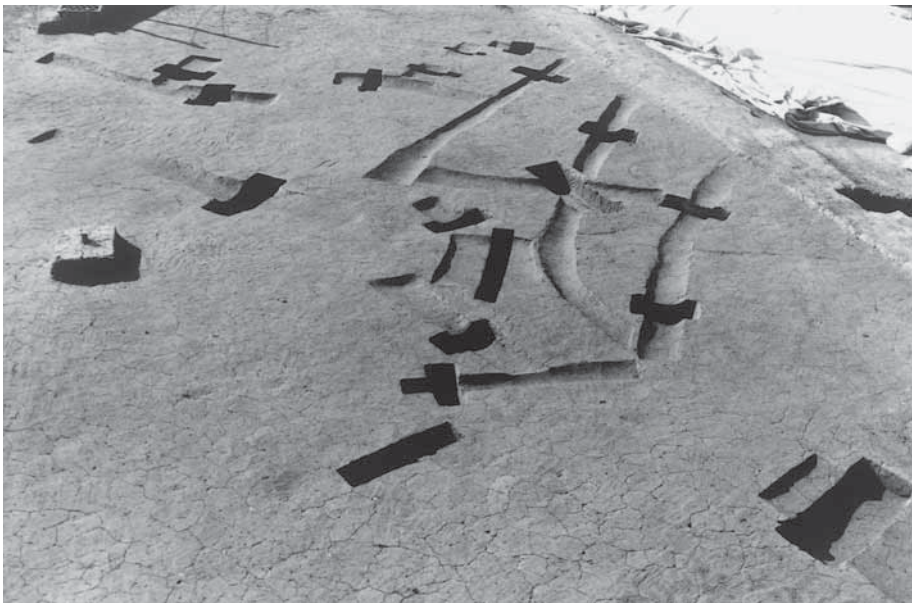


写真(PL)50
S015完掘状況

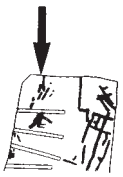


写真(PL)51
S016検出状況



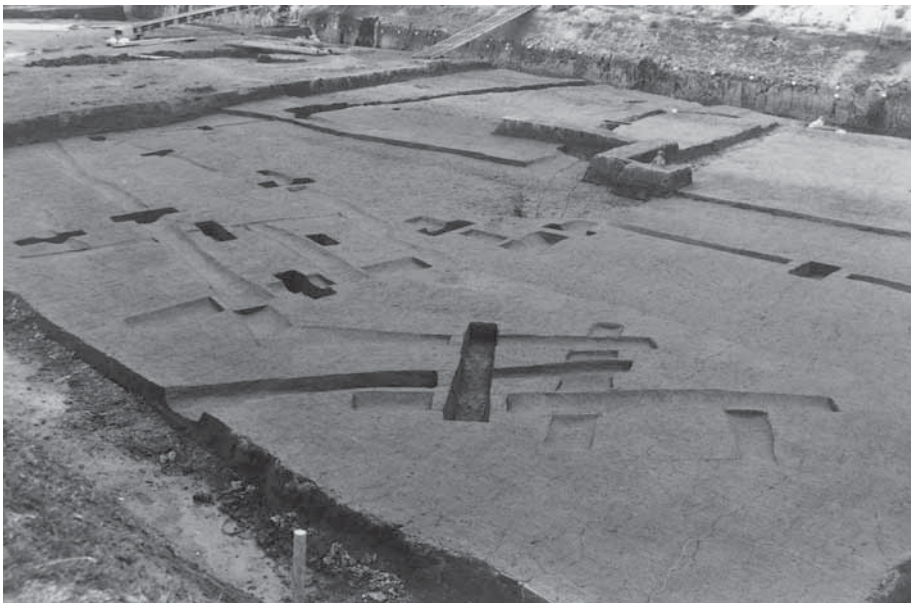


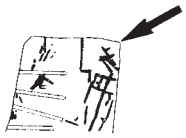
写真(PL)52
S016完掘状況



写真(PL)53
S018検出状況
(北側)

写真(PL)54
S018完掘状況
(北側)





写真(PL)55
S018完掘状況
(南側)

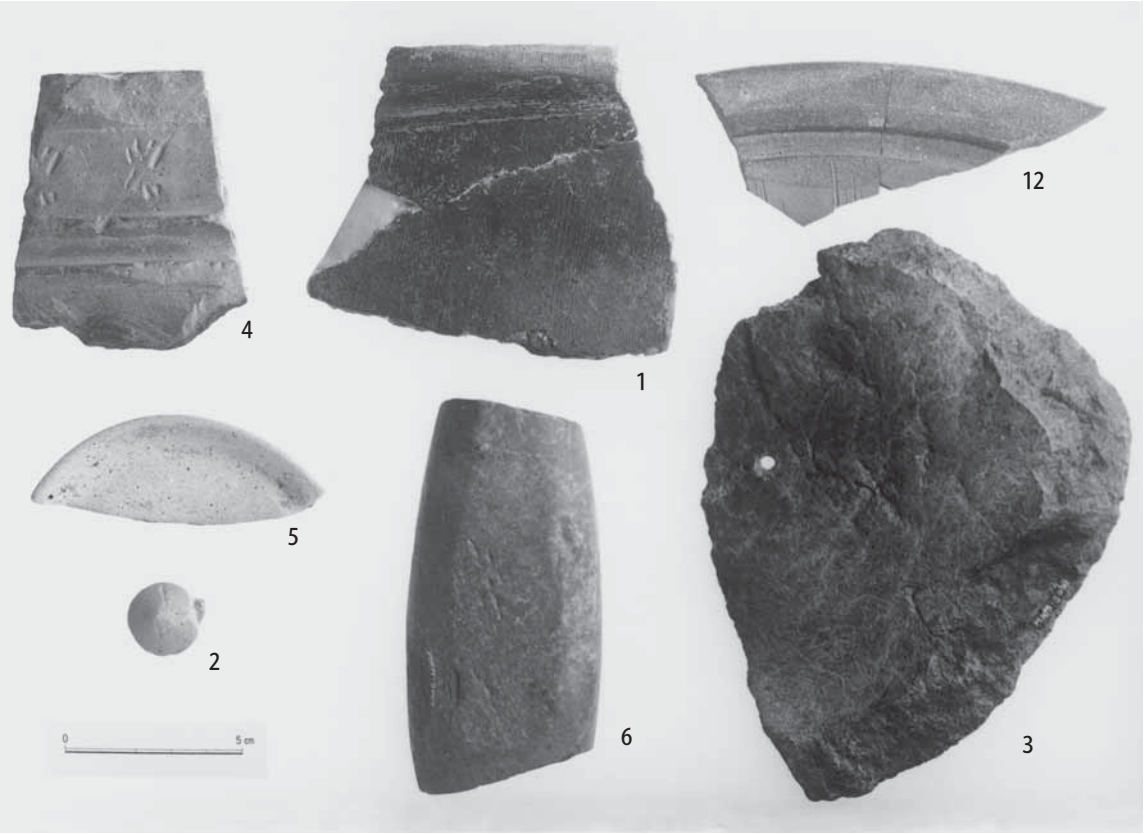
写真(PL)56
作業風景(1)

写真(PL)57
作業風景(2)

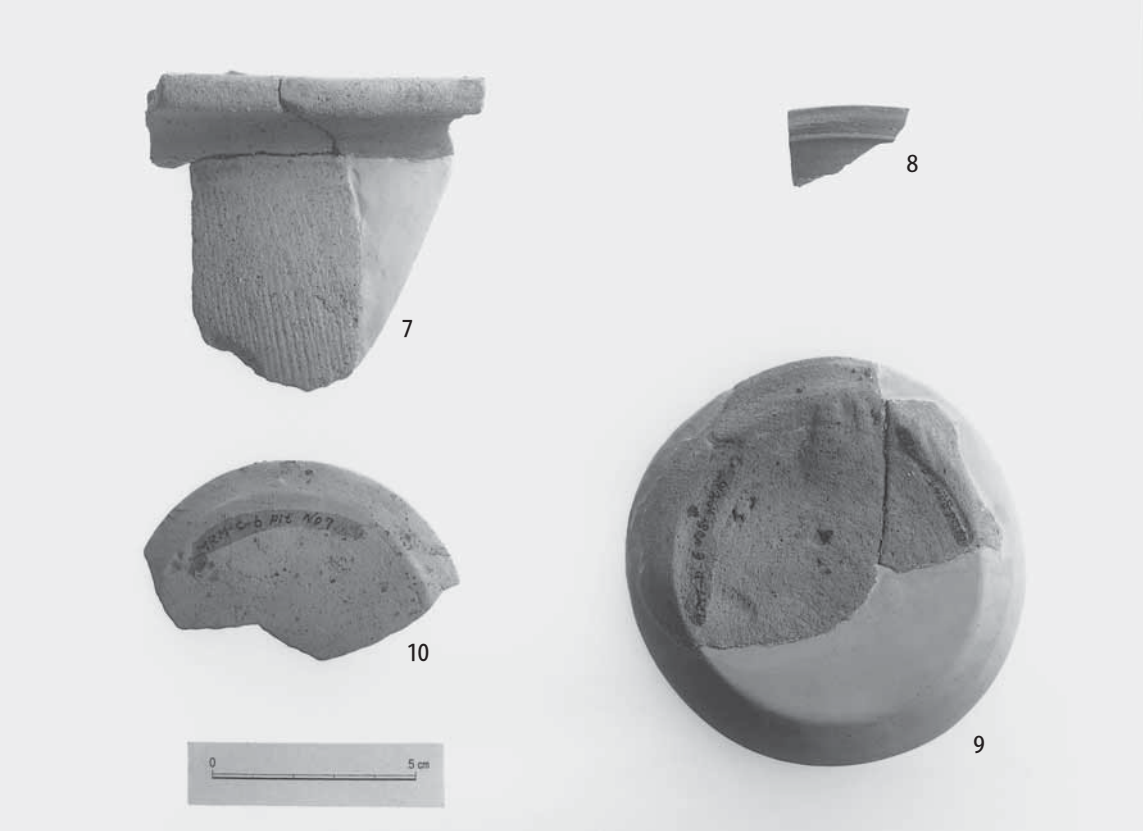
写真(PL)58
作業風景(3)

写真(PL)59
作業風景(4)

写真(PL)60
作業員の皆様方と

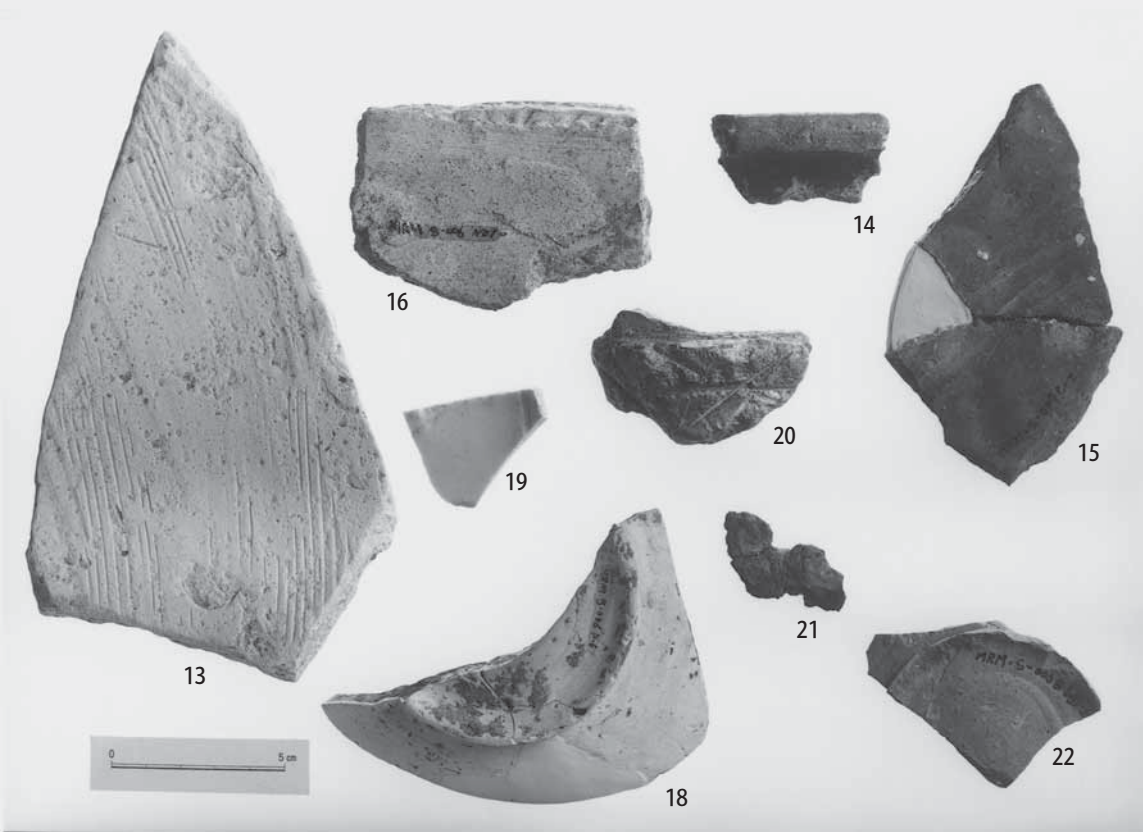


写真(PL)61　遺構内出土遺物【S001, 002, 007, 008】

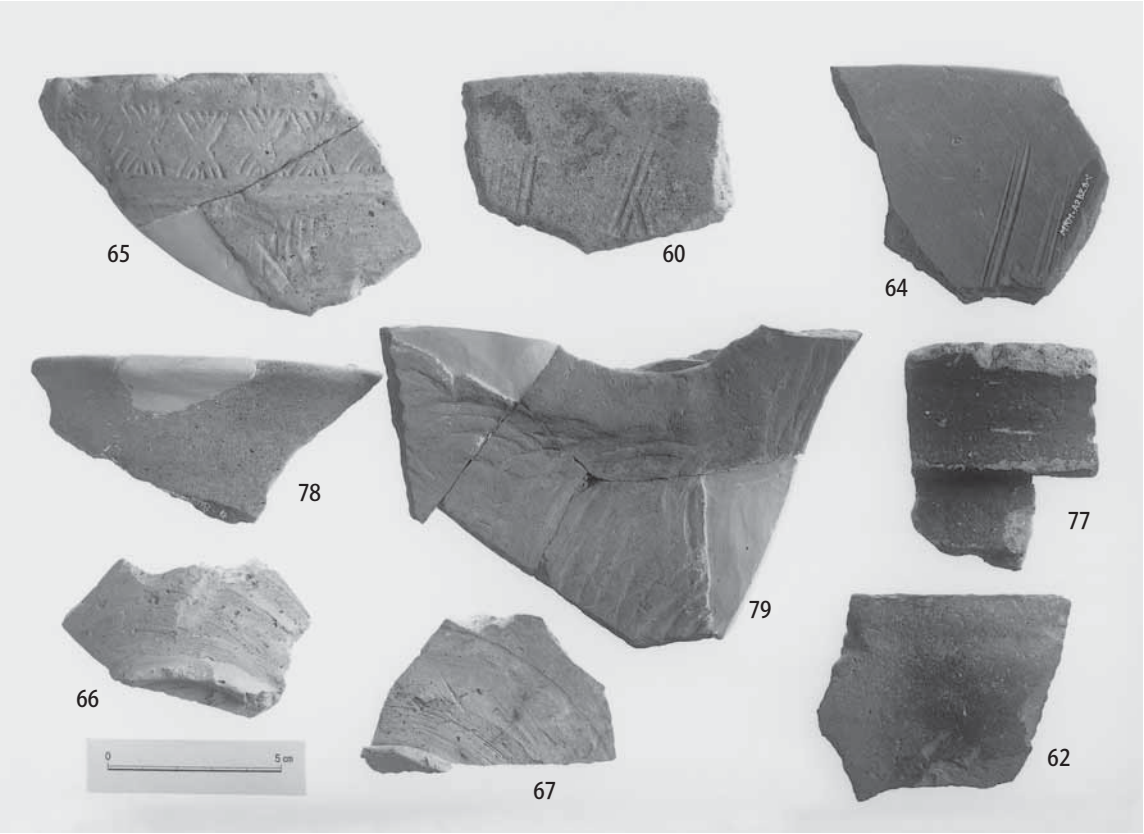


写真(PL)62　遺構内出土遺物【S010, 011】

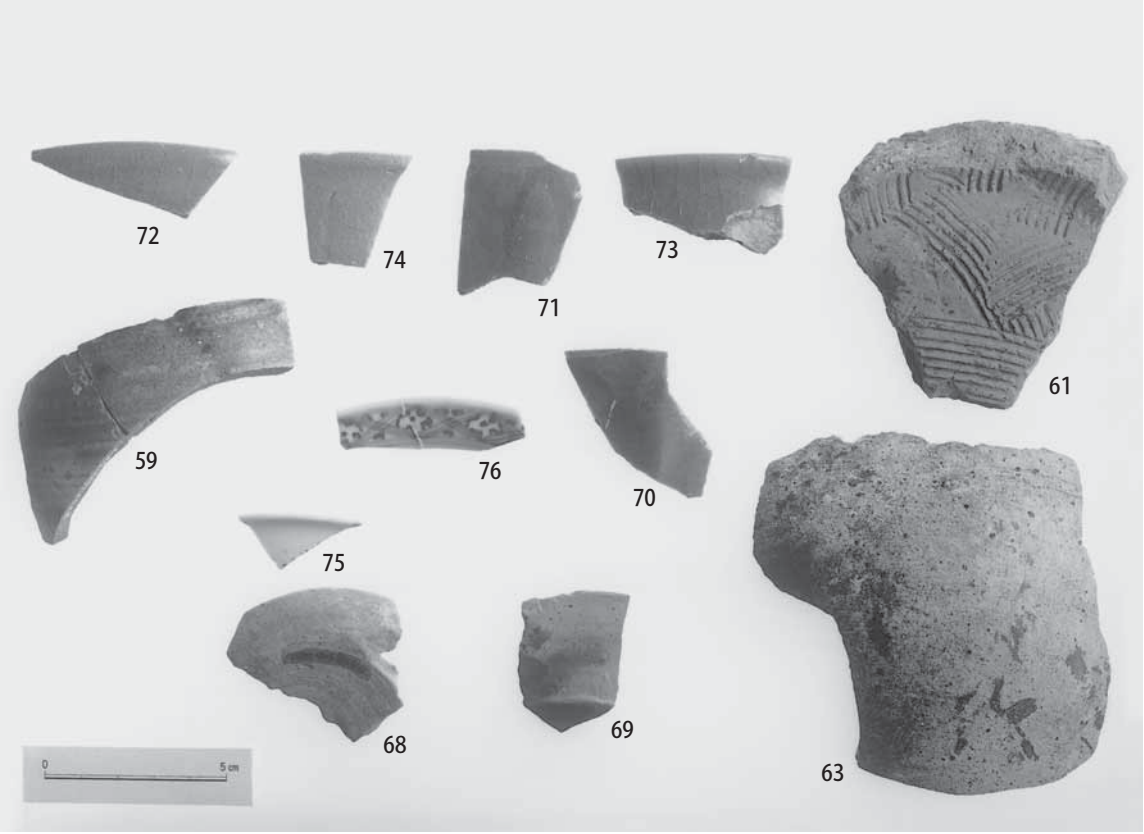
写真(PL)63　遺構内出土遺物【C―4ピット1】



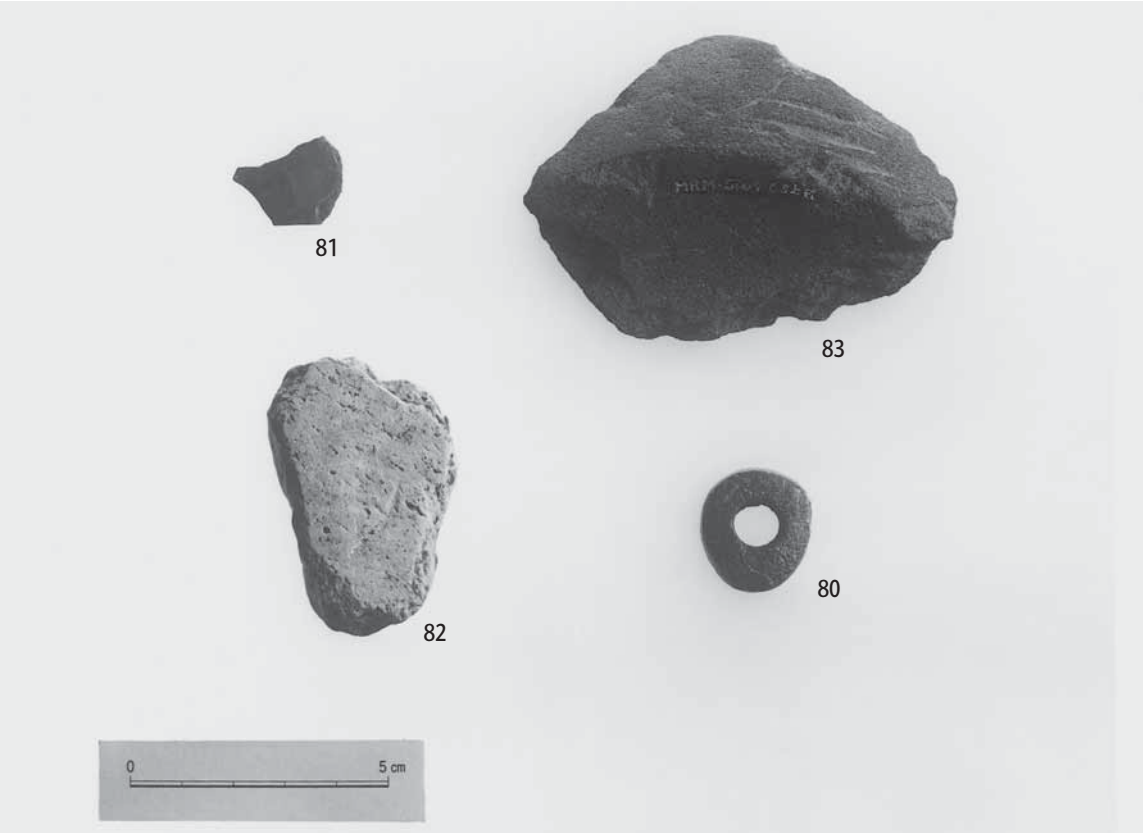
写真(PL)64　遺構内出土遺物【S006】



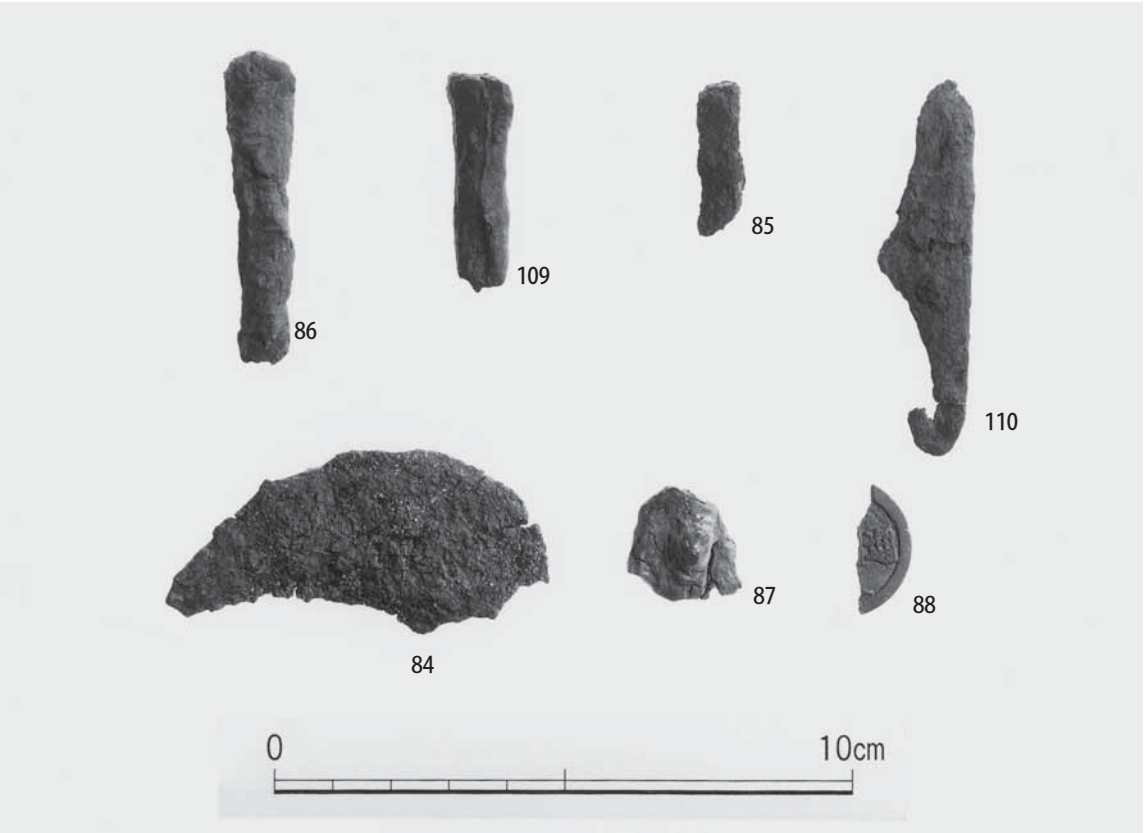
写真(PL)65　遺構内出土遺物【自然の落ちこみⅠ上層及び一括(1)】



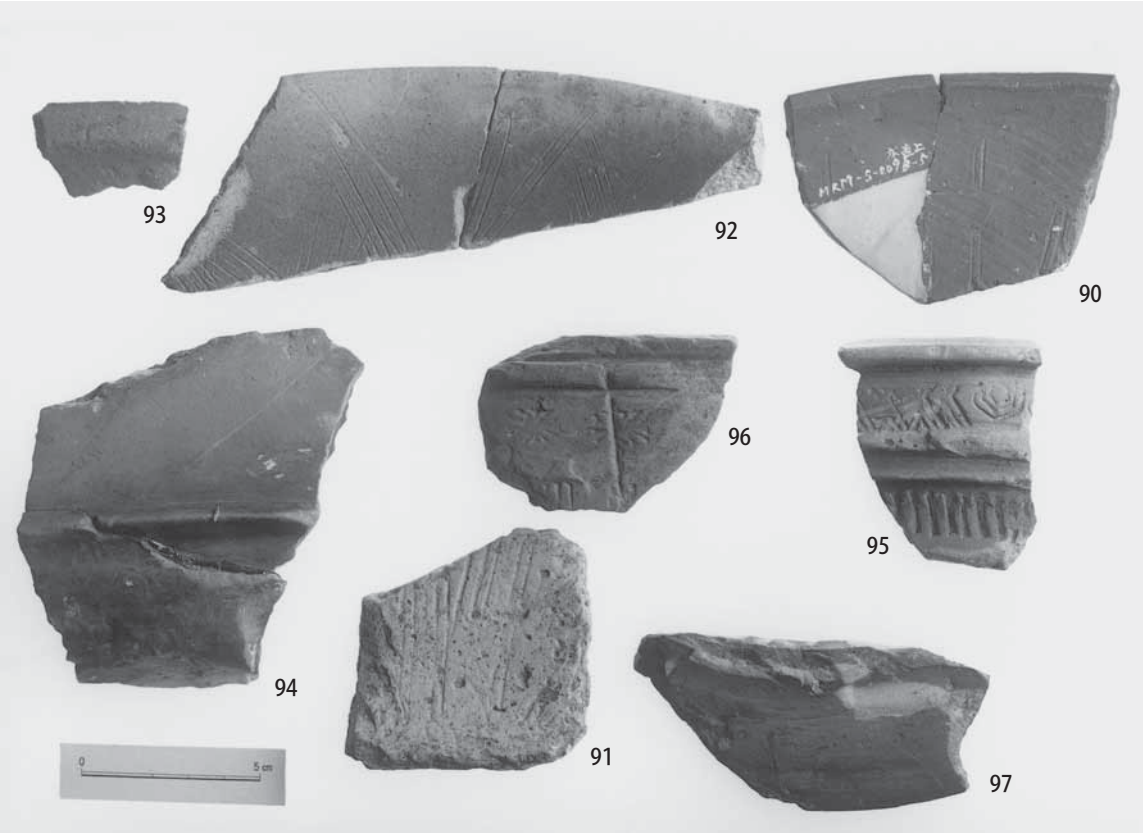
写真(PL)66　遺構内出土遺物【自然の落ちこみⅠ上層及び一括(2)】



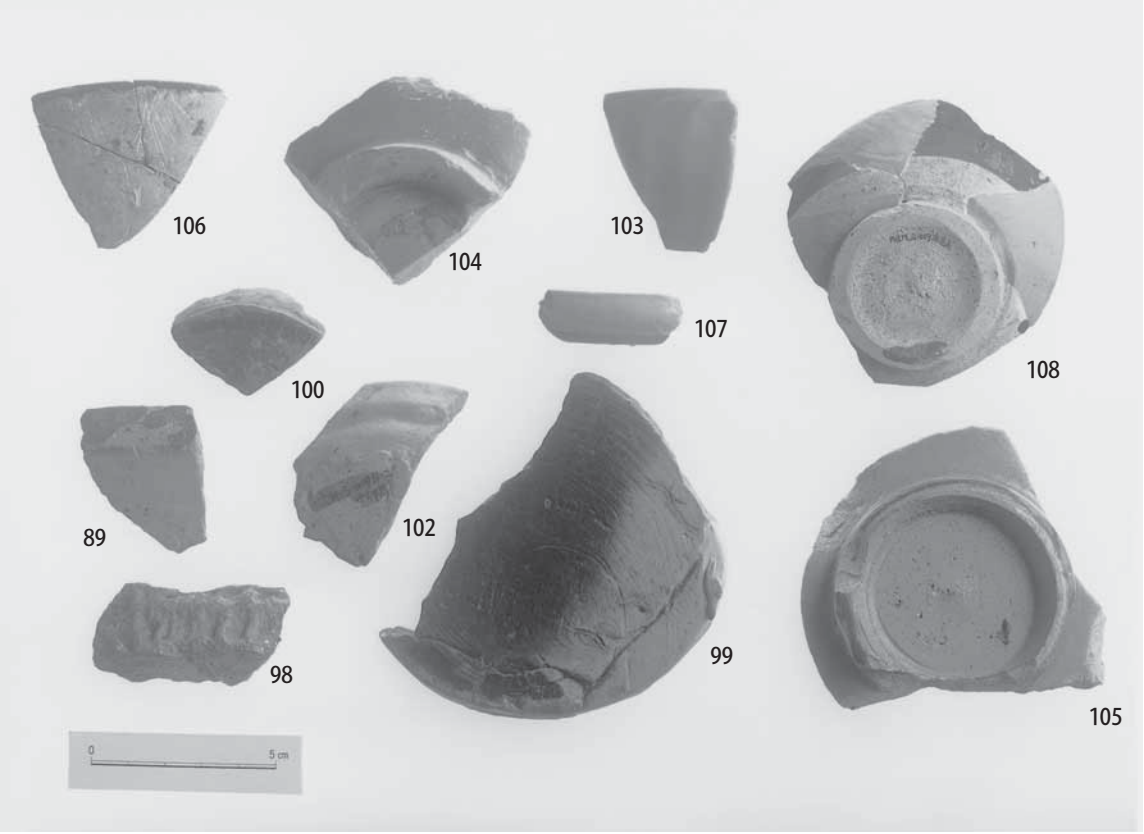
写真(PL)67　遺構内出土遺物【自然の落ちこみⅠ上層及び一括③】



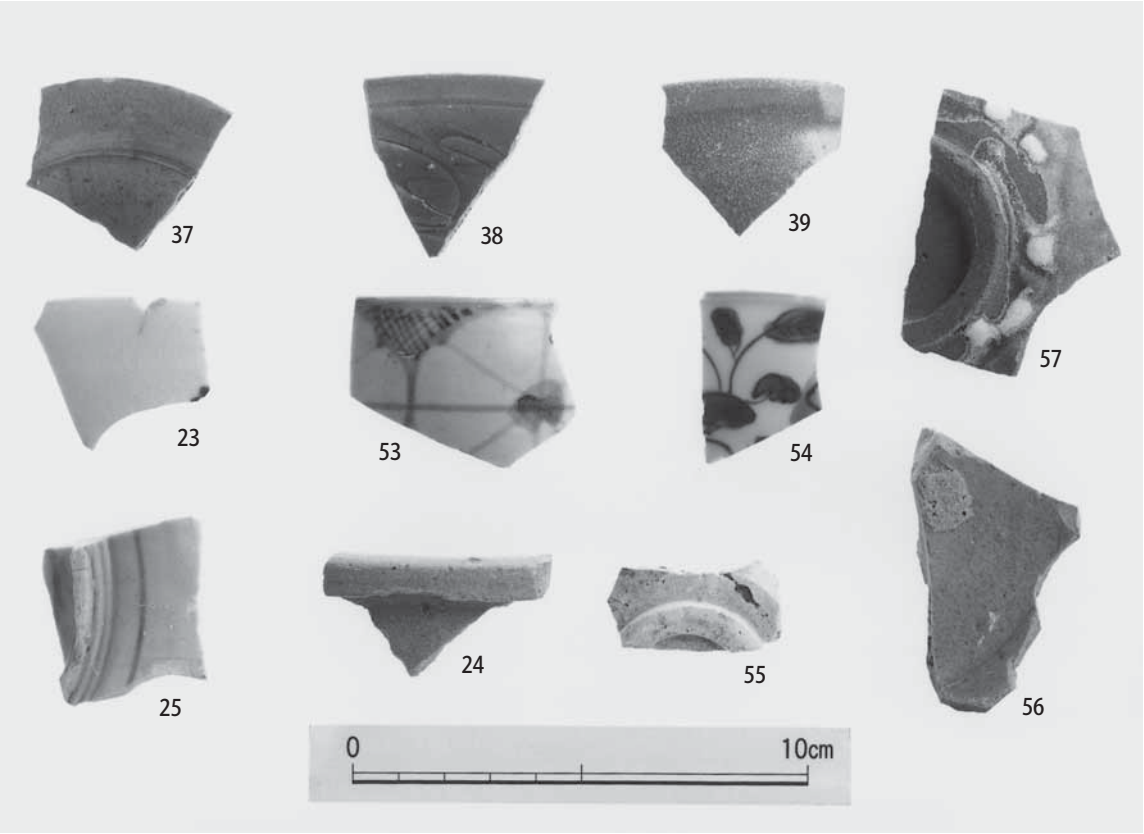
写真(PL)68　遺構内出土遺物【自然の落ちこみⅠ出土鉄器・古銭】



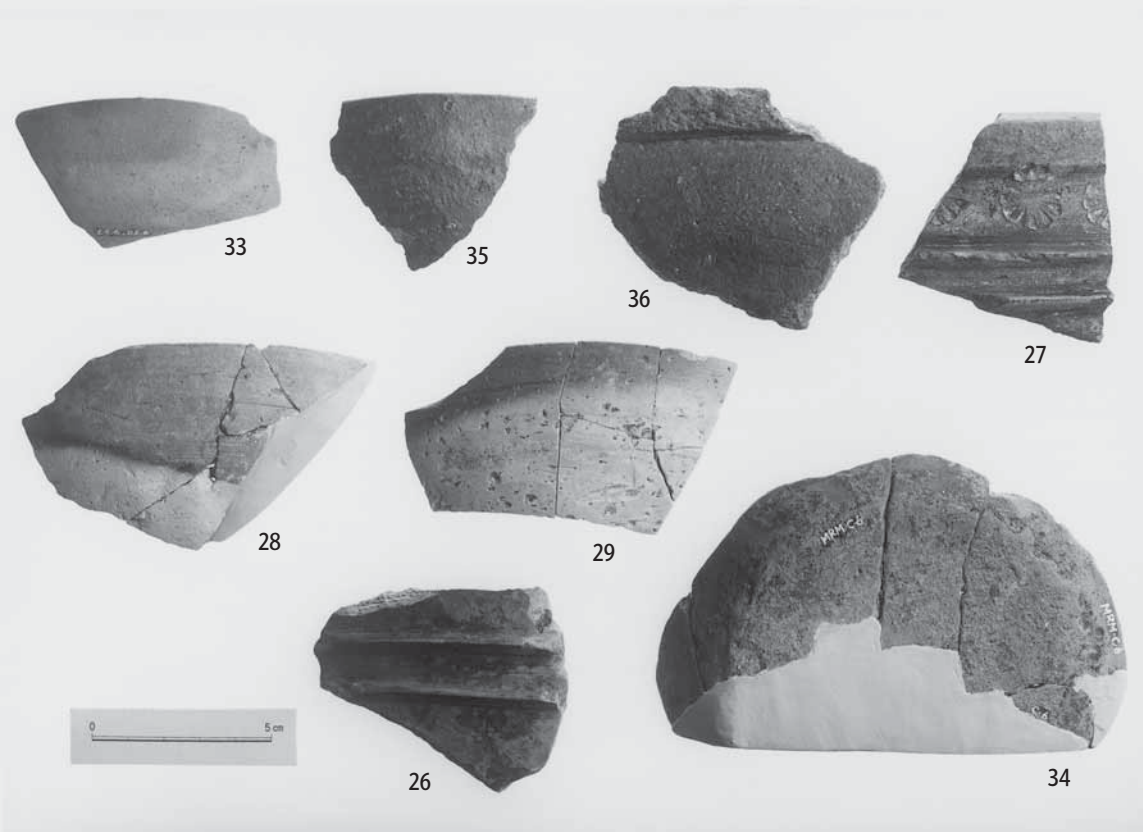
写真(PL)69　遺構内出土遺物【自然の落ちこみⅠ下層(1)】



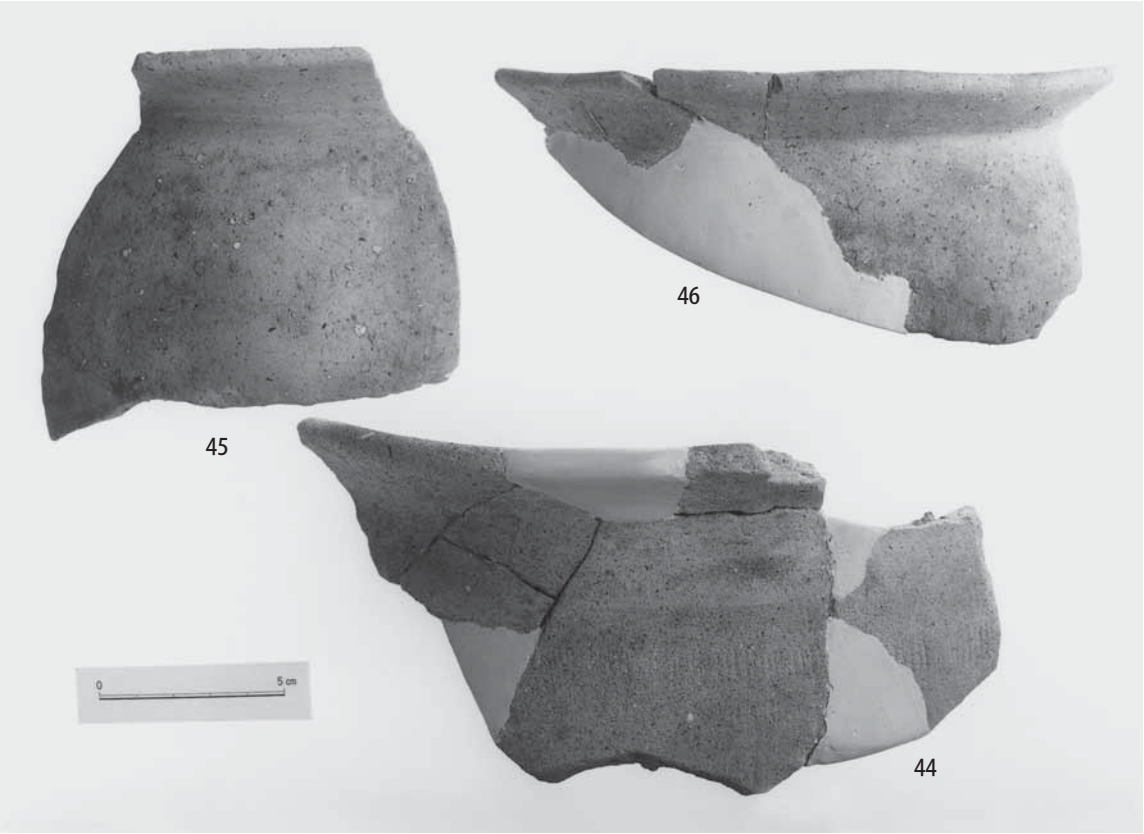
写真(PL)70　遺構内出土遺物【自然の落ちこみⅠ下層(2)】



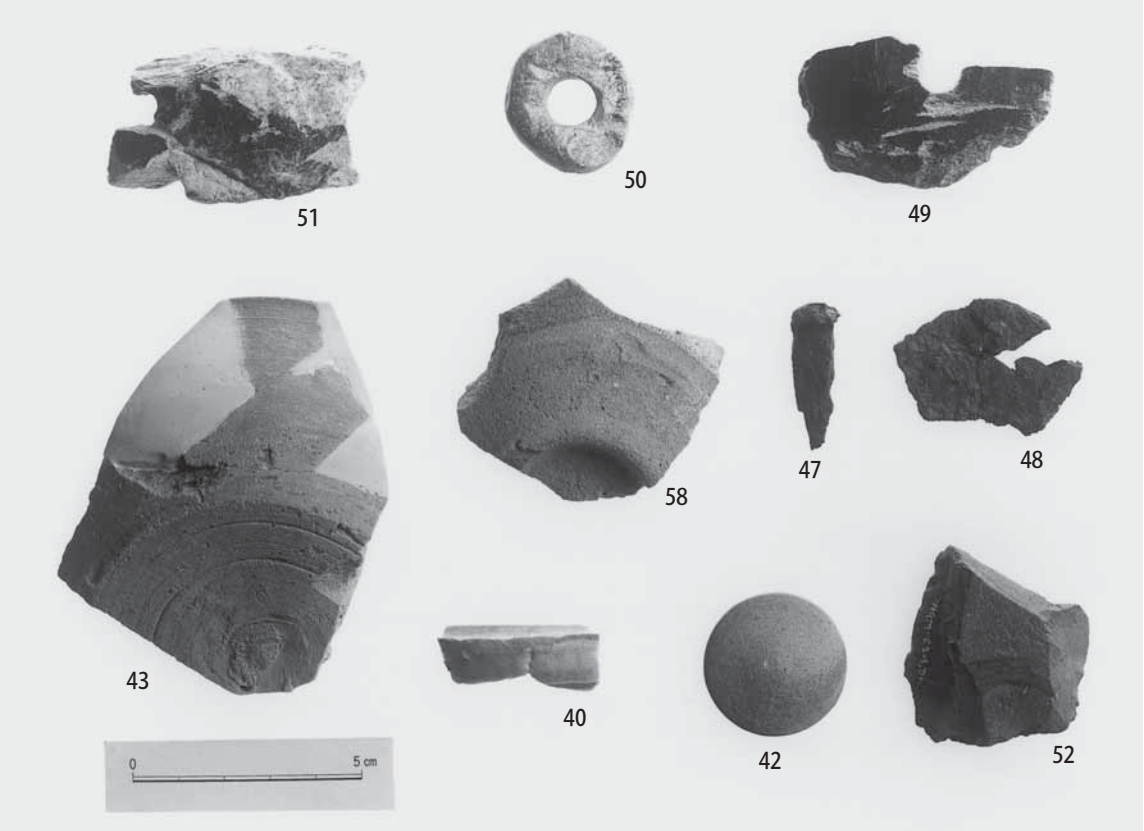
写真(PL)71　包含層出土遺物 (1)【53～57は自然の落ちこみⅠ】



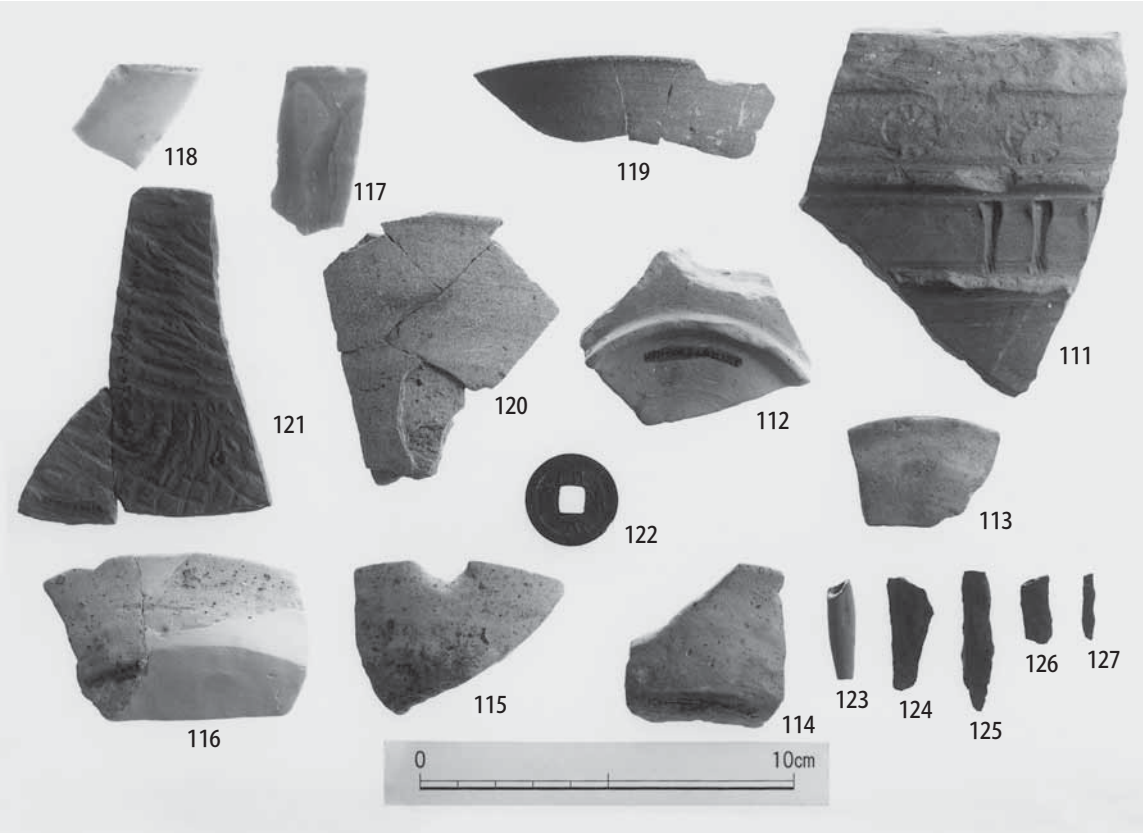
写真(PL)72　包含層出土遺物 (2)



写真(PL)73　包含層出土遺物 (3)

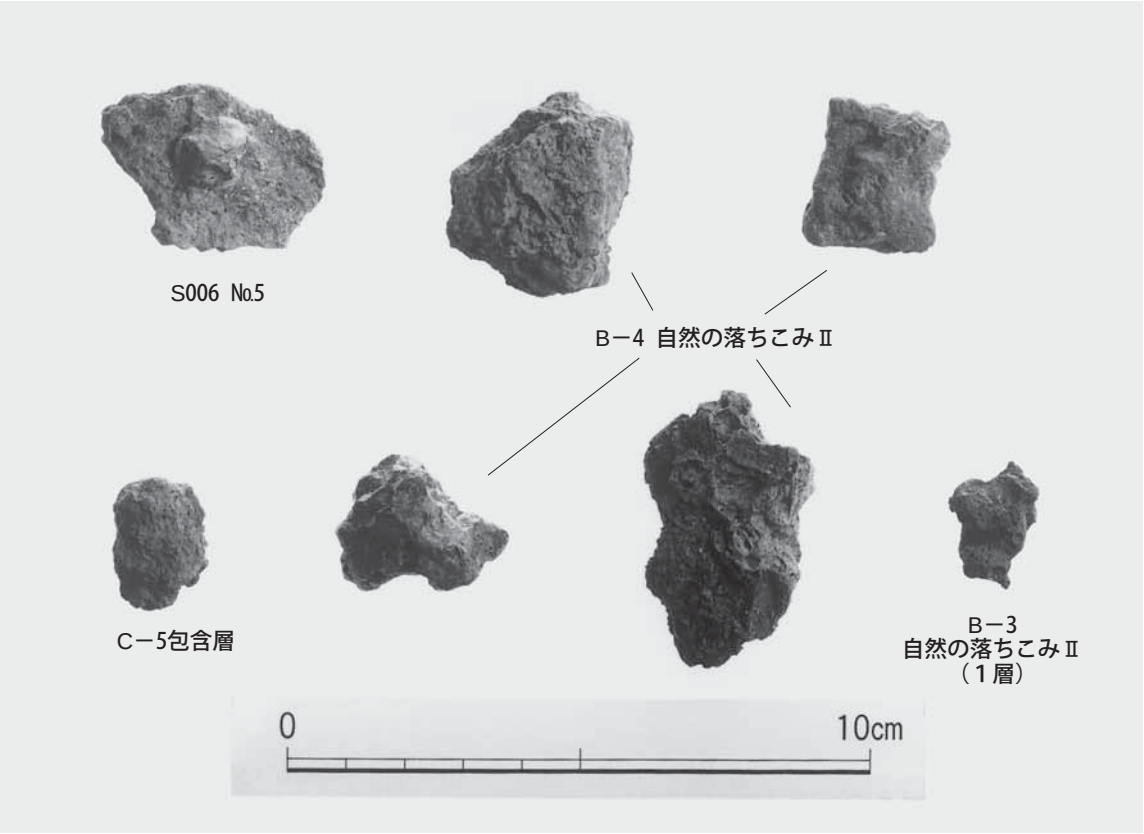


写真(PL)74　包含層出土遺物 (4)【58は自然の落ちこみⅠ】

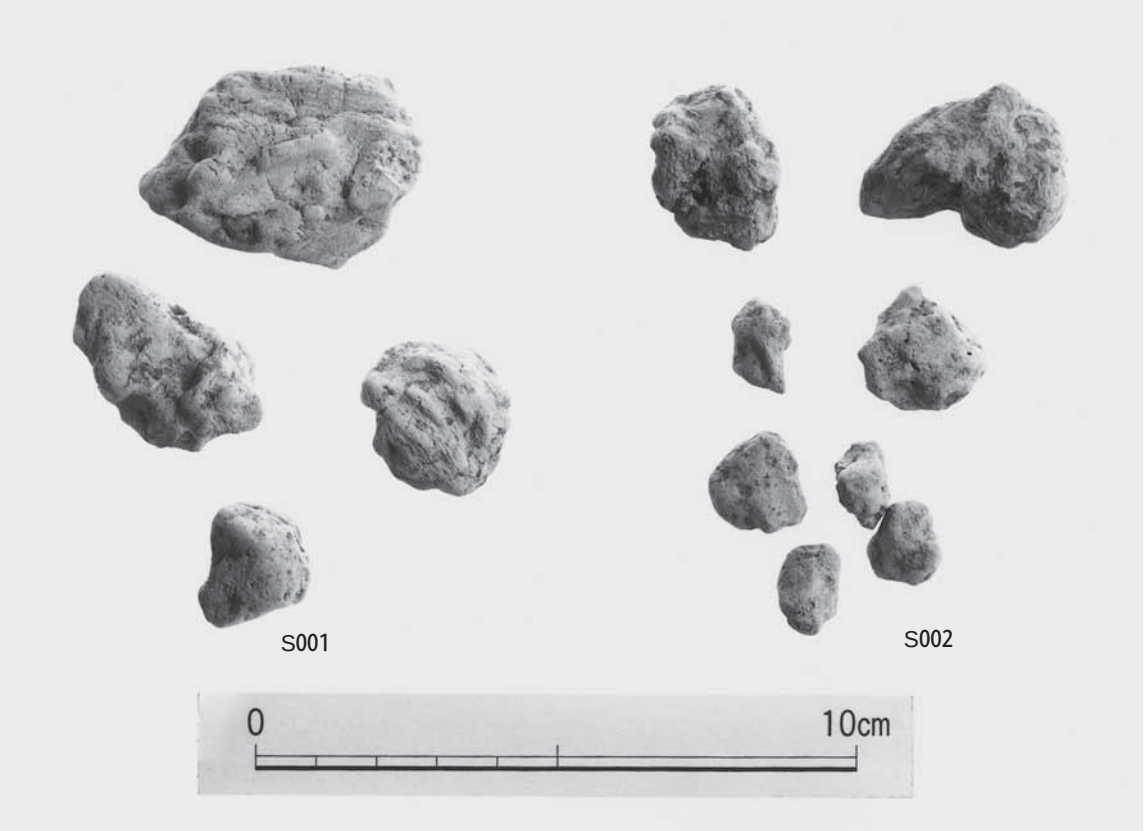


写真(PL)75　自然の落ちこみⅡ出土遺物 (1)

写真(PL)76　自然の落ちこみⅡ出土遺物 (2)



写真（PL）77　遺跡内出土鉄宰



写真（PL）78　遺構内出土粘土塊

あ と が き

1997年（平成９年）６月、初めて玉名市の柳町遺跡で発掘調査に携わらせていただいてから早６年の歳月が流れた。柳町遺跡は、古墳時代初頭と古代の複合遺跡であり、菊池川の氾濫源に営まれていた低湿地の遺跡でもあった。そこで古墳時代の井戸や溝から多量の木製品が出土する様を目の当たりにした。古墳時代の井戸の発掘では土師器の頸部に巻かれた縄や緑色の木葉が数十秒の内に黒色に変化していく様を見て感動したことをつい先日の様に思い出す。また、満潮に近づく頃に有明海から遡ってきた潮が菊池川を逆行していく様を見て、自然の偉大さを感じたのもこのころであった。

その後前田遺跡、そして今回報告させていただく群前遺跡を担当させていただき、気がつくと私の文化課生活６年間のうち、約４年間を玉名市内の遺跡で発掘調査に携わらせていただいていた。

海あり、山あり、川ありの自然に囲まれた玉名は私の大好きな場所である。この場所で調査をさせていただいたことに感謝するとともに、寒い時も一緒に汗を流して下さった作業員さん方、遺物の水洗い、註記、接合をしていただいた一次整理作業員さん方、報告書作成に関わって下さった二次整理作業員さん方、そして調査から報告書作成までご指導いただいた全ての皆さん方に感謝をして、結びの言葉とします。

ありがとうございました。

（現場作業員）

伊吹富子、村上洋子、塚本紘一、荒谷邦雄、石原紀久代、仲山尚義、宮本治光、田上健次郎、吉田由美子、田添五雄、石元孝行、北田テイ子、上野幸枝、藤本政子、山中榮一郎、平木忠盛、河部公義、高崎ハル子、徳山　司、前村国博、宮本知恵子、森　孝明、森葵美子、広瀬千代子、星野テツヤ、森本起江、平野えい子、水成裕介、坂本季明、中林静代、中林淳子、梶原文男諸氏（順不同・敬称略）

（１次整理作業員）

小山正子、水本寿美子、高濱悦子、瀬口絹代、木村雅子、上野栄子、伊津野ノブ子、山下千栄子、原田美和、桑原佐和子、今村幸枝、塚本博子、吉本清子諸氏（順不同・敬称略）

報　告　書　抄　録

フ　リ　ガ　ナ	ムレノマエ
書　　名	群前遺跡
副　書　名	国土交通省菊池川工事事務所木葉川復緊事業に伴う埋蔵文化財の調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第219号
編　著　者	岡本　真也
編　集　機　関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒860-0806　熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号
発　行　年	2004年３月31日

フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ﾑﾚﾉﾏｴ 群前遺跡	ﾀﾏﾅｼｵｵｱｻﾞ 玉名市大字 ﾂﾙｱｻﾞﾑﾚﾉﾏｴ 津留字群前	4320.6	493	32 55′ 36″	130 35′ 30″	H.14.10．1 ～ H.15.２.28	3,000㎡	国土交通省 菊池川工事 事務所木葉川 復緊事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
群前	集落	弥生時代 後期		弥生式土器（甕）	
		古墳時代 後期		土師器（甕）	
		古代		須恵器（坏・甕・壺） 土師器（甕）	
		中世	土坑、溝、掘立柱建物、畝状遺構群	龍泉窯系青磁、白磁、景徳鎮窯系磁器 瓦質土器、瓦器 須恵器（甕）、土師器（土鍋・小皿・坏） 火鉢、擂り鉢、天目椀 石鍋、滑石製品、砥石、鉄器	
		近世以降	溝、杭列	古銭（寛永通宝）、鉄器 陶磁器	

熊本県文化財調査報告　第219集

群　前　遺　跡

発行年月日　平成16年３月31日

編　集
発　行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺６丁目18番1号

印　刷　コロニー印刷
〒862-0051　熊本市二本木３丁目12番37号

Cultural Series of *Kumamoto* Prefecture NO.219

The Murenomae Site

Excavation for Making Embankment (Improvement)
of *Konoha* River in *Tamana* City

March 2004

Board of Education, *Kumamoto* Prefecture

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 219 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 群前遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/